

第五章 増子方式の成果

「有島武郎とヨハネ伝」「有島武郎と創世記」「有島武郎とマタイ伝」と題して長々と調査研究を元に解説を続けてきた。以上が「有島武郎と聖書」ビツククスリー 上位3位まで「ヨハネ伝」「創世記」「マタイ伝」を「増子方式」で調査研究した成果である。各一覧表と東西教会の司祭、神学者からの意見、感想、総括の指摘、著者の解説などが成果の具体的事項である。ここで総括の指摘を集約し、アングロ・カトリック 聖公会、プロテスタント教会の意見を加え四つの教会から見た共通点を発見し、最終検討を加えておこう。

ゲリートの・オリソドンクス 東方正教会（山口義人司祭）

ヨハネ伝

第一点 ミサ（聖体機密）がない。

第二点 イエスの神性より人性を見ている。

第三点 有島のヨハネ伝の読み方は、自分とかわりあるところから入り、忠実に心に響いたところを書き出し、よく読んでいる。

創世記

第一点 信仰の父アブラハムの話がない。

第二点 芸術家として男女関係（一一十一章）を重視し、作品に生かす読み方。

第三点 ヨセフの話がない。

第四点 キリストと関連させて創世記を読んでいない。

第五点 文学者として人間性探究の立場から読んでいる。

マタイ伝

第一点 ペテロの登場が少ない。

第二点 復活にふれていない。

第三点 十字架がない。

第四点 文学作品としてマタイ伝を見ている。聖書を題材として作品化に生かしている。

第五点 教会批判がすさまじい。有島はイエスのパリサイ人、学者、長老への批判をそのまま使っている。

西方公教会（ローマカトリックネメシエギ教授）

ヨハネ伝

第一点 六章五十三節から五十七節、つまりミサ（聖体秘跡）がない。「わたしの肉を食べ、血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。」（五十六節）、この言葉がない。

第二点 十七章が全然ない。「父よ、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。」（二十一節）、

内なるキリスト、相互内在、ヨハネ的神秘的一致を示す言葉がない。

創世記

第一点 アブラハムの歴史、信仰の父の話題がない。

第二点 ヨセフの話がない。

マタイ伝

第一点 ペテロがほとんど登場していない。「あなたはペテロである。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。」、十六章十八節などがない。

第二点 「敵を愛せよ」(5・43、48)がない。

第三点 譬話が少ない。十三章毒麦の話のように。

第四点 二十八章十八、十九、二十節「全世界に述べ伝えよ」というマタイ伝の結論が出ていない。

第五点 有島は自分の心に響いたことを卒直に取り上げている。

以上が著者の調査を元にして有島著作原文を著者と共に読んだ結果、山口義人司祭による総括の指摘集約十三点と、ネメシエギ教授による総括の指摘集約九点である。さて東西教会の両氏が指摘する共通点は全体で次の六つである。

第一は、ヨハネ伝ではミサがない。

第二は、創世記ではアブラハムとヨセフの話がない。

第三は、創世記第十四位「ネピリムは、小説家有島にとっては魅力あるところ。」との教授の意見を考慮すれば、芸術家として男女関係を重視し、作品に生かす読み方である。

第四は、マタイ伝ではペテロがほとんど登場していない。

第五は、全体として有島は自分の心に響いたところを忠実に取り上げてよく読んでいる。

第六は、キリスト者としてまず神第一、人間第二であるべきなのに、人間第一の聖書の言葉の方が多くなっている。以上の六つの共通点は四大教会の立場から見ても事実として認めざるを得ない発見である。ここで著者の聖公会、プロテスタント教会の立場から、共通点について意見と解説そして最終検討を加えておこう。

第一共通点「ミサがない」という指摘であるが、東西の伝統教会ではなくプロテスタント教会の有島にこの読み方がないと言うのは無理であろう。当然、聖公会ハイチャーチ（カトリック寄り）の人も同じ指摘をするであろう。しかし明治三十年代、有島の信仰が生れ育った札幌独立教会、東京で思い出深い本郷教会（海老名弾正）、一番町教会（植村正久）、個人としてはクラーク博士、内村鑑三、新渡戸稲造、有島が直接間接に関係していたキリスト教界は、芸術の対象となったヨーロッパのカトリック教会を除けば、すべてプロテスタントの教会であり人物であった。有島が通っていたプロテスタント教会にも聖餐式は実施されていたが、パンとぶどう酒がそのままキリストの体と血に聖変化する機密、秘跡ではない。

第二共通点「アブラハムとヨセフの話がない」という指摘であるが、確かに有島の聖書誤解であり創世記の読み方としては大きな欠点である。ただ聖書誤解を権威をもって正せる教会に恵まれていなかったことは不幸であった。有島はアブラハムの家系を調べ、次男イサクとヤコブには恩寵が与えられているのに、長男イシマエルとエサウは一方的に呪われていると考え、えこひいきの神へ極めて不公平なる神（明治36・4・20）に反発した。この読み方で、イサクとヤコブに対する反感が、信仰の父アブラハムに対する関心を弱めさせてしまった。更にイサクの孫、ヤコブの子であるヨセフにも、曾祖父アブラハムに対すると同じように、関心が及ばなくなってしまうのである。

第三共通点「男女関係を重視し、作品に生かす聖書の読み方」は、作家として自然な読み方であろう。その結果、小説（「迷路」「宣言」「クララの出家」「或る女」「星座」）、戯曲（「二部曲」）、翻訳（「ブランド」「草の葉」「リビング

第三部 増子方式

ストン傳)、評論(「惜みなく愛は奪ふ」「内部生活の現象」「靜思」を讀んで倉田氏に)「卽實の生活」等、著作品の多くに聖書の言葉が生かされており、近代日本を代表する文学者となった事實は周知の通りである。第四共通点「マタイ伝でペテロがほとんど登場していない。」という指摘はその通りである。マタイ伝中にペテロが登場するところ、そしてペテロの文字があるところは少なくとも19カ所ある。

- (1) 4・18 19 20 「人間をとる漁師」
- (2) 8・14 「イエスはペテロの家に」
- (3) 10・2 「十二使徒の名」
- (4) 14・28 33 「ペテロおほれる」
- (5) 15・15 18 「口から出るものを汚す」
- (6) 16・13 20 「岩の上に教会」
- (7) 16・23 「ペテロイエスをいさめて叱られる」
- (8) 17・1 8 「小屋を三つ建てよう」
- (9) 17・24 25 26 「魚の口の銀貨を納入金」
- (10) 18・21 「基督と寛恕問答」
- (11) 19・27 「いっさい捨て従いました」
- (12) 26・35 「知らないと申しません」
- (13) 26・37 「ゲツセマネへ」
- (14) 26・40 「眠っているペテロ」
- (15) 26・58 「遠くからイエスを見る」

- (16) 26・69 70 「そんな人知らない」
 (17) 26・71 72 「そんな人知らない」
 (18) 26・73 74 「その人を知らない、鶏鳴く」
 (19) 26・75 「ペテロ激しく泣く」

「聖餐」にはペテロの台詞が18回ある。台詞のほとんどは有島が大好きなヨハネ伝のペテロの台詞である。例えば「イエスが弟子の足を洗う」話はマタイ伝にはなくヨハネ伝のみである。マタイ伝第23位「ペテロの離反を予告」にある「私は死んでも主をお疑ひ申すことは出来ません」とはマタイ伝二十六章三十五節「一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどは、決して申しません。」に準ずる。ペテロの言葉である。へお疑ひ申すことは出来ません」の言葉は「聖餐」ではマリヤの台詞になっている。マタイ伝のペテロは第25位「仲間をゆるさない家来」のたとえ話にある「ペテロと基督との寛恕問答」(18・21、35)として「或る女のグリンブス」と「或る女」で二回話題に出してくるだけである。《寛恕問答》について正教会の山口義人司祭は「罪意識で悩む有島さんには限りなく許されることとが気に入るわけです」と述べている。キリストに対しても社会に対しても裏切者意識で悩んでいた有島であるから、鶏が鳴いた時、キリストを裏切ったペテロが激しく泣いた場面(26・75)などが有島の心の隅にあったであろうが、更に裏切者としてはユダの方に強く関心が向いていたのである(ヨハネ伝第3位「会計係イスカリオテのユダの裏切り」参照)。というわけでマタイ伝のペテロ19カ所中、《寛恕問答》一カ所が二回しか話題になっていない。ネメシエギ教授が指摘するように「あなたはペテロである。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。」という十六章十八節がマタイ伝では重要であるが、有島は触れていない。ローマ法王はペテロの後継者として西方公会では特に十六章十八節がマタイ伝では重要となる。

第五共通点「全体として有島は自分の心に響いたところを忠実に取り上げよく読んでいる」との指摘は尤もである。

新「有島武郎と聖書」回数別順位第1位マタイ伝から第44位ミカ書まで、旧約聖書22巻、新約聖書20巻、合わせて42巻の聖書を話題にしている。読み方に欠点はあるが、近代日本の知識人の中で最も聖書を読んでいる一人と言われる所以である。翻訳と研究を通してイブセン、ホイットマン、リビングストンの芸術とキリスト教思想、伝道精神を紹介した功績は大きい。有島は自分の心に響いたところを余りに忠実に取り上げたため、性欲に悩む若き日に、パウロの禁欲奨励に躓き、愛のヨハネに傾倒して行った経過は「聖書誤解」「パウロよりヨハネ」で論じてきた通りである。更に有産階級に属し持てる者の罪意識を抱いていた有島は、大正時代の社会主義労働思想に共鳴し、「即實の生活」「静思」を読んで倉田氏に「宣言一つ」では現実的労働思想を論じた。教会の偽善と自己の信仰動揺とが共振し、「内部生活の現象」「惜みなく愛は奪ふ」では反キリスト教を論じる。作品創作においても例えば「大洪水の前」セム、ハム、ヤベテに託して歴史思潮を考察した戯曲は、有島が単に小説家であるだけでなく思想家の力量を示している作品と言えよう。

第六共通点「キリスト者としてまず神第一、人間第二であるべきなのに、人間第一の聖書の言葉の方が多くなっている。」という指摘は、東西教会の両氏が総括として挙げた時のものではなく、主にマタイ伝「内容別順位」に従い有島の著作原文を著者と共に読みながら、両氏が意見と感想を述べる中に見出した共通指摘である。マタイ伝第8位「ゲツセマネで祈る」では神第一に相当する「御心を爲さしめ給へ」(札幌獨立教會)が一回のみで、人間第二に相当する「苦き杯を我れより放ち給へ」(ブランド)「藝術論」が五回、マタイ伝第13位「主の祈り」でも神第一に相当する「御名があがめられますように」がなく、人間第二に相当する「日々の糧を今日も與へ給へ」(ブランド)が二回、「我れを試練に遭はせず悪より救ひ」(聖餐)が二回、マタイ伝第1位「山上の垂訓」でも神第一に相当する「義のため迫害されてきた人たちは幸いである」がないので山口義人司祭は、「有島さんは教えのため命を捨てることに抵抗があるので、十字架が一度も出てこない。」と意見する。更にネメシエギ教授は、「汝の行為、汝の義、学者、パリサ

イ人より勝ずば」(5・20)であって、行為、義が劣っていないがらへいはんや弱き者、罪人においておや(明治32・4・17)という人間の都合第一の解釈と思考を否定する。神第一でなく人間第一の聖書の言葉が、戯曲、小説のみであったら芸術創造の意味で容認されるであろうが、評論、日記という作者有島の本心が出てくる著作を含めての共通指摘である時、少なくとも明治三十六年前後の二十五、六歳頃、模範的キリスト者であった有島武郎においてそうであるならば、すべてのキリスト者に反省を促す結果を見るようである。非キリスト者を含め人間とはそういうものと言ってしまうはそれまでであるが、キリスト教では、神第一、人間第二であって始めて、人間第一とする思考言動によって得られない本来の幸福に至る生き方を、生き方の基本信条としている。人間研究である文学とキリスト教との関係を研究する者は、まず基本的な信条を認識しておかねばならないであろう。生き方の基本としている信条の一例を記しておこう。

信者の心得

問 毎日の生活を営むに当って、信者にはどんな心掛けが大切ですか？

答 信者は、何事も神の光栄のために、行う、という心構えをもつべきです。(武岡武夫編『正教の信条』(信経十二端の間答) 日本ハリストス正教会 昭和45年 59頁)

東西教会の両氏の指摘十三点と九点には、ミサがない、アブラハムとヨセフの話がない、ペテロがほとんど登場していない、等の共通指摘があり、それらの共通指摘については既に論じてきたが、両氏の特徴が指摘に出ていることに気付くのである。まずニコライ堂は、正式には日本ハリストス正教会教団・府主教庁「東京復活大聖堂」と言う。四大教会がキリスト教の祭典の中で最重要とするのは、クリスマスではなく復活祭である。正教会では、復活祭を「祭

の中の祭」とし、十二大祭とは別に独立した最大の祭として祝ってきた(『正教の信條』29頁)。山口義人司祭の指摘は、復活大聖堂の司祭らしい指摘であると言えよう。すなわち、マタイ伝では復活にふれていない、十字架がない、教会批判がすさまじい、トルストイ「聖書」の倫理性、創世記でもキリストと関連させて創世記を読んでいない、等の指摘がそれである。一方、西方公教会のペテロ・ネメシエギ教授の指摘は、オリゲネス研究家として神学者らしい指摘であると言えよう。具体的に聖書の章節を適確に示しているからである。すなわち、ヨハネ伝第一点(6・53と57)、第二点(17・21)、マタイ伝第一点(16・18)、第二点(5・43と48)、第三点(十三章)、第四点(28・18 19 20)、等である。尚、マタイ伝第四点二十八章十八、十九、二十節「全世界に宣べ伝えよ」というマタイ伝の結論が出ていないという指摘であるが、マタイ伝第43位「弟子たちを派遣する」(「天地の間、我れ凡ての力を有てり、汝と俱に在らむ」)、『リビングストン傳』28・18 19 20)として一回だけ出ている。福音宣教というマタイ伝の重要な結論であるので話題一回では少ないし、リビングストンが引用した言葉の翻訳であり、有島自身が引用した言葉でないので、指摘しているのである。

第四部 日記で話題にした聖書

はじめに

有島武郎が書き記したすべて（新潮社と筑摩書房の全集、有島が使用した『新約全書』への書き込みなど）の中から、聖書とそれに準ずる言葉を調査し、「有島武郎と聖書」回数別順位」と「観想録（日記）とヨハネ伝福音書」なる一覽表を作成することができた。この二つの一覽表と、日記以外の「有島武郎全集とヨハネ伝一覽表」（巻、頁と行、章節）は「有島武郎とヨハネ伝」で発表済みである。それで本稿では「観想録（日記）とヨハネ伝福音書」①番から③番までの詳説とまとめを論じたのち、他の各書との関連についても同じように吟味してみようと思う。

観想録（日記）とヨハネ伝福音書

番	期	日	章	節	内	容	同	項
9	32	16	3	16	キリストの愛			
8	32	16	9	2	盲人のいやし			
7	32	16	13	1	イエスの愛と死			
6	34	24	12	4	裏切者ユダとマリヤの香油塗り			
5	34	24	1	4	バプテスマヨハネの消極的証言			
4	35	31	5	27	神の榮より人の榮			
3	36	1	3	16	ヨハネの愛の普遍性			1
2	36	1	8	11	姦淫の女			
1	36	1	9	15	盲人のいやし			2

第四部 日記で話題にした聖書

32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	
37	37	37	37	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36
8	7	7	7	9	9	8	8	8	8	8	8	6	5	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2
2	21	20	20	6	6	1	31	29	28	26	1	30	29	25	22	17	6	6	3	1	27	25	15
13	9	ヨハネ伝	13	2	9	5	4	2	1	ヨハネ伝	8	8	8	13	13	6	5	1	9	ヨハネ書	ヨハネ書	5	44
31	41	ヨハネ伝	1	1	章	44	1	章	章	1	1	1	34	34	38	44		章	章	ヨハネ書	ヨハネ書		
35			20	11		42	42			11	11	11			45								
相愛すべし	精神的盲目	規則正しく讀む	弟子の足を洗う	カナの婚筵	盲人のいやし	神の榮より人の榮	サマリヤの女	カナの婚禮と宮清め	言葉が人間となる	航海の間を研究に	姦淫の女	姦淫の女	姦淫の女	相愛すべし	相愛すべし	終りの日を待つ	神の榮より人の榮	全聖書の序説	盲人のいやし	ヨハネに學ぶ	感激の宗教	神の榮より人の榮	
17	2	11	3	24	2	6			14	11	8	8	8	17		6							6
18	9	12			9	10			12	12	19	19				10				2	11		
	13	22			13	15					20									9			
	27																						

39	38	37	36	35	34	33
36 ・ 9 ・ 22	大正 5 ・ 8 ・ 3	大正 5 ・ 8 ・ 3	39 ・ 10 ・ 6	37 ・ 9 ・ 15	37 ・ 8 ・ 3	37 ・ 8 ・ 2
12 13 章	14 ・ 8	12 ・ 23	8 ・ 7	19 ・ 30	14 ・ 18 ・ 20	3 ・ 16 18
				十字架の完成	終末の時	神の獨り子
			人の子榮光受ける時	姦淫の女		
			子と父とは一つ			
			マリヤとユダ			
						1 7
				8 19 20 21		
			4			

① 32・2・16 ヘクリストの愛は世界萬劫の民を救ふに足る、(3・16に準ずる。入信直前の頃から武郎はヘクリストの愛に注目していた。)

② 32・3・16 へ此夜約翰伝の第九章を讀む。讀み去りて無限の感慨なき能はず。(略) And his disciples asked him, saying, Master, who did sin, this man, or his parents, that he was born blind? (9:2) 之れ寧ろ當然の理のみ。而して基督の答は實に簡單なるものなりき、而かも心膽に剗入したるの語なりき。Jesus answered, Neither hath this man sinned, nor his parents; but that the works of God should be made manifest in him. (9:3) 彼の如き疑問を持したる弟子は此の答辯に對して、豈満足する事を得んや。彼等が其證を求めんとするの前、聰明なる基督は既に之れが證を與ふべき盲者を癒しぬ。之れに次ぎて起る一條は、即ち驚愕して信ずる事能はざる無氣力者と、罪の己れに來らん事を恐れたる父母と、己れの權勢の爲めには眞理をも犠牲として憚らざるバリアイ人と、一徹の所信巖石の如き盲者が、相錯綜して弟子等に驚く可き教訓を與へつゝあるを見ずや。(略) 兩親はその甚だ我に危険なるを見るや、言を構へて其癒者を知らずと云ひぬ。而して疑問は再び盲者の上に向けられたり。此時の盲者の答解は、基督の弟子、バリアイ人、及び余等の懷疑論者を愧死せしむるに足るものなりき。He answer-

red and said, Whether he be a sinner or no, I know not; one thing I know, that, whereas I was blind, now I see. (9:25) 嗚呼之れ何等簡潔の語にして、然かも深遠しんせんの意を有するぞ。彼は多く餘は云はざりき。パリサイ人が彼をくまして基督のなせし所を聞き正さんとするに對し、彼は敢然としづ。He answered them, I have told you already, and ye did not hear: Wherefore would ye hear it again? will you also be his disciples? (9:27) と掀弄きんろう一番しぬ。而して、パリサイ人は此警語に、胸を剔くられたる不快の餘りに、所謂本末主義、愛國主義の盾に隠れて彼を追放せり。而して基督は再び彼と共にあるなり。而して弟子亦彼に従ひたらん。基督と彼との問答を見ずや。He said unto him, Dost thou believe on the Son of God? He answered and said, Who is he, Lord, that I might believe on him? And Jesus said unto him, Thou hast both seen him, it is he that talketh with thee. And he said, Lord, I believe. And he worshipped him. (9:35~38) 此に於て基督は此に鐵の如き斷案を與へて曰く、And Jesus said, For Judgement I am come into this world, that they which see not might see; and that they which see might be made blind. (9:39) 傍に聞き居たるパリサイ人は、眼を撫して其盲せざるかを疑ひつゝ、恐る恐る基督に反問せり。……and said unto him, Are we blind also? (9:40) 基督が最後に發したる一言は、實にパリサイ人を驚倒せしめて永遠に吾人を驚醒するものなり。曰く、Jesus said unto them, If ye were blind, ye should have no sin: but now ye say, We see; therefore your sin remaineth. (9:41) と。嗚呼なまじひ眼あるものは不幸なるかな。(英語聖書から9・23 25 27 35~41までの引用あり。23 25 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000)

③ 34・11・24 へ基督の死近づきぬ。慧眼なる基督は既に悉く之れを知り給へり。彼の心中には今更の如く云ふ可

からざる一種の悲憂を感じしならん。如何となれば、彼は「世に在りし己れの民を既に愛し、終りに至るまで之を愛し給ひ」たればなり。今は永へに牧者と離れんとする憐れむべき微弱なる羊は、嘗て此事あるを思ひ及ぼざりき。』
 (13・11)イエスの愛は、その死において最高潮に達し、彼の死にこそ弟子たちの救いと罪の赦しの福音がある(間)。

④ 34・11・24 へ忽ちにして弟子の一人は不平を漏らせり「此膏を喫すは何故ぞや。之れを嚮がば三百有奇のデナリを得て貧者に施す事を得ん」と。列座の弟子は其有理の言に動かされて亦其聲に和しぬ。嗚呼是れ今日の社會學者なるものが現に稱呼しつつかある聲にあらずや。』(12・45に準ずる。||一デナリは、一日の労働賃金である。常識をこえたマリヤの真心からの最大の感謝と讚美の行為。弟子の言葉は、主を理解していない言葉としてしりぞけられねばならない(間)。マタイ26・89、マルコ14・45に類似あり。尚、この文中のひらかなは著者が付けてある。)

⑤ 35・12・31 へ彼の靴の緒をヨハネだに解き且つ結ぶ事を得ずと云ぬ。』(1・27に準ずる。||パプテスマのヨハネの消極的証言(間)(共)。

⑥ 36・1・1 へ爾曹は互に人の榮を受けて神より出づる榮を受けざる者なるに争でよく信ずる事を得んや。— John. V. 44— 主は誠によきものを我に與へ給へり。』(5・44 彼らの知識は人よりの尊敬をうる手段と化し、彼らは真の神の声を聞けなかつた(間)。

⑦ 36・2・5 へ僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。』(罪人の救ひの爲めに「己れの御子をも惜まで」賜ふ神は、「愛」と言う賓辭を以て説明するのが、最も適當である。三章一六節。この形式に於て愛は最高頂の表現に到達したのである。愛の使徒と言はれるヨハネ。(山谷省吾『基督教の愛について』一五八、一六一頁)

⑧ 36・2・8 へ約翰傳八章一の一。殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。』(8・11 へ11 へ姦淫の女。「聖餐」第一幕での「姦淫の女」は(大正8年)、ヨハネ伝八章に感激した有島が(36・2・8、5・29、6・30、8・1)、十六年後に戯曲に登場させたヒロインである。そしてこの「姦淫の女」が第三幕の「香油注ぎのマリヤ」(すなわちべ

タニヤのマリヤ)であり、復活のイエスに初めて対面した「マグダラのマリヤ」であると見做している。この三女性同一人物視は有島の創作上の自由な解釈である。内村鑑三も第八章二節から一一節を「聖善の勝利」(イエス対宗教家)と題して、次のように注解している。「この一篇のごとき。これを全福音の縮写として見る事ができる。もしこの篇だけが残っていたとして、イエスの感化は永久に消えない。」(昭和4年11月『聖書之研究』これは有島の感激を思わせるようであるが、残念ながら有島他界後の注解である。

二月八日の日記は、三頁にもわたって「姦淫の女」について「余が受けたる感化の一端を茲に記さんと」している。内容は第八章一節から一一節までに枝葉をつけて物語にしてある。「我も亦爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す事勿れ」。我 Ego (Ego の誤植、著者 は此時云ふ可からざる懺悔と、懽喜と自責と感謝との涙に震ひ戦きぬ)で終っている。

「三頁にもわたって」感化の一端を述べているのだが、「姦淫の罪を許された感激」に重点が置かれ過ぎていて、「主よ、誰もなし」とは人が人を裁くことができない意味である。今日では当然の読み方であるが、「これをバネとして以後、神と人のため積極的に生きよ」という読み方をするために一節から一一節までがあるのである。有島にはこの読み方が不足している。最多の25回も「姦淫の女」を話題にしておりながら、すべて「姦淫の罪の許し」を重視する読み方である。有島は「Expositor Bible」を讀みて、今迄の節が事實にあらざりて後人の挿入せるものなるを知り、余は云う可からざる失望を感じてはいる。当時の日本の解説書にはまだ充実した研究書と言えるものは少なかった。この節も「史実と神感にもとづくものであることは疑いない。」(フランシスコ会 聖書研究所)のだから。

聖書の言葉は、人を重荷から解放し(マタイ11・28)、自由を得させるのである(ヨハ8・32)のに、有島には聖書が足かせになって自分を苦しめる読み方をしているとことがある。例えば「情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」(マタ5・28)↓「姦淫の女を許す」25回、「自制することができないなら、結婚するがよい。」(コリント前書7・9)↓「私は半年程妻から離れても見た。」(『リビングストーン傳』の序)、「金持が天國に入るのは略

駝が針の目を潜るより難事だ」(「序」、マタ19・24、マコ10・25、ルカ18・25↓有島農場解放)などの言葉とは四つに組んで対決していた。

⑨ 36・2・12へ我を導きてシロアムの池に到らしめ眼明かになるを得て、(9・1~15||盲人のいやし(問)②と同じ。)

⑩ 36・2・15△「汝等人の榮を求めて神の榮を求めざるものなるにいかでよく神を信ずる事を得んや」の句が胸に泌み入る。(5・44||⑥と同じ。)

⑪ 36・2・25へヨハネ、ヨハネ、汝の想の何ぞ高くして清き。汝の宗教は感激の宗教なり。(1)

⑫ 36・2・27へ昨日から聖書はヨハネの書を精讀し初めた。僕は充分にヨハネに學ぼうと思ふ。

⑬ 36・3・1△Dod's "Gospel of St. John"の中「Sight given to the blind」を読む。余は失望したり。

余は多く得る所なかりき。Expositor Bibleの中、此書の如きは最も重きをおかるゝものなるに、余のこれに失望せるは余の道を求むるの精足らざるか。余は斷じて然らずと思ふなり。余は直ちに去りてBibleに到りぬ。始めに約翰書を熟讀し後馬太傳の山上の垂訓を讀みぬ。……余は約翰より基督に來りて、狹き道より廣き廣き花野に出でたるが如く感じぬ。(9章。②⑨と同じ。)

⑭ 36・3・3へ家に歸りてヨブ記及び約翰傳を讀み始む。約翰傳の第一章を衷心より理解し得るものは幸なるかな。余は實に此境遇に達せん事を希ふ。余は既に幾度か此章を讀みぬ。而してそれが何を意味するかをも略知する事を得たり。(第一章||福音の中心主題、全聖書の序説(問)。世界最大のことば(内)。)

⑮ 36・3・6へ朝、聖書を讀む。「爾等互に人の榮を受けて神の榮を受けざるものなるに、いかでよく信ずる事を得んや」なるヨハネ傳の句に到る。余は慄然として震ひぬ。汝健忘の徒よ、幾度此句を忘れんとするや。(5・44||⑥⑩と同じ。)

⑩ 36・3・17 へ朝、約翰傳六章を見る。「わが天より降りしは己れの意の任を行はんがためにあらず。我を遣はし、者の意を行はんためなり。凡て父の我に賜ひし者をわれ一をも失はず。末日にこれを廻らすは即ち我を遣し、父の意なり」の語あり。玆に「凡て父の我に賜ひし者」なる者は凡ての者なり。義者と不義者とを問はず、仁者と罪人とを問はず、聖者と盜賊とを問はざるなり。四十五節に、「人皆(↓) 教を神に受けん」と錄されたるを見て知る可し。我は神の聖愛の萬倫を超越せるを思ふ時、如何にしても此結論に達せざれば満足する能はざるなり。(6・38 39 45 Ⅱ イエスは生命のパン(間)、終わりの日を待て(内)。)

⑪ 36・3・22 へ朝例に依りて聖書約翰傳を讀む。第十三章に「われ新しき誠を爾曹に與ふ。即ち爾曹相愛すべしとこれなり。我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へる句に來りて、余は余に凡ての力の與へられたるを覺えぬ。余の立たんとする立場は決して無益の立場にあらず。嘗て地上に現はれ出でし何人かよく基督のに等しき權威を以て「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云ひ得しものありや。(13・34 Ⅱ 最後の教訓(間)、新しい錠(共)、相愛すべし、新しき戒め(内)。)

⑫ 36・3・25 へ朝、約翰傳を讀み「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へる句を再び見出して約翰の崇高の着眼の今更なるに敬服しぬ。(13・34 Ⅱ ⑪と同じ。)

⑬ 36・5・29 へ彼は姦淫を犯せる一賤女子にさへ其無限の愛憐を瀉ぎ給ひぬ。(7・53 Ⅱ 8・11 Ⅱ 姦淫の女。⑧と同じ。)

⑭ 36・6・30 へ余は今日語るに約翰傳第八章なる姦淫にて捕へられし婦人の事を以てし要之基督教の根本的思想は Love にあり、人は多く Love を説けば道德は柔に偏して又爲すなきものたる可しと云へどもそれは眞に愛の眞諦に達せざるもの云ふ所のみ。(8・1 Ⅱ 姦淫の女、⑧⑬と同じ。)

⑮ 36・8・1 へ人妻を戀ひ、自ら殺すを敢てせし Werther 彼果して永久に罪せらる可きものなるや。汝の心を

檢せよ。而して尙安きもの先づ第一の石を彼に投げよ。可憐此世、此塵世遂に此罪多き Werther に石を投じ得るものなし。√(8・1〜11に準ずる。⑧⑨⑩と同じ。)

②② 36・8・26 へ余は此航海の間をヨハネ傳の研究に用ゐんとす。√

②③ 36・8・28 へ今日よりヨハネ傳の第一章を讀む。√(第一章 言葉が人間となる、洗礼者の証言と弟子召命、(共)間)。⑭と同じ。)

②④ 36・8・29 へ今日はヨハネ傳第二章を讀めり。√(第二章 カナの婚礼と宮清めの二つのしるし、イエスは人を信ぜず(間)(内)。)

②⑤ 36・8・31 へ歸り來りて基督傳を讀み、基督の教訓と云へる章に於て、基督が教訓の模範として一は井戸のほとりにありしサマリヤの女。√(4・1〜42 Ⅱイエスとサマリヤの女、へニコルの基督傳)(共(間)。)

②⑥ 36・9・1 へ此日ヨハネ書を讀み「爾等人の榮を受けて神より出づる榮を受けざるに、いかでよく信ずる事を得んや」と言へる章に讀み到りて思はず竦然たりき。是れ本年の元旦に聖書が余に教へし大教訓なり。√(5・44 Ⅱ⑥⑩⑪と同じ。)

②⑦ 36・9・6 へ朝よりヨハネ傳第九章を讀む。√(第九章 Ⅱ生まれながらの盲人を治す(共。②⑨⑬と同じ。)

②⑧ 36・9・6 へ市村君司會し柏井君はカナの婚筵に就て。√(2・1〜11 Ⅱカナの婚筵(内)。⑭と同じ。)

②⑨ 37・7・20 へ我が主なる神なる基督は、名もなき漁夫や税吏やの足を洗ひ給へり。(13・1〜20 Ⅱ弟子の足を洗う(共)。③と関連あり。)

③⑩ 37・7・20 へ余は聖書の中ヨハネ傳を規則正しく讀み居れり。√

③⑪ 37・7・21 へ余は心より基督の "If you were blind, ye should have no sin; but now ye say, We see; therefore your sin remaineth" へ云ひ給ひし語を味ひ知りぬ。√(9・41 Ⅱ精神的盲目(共。②④⑬⑭⑯と同じ。))

- ③② 37・8・2 へ日記を記したる後靜かに聖書を讀む。ヨハネ書の中基督が弟子に對して爲されたる最後の教訓身に泌むを覺ゆ。こは實にヨハネ書の特徴なり。(13・31と35||新しき戒め(内)、特に34節「互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」を指す。①⑦⑱と同じ)
- ③③ 37・8・2 へ「我れは神の獨り子なり」と云へりし人の子(3・16に準ずる。)
- ③④ 37・8・3 へ聖書を展き John の Chap.14 を讀む。曰く、「I will not leave you comfortless; I will come to you. Yet a little while, and the world seeth me no more; but ye see me, because I live, ye shall live also. At that day ye shall know that I am in my Father, and ye in me, and I in you.」基督はかく余に宣ひぬ。(14・18と20||終末の時、主におるもの(間)、現在したもうキリスト(内。))
- ③⑤ 37・9・15 へ「事終れり」と十字架につけられたる(19・30||十字架の完成(間。))
- ③⑥ 39・10・6 へ誰か先づ石もて打ち得るものぞ。(8・7に準ずる。姦淫の女。⑧⑨⑳㉑と同じ。)
- ③⑦ 大正5・8・3 へ約翰傳十二、二三(II)「人の子が榮光を受ける時がきた」とは、十字架上で死に復活することを弟子たちに示しているのである(間)。武郎は安子の死もやがて復活の榮光であれと祈る氣持から「終焉日記」にメモしたのであらう。この二十三節はかつて武郎がこの聖書に日印を付けて心に留めてあったところである。「終焉日記」とは安子臨終の記録であり筑摩全集第十二巻にあるが新潮全集にはない。明治四十一年九月十五日、婚約中の安子に、自分で傍線を引き日印をつけたり書き込みをしてある『新約全書 詩篇附』を贈っている。その聖書のヨハネ傳十二章二十三節の「イエス」と二十八節の「榮を顯」とに日印と日印とを付けている。)
- ③⑧ 大正5・8・3 へ約翰傳十四、八(II)「主よ、わたしたちに父を示して下さい。」「わたしを見た者は、父を見たのである。」子と父とは一つである。神への道(間)。十二章二十三節同様、安子の臨終に際し「終焉日記」にメモしたものである。)

③9 36・9・22 〈Mrs. Fiske と言ふ人 “Mary Magdalene” を演じつゝあり。同婦人の Mary Magdalene もさる事ながら、最も深く感興を引きたりしはイスカリオテのユダなり。一人ながら聖書に於ては例を見ざる二大性格なり。此劇に於てはユダがマリヤを戀慕し（略）遂に基督を賣るに至りしまでの経路は誠に畏ろしき許りなりき。〉（12 13章 注油（12・11））、エルサレム入城（12・12）19）、公生涯の終局（12・37）50）、弟子の足を洗う、最後の晩餐、裏切りの予言（13・1）30）（間）（フ）。詳細は「ヨハネ伝内容別順位 1）21位解説」の第3位「会計係イスカリオテのユダの裏切り」を参照されたい。④に類似す。）

以上のように①番から③9番まで詳説してきたので、全体をまとめて見ておこう。聖書の中で、有島がヨハネ伝に最も引かれるわけ、三点を挙げてみると次のようになる。

第一点 「姦淫の女」の話があるからである（5回 ⑧⑱⑲⑳㉑㉒）。

第二点 ヨハネは愛の使徒、ヨハネ伝は愛の福音書と言われるからである（6回 ①③⑦⑱⑳㉑㉒）。

第三点 ヨハネ伝は思想的神学的に深い思考思索を要する福音書であるからである。理論的思考を得意とする思想家としての有島は、ヨハネ伝の内容には引かれるのである（6回 ⑪⑫⑬⑭⑮⑯㉑㉒）。

これまでの三点は日記の中のヨハネ伝39回について言えることであるが、書き記したすべてのヨハネ伝の言葉192回を内容別に整理しても、この三点は言えることが分っている。尚、書き記したすべてのヨハネ伝の言葉192回を内容別に整理した結果、第四点は、裏切者ユダの心理描写に秀れているのは、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書ではなく、ヨハネ伝であるからである、ということを補足しておこう。有島にも裏切者意識が潜在していたからである（第二部「裏切者意識と潜在信仰」）。このようにまとめてみるとヨハネ伝には、れ込んだ有島武郎の人となり、が又改めて理解できるように思う。

37	36		
36	39	18	迷へる羊の如し
9	12	12	
15	22	14	
5	20		行爲學者より勝れずば
		9	13 15 29

① 30・5・22 へ我は彼の聖書に於ける「人汝の左の頬を打たば、汝其人に又右の頬を向けよ」と云へる語を想起せずんばあらず。(5・39 無抵抗(内)。ルカ6・29にもあり。)

② 31・12・31 へ余を窄き門に導き給はんが爲めには余に sinful なる事を覺悟す可き一事を殘されたり。(7・13に準ず。 信仰のみが見いだす門(三)。ルカ13・24に類似あり。)

③ 32・4・17 へ余は家に歸りて再び聖書を讀み、山上の垂訓の處を讀み、義者の上げらるゝを見て何とも云へぬ心地となれり。 Behold, the righteous shall be recompensed in the earth; much more the wicked and the sinner。(5・3 へ山上の垂訓。いかに生きるかについての主の語りかけ(内)。⑭⑮⑯⑰類似す。)

④ 32・6・14 へ「死者をして死者を葬らしめよ」、余亦よく之れを知れり。(8・22 へ弟子の覺悟(共)。ルカ9・60にもあり。⑳に類似す。)

⑤ 32・6・14 へクリスト言ひ給へり。 I say unto you, That many shall come from the east and west, and shall sit down with Abraham and Isaac, and Jacob, in the Kingdom of heaven. But the children of the kingdom shall be cast out into outer darkness: there shall be weeping and gnashing of teeth. 余をして神の言を信ぜしめよ、然らば彼女(祖母、著者注)は必ずや今や天父の傍にありて Abraham 等と席を同じうしつゝあるなり。而して見よ、哀れなる Kingdom の子は outer darkness に放置せられて、神を求めつゝ泣けり。噫。(8・11 12 へ選民の思いにおこつた者に対する警告(三)。ルカ13・28にも類似あり。)

⑥ 33・1・24 へ若しくはナザレの僻村、東方遠來の旅客を導きて世界開闢以來最も榮光ある奇跡を暗示せるもの

は、此星にあらざりしか。嗚呼星よ。〕(2・1と12に準ずる。|| 東方の博士たちが訪れる(三)共。⑫に類似す。)

⑦ 34・3・3 へ嗚呼我知らず、汝亦知らず、唯神のみ知り給ふ。〕(24・36に準ずる。|| 絶対なる神の主権。マルコ13・32にもあり。⑯⑰に類似す。)

⑧ 34・4・13 へ無數の蟲類にソロモンの榮華の極だに及ばざる宮殿を供して、〕(6・29に準ずる。|| 虫たちにとつて春の原野はソロモンの榮華の極でさえ及ばぬ宮殿である。神に榮光あれ(三)。ルカ12・27にもあり。⑳に類似す。)

⑨ 34・7・25 へ主よ、我が凡てよ、迷へる羊に直き道を教へ給へ、みまへに跪きて我が靈痛く戦けり。〕(18・12と14に準ずる。|| 神にとつて弱小者、迷っている者は、大切な存在者なのである。ルカ15・3と7にもあり(三)。)「遺された手帖から」(⑬⑭⑮⑯⑰⑱)に類似す。)

⑩ 34・11・24 へ忽ちにして弟子の一人は不平を漏らせり「此膏を糜すは何故ぞや。之れを鬻がば三百有奇のデナリを得て貧者に施す事を得ん」と。列座の弟子は其有理の言に動かされて亦其聲に和しぬ。嗚呼是れ今日の社會學者なるものが現に稱呼しつゝある聲にあらずや。〕(26・89に準ずる。|| デナリは労働者一日の賃金である。常識をこえたマリヤの真心からの最大の感謝と讚美の行爲。弟子の言葉は、主を理解していない言葉としてしりぞけられねばならない(三)間。マルコ14・45、ヨハネ12・45に類似あり。尚、この文中のひらかなは著者が付けてある。⑪に類似す。)

⑪ 34・11・24 へ〔彼に係はる勿れ。(略)我まことに爾曹に告げん、天の下いづくにても此福音の宣べ傳へらるゝ處には、此婦の爲せし事も亦其記念の爲めに言ひ傳へらるべし〕と。〕(26・10と13に準ずる。|| ベタニヤのマリヤの香油注ぎ。葬りの用意(辞)共(三三)。引用文はマルコ14・6と9と同じ。ヨハネ12・1と8に類似あり。⑩に類似す。)

⑫ 34・12・26 へ東方の博士はるゝと異象のまぼろしに導かれ駱駝の背に夜毎の光を打仰ぎつゝうまぶねの下に跪きてより、聖母にして聖處女の例へがたなき尊相。〕(2・1と12に準ずる。|| 東方博士の訪来(内)。⑥に類似す。)

- ⑬ 36・2・23へ父様、どうか此愚かなる迷羊をよきに導き下さい。(18・12・14に準ずる。||神にとって弱小者、迷っている者は、大切な存在者なのである(二三)。ルカ15・3・7にもあり。⁽²⁾⑨⑬に類似す。
- ⑭ 36・3・1へ始めに約翰書を熟讀し後馬太傳の山上の垂訓を讀みぬ。……余は非常に敬肅の念を以て *Benitude* (*Benitude* (山上の垂訓中に説いた福音。5・13・11)の誤植であろう。著者注。)を讀みたりき。高潔比なき聖訓は余が心を痛ましむ。是れ世の多くの人には救済にして余には苦痛なり。世の人皆安んじて救はれたりとなすに、余は如何なれば何時までも神の愛憐の御手より遠ざからんとはするぞ。されども *Benitude* の如きを讀む時に其高崇は果して何の世に達せらる可きやを思へば、余の心には汚穢滿ち不義滿ちて唯々恨悔退縮の悲みあるのみ。神の前に潔きものなし。(5・1・7・28 || 山上の垂訓(内)。③⑭⑮⑯に類似す。)
- ⑮ 36・3・1へ迷へる羊の跡追ひてそを故の群に収む可く余を遣はし給ふ事もあらんと思へばなり。(18・12・14に準ずる。⑨⑬⑲⑳㉑㉒に類似す。ルカ15・3・7にもあり。)
- ⑯ 36・3・7へ只神のみ知り給ふ。(24・36に準ずる。||絶対なる神の主権。マルコ13・32にもあり。⑦⑱と同じ。)
- ⑰ 36・4・3へ唯神余の心を知り給ふ。(24・36に準ずる。⑦⑱と同じ。)
- ⑱ 36・4・19へ余は馬太傳を讀み第一章に出でたる系圖の人物を知らんが爲めに舊約聖書創世記を讀む可く試みたれども、(1・1・17 || イエスの系図(辞)。ルカ3・23・38にもあり。)
- ⑲ 36・4・21へ朝、馬太傳の第三章を讀む。John Baptistの荒野の叫びなり。基督が評せられて人の子の如きもの未だ生れずとなし給ひし所のものなり。(3・1・17 || 先驅者・洗礼者ヨハネの出現。救いの序曲(三)。マルコ1・1・1・9、ルカ3・1・18、ヨハネ1・6・8、19・27にもあり。)
- ⑳ 36・4・22へ朝、馬太傳の中 Christの temptationを讀む。(4・1・11 || 荒野の試み(辞)。マルコ1・12、ルカ4・1・13にもあり。)

②1 36・4・30「嗚呼、「我れ笛吹けども汝踊らず」余は余の道を獨り歩まざる可からず。否、されども神余と共に
のまさん。』(11・17Ⅱ主の呼びかけに正しく応答しない姿である(三)。ルカ7・32にもあり。)

②2 36・5・8「蛇の如く慧からざりし人の子の窮境を見よ。』(10・16に準ずる。Ⅱ「へびのように賢く、はとの
ように素直であれ。」とはキリスト者の態度である(内)。へんの子」とは武郎自身であり、へ窮境」とは、学習院時代
の親友・増田英一と妹愛子とのプラトニックラブを育もうとして失敗したことを指す。明治二十八年、中等科の十七
歳の時以来、増田と武郎は親しかった。そしてこの頃から増田は愛子を思っていたらしい。明治三十年夏季休暇に札
幌から上京した武郎は増田と内村鑑三を青山南町の自宅に訪れている。その年の十二月六日、二歳下の愛子は山本直
良に嫁した。しかしその後も増田の愛子に対する愛は変わらず、そ思のいを兄の武郎に書いていた。へ余は永く永く然
り實に永く應ぜざりき。』へ彼女は片信をだに送らざりき。是れ彼が失望の淵に陥り誤解の暗に入りし所以なり。』し
かし愛子も増田への思いはあった。へ愛子若し彼女の戀を捨てなば世には戀なるものある事なし。』(36・5・3)』妹
は人妻になっていることも考え、結局、両者の間にいる武郎自身の責任と感じへ余は一人の有爲なる青年を殺したる
もの、心裂くるが如し。』となる。キリスト者としてへ蛇の如く慧からざりし』自分を反省しているのである。)

②3 36・5・8「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」何ぞ我を捨て給ふや。』(27・46Ⅱこの言葉は、詩篇22
・1にある。主イエスは、ここで、事実捨てられている。自らの罪ではなく、罪人の罪のために、おそるべき神の審
判を受けている。「神に見捨てられる」ということは、本当は戦慄すべき事態である。人は、この叫びの深さを知る
ことも、表現することもできない。しかし他方、イエスは、この言葉において、神にもっとも近く身を置いてい
る。ヘルムート・ティリーケは、この言葉には、神とキリストの間の無限のへだたりと無限の近接が同時に存在している
と考えている(三三)。マルコ15・34にもあり。)

②4 36・5・8「世の鹽たる可かりし高潔の靈魂」(5・13に準ずる。Ⅱキリスト者の存在の意義(二二)。マルコ9

・ 50、ルカ 14・34。③⑭⑲⑳に類似す。

⑲ 36・5・13 へ神よ。我が牧者よ、願くは芥子粒の如き信を賜へ。 (17・20に準ず。||どんなに小さくても、存
在する信仰には力あり(三三)。ルカ 17・6にもあり。)

⑳ 36・6・19 へ眞面目なる人は祝福す可きかな。實に其人は神の國を見るべければなり。 (5・8に準ずる。||
信仰だけが神によって、眞面目なる人としてうけいられるのである(三三)。③⑭⑲⑳に類似す。)

㉑ 36・8・25 へ砂上の樓閣の如く見る見の中に散りくだけて。 (7・26に準ずる。||キリストの言葉を聞いて行
なわない人は、このような愚か者にたとえられる(三三)。ルカ 6・49に類似あり。)

㉒ 36・8・29 へ生きて枕する所なかりし彼は、彼等にも亦よき枕を與へ給ふなる可し。 (8・20に準ずる。||主
の貧しい地上の生涯(三三)。ルカ 9・58にもあり。④に類似す。)

㉓ 36・9・1 へ主の廣き胸迷へる羊を捨て給はざれ。 (18・12 へ 14に準ずる。||神にとって弱小者、迷っている
者は、大切な存在者なのである(三三)。ルカ 15・3 へ 7にもあり。⑨⑬⑮⑳に類似す。)

㉔ 37・7・27 へ異郷人に一杯の水を與ふる人は祝福さる可きかな。 (10・42に準ずる。||イエスの愛しておられ
る者に、水一杯をやる小さな愛でも、それはイエスに対する愛であつて、その報いは大きい(間)。マルコ 9・41にも
あり。)

㉕ 37・8・6 へ悲まんよりは我れに來れ。我れは汝の凡てなり。 (11・28 27に準ずる。28 ||絶望する者に恵みの
招き。27 ||主とキリスト者との關係(三三)。ルカ 10・22に類似あり。)

㉖ 37・9・13 へ去る日 Mr. Hall を訪へる時、氏は余に貸すに “Memoirs of the Life and Gospel Labors
of Stephen Grellert” Philadelphia (Friend’s Book-store, 304 Arch St.) へふ書を以てしぬ。(略)余は殆んど
余自身の心靈的告白を讀むの思に堪へざりき。余が此數日の間筆に云はしめんとして云はしめ能はざりし思想を、彼

は最も明白に余に示せり。其二三を摘記せんか。“My mind was, at seasons, so taken up with a sense of the Lord's love, that it seemed as if I could have continued days and nights swallowed up in it. (略) My desire for them is that they may come to the state of the child, — the weaned child, — that they may come to Christ, and learn of him; for though there may be much instruction in the sciences of the world, yet Christ is the only teacher in the things of God.”是等は凡て余の心深く味へる所なり。(23・10に準ずる。|| 「あなたがたの教師はただひとり、すなわち、キリストである。」万物の上にある神の支配に対して、人間同士の兄弟性を強調した言葉である(二三)。明治三十七年の夏二ヶ月間、フランクフォードにあるフレンド派の精神病院で看護夫として働きながら、読書し、見聞を広めるのである。その病院の管理人 Mr. Hall (新渡戸夫人マリの兄ジョセフ・エルキンソンの親戚) から読むようにと渡された本が、先達の伝道の生涯をまとめたものである。その中の一部の英文を引用しておいたので翻訳しておこう。「私の心は常に神の愛という観念に向けられていたので、私はまるでその観念に包み込まれて日々を送り続けることができたかのように思えた。(略) 私が彼ら(召使い達)に望むことは彼らが子供つまり離乳した子供の心の状態にたち帰ること——すなわち彼らがキリストにたち帰りキリストより学ぶことである、というのは世の諸科学にも多くの教えがあるかもしれないが、キリストこそ神の御業における唯一の教師であるからなのである。」以上のような内容に対して有島は「余自身の心靈的告白」へ凡て余の心深く味へる所なり。」と感想を述べているのである。尚、23・10に準ずる部分は翻訳最後の傍線文である。又、引用した英文は叢文閣全集第十二巻からである。)

③③ 37・9・19 へ余の心の中に沁々と “I was a stranger; and ye took me in.” と云へる聖句の一を思ひ浮べたる日なり。(25・35 || 愛とは具体的な行為である(三三))

③④ 37・9・19 へ嗚呼言ふ『心の貧しきものは幸なり』と。(5・3 || 自分を低くして神に栄光を帰することであ

る。山上の垂訓の一つ(三三)。③⑭⑮⑯と一部同じ。

③⑤ 39・9・3 へ明日の日に心わづらふ事をしない。野の花のやうだ。(6・34・28に準ずる。|| 明日の神の守りを信ず(三三)。⑧に類似す。)

③⑥ 39・12・22 へ迷へる羊の如し。(18・12・14 || 神にとって弱小な者、罪に沈む者は大切な存在者なのである(三三)。ルカ15・3・7、申命22・1にもあり。⑨⑬⑮⑲に類似す。)

③⑦ 36・9・15 へ「汝の行爲學者とバリサイ人より勝れずば」と云はれし聲雷の如く余が耳に響き來る時余は何を以て、余は信仰篤し、余は基督信者なりと云ひ得可きや。(5・20 || 弟子たちの義が、熱心さにおいても、また、その内容においても、律法学者やハリサイ人にまさっていなければ、彼らは天国にはいることができない(三三)。有島はキリスト者として自分の行為に気をもんでいる。このこととヤコブ書重視と関連あり(36・2・5、7・22)。

(内) || 『内村鑑三聖書注解全集』第八卷「マタイ伝」教文館(昭和44年)

(三) || 三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

(共) || 『新約聖書 共同訳』カトリック・プロテスタント共同翻訳 日本聖書協会(昭和53年)

(辞) || 『新聖書大辞典』キリスト新聞社(昭和46年)

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19
39 ・ 12 ・ 22	37 ・ 8 ・ 6	37 ・ 8 ・ 4	37 ・ 7 ・ 29	36 ・ 9 ・ 1	36 ・ 8 ・ 29	36 ・ 8 ・ 25	36 ・ 6 ・ 19	36 ・ 6 ・ 19	36 ・ 5 ・ 13	36 ・ 5 ・ 13	36 ・ 4 ・ 30
15 ・ 3 ・ 7	10 ・ 22	10 ・ 25 ・ 37	23 ・ 34 ・ 38	15 ・ 3 ・ 7	9 ・ 58	6 ・ 49	15 ・ 11 ・ 32	23 ・ 46	18 ・ 8	17 ・ 6	7 ・ 36 ・ 50
<p>罪深い女をゆるす 芥子粒の信を賜へ 人の子來らん時信を 十字架最後の言葉 放蕩息子 砂上の樓閣 枕する所なし 迷羊を導き給へ 天父の宥恕を祈る 善いサマリア人 我れは汝の凡てなり 迷羊を導き給へ</p>											
9 13 15			11	9 13 15			10	12 14 16			

① 30・5・22へ我は彼の聖書に於ける「人汝の左の頬を打たば、汝其人に又右の頬を向けよ」と云へる語を想起せずんばあらず。(6・29 Ⅱ天国の民の律法。マタイ5・39にもあり(内)。)

② 31・12・31へ「貧乏人、無智の人、罪人、嗚呼窮せざれば基督の酒宴に侍するものなきが如し」とは實に眞理なり。余の家は幸か不幸か不足なきまでに富めり。——嗟、余は實に基督の酒宴に侍り難きものなり。(14・12 Ⅱ神は見捨てられてゐるような者を招かれる。心からの交わりがあるから(牛)。)

③ 31・12・31へ余を窄き門に導き給はんが爲めには余に *sin* なる事を覺悟す可き一事を殘されたり。(13・24に準ずる。Ⅱ悔い改めと信仰がなければ入ることはできない(牛)。マタイ7・13にも類似あり。)

- ④ 32・6・14 「死者をして死者を葬らしめよ」、余亦よく之れを知れり。(9・60 Ⅱ弟子の覚悟(牛)。マタイ8・22にもあり。)
- ⑤ 34・3・23 「若しくは又投寡トウゴの机下に犬と共に落ち散る食物を拾ひ食ひしラザロの天國に擧げられたる其瞬間を思ひ見なば、此一場の光景稍々鬚髯はうぶつせらるべき。」(16・19 Ⅰ31に準ずる。Ⅱ金持ちとラザロ。現世において己が欲する幸をのみむさぼり盡したものと、己が欲せざる不遇の一生も神与のものと柔順に送り通したものとの違い(内)。)
- ⑥ 34・4・13 「無數の蟲類にソロモンの榮華の極に及ばざる宮殿を供して、」(12・27に準ずる。Ⅱ虫たちにとって春の原野はソロモンの榮華の極でさえ及ばぬ宮殿である。神に榮光あれ(牛)。マタイ6・29にも類似あり。)
- ⑦ 34・5・10 「ソロモンが立てし シオンの宮居の地も 此地の聖きに 若くべしや。」(12・27に準ずる。Ⅱ「祝福されたる聖地」はソロモンが立てたシオンの宮居の地でさえも及ばぬ地である(牛)。マタイ6・29にも類似あり。列王上5・1 Ⅰ7・51 神殿建築。)
- ⑧ 34・5・26 「今日は安息日なりき。朝聖書を読み、教會に出席せり。而して小兒と共に日曜學校を終へ、一生懸命になりてローランド氏の「生を完ふせんとするものは之れを失ひ、生を失ふものは之れを完ふす」との説教を聞きて感慨を惹きたれども、余の心は猶鈍にて何の用にも堪ゆ可からざりき。」(17・33 Ⅱみこころであるなら命を捨てることがいとおわないと決心をする者に、かえつて神は多くの恵みを与えて下さる(牛)。)
- ⑨ 34・7・25 「主よ、我が凡てよ、迷へる羊に直き道を教へ給へ、みまへに跪きて我が靈痛く戦けり。」(15・3 Ⅰ7に準ずる。Ⅱ神にとって弱小者、迷っている者は、大切な存在者なのである。マタイ18・12 Ⅰ14にもあり(牛)。)
- ⑩ 35・12・29 「主よ、放蕩なる汝の第二子は再び汝より離れ去りぬ。……主よ、願くは彼の悲しむべき放蕩を許し給へ、而して彼の口を一となし、彼の背に笞を加へ給へ。」(15・11 Ⅰ32に準ずる。Ⅱ放蕩息子。人々の悔い改めて帰るのを待たたもう神の愛(牛)。)

⑩ 35・12・31へ而して彼等尙悟らずして彼を十字架に擧ぐるや、彼は彼等の爲めに天父の宥怒ゆるしどを祈り給ひき。(23・34に準ずる。||キリストは、自分に最大の悪をなしている人々のためにも神にゆるしを願うことにより、新しい愛を示した(牛)。漢字に付いているひらかなは著者が付けたものである。)

⑫ 35・12・31へ凡てを主に任せん。(23・46に準ずる。||十字架上の最後の言葉(牛)。詩篇31・5の言葉。)

⑬ 36・2・23へ父様、どうか此愚かなる迷羊をよきに導き下さい。(15・3と7に準ずる。||神にとって弱小者、迷っている者は、大切な存在者なのである。マタイ18・12と14にもあり(牛)。⑨に類似す。)

⑭ 36・3・1へ余が此汚穢に充ち満ちたる心と肉とを其儘に主の御手に任せ奉らんのみ。(23・46に準ずる。||十字架上の最後の言葉(牛)。詩篇31・5の言葉。⑩に類似す。)

⑮ 36・3・1へ迷へる羊の跡追ひてそを故の群に収む可く余を遣はし給ふ事もあらんと思へばなり。(15・3と7に準ずる。||神にとって弱小者、迷っている者は、大切な存在者なのである(牛)。マタイ18・12と14にもあり。⑨に類似す。)

⑯ 36・3・7へ凡てを御手に任し奉る。(23・46に準ずる。||十字架上の最後の言葉(牛)。詩篇31・5の言葉。)

⑰ ⑭に類似す。

⑱ 36・3・15へ朝 The 20th Century New Testamentと和聖書路加傳とを読む。路加の第十二章畏ろしき計り力ある句「我が友爾曹の身體を殺して後に何をもなし能はざる者を懼るゝ勿れ。」「先づ神の國を求めよ、さらば是等のものは汝等に加へらるべし。」(12・4 ||神のみを恐れよ。12・31 ||神に凡てをゆだね思いわずらうな。共に弟子たちへの教訓で、マタイ10・28、6・33にもあり(牛)。

⑳ 36・4・30へ嗚呼、「我れ笛吹けども汝踊らず」余は余の道を獨り歩まざる可からず。否、されども神余と共にあるまさん。神の道を歩む如く見ゆるものは多し。然かも其内容を探れば、其根柢には皆「我」なるものありて潜め

るなり。彼等の正義は彼等の爲めなり。彼等の善良なる行爲は彼等が最終の comfort のためなり。 (7・32) 主の呼びかけに正しく応答しない姿である (三)。マタイ 11・17 にもあり。既に入会 (34・3・24) して二年後、偽善的教会人に対する有島の批判文として注目すべき一例である。他に 36・1・11、5・10、「半日」などの例がある。

⑭ 36・4・30 へそのあしは わがくちづけ わがかみ わがなみだを (7・36) 50 に準ずる。 ⑮ 罪深い女をゆるす。イエスに香油を塗ったということは四つの福音書にしろされているが、ルカによる福音書の記事は他の三福音書と内容的に全く違っている。三福音書にはイエスの葬りの準備の意味をもって、ベタニヤで、マリヤの愛のわざとしてなされたことがしるされているが、ルカによる福音書は、罪の女のわざとしてしるされている (牛)。香油を塗るところで、足、接吻、髪、涙の四つの単語があるのはルカ伝七章だけである。

⑯ 36・5・13 へ神よ。我が牧者よ、願くは芥子粒の如き信を賜へ。 (17・6 に準ずる。 ⑰ 眞の信仰は、不可能も可能にするもの (牛)。マタイ 17・20 にもあり。)

⑱ 36・5・13 へ「人の子來らん時信を世に見んや」と云ひ給はされ、世は尙信を得んとて悶えつゝあり。 (18・8) 再臨の時、喜びをもって迎えることができる信仰に生きる人は、何人あることであろうか (牛)。

⑳ 36・6・19 へ余は余が凡てを主の御手に委ぬ。 (23・46 に準ずる。 ㉑ 十字架上の最後の言葉 (牛)。詩篇 31・5 の言葉。⑫⑬⑭⑮⑯に類似す。)

㉒ 36・6・19 へ放蕩なる末子を我が父は憐み給ふ事もやあらん。 (15・11) 32 に準ずる。 ㉓ 放蕩息子 (牛)。人々の悔い改めて帰るのを待ちたもう神の愛。⑩に類似す。)

㉔ 36・8・25 へ砂上の樓閣の如く見る見る中に散りくだけて、 (6・49 に準ずる。 ㉕ 聞いても行わない人は、土台のない家が洪水の時には直ぐ倒れるように、試練には耐えられない (牛)。マタイ 7・26 に類似あり。)

㉖ 36・8・29 へ生きて枕する所なかりし彼は、 (9・58 に準ずる。 ㉗ 主に従う者は、主と共に枕する所さえない

ことを覚悟しなければならぬ(牛)。マタイ 8・20 にもあり。)

②6 36・9・1 〈主の廣き胸迷へる羊を捨て給はされ。〉(15・3と7に準ずる。罪の道にさまよい、離れたものが、悔い改めて帰ることを、父なる愛の神は待ちたもう(牛)。マタイ 18・12と14にもあり。⑨⑩⑮に類似す。)

②7 37・7・29 〈基督は國賊と罵られ神を汚すものとのよしられ給ひて尙彼等の爲めに祈るを忘れ給はざりき。〉(23・34と38に準ずる。キリストは、自分に最大の悪をなしている人々のために神にゆるしを願うことにより、新しい愛を示した(牛)。⑩に類似す。)

②8 37・8・4 〈旅人を重傷負ひたる儘に残して、よきマリヤ人を強ひて拉し去らんとする心なの盗人は災なるかな。〉(10・25と37に準ずる。善いサマリア人。強盗から重傷を負わされた人に慈悲深く行動する者こそ、よい隣人である(共(牛))。へよきマリヤ人〉はへよきサマリア人の脱字、へ心なの盗人はへ心なき盗人の誤植であろう。)

②9 37・8・6 〈我れは汝の凡てなり。〉(10・22に準ずる。主とキリスト者との関係。マタイ 11・27に類似あり。)

③0 39・12・22 〈迷へる羊の如し。〉(15・1と7に準ずる。罪の道にさまよい、離れたものが、悔い改めて帰ることを、父なる愛の神は待ちたもう(牛)。⑨⑬⑮⑲に類似す。)

(内) Ⅱ 『内村鑑三聖書注解全集』第九卷「ルカ伝」教文館(昭和47年)

(牛) Ⅱ 牛丸省吾郎著『3 ルカによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和44年)

(三) Ⅱ 三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

(共) Ⅱ 『新約聖書 共同訳』カトリック・プロテスタント共同翻訳 日本聖書協会(昭和53年)

観想録（日記）と創世記

番	期	日	章	節	内	容	同	項
14	36	4・19	12	1・2・3、29	馬太傳一章系圖人物			
13	36	3・7	49	24	全能の御手よ、僕は		7	11
12	36	1・1	49	24・25	全能手我を救ひ出し		7	11
11	35	12・31	49	22、26	攝理を彼等の上に		7	
10	35	12・29	4	24	七十倍罪を許し給へ			
9	35	11・15	4	1、12	何故汝弟を殺せるや		3	
8	34	9・16	2	17、3、6	智慧の果を味ひ			
7	34	7・25	49	24	全能手天地を宇宙に			
6	34	6・18	19	24・25・26	ソドム、ゴモラ		1	2
5	34	6・18	2	7	塵より生命を造り		1	4
4	34	6・9	20	7、24、3	アダム、イブのエデン		1	2
3	33	12・31	2	17、3、6	始祖の墮落と自己欲			
2	33	12・31	1	27、2、7	神と等しき身體を慕			
1	33	12・31	2	7・21・22	始祖アダム、エバ			

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15
43 3 44 1	41 1 28	37 8 6	36 10 8	36 9 15	36 8 27	36 6 19	36 4 29	36 4 29	36 4 21	36 4 20
1 章	1 1 2 4	2 7	2 18 25	4 24	25 24 34	2 3 章	49 24	2 章、3 23	推測 21 1 36 43	25 19 36 43
the 1st chap. of Genesis...										
24	1 2 4 5 22	1 2 4 5	10	15 16	3 8 17	7 11 12 13	3 8			

① 33・12・31 (然り人類の始祖アダム、エバの生れしより此に幾十萬年) (2・7に準ずる。|| 神は人間を土から造られた。2・2122に準ずる。|| 神は人から取ったあばら骨で女を造られた。)

② 33・12・31 (人類は Der kleine Gott der Welt として神と等しき身體を稟け特殊なる靈魂を受けながら、(1・27に準ずる。|| 神は自分のかたち人に人を創造された。2・7に準ずる。|| 命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。)

③ 33・12・31 (始祖の墮落と共に此貴重なる天賜を濫用し、悪用し、人は自己の欲する所に従ひて方向なき進路を取りたるが故に、) (2・17、3・61323に準ずる。|| 蛇に誘惑され、エバは禁断の木の実を食べ、夫にも与える。)

そしてエデンの園を追放される。

④ ^{〔一七〇〕} 34・6・9 へアダム、イブの 楽しき時 譬へがたなき エデンの 景色は(2・7822、3・20)エデンの園はアルメニヤの南部、ヴァン湖畔、アララット山の南麓にあったと推定されている(内)。

⑤ 34・6・18 へ神よ、總ての塵より生命を造り軽き粘土より人類を創り給ひし御手よ、(2・7に準ずる。)

⑥ 34・6・18 へ人を鹽の柱となし、ソドム、ゴモラを灰の下に埋め給ひし御手よ、(19・242526)ロトの妻がこの世の喜びを諦められず神の命令に背いてうしろを見て塩の塚となる。神が人間の罪を罰せんために送りましたもう天災、神の審判(内)。(フ)。

⑦ 34・7・25 へされど全能の手は此小天地を霧によりて宇宙につなぎ給ひぬ、(49・24に準ずる。「手帖」)

⑧ 34・9・16 へ智慧の果を味ひ知らで(2・17に準ずる。 へ善悪を知る木の実)

⑨ 35・11・15 へかくの如くして此小なる地球の表面に、兄と弟とは嘗て其の争を解かず。神の前に親しき幼児たるべき人類は、悲しくも剣を乗り銃を杖つき遇へば相殺し離るれば相罵り、寸時も其唇より呪の聲を絶たざるなり。

……。汝は何故に汝の弟を殺せるや、(4・1と12に準ずる。 へ人類最初の殺人罪。 弟アベルの信仰と高德をねたんだ兄カインの殺人罪(内)。「カインの末裔」の題名の由来。)

⑩ 35・12・29 へ憐れむべき彼は再び主の御前に歸り來り小さき其頭を俯せぬ。七度を七十倍せるまで罪の子の罪を許し給へ、(4・24に準ずる。 へ「レメクの劍の歌」(内)。「大洪水の前」第二幕、レメクの台詞。)

⑪ 35・12・31 へされど全能の手は、我等の測り知る能はざる攝理を彼等の上に置き給ひぬ、(49・22と26に準ずる。 へヨセフについての託宣(フ)。(7)に類似す。)

⑫ ^{〔一九三〕} 36・1・1 へ全能の手のみ我を地獄の汚穢より救ひ出し給ふ、(49・2425に準ずる。 (7)⑪に類似す。)

⑬ 36・3・7 へ全能の御手よ、小なる僕に實に何をなす可きかを知らず、(49・24に準ずる。「ヨセフについて

の託宣」の一部「全能者の手」は聖書中、49・24だけにある。⑦⑩⑫に類似す。

⑭ 36・4・19へ余は馬太傳を讀み第一章に出でたる系圖の人物を知らんが為めに舊約聖書創世記を讀む可く試みたれども、頻々として來る客の接待の爲めに讀む可き時間を奪ひ取られぬ。(12・123Ⅱアブラムの召命。29・35Ⅱヤコブは妻レアによりてユダを生む。38章Ⅱタマル(内)。(3)。

⑮ 36・4・20へ朝創生記を讀み、イサク、ヤコブの事蹟を讀む。Pastoral ageの有様描くが如し。此の如き傳説より基督教的精神を發見せし事は餘程の難事なり。……極めて不公平なる神として顯るゝを見る。(21・117、22・117、24・117、25・117Ⅱイサク物語。25・19136・43Ⅱヤコブ物語(フ)。

⑯ 36・4・21へ其閑を得る毎に創世記を讀む。

⑰ 36・4・29へ智慧の樹は今も樂園に生じて主よ、爾のものなり。未だ全く樂園に入り能はざるものゝ、智慧の果を貪り食はんとせし結果はアダムとイブとの夫れに等しかりき。かくて余は樂園を追はれて外の暗黒に投げられぬ。(2章、3章に準ずる)。

⑱ 36・4・29へ正に大能の御手の余を捕へ給ひし時なりき。(49・24「全能者の手により、」に準ずる。⑦⑩⑫に類似す)。

⑲ 36・6・19へ智慧の果を味知りしアダムの未裔は此の如き事能はざるなり。(2章、3章に準ずる)。

⑳ 36・8・27へイサクの子ヤコブ。(25・24134Ⅱ弟ヤコブは兄エサウから長子の特権を買い取る(フ)。

㉑ 36・9・15へ七度を七十七倍する寛容はありとも、余の不順を憐れむの寛容は残され得るや。(4・24に準ずる。Ⅱ「レメタの劍の歌」(内)。「大洪水の前」第二幕、レメタの台詞。⑩と同じ。ユダヤでは7という数字は、完全をあらわすものとされてきた。『事典』の「七つの教会」の項。⑩に類似す)。

㉒ 36・10・8へ余は宛ら禽獸に満ちたりし樂園にイブの誕生を見んとするアダムの如し。(2・18125に準ずる)。

- ②③ 37・8・6 〈爾は尙土塊もて造れる人の中に恒久の或者を求め出でんとす。〉(2・7に準ずる。人間の創造。出エジプト20・4、申命記5・8にある「十戒」の偶像禁止に準ずる(辞)。
- ②④ 41・1・28 〈天地創りし 其の御手の指に〉(1・1と31、2・1と4に天地創造)
- ②⑤ 43・3月下旬と44・1月頃〈The account given of the stages of creation in the 1st chap. of Genesis...〉(創世記第一章に於ける創造の様々な段階についての説明(著者訳)。「手帖十」〔明治四十三と四十四年〕の中のメモである。これは筑摩全集第十二巻 日記三 に収められてある。新潮全集にはない。)

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第一巻「創世記」教文館(昭和45年)

(フ)ⅡC・T・フリッチ著 平出 享訳『創世記』聖書講解全書2 日本基督教団出版局(昭和42年)

(辞)Ⅱ『新聖書大辞典』キリスト新聞社(昭和46年)

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第八巻「マタイ伝」教文館(昭和44年)

25	24	23	22	21	20	19	18
38・1・13	37・8・3	36・7・28	36・7・19	36・5・15	36・4・30	36・4・20	36・4・2
7、8、9章	6・17、7・25	8・1、9	1・16	8・26	9・3	9・11、12、13	13・8
互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ	互に愛を負ふの外負ふ勿れ
イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟	イサク、ヤコブの事蹟
骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも	骨肉のため地獄に入れらるるも
聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲	聖靈云ひ難き悲しみもて我が爲
我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず	我は福音を恥とせず
靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの	靈肉の衝突より來れるもの
神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな	神は感謝すべきかな
律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き	律法解放、聖靈救い、イスラエル蹟き
			16		13		15

① 32・7・7 へ汝、神に於て全くの服従をなさば、汝は其他に於て毫も服従の要を見ず。……。傲慢とは神に對して逆ふを云ふにあらずして、これに服従する事能はざるを云ふなり。汝は果して全然の服従をなせしか。……。汝全然の服従をなして、己れの位置を危むの必要なし。……。神よ、願くば此弱く而かも高慢なるものゝ心を憐れみ給ふて、願くは、全然の服従を捧ぐるを許し給へ。(6・15、23に準ずる。|| 罪の僕から従順の僕・自由の僕へ(岸)(バ)。

② 32・7・7 へ汝が、汝の弱き肉と心とを城壁となせるの間に、汝に永遠の平安來るべきの理なし。(7・14、23に準ずる。|| 肉の内に善宿らず。二律背反。内在する罪(共)(岸)。

③ 32・7・7 へポロは心身共に一度死せりと自ら稱して、其力は實に天まで接しぬ。一度心身を擲たざるものにして真正の獨立と力とを得べきにあらず。(6・6、11に準ずる。|| キリストと共に死に共によみがえる。十字架とパウロ。罪に對して死に、神に生きる。聖化としての福音(辞)(岸)(バ)(共)。

④ 32・8・17 へ嗚呼、罪人の罪人唯基督の血によりて生き得べし。余は唯祈る。(5・89に準ずる。|| 神の愛は、罪人のために十字架の死にいたるまで自分を与えていくもの。罪人はキリストの身代りの血によって義人とされる。神との和解としての福音(バ)。ヨハネ第一の手紙1・7に類似あり(内)(岸)。

⑤ 33・5・25 一人の友をさへ満足せしめ能はざる憐れむ可きものよ、汝が「キリストの愛より我儕を絶せんものは誰ぞや。患難なるか。或は困苦か。迫害か。飢餓か。課程か。危険なるか。是れ我等終日汝の爲めに死に附され、屠られんとする羊の如くせらるゝなり」と録されたるが如し。然れども、我儕を愛する者に頼む凡ては此等の事に勝りて餘りあり。そは或は死、或は生、或は天使、或は熱心、或は有能、或は今あるもの。或は後あらんもの、或は高き、或は深き、又他の受造者は我等を我が主イエスキリストに頼れる神の愛より絶する事能はざるものなるを我は信ぜり」と、歡喜を以て云ひ得るは果して何の時ぞ。我に最も要せらるゝは基督の愛を眞に解せん事なり。(8・35) 39 || 無敵なる神の愛。救いの完成。新約聖書の中心(岸(内))。

⑥ 33・5・25 へ信仰によりて生き、信仰によりて死するの聖生涯我に臨む時は果して何時なる可き。(1・17に準ずる。|| この一語「信仰による義人は生きる」は実にロマ書を圧搾せしものと称し得るのである。ハバクク書2・4よりの引用である。パウロは同一の句をガラテヤ書3・11においても引用している(内)。ギリシア語訳では「義人は私の(神の) 眞実によつて生きるであらう」である(バ)。ヘブル書10・38、11・13に類似あり。有島はイスラエルの列祖、アブラハム、イサク、ヤコブたちのような(聖生涯)を自分も全うしたいと望んでいるのである。)

⑦ 33・6・12 へ我は偉大なる識見を要せず、高尚なる學理を要せず。「若し我等彼の死の狀に等しからば亦彼の復活にも等しかるべし。我は先づ眞に死せざる可からず。而して血の涙と血の汗とを流さざる可からず。(6・5) || 新しく造られた者の新しい生活。第二コリント5・17と相通じ(岸)。

⑧ 33・6・12 へ「汝神の豊厚なる仁慈と、寛容なると、恒忍したまふとて貌視する乎。其仁慈は爾を悔改に導くな

るを知らず。剛愎にして悔なき心に循ひ己の爲めに神の怒を積みて、其義鞠ききゆうの顯はれん震怒の日に及ぶなり。」羅、II、4—5。〕(2・45 〓自分の罪を認め、降伏と自己委任の態度で近づく時、神の慈愛は、人を悔い改めへと導く。人間に対する神の断罪としての福音(岸(バ))。)

⑨ 33・12・31 (へ世紀の去り世紀の來る毎に、純白雪の如き其表に汚點黒斑を残すものは實に人類にあらずや。嗚呼義人なし。一人もある事なし。)(3・10に準ずる。〓万人有罪の事実の総括的断定。人間の全面的墮罪の事実。詩篇14・1と3からパウロが引用したところ(内(岸))。)

⑩ 34・7・23 (へ神は我に甚だ多くを爲し給へり。我が眞生命の生れし故郷は札幌なりき。……。神よ、罪多き卑僕にさへ、再び去るべからざる生命を附與し給へる恵みに満てる神よ。)(6・4と11に準ずる。〓キリストと共に死に共によみがえる。罪に対して死に、神に生きる(辞(共))「遺された手帖から」。③に類似す。)

⑪ 34・7・25 (へ嗚呼我れ罪の子弱き者。)(7・41に準ずる。〓二律背反。キリストにある「わたし」と「罪にとらえられているわたし」(岸))。)

⑫ 36・2・5 (へ朝聖書を讀んだ。羅馬書である。難解の文は實に此書である。疑問と思はるゝ個處が尠くない。僕が疑へる所は彼の書に於ては直覺的にポーロの結論のみが示してあつて、其所以が説いてないと思ふ様な所がある。又基督の基督教にあらずしてポーロの基督教と推せらるゝ所も尠くない。)(二ヶ月半後の四月二十日、創世記のヘイサク、ヤコブの事蹟を讀んで立腹していることから判断して、予定説で問題となる九章を讀んでいたと推測しておこう。)

⑬ 36・2・14 (へ朝、例によりて聖書を讀む。此頃は羅馬書を讀み居れり。第九章の始めの句を誦する毎に云ふ可からざる感激の情を齎すなり。同胞に同情する事斯の如くして初めて眞の基督教徒たる事を得べし。……、我地獄に陥るとも彼等を救ふの祈禱を捧ぐる事を得せしめ給へ。)(9・1と5 〓同胞ユダヤ人の救いとパウロが悪魔の手に渡

されることゝが交換条件。キリストの十字架とパウロの十字架。共に生命への道(岸)。⑳と同じ。

⑭ 36・2・16 へ朝聖書を読んで「爾惡に勝たるゝ事忽れ。善を以て惡に勝つべし」の語を得た。人生が若し勇ましき戦闘とするならば、此語は實に我等の旗に書くべき好適の句である。(12・21 憎みに報ゆるに愛をもつてするのは、自然の情に打ち勝つて、聖靈の恩化に浴して初めて可能なる事。箴言25・2122にもあるが、ここはロマ書である(内(岸))。)

⑮ 36・2・17 へ「爾等互に愛を負ふの外凡ての事を人に負ふ事勿れ」(羅、ⅩⅢ・8) 是れ實に人間處世の眞訣だと思ふ。僕は實に今日好い言葉拾ひ得た。(13・8 Ⅱ つかいの負債義務責任を果たせ。貸借なしの関係。愛という負債は生涯払いつくせぬ負債。処世の指針(内)。㉑と同じ)。

⑯ 36・2・23 へ此頃頻りに札幌獨立教會の事が想起される。(略)故郷を持たぬ僕は實に彼處が故郷の氣がする。僕は彼處の子等の一人として其名簿の中に姓名を記さるゝ事を以て云ふ可からざる感謝を感じる。彼處は僕に恥づべき所ではない。然り福音は僕が決して恥づる所でない。唯僕が畏れるのは僕が福音に恥とせらるゝ事である。(1・16に準ずる。Ⅱ福音は、神のものであって、パウロのものでも有島のものでもない。この福音に仕えるために召し出された者の使命と謙虚さが同時に見られる(岸)。有島には放浪人意識トウザイと同時に故郷は札幌であるという意識が既にこの頃からあることに注目しよう。㉒と同じ)。

⑰ 36・3・29 へ朝羅馬書を読む。「夫れ神は衆人を憐まんが爲めに感かなこれを不服の中に入れかこめり。あゝ神の智と識の富は如何に深い哉」(第十一章)。……暇あればTolstoyの『我が宗教』を読む。余は未だ結論に達せず。(11・32 33 Ⅱ 11・32 へ36までが9 10 11章(子定説・人類救済論)全体の結論になっている(バ(内))。)

⑱ 36・4・2 へ朝、羅馬書を読む。「汝曹互に愛を負ふの外總てのものを人に負ふ事勿れ」の語讀む毎に心に沁む。余等愛を負はざれば片時も此世にある事能はず。愛は實に魚の水、獸の空氣よりも緊要なるものなり。(略)余等愛に

負はざる可からず。唯其外の總ての事一も人に負ふ事勿。(13・8) Ⅱいっさいの負債義務責任を果たせ。貸借なしの關係。愛という負債は生涯払いつくせぬ負債。処世の指針(内)。(15と同じ。)

①9 36・4・20 へ朝創生記を讀み、イサク、ヤコブの事蹟を讀む。(略)片言隻句を捕へて「是れ基督のかくなし給へるに叶はせんが爲めなり」等云へる固より爲し得べき業なる可しと雖も、全體の思想を統一して之れを觀する時は、當時に於ける神に對する觀念は、唯其唯一的なりしと絶對の威權を有したりし事に於て相似たりと雖も、極めて僻見なる、極めて畏怖すべき、極めて感情的なる、極めて怒り易き、極めて不公平なる神として顯るゝを見る。而してかゝる、人に屬し地に屬したる思想は基督教の建設せられし後尙使徒等によりて繼承せられしものありしが如し。ユダヤ教の眞髓を極めたる Paul が多少かゝる思想の拘縛する所となりしは怪しむに足らざるなり。而して漁人ヨハネには寧ろ此の如きユダヤの人民特有の思想の浸潤せざりしを見る。Paul は此に彼の弱點を有し John は此に彼の長處を有せり。(9・11 12 13に準ずる。Ⅱ予定説。神の選びの計画。約束の子・ヤコブを愛し、肉の子・エサウを憎む。しかし愛の神が、憎まなければならぬということには、それだけの理由(ロマ 11・32、全人類を救わんため)があるのであつて、愛せんがために憎しみもやむなしということである。有島が「極めて不公平なる神」と言つてパウロに反感を示しているその原因は、安価なヒューマニズムにあるのである(岸(内)(バ))。

②0 36・4・30 へ「若し我が兄弟我が骨肉のためならんには地獄に投げ入れらるゝも亦我が望なり」と言へる Paul の感激を余も得ん事を祈る。主よ、此弱きものを用ひ給へ。(9・3) Ⅱ同胞ユダヤ人の救いとパウロが悪魔の手に渡されることとが交換条件。キリストの十字架とパウロの十字架。共に生命への道(岸)。有島の場合も、自分の家族をして日本民族の救いを純粹に願つている。(13と同じ。)

②1 36・5・15 へ主よ、牧者よ、赤兒の如く意を表はす事能はずして唯叫ぶ祈に耳傾け給へ。「聖靈云ひ難きの悲しみもて我が爲めに祈る」。神は讀む可きかな。(8・26) Ⅱキリストが血の汗をふりしほつて祈つてくださったあの

切なる祈りと同様な切実な祈りが、聖霊なる神によってわたしたちのために祈られる。しかも聖霊の切実なとりなしの祈りは、父なる神にききいれられる。三位一体の神(岸)。

②② 36・7・19 へ基督教信徒ならざる農夫と少女との行動は、實に我等に力ある鞭撻なり。嗚呼余焉んぞ福音を恥とせんや。唯福音に恥とせられん事を悲む。主よ、爾の途は峻しくして遠し。力弱きものを導き給へ。(1・16に準ずる。||福音は、神のものであって、パウロのものでも有島のものでもない。この福音に仕えるために召し出された者の使命と謙虚さが同時に見られる(岸)。(16)に類似す。)

②③ 36・7・28 へ然し是れ兩つながら涙の深淵より湧き來れるもの。肉と靈との激しき衝突争闘より來れるもの。(8・1~9に準ずる。||神と人間との間をはなれさせるものは、「肉」すなわち、反神的なものであるが、歴史上に唯一回、神にして人なるキリストが「罪なき肉」として、この世にきたまい、「罪の肉」と自己を同一水準におきたもうことによつて、神に対しても、悪魔に対しても、満足のいくような刑罰が課せられたのである。キリスト者は、キリストのなかで、キリストとともに律法の完全履行を自動的にやることになる。聖霊とのつながりにおいて、なされる思いは、神とむすびついでるので永遠の意味をもち破綻がない。三一の神の不思議なみわざ(岸)。

②④ 37・8・3 へ此頃余が心の中に徂徠する事は——神は感謝す可きかな——自責と感謝と慕はしき回想と建かなる安意とのみ。(6・17、7・25 ||「パウロ書簡」にのみ見られる表現である。コリント後書2・14にもあり(典)。

②⑤ 38・1・13 へ今朝讀みし聖書は羅馬書の七、八、九章、骨に沁みたり。(7章||律法からの解放としての福音(岸)(バ)。8章||聖霊による救いの完成(内)(辞)。9章||イスラエルのつまずきと人類の救い(内)(辞)。

(内)||『内村鑑三聖書注解全集』第十六卷「ロマ書の研究(上)」教文館(昭和47年)

(内)||『内村鑑三聖書注解全集』第十七卷「ロマ書の研究(下)」教文館(昭和48年)

第十六、十七卷に収録されている内村の「ロマ書の研究」は大正十年二月から翌年十二月にわたって『聖書之研究』誌上に発表されている。

- (バ)Ⅱカール・バルト『ローマ書新解』川名勇訳 新教出版社(昭和41年)
- (辞)Ⅱ『新聖書大辞典』キリスト新聞社(昭和46年)「ロマ書」の項は松木治三郎
- (岸)Ⅱ岸 千年著『6 ローマ人への手紙』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)
- (共)Ⅱ『新約聖書 共同訳』カトリック・プロテスタント共同翻訳 日本聖書協会(昭和53年)
- (典)Ⅱ『旧約新約 聖書語句大辞典』教文館(昭和44年) 362 363頁

観想録と共観福音書(マタイ伝で表記する)

番	期 日	章 節	内 容	同 項
9	32・3・3	マタ10・21	眞實の義人は迫害さる	13
8	32・3・16	マタ19・13 14 15	祝福された幼な子	7 8 14
7	33・5・25	マタ19・23 26	神に不可能なし	12
6	33・6・12	マタ26・36 46	ゲツセマネの祈り	20
5	35・12・31	マタ13・31 32	芥子種一粒死して多實	21
4	35・12・31	マタ17・17	未信者を愛惜される主	
3	35・12・31	マタ19・13 14 15	祝福された幼な子	2 8 14
2	36・1・11	マタ4・1 11	荒野の誘惑	19

10	36・1・25	マタ9・1・8	罪をゆるす權威	
11	36・2・23	マタ22・34・40	最重要の掟と隣人愛	
12	36・3・1	マタ19・23・26	神に不可能なし	3
13	36・3・1	マタ10・22	迫害	1
14	36・4・29	マタ19・13・14・15	祝福された幼な子	2 7 8
15	36・5・8	マタ5・13	世の鹽、基督者存在	
16	36・8・31	マタ19・16・22	金持ちの青年	
17	39・10・26	マタ27・45	基督の死と午後の暗闇	
18	40・3・21	マタ9・20・21	イエスの服に触る女	
19	40・7・26	マタ4・1・11	荒野の誘惑	9
20	41・8・1	マタ26・39	ゲッセマネの祈り	4
21	大正9・4	マタ13・31	芥子種一粒死して多實	5
・17 18				

① 32・3・3 〈基督は汝若し我が道を行はんとせば父母兄弟とも敵とならざる可からざるを覺悟せよと宣ひぬ。〉
 (マタイ10・21、マルコ13・12、ルカ21・16に準ずる。||この地上では、真実の義人はかならず迫害される(三)。明治三十二年二月二十日、定山溪で入信決意して、我が家に断然基督教信徒となるの許しを乞(32・2・21)うため手紙を書いたが、十二日後の返信は、父上は我が基督教に入るの擧を一時に激せられたる妄動となし、母上は我が良心を失ひ不忠不孝の罪を犯して邪教に入りたるものとなし、祖母は(略)何が故に世に在るやを歎ぜらると云ふ、(32・3・3)というように、辛辣な反対意見であった。しかし武郎は〈基督は汝若し我が道を行はんとせば父母兄弟とも敵とならざる可からざるを覺悟せよと宣ひぬ。〉のごとく〈覺悟〉はしていた。)。

一六九

② 32・3・16 〈赤兒の如き信仰を説けるにあり。〉(マタイ19・13と15、マルコ10・13と16、ルカ18・15と17に準ずる。|| 祝福された幼な子(三))。

一七〇

③ 33・5・25 〈肉に強くして靈に弱く、財に裕かにして心貧しき我、加ふるに生來の鈍根を以てして、屢々神の眼を避けんと欲す。我が基督に到らんは駱駝が針眼を通過するよりも難し。眞に難し。さりながら不可能の事にあらず。神は能はざる所なし。〉(マタイ19・23と26、マルコ10・23と27、ルカ18・24と27に準ずる。|| 神に不可能なことはなし(三))。

④ 33・6・12 〈月、此月、余は忽如として胸中にゲツセマネの光景を思ひ浮べぬ。二千年に近きその昔、荒寥たる園圍の中に血の涙を流し、血の汗を振うて祈りし人の仰ぎ見たるは此月なりしか。彼が人と稱する罪惡の奴隸をも捨つる事なく、立ちてより斃るゝ迄唯々我等の道を開かんがために血の涙と血の汗とを瀉ぎぬ。〉(マタイ26・36と46、マルコ14・32と42、ルカ22・40と46に準ずる。|| ゲツセマネの祈り(三)共)。ヨハネ12・27、14・31、18・1に類似あり(辭)。

⑤ 35・12・31 〈嘗て札幌に在りて心の衷に落されたる芥子種は、我の懼れてこれを拒みしにも拘らず芽を吹き葉を生じて今は其處に繁美はしき影を生じて空の鳥の巢ふべくなりぬ。〉(マタイ13・31、マルコ4・30、31、32、ルカ13・18と21に準ずる。|| 芥子種一粒は地に落ちて死ぬが、それによって多くの実を結ぶ(三)共)。

⑥ 35・12・31 〈我若し信仰に進むを得ずんば洵に我が衷の人齷す可からざる痛みを覺えん。〉(マタイ17・17、マルコ9・19、ルカ9・41に準ずる。|| いつまでも信仰を知らない人々を深く愛惜される主イエス(三))。

⑦ 35・12・31 〈願くは来る年も亦小兒の祈を爲さしめ給へ。アーメン。〉(マタイ19・13と15、マルコ10・13と16、ルカ18・15と17に準ずる。|| 祝福された幼な子(三))。②と同じ)。

⑧ 36・1・11 〈近來いやが上に心に沁むるは、赤兒の如き信仰なり。(省略) 主よ、願くは赤兒の如き信仰を與へ

させ給へ。御前にありて我が靈痛む。(マタイ19・13、マルコ10・13、ルカ18・15、マルコ17に準ずる。||祝福された幼な子(三)。(②⑦と同じ)。

⑨ 36・1・25 へ我等をして基督に歸らしめよ 彼は四十日間荒野の試練に遇へり。而して彼を試練すべく悪魔の提供せしものは、肉によりて人の苦痛を醫すの術なりき。曰く、石をパンとなせよ。曰く、萬國に君臨して汝の善政を布けよ。曰く、汝の神性を利用して汝の民を外邦より救へよと。されど基督は一もこれに従ひ給はざりしのみならず、凡て之れを悪魔の語として退け給ひぬ。(マタイ4・1、マルコ1・12、ルカ4・1、13に準ずる。||荒野の誘惑(三)。

⑩ 36・1・25 へ authority を以て我が耳に『汝の罪許されたり』と囁く一連の聲是れのみ。人の子も亦惱めるものなる哉。(マタイ9・1、マルコ2・1、ルカ5・17、26に準ずる。||罪をゆるす權威(三)。

⑪ 36・2・23 へさうだ、死も病も貧も苦も若し之れが僕に神より離る可からざる信仰と、己れの如く人を愛し得る同情とを齎らすならば僕は甘じてそれ等の僕とならう。(マタイ22・34、マルコ12・28、ルカ10・25、28に準ずる。||最も重要な掟。律法学者の質問。隣人愛はレビ記19・18からの引用である(共(三))。

⑫ 36・3・1 へ主は爲し得給はざる事なし。(マタイ19・23、マルコ10・23、ルカ18・24、27に準ずる。||神に不可能なことはない(三)。(③に類似す)。

⑬ 36・3・1 へ唯「終りまで忍ぶものは幸なり」余をして願くば此忍耐あらしめ給へ。(マタイ10・22、マルコ13・13、ルカ21・19 ||迫害。クリスチャンは無抵抗の態度をとらなければならぬ(内) ||明治四十年八月『聖書之研究』。ヤコブ5・11に類似あり)。

⑭ 36・4・29 へ赤兒の如き信仰を授け給へ。(マタイ19・13、マルコ10・13、ルカ18・15、17に準ずる。||祝福された幼な子(三)。(②⑦⑧と同じ)。

⑮ 36・5・8 〈世の鹽〉(マタイ5・13、マルコ9・50、ルカ14・34に準ずる。||キリスト者の存在の意義とその機能(三)。(

⑯ 36・8・31 〈歸り來りて(ニコルの)基督傳を讀み、基督の教訓と云へる章に於て、基督が教訓の模範として一は井戸のほとりにありしサマリヤの女、一は基督に來りし富める青年を見て大に感じぬ。是れ實によく對照なり。

余は尙此熟考す可き問題の上に實行の餘地饒たかなりと思ふ。)(マタイ19・16と22、マルコ10・17と31、ルカ18・18と30に準ずる。||悲しみながら立ち去った富んだ青年(三三)。〈井戸のほとりにありしサマリヤの女〉はヨハネ4・1と42に記事あり。)

⑰ 39・10・26 〈基督の磔せられしエルサレムの午後の如き寂寥に入らしめし〉(マタイ27・45、マルコ15・33、ルカ23・44に準ずる。||この地方特有の風による異常現象により、不思議な暗さがそこに迫って來た。キリストの死

(佐(三三)。

⑱ 40・3・21 〈父なる神よ、私を導き給へ。神よ、御手にはあらずとも、せめて衣の縁を持たせ給へ。)(マタイ9

・20 21、マコ5・25と34、ルカ8・43と48 ||イエスの服に触る女(共)。

⑲ 40・7・26 〈彼が四十日の荒野の試練は、(略)、如何にして大國を建立し、如何にして學術を進歩せしめんか)にありき。しかも彼人心救済の最大要務なるを認むるや、斷じて是等凡俗の眼には何よりも必要なりと見ゆるものを排除し、以て心靈の救済に従へり。)(マタイ4・1と11、マルコ1・12 13、ルカ4・1と13に準ずる。||荒野の誘惑(三三)。(類似す。)

⑳ 41・8・1 〈神よ、御心のまゝに余を導き給へ。)(マタイ26・39、マルコ14・36、ルカ22・42に準ずる。||「ゲツセマネの祈り」ここに真実の信仰の祈りがある。しかも、ここには「あきらめ」はない。「あきらめ」は不信仰である(三三)。(この頃、武郎は敢父・武の命令で有島農場へ視察に來ていた。しかし農場経営はへ恐しく不愉快である。)

と痛感していた(41・7・28)。それでようやく心の中では、個性、自我を生かし得る文学への道へに余自身にもまだはつきりしてゐないが、全身を捧げる時が近づきつゝあることを知る。と密かに思っていた。であるから、共観福音書「ゲツセマネの祈り」にある有名な言葉「わたしの思いではなく、みこころのままになさってください。」に準ずる言葉を書いておきながら、その直後に「余の望みは、たゞ自我を生かし得れば足る。」と思わず心境を吐露してしまっているのである。

⑳ 大正9・4・17 18 「一粒の芥子種」(水野仙子の作品である。「大正九年自由日記」にある。一年間の日記帖とは言え、内容は四月十七日から二十日までの水野仙子「作品集」寸評が主なものである。マタ13・31、マコ4・31、ルカ13・19)

(内) Ⅱ 『内村鑑三聖書注解全集』第八卷「マタイ伝」教文館(昭和44年)

(三) Ⅱ 三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

(辞) Ⅱ 『新聖書大辞典』キリスト新聞社(昭和46年) 「福音書対観表」の項

(共) Ⅱ 『新約聖書 共同訳』カトリック・プロテスタント共同翻訳 日本聖書協会(昭和53年)

(佐) Ⅱ 佐藤陽二著『マルコ福音書講話』えくれしあ社(昭和37年)

観想録と四福音書（マタイ伝で表記する）

番	期	日	章	節	内	容	同	項
16	大正	5	マタ	26	最後の晚餐		9	
15	5	3	マタ	28	復活		10	
14	5	12	マタ	27	十字架下のキリスト			
13	5	12	マタ	27	十字架の埋葬			
12	5	12	マタ	27	強盗と十字架の基督			
11	5	12	マタ	26	裏切り者ユダ		7	
10	5	12	マタ	26	最後の晚餐		9	
9	5	11	マタ	26	最後の晚餐		10	
8	5	10	マタ	27	裏切り者ユダ		6	
7	5	9	マタ	26	マリヤ基督に遇う		11	
6	5	9	マタ	27	マグダラのマリヤ		8	
5	5	4	マタ	26	ベタニヤ香油注ぎ		2	
4	5	3	マタ	10	基督の苦難以上でない			
3	5	2	マタ	26	捕縛			
2	5	11	マタ	26	ベタニヤ香油注ぎ		5	
1	5	1	マタ	3	バプテスマのヨハネ			

① 33・1・24へユダヤの豫言者等が俗世の腐敗を憤り天國の近づかん事を祈り、独り廣漠たる砂原に俯伏して同情を求めたりしは彼の星光にはあらざりしか。(マタイ3・1と12、マルコ1・1と8、ルカ3・1と17、ヨハネ1・19と28に準ずる。ヨハネが成長し活躍したのはユダの荒野である。彼は当時のユダヤ教の中の非主流派に属し、タムラン宗団とはかなり近似した流れの中で現われた大預言である(辞)。)

② 34・11・24へ基督は靜かに弟子等を顧み給ひぬ、而して其慈愛に満ちたる手は、恐らくは涙にくれて跪きつゝありしマリヤの肩のほとりにありしならん。かくて穩かに、されど嚴かに宣ひぬ。「彼に係はる勿れ。何ぞ此婦を擾すや。我に善事を行へる也。貧者は常に爾曹と偕に在れば、爾曹意に任せて彼等を濟ることを得べし。我は常に爾曹と偕に在らず。此婦は力を盡して爲せり。蓋しあらかじめ我を葬る爲め、わが身に膏を沃ぎしなり。我まことに爾曹に告げん、天の下いづくにても此福音の宣べ傳へらるゝ處には、此婦の爲せし事も亦其記念の爲めに言ひ傳へらるべし」と。基督教の同情と愛心と推恕とを知らんと欲せば須く此優渥なる辭を再三熟誦せよ。(マタイ26・10と13、マルコ14・6と9、ルカ7・36と50、ヨハネ12・7と8) ヲベタニヤでの香油注ぎ。葬りの用意(辞)(三)。「聖餐」第三幕「シモンの家」でのイエスの台詞に相当している。)

③ 36・2・5へ接吻の交換を爲すべきものを捕へて、(マタイ26・47と50、マルコ14・43と50、ルカ22・47と54、ヨハネ18・2と13) 捕縛)

④ 36・3・1へ思へば余は永き間四福音書に指を染めざりき。今日之を讀むに至りて、余は痛く余の愚を悟りぬ。弟子豈其師の上に出でんや。人豈神の右に立ち得んや。(マタイ10・24、ルカ6・40) キリスト者の苦難は、けつしてキリストの苦難以上のものではない(三三)。へ余は痛く余の愚を悟りぬ。と反省しているところに当時の有島の純粹な信仰心が表われていると言えよう。)

⑤ 36・4・30へマグダレナのマリヤ 饗宴の道すがらなる列を離れキリスト立てるシモンの家の階を上らんとす

るを追ひて戀夫マリヤを牽き止むる圖に題す。D. G. Rossetti (マタイ 26・6 13、マルコ 14・3 9、ルカ 7・36 50、ヨハネ 12・1 8 に準ずる 11 食卓でのイエス。ベタニヤでの香油注ぎ。四福音書とも次の点で相違がある。マタイ 11 ベタニヤのシモンの家でのひとりの女、マルコ 11 ベタニヤのシモンの家でのひとりの女、ルカ 11 パリサイ人の家での罪の女、ヨハネ 11 ベタニヤのラザロのいた所でのマリヤ、以上のようにどれもマグダラのマリヤではない。しかし四福音書の四人の女性は同一女性で、ベタニヤのマリヤであろう。香油注ぎの女である(辞)。②に類似す。)

⑥ 36・9・22 (此夜は英一兄余を Manhattan 座に伴はんとするなり。Mrs. Fiske と言ふ人 “Mary Magdalene” を演じつゝあり。) (マタイ 27・56 28・7、マルコ 15・40 16・11、ルカ 24・10、ヨハネ 19・25 20・18 11 マグダラのマリヤ。彼女が四福音書に共通して現われている場面は、イエスの十字架のかたわらと墓への葬りと復活の朝との三つである。ルカ 7・37 の「罪ある女」と同一視すべきではない。彼女は深い敬愛をもってイエスを慕い、女性的純真さをもってイエスに仕えた。彼女はイエスの復活のはじめでの経験者としての榮譽をもっている(辞)。

⑦ 36・9・22 (同婦人の Mary Magdalene もさる事ながら、最も深く感興を引きたりしはイスカリオテのユダなり。二人ながら聖書に於ては例を見ざる二大性格なり。此劇に於てはユダがマリヤを戀慕し其戀の成らざりし深刻なる失望に加へ、基督の爲す所己れの理想となせし所と何の關りもあらざりしを見、將又己れが戀の敵なりし一羅馬人が其戀に成功してユダに加ふるに激烈なる罵詈を加ふるに至りて、ユダの心は大に動き非常なる煩悶苦痛に陥り遂に基督を賣るに至りしまでの經路は誠に畏ろしき許りなりき。余は嘗て伊豫丸の船中に三人の牧師とユダを論じて議大に合はざりし事ありしが、今此の劇を見て余は余の所論の誤れるや否やに拘らず益々其根柢を堅ふせらるゝを覺ゆるなり。若し此に劇作者ありて基督とユダとの性格を畫きしとせよ、而してこれを場に登さんとせよ。余等は必ずやユダに同情の一片を寄せざる能はざる可し。(基督に對する無限の痛惜は勿論の事なり) 而して基督が益々よく描かれユダが愈々よく描かるゝに從ひ、此の度は益々加はる可し。) (マタイ 26・14 15 16、マルコ 14・10 11、ルカ 23・3 1)

6、ヨハネ12・456に準ずる。||裏切り者ユダ。ユダの〈己れの理想となせし所〉とは、木下順治氏の解説に従えば、ユダは熱心党的意志をもってイエスに仕え、イエスが果たしてくれるであろうこの世的、神政王国の出現に期待をかけていたことを意味している(辞)。「聖餐」第二幕でのユダは〈神の御國はこの地上に出来るのです〉と行って、行動している。ユダがマリヤに失恋し、その腹いせも加わって遂はイエスを裏切るという話は、劇作者の創作である。しかしこのような話は多くの作家に関心があるらしい。例えば太宰 治「駈込み訴へ」がそれである。尚、聖書ではマグダラのマリヤとベタニヤのマリヤとは別人である。しかし「聖餐」のマグダラのマリヤは、ベタニヤのマリヤ(香油注ぎの女)であり、「姦淫の女」(ヨハネ7・53〜8・11)でもある。三人の女性を同一人物としているのは、有島の自由な創作上の解釈によっている。

⑧ 39・10・26へ其左なる第一の小室には「マグダレナのマリヤ基督に遇ふの圖」あり。(マタイ27・56、マルコ16・9、ルカ24・10、ヨハネ20・16に準ずる。||イエスの復活のはじめての経験者。⑥に類似す。)

⑨ 39・11・7〜11へ又 Leonardo が此畫に云はせた心地を Goethe は解釋して、主と十二弟子が一夕平和なる小晚餐をして居た時、主が突然例の話を發せられたので、弟子が愕然と騒いだ所だとあるさうだが、聖書を読んで見ると、此晚餐があつた時は、弟子の間に既に一種理由の解らない疑懼の念がわだかまつて居た事が臆に見える様だが、此畫も此名状す可からざる弟子の疑懼が一段の解決を得て、弟子の驚愕と一層深甚な疑懼とを惹き起すに至つた場合として見た方が、更に強い印象を受けるやうに思ふがどうであらう。(マタイ26・20〜29、マルコ14・17〜25、ルカ22・14〜23、ヨハネ13・21〜30に準ずる。||最後の晚餐。レオナルドの名画に対する有島の解釈として注目すべき文である。)

⑩ 39・12・12へ突き當りて左に曲れる一室に Leonardo da Vinci が「最後の晚餐」の study あり。基督の頭は見當らず。(マタイ26・20〜29、マルコ14・17〜25、ルカ22・14〜23、ヨハネ13・21〜30に準ずる。||最後の晚餐。)

⑨⑩に類似す。

⑪ 39・12・21へ今地獄の極下 Iscariot のユダとブルタースとが、首までを現はして齒嚙みしつゝある烈寒世界の囚に繋がれたり。(マタイ26・14 15 16、マルコ14・10 11、ルカ23・3 6、ヨハネ12・4 5 6に準ずる。||裏切り者ユダ。しかしカール・バルトによれば、ユダはどこまでも「神の恵みの選び」のもとに置かれるべき人物である。(バルト『イスカリオテのユダ』川名 勇訳 新教新書77 209頁他) ⑦に類似す。)

⑫ 39・12・25(Rubens の作品の中には最も興味あるもの多し。"Christ crucified between the Two Thieves" (Le Coup de Lance), "Christ a' la Paille" の如きは、其意氣に於て連筆に於て、古伊太利の諸家と肩を列するに足るものと云ふ可し。(マタイ27・38、マルコ15・27、ルカ23・33、ヨハネ19・18 ||二人の強盜の間に十字架につけられたキリスト) ヨハネ19・34 || フランス語の(棺の一撃))

⑬ 39・12・25(Quinten Matsys の "Entombment of Christ" 如きは、我の喜び見たるところなりき。(マタイ27・57 61、マルコ15・42 47、ルカ23・50 56、ヨハネ19・38 42に準ずる。||「キリストの埋葬」)

⑭ 39・12・25(此寺院はかの Rubens の有名なる Christ 十字架を下るの畫あるを以て知られたる所なり。(マタイ27・59、マルコ15・46、ルカ23・53、ヨハネ19・40に準ずる。)

⑮ 41・3・22(「キリストは墓に埋められてしまつたのに、三日たつたら生き返つて來たんですか。」それに對して余は肯定の答をなした。(マタ28・1 15、マコ16・1 8、ルカ24・1 12、ヨハ20・1 18に準拠||復活)
五六

⑯ 大正5・5・26(金曜。曇。約二千年前、キリストが愛する弟子と共に最後の晩餐を喫し、爾來多くの人が不吉な日として忌んで居るその金曜日である。(マタイ26・20 29、マルコ14・17 25、ルカ22・14 23、ヨハネ13・21 30に準ずる。||最後の晩餐。⑨⑩に類似す。)

(三) 三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社 (昭和53年)
 (辞) 『新聖書大辞典』キリスト新聞社 (昭和46年)

観想録 (日記) と詩篇

番	期	日	章	節	内	容	同	項
8	大正	5・8・3	23	篇	ダビデの歌、エホバはわが牧者			
7	36	9・6	90	篇	モーセの祈り、世々われらの居所			
6	35	12・31	31	5	凡てを主に任せん			
5	34	4・21	23	4	なんじの杖なんじの咎我を慰む			
4	33	12・31	104	31	天地創造、エホバのみわざ		3	
3	33	12・31	104	1	天地創造、ノア洪水、万物の生命		4	
2	33	12・31	19	1	天は神の榮光を表はし			
1	33	1211	51	17	禮拜はくだけたる靈魂			

① 一七〇〇
 33・11・12 又は 12・8
 たまふまじ。 (51・17 礼拝の本質的なものを教える (井))。明治三十三年十一月十二日 へ此日我級栗山に修學旅行をなしぬ。(略)深山無人の境森閑として鳥語の外徽音の耳に來るなき處とあるように、北海道の自然に心打たれ、ミルトンの詩の引用直後に詩篇五十一篇十七節を書いている。この時の日付けが十一月十二日なのか十二月八日であ

るのか、『観想録』に六頁落丁があつて定かでない。入信一年九ヶ月、又は十ヶ月後、二十二歳の有島の純粋な信仰心が、礼拝の本質的なものを教える五十一篇十七節を書かしたためであるといふことは云える。この頃から詩篇を読み始めており、十二月三十日には一年十ヶ月ぶりに〈定山溪〉、十二月三十一日には〈豊平河源の清流〉に至りて詩篇十九・一〇四、一〇四・一〇四・一〇四・二十八、二十九、三十、三十一と三五を引用し、神の天地創造に〈驚嘆〉している。

② 33・12・31 へ十九世紀最後の日は拭ふが如き晴空に昇り、山色水聲共に一段の風意を副へぬ。(略)余は宇宙に俯仰して唯驚愕と畏懼との外に何者もあるなきなり。「もろもろの天は神の榮光を表はし、蒼穹は其手の業を示す。此 ことばをかの日傳へ、此夜知識をかの夜に送る。語らず言はず、其聲聞えざるに其響は全地にあまねく、其ことばは地のはてにまで及ぶ。」(19・1・1と4llダビデの歌。牧羊の業を取りし彼が、ひとり荒野にありて天を仰ぎおのが心にかんがみて、造化にあらわれたる神の偉業を讃する。「もろもろの天」はすべての天体をさしていうなり。他の国民はこれを神としてあがめし時に、へブライ人のみはこれを神のわざとなせり。「ことば」は讚美なり。「知識」は説教なり。宇宙に声なし、しかもこれに雷霆のひびきのごときものありてその教訓を全地に伝達す(内)。十九世紀最後の日の朝、二十二歳の武郎は〈永遠より永遠に流れて休む事なき豊平河源の清流〉に下り、大自然に接して偉大なる神の手を示さざるものは何れにあるぞ。と感激し、詩篇十九篇「もろもろの天は神の榮光をあらわし」を思い浮わべて〈黙考〉したのである。実に適確な引用である。

③ 33・12・31 へわが靈魂よ、エホバをほめまつれ。わが神エホバよ、爾は至大にして尊貴と稜威とを衣たまへり。爾光を衣の如くにまとひ、天を幕の如くにはり、水の中の己れの殿の棟梁をおき、雲を己れの車となし、風の翼にのりあるき、風を使者となし、焰のいづる火を僕となしたまふ。衣にておほふ如く大水にて地をおほひ給へり。水たへて山の上をこゆ。爾叱咤すれば水退き、爾いかづちの聲を放てば水忽ち去りぬ。或は山に登り、或は谷に下りて爾

の定め給へる處にゆけり。爾界を立て、之れを越えしめず、再び地をおほふことなからしむ。エホバは泉を谷に湧き出し給ふ。その流れは山の間に走る。かくて野の諸の獸に吞ましむ。……

爾手を開き給へば彼等嘉物にあきたりぬ。爾面をおほひ給へば彼等はあわてふためく。爾彼等の氣息をとりたまへば彼等は死にて塵にかへる。爾靈を出し給へば百物皆造らる。爾地の面を新たにし給ふ。」紀元前に在りて牧羊詩人は既に余の思ひ及ばざる自然の高崇と偉大とを歌ひぬ。余復何を以てか加ふべき。惡魔 Mephistopheles ちへ Von Sonn' und Welten weisz ich nichts zu sagen, 云ひぬ。然り如何なる惡魔も、天地の偉大にして完全なるには驚嘆すべし。宇宙は實に完全の表現なり。然り神の「生」ある外衣なり。神は自然によりて其 perfectness を示しつゝあるものゝ如し。▽(104・1~11、28 29 30 || 天地創造。内容は創世記一章による。6 || ノアの洪水の記憶。7 8 9 || 回復された自然の秩序。10 11 || 自然の中の生の喜び。29 30 || 万物の生命が神に依存している(井)。) < 豊平河源の清流 > に下り、大自然に接した有島は詩篇十九篇「天は神の榮光をあらはす」に続いて「天地創造」を讚美する一〇四篇を引用し「神は自然によりて其 perfectness を示しつゝあるものゝ如し。▽」と言つて若者らしく「驚嘆」しているのである。)

④ 33・12・31 < 此完全なる世界に於て唯一の不完全なるものあり。人類なり。(略) かくて人類が其罪惡に浸潤しつゝありし Soul を神によりて救出されて、完全なる天地に於ける完全なる一部分となる事を得、聲を放ちてダビテと共に、「願くはエホバの榮光としへにあらん事を、エホバそのみわざを喜び給はん事を。エホバ地を見給へば地震ひ、山に觸れ給へば山煙を出す。生るかぎりはエホバは向ひてうたひ我ながらふるほどはわが神をほめうたはん。エホバを思ふわが思念は樂しみ深からん。我エホバによりて喜ぶべし。罪人は地より絶滅され、悪しき者は復あらざるべし。わが靈魂よ、エホバを讀めまつれ、エホバを讀め稱へよ。」と歌ふを得るの時に至りて余は初めて安んぜざるべからず。▽(104・31~35 || 天地創造。31 || 創造の秩序と合目的性は、創造者としての神の知恵と主權とを表わす。

32 神の主権は、秩序を失した驚天動地の現象の中にも現われる。35 日よきことを見たあとで、詩人はこの世の悲しみ（悪しき人）に目をとめる。しかし世の悪は罪に起源を持つゆえに、罪は滅ぼされなければならない（井）。へ唯一の不完全なるへ人類はへ其罪惡に浸潤しつゝありし Soul を神によりて救出されてへ完全なる一部分となる事を得へへ初めて安んぜざるべからず。へ」という有島の認識が三十一節から三十五節を引用させたのである。或いは引用文によってこのような認識を得たと言う方が正しいかも知れない。十九世紀最後の日、豊平河の大自然に接して感激した二十二歳の有島が一〇四篇を引用しつつ信仰告白している文章である。）

⑤ 34・4・21 へ神よ「なんぢの杖なんぢの管我をなぐさむ」我をして涙の甘さを味はしめよ。……此夜貧民窟の事愈々胸に浮び來りて殆ど決心せんとせるも今少し神に聞くべし。（略）神の今日我を恵み給ひて我が心高くなりしは、唯々感泣の外なし。へ（23・4 日主はわたしの牧者。「よき牧者」がおられる時、死の恐れはたちどころに消え去る。鉄のつめのついた「むち」をもって野獸を追い払い、曲枝の「つえ」をもって、穴におちた羊を救い出す羊飼いは、つえをもって羊を教え、その一匹一匹を知っていたのである（井）。正義の管と慈愛の杖、この二者をもって彼はわれを救い、かつなぐさめたもうなり（内）明治三十三年十二月『聖書之研究』。この朝、日曜学校教師としてへ小兒へに慰められた有島は、天折の詩人・永野武三郎著『用無遺稿』に感涙して「主はわたしの牧者」二十三篇を引用したのである。そしてへ貧民窟へ（遠友夜學校）で働こうと祈るのである。ヨハネ 10・11 に類似あり。）

⑥ 35・12・31 へ凡てを主に任せん。へ（31・5 日「わが魂をみ手にゆだねます。」この詩人は、今の苦難の中で、自分のせねばならぬ唯一のこととして、神にすべてをゆだねることを知っている。この五節のことばは、十字架上で、人の罪のために、主イエス・キリストが神にうたれた時、苦しみの中から叫ばれた声でもあった（ルカ 23・46）（井）。

十字架上の最後の言葉として有名である。およそ信仰者が常に心に銘記すべき言葉である。有島もこの言葉を四回も日記に書いている（35・12・31、36・3・1、36・3・7、36・6・19）。その四回はルカ伝に数えておいた。し

かし詩篇をひもどく確率から一回に数えておく。

⑦ 36・9・6 へ市村君司會し柏井君はカナの婚筵に就て、光君は詩篇の中のモーゼの祈りと時間の貴重に就て語りたり。(90 〓世々われらのすみか。モーゼの名が表題に冠せられているが、モーゼの五書からの引用以外に(創世記)、内容は直接モーゼと関係はない。捕囚後の民族的な復古運動の中から生まれたのであろう。民族の嘆きの歌と、信仰の歌、それに教訓的なものが入りまじっている(井)。米国への航海中、有島は柏井園かしむえん(明治三年、大正九年、教会史、新約聖書の専攻で明治、大正年代の代表的神学者)、光小太郎牧師らと語りあい、多くの(聖書上の知識)を得ているのである。)

⑧ 大正5・8・3 へ詩篇二三(〓ダビデの歌。安子臨終の記録「終焉日記」から。筑摩全集第十二巻にあるが、新潮全集にはない。明治四十一年九月十五日、武郎は婚約中の安子に『新約全書 詩篇附』を贈った。その中の第二十三篇の最後の余白に「Nightingale of the psalms Beecher」(詩篇の夜鳴鳥。ビーチャーとは人の名前であらう(著者の注))。という書き込みがあり、そこから第二十三篇の最初の「ダビデのうた」の下まで傍線が引いて矢印が付けてある。武郎の書き込みである。詳細は第六部「有島武郎が使用した『新約全書』」を参照されたい。武郎は安子に贈った聖書から心に残る二十三篇を終焉日記にメモしたのである。)

(井) 〓岸井 敏著『12 詩 篇』信徒のための聖書講解 聖文舎(昭和49年)

(内) 〓『内村鑑三聖書注解全集』第五卷「詩篇」箴言 伝道の書」教文館(昭和47年)

観想録（日記）とマルコ伝福音書

番	期	日	章	節	内 容	同 項
8	37	7	9	41	聖靈を漬 <small>けが</small> す者赦されず 仕えるために 唯神のみ知り給ふ 小黙示録 ベタニヤのマリヤの香油注ぎ 信じて行ふもの救はれん 我が神、何ぞ我を捨て給ふや 異郷人に一杯の水を與ふ	3 4
7	36	15	34			
6	36	16	16			
5	34	14	3			
4	34	13	9			
3	34	13	32			
2	32	10	35			
1	31	3	29			

① 31・4・27（即ち森本君と相携へて宗教談を爲さんとす。（略）又君問うて曰く、基督教と吾が信ずる所と衝突せる事なきや。余一事を以て君に問へり。……But he that shall blaspheme against the Holy Ghost hath never forgiveness, but is in danger of eternal damnation……とは如何。然れども、今にして思ふに、余の君に問ひしものは誤れりき。余はかく思ひしなり。「苟も一旦 Holy Ghost を blaspheme せるものは其罪永遠に許されざるものなり。」歸來、其章を熟讀するに「一旦」なる語意其中にあらざるが如し。嗚呼これ實に余の粗忽そとつなりき。◁（3・29）しかし、聖靈をけがす者は、いつまでもゆるされず、永遠の罪に定められる。この罪の解釈は、「主イエスのわざを故意に悪魔のわざとすること、および意識的に頑迷に真理を拒否すること」である（三三）。聖書の英文はマルコ伝3・29であるが、類似はマタイ伝12・3132、ルカ伝12・10にもある。

尚、ここにも有島の性格が読みとれる。すなわち、有島は潔癖にして徹底完全主義の性格であるので、それが災いしてか、一度を罪犯かせば必ず罰せられるという思考癖がここでも見られるということである。△「苟も一旦 Holy Ghost を bolasphe me せるものは其罪永遠に許されざるものなり。」と△「一旦」を入れて読んでしまっているのがそれである。自ら粗忽者とは言っているが、この思考癖は後にも出ている。明治三十七年八月十六日の日記にあることである。約一ヶ月後に自殺するのであるが、スコット氏を苦境に陥れたのは、△血を有せざる基督敎神學者△の△罪を犯す事一度なるものは救はれざる可し△という説教であった。三十七年九月二十六日、遂に自殺の報に接した有島はスコット氏の言葉を回想する。△「神既に業に余を永遠の刑罰に命じ給ひぬ。……。一度基督信徒となりしものに、罪を犯すに増して世に恐る可きものある事なし。」△そして有島が△余は此一大事件を忘れじ。△と言って基督者の△一度△に異常な関心を示していることは有島の性格を知る上でも注目すべきことであろう。三十六年二月五日以来、ロマ書の手定説でパウロに反抗していた有島は、一年半後、米国のスコット自殺事件を体験して教会に対する不信を決定的なものとしてしまった。）

② 32・4・9 △They said unto him, Grant unto us that we may sit, one on thy right hand, and the other on thy left hand, in thy glory. ……Mark. chap. X. 37. 之れ Zebbedee の息なる James と John が、基督に乞ひたる言なりとす。之れによりて考ふるに此二人の弟子は、基督が必ずや遂にユダヤの王位に登りて、羅馬の羈絆より逃るゝの機あるべしと信ぜるが如し。又基督が此の如くならば、己れ又其の顯要の地位を占めて、窻かに浮世の光榮をも望める念あるが如し。そは他の弟子が、此會話の始末を聞きて相怒りたるにも知る事を得可し。兎に角そは今余に多くを要せざるなり。余は此章を見て、今人の宗教に身を投ずる又、這般の觀念より來れるものなきやを思はざる能はず。甚だしきものに至りては、信者たるによりて、世上の信用と體面とを得んとするものあるべし。聖職にありとの故を以て、自ら高くせんとするものあるべし。(略)基督は云へり、"And whosoever

of you will be the chiefest, shall be servant of all.” 嗚呼眞に然るべし、眞に神を知るものは人の上に立つものにあらず。(10・35〜45 〓 仕えるために。10・37 〓 この節に関する有島の注解は正しい。すなわち、基督がユダヤの王位に登れば、弟子たちも 〓 顯要の地位を占めて、窃かに浮世の光榮をも望める念あるが如し。) という注解である。間垣氏の注解によれば、「榮光を受ける」は、キリストの再臨の時のことで、当時の一般的信仰では、地上の權力をもって救い主が再臨すると思われていた。そして、「右と左にすわる」ことは、この權力者の榮誉と權威にあずかることである。弟子たちは、イエスの苦難を理解せず、地上的譽れを夢みていたのである(間)。10・43 〓 偉くないと思うなら、仕える人とならねばならない。福音の逆説である(間)。

③ 34・3・3 〓 嗚呼我知らず、汝亦知らず、唯神のみ知り給ふ。(13・32 に準ずる。〓 絶対なる神の主權。マタイ 24・36 にもあり。)

④ 34・11・20 〓 馬可傳十三章。此章聖書研究者の最も困難を感じる處なり。從來の聖書註釋者にして、此章に完全なる義解を興へたるものなし。試みに通讀すべし。いかに其記事錯綜せるよ。主はエルサレムの滅亡を語りユダヤ人を戒めらるゝかと思へば忽ちにして世の滅亡を語り人類を戒めらるゝものゝ如し。其何節迄がエルサレムの滅亡にして、何節迄が世の滅亡なるか、如何に明晰なる頭腦を有する人と雖も直ちに此文章を讀みたるのみにては到底區別し能はざるべしと信するなり。四福音書同一の記事は馬太傳と路加傳とにあり。馬太傳最も委しくして秩序稍々整ひ、馬可傳之れに次ぎ路加傳最も簡なり。其最も委曲を盡せるものも、其最も梗概を抜けるものも、要するに基督所言の一部分だに過ぎず。唯此繁簡異なる記事あるが爲めに、基督の言が三福音書の寫し得ざる猶多くを語られしを知るべきのみ。此章を解するの困難は、洵に此如きものあり、然かも少しく基督の如何なる人なりしかを窮むれば、此記事は案外に解し易きものとなり來るべきなり。世に偉人と云はるゝ人は如何なる人なるか。偉人とは高く廣く深く見得人なり。(略) 而して基督は如何なる人なりしぞや。彼は偉人中の偉人なり。人類中の神なり。(略) 基督の眼中に

は倏忽として一の石も石の上に圮されずしては遺らざる聖城の滅落の現じ來りしと共に、人類其者の最後の審判は歴々として現じ來れるなり。茲に於て彼は毫も躊躇する事なく盛大繁榮を極めたるエルサレムの城を指し最も汚瀆と見ゆる大膽なる豫言をなし給ひぬ。紀元後七十年テイワス、エルサレムを圍みて重圍永く解けず、城中の人は續々死亡し、死屍臭を發して放置す可からず。城外なる敵中に毎日投ずる所實に六萬人「弟は兄を、兄は弟を死に付し、父は子を、亦子はその父母に逆ひて之れを死せしめ」たる歴史は、最も慘憺たる筆に彩られて八月十日エルサレム遂に亡ぶと大書せられぬ。主磔死せられ給ひてより僅かに四十年なり。嗚呼豫言の的中は餘りに正確なりき。人類の滅亡、最後の審判に就きて尙且つ疑ふものあらば、彼は眼を抉りて之れを東門に懸け置けよ。此章の意義が、一見錯綜して秩序を失へる如き所似は、此に到りて明瞭に氷解せらるべし。〔13章〕「小黙示」 黙示的文体をもつて、キリストの再臨への期待をのしるしものであつて、イエスの言葉とともに、初代教会の切迫した終末待望の一致した信仰とが結合している（二間）。マルコ伝は六十年から七十年の間に書かれた最古の福音書である。有島も書いてるように、七十年には、ローマ軍の包圍にあつてエルサレムは陥落している。故に十三章は、そのエルサレム包圍直前のころの歴史的情況が反映しているものと言える（二間）。マタイ伝（24・1〜44）、マルコ伝（13・1〜37）、ルカ伝（21・5〜36、17・26〜35）の中では有島が言うように「馬太傳最も委しくして秩序稍々整ひ、馬可傳之れに次ぎ路加傳最も簡なり」である。このことは共観福音書にある「小黙示」を読み較べてみれば分る。しかし「從來の聖書註釋者にして、此章に完全なる義解を與へたるものなし」へ其何節迄がエルサレムの滅亡にして、何節迄が世の滅亡なるか、……到底區別し能はざるべし」とあるが、確かに明治三十四年頃の有島が讀んだ註釋書では充分な説明がなかつたであらう。その中で有島が愛読した内村鑑三の『聖書之研究』（明治33・9創刊と昭和5・4廃刊）には同じ明治三十四年の八月にマルコ伝6・14〜29と16・15についての注解があるが、残念ながら内村のマルコ伝注解には十三章がない。また、内村のルカ伝注解にも「小黙示」である二十一章はない。そして内村のマタイ伝「小黙示」である二十四章（「イエスの終末觀」）は注解

があるが、発表は大正八年四月であり、有島は読んではいない。既に大正元年十月、有島は内村と宮部博士の家で決別しており、読んでいる記録もないからである。

⑤ 34・11・24 (馬可傳(十四章)三節。「ある婦」——ベタニヤのマリヤなり。「蠟石の盒びたに價高きナルドの香膏」ナルドの香膏は一種の植物の根より製するものにしてヒマラヤ山の高峰にあらざれば産せず。非常に高價のものにして、三百有奇おものデナリと稱するものは殆ど我が百圓に當れり。王者の即位式等に最も多く使用せられたるものにして、普通の平民が之れを塗るが如き事は全くなし。多くは美麗なる貴石製の小蠟ろうに盛りて印度より輸入し來るなり。「其盒を破りて……」前にも云へる如く該香膏は貴石製の蠟に入るが故に、普通の習慣によれば注意して其蠟の蓋を開き香膏を使用し終らば其蠟を保存し置きたるものなるべし。然かるにマリヤは之れを破りて惜愛する所なかりしとなり。四節以下。基督の死近づきぬ。慧眼なる基督は既に悉く之れを知り給へり。彼の心中には今更の如く云ふ可からざる一種の悲憂を感じしならん。如何となれば、彼は「世に在りし己れの民を既に愛し、終りに至るまで之を愛し給ひ」たればなり。今は永へに牧者と離れんとする憐れむべき微弱なる羊は、嘗て此事あるを思ひ及ばざりき。唯獨り基督が痛く愛し給ひし一個の處女あり。彼女はエルサレムに近きベタニヤに住み、よくエルサレムに起る事情を詳知するを得たりき。而して彼女は *poetic woman* なりしが故に、彼女の鋭敏なる感情と基督を敬慕する *affection* とは、よく基督が自ら知り給ひし如く基督の死を豫察せしにあらざるか。彼女の優しく、強く、鋭く、深き感情は利鏃の如く其心を刺しぬ。嗚呼主基督、是れ實に彼女の熱愛せし兄弟ラザロを死より甦らせ給ひし人なり。マルタに諭して、如何にマリヤが己れを愛するかを知らしめ給ひし人なり。(略)かくて彼女は千思萬考の末、女らしき結論に至りぬ。恐らくは多く富めるものならざりしならん。彼女は彼女の有する凡てを賣りぬ。而して彼女は之れを以てナルドの香膏を買へり。別離に臨み、其人に塗るに香膏を以てす。嗚呼、何等の優しき美しき行爲なるぞ。是れ直ちに一個の詩にあらざや。シモンの家に饗食正さに耐なりき。近き將來に受くべき基督の苦痛を悟らざる弟子等は、共に相權語あひましつゝあ

りき。主も亦其容貌には微笑を浮かべ賜ひしならんも、心中には「群の綿羊散らん」と録されたる事を想起して、無眼の感慨に満ち給ひしならん。此時一小女あり、靜かに主の傍に來りぬ。其面には感激の紅ありしならん。其眼には謝恩の涙ありしならん。彼女基督に近づける時香膏の盒を破りぬ。芳香忽ち室に満ちて百花一時に薫するが如くなりき。彼女はそを——王者の用ふべき香膏を——主の頭には瀉がずして其足に瀉ぎぬ。而して其美しく艶かなる頭髮を以て押拭ひつゝ、潜然として泣きぬ。主は之れを退けんとはし給はで靜かに俯目に彼女が爲す所を見守り給へり。弟子等は半ば身を起して此一場の珍事に呆然たるのみ。嗚呼、何等悲痛なる、高尚なる、嚴肅なる活畫なりしぞ。勿ちにして弟子の一人は不平を漏らせり「此膏を贖すは何故ぞや。之れを贖がば三百有奇のデナリを得て貧者に施す事を得ん」と。列座の弟子は其有理の言に動かされて亦其聲に和しぬ。嗚呼是れ今日の社會學者なるものが現に稱呼しつゝある聲にあらずや。人の心中に鑿入して其意の眞を計り得ざる人は災なるかな。基督は靜かに弟子等を顧み給ひぬ、而して其慈愛に満ちたる手は、恐らくは涙にくれて跪きつゝありしマリヤの肩のほとりにありしならん。かくて穩かに、されど嚴かに宣ひぬ。「彼に係はる勿れ。何ぞ此婦を擾すや。我に善事を行へる也。貧者は常に爾曹と偕に在れば、爾曹意に任せて彼等を濟ることを得べし。我は常に爾曹と偕に在らず。此婦は力を盡して爲せり。蓋しあらかじめ我を葬る爲め、わが身に膏を沃ぎしなり。我まことに爾曹に告げん、天の下いづくにても此福音の宣べ傳へらるゝ處には、此婦の爲せし事も亦其記念の爲めに言ひ傳へらるべし」と。基督教の同情と愛心と推恕とを知らんと欲せば須く此優渥なる辭を再三熟誦せよ。

(14・3・9) 香油注ぎ。有島の文章そのものが、分りやすい注解になっている。特にマリヤの心理描写は作家有島の資質が発揮されて見事である。有島が理解するマリヤは Poetic woman (詩人肌の女性) であり、この場面は有島にとって「一個の詩」へ「嚴肅なる活畫」なのである。そしてこの日記に書いたマリヤの人物像が、十八年後の「聖餐」執筆の際(大正八年)、第三幕「シモンの家」で「香油注ぎのマリヤ」として結実しているのである。尚、「聖餐」

第一幕での「姦淫の女」は、ヨハネ伝八章に感激した有島が(36・2・8、5・29、6・30、8・1)、十六年後に戯曲に登場させたヒロインである。原文中のひらかな付けで「有奇」^{ありまろ}以外は著者が付けたものである。

⑥ 36・4・21「信じて行ふもの唯克く救はれん。其他共に非なり。」(16・16に準ずる。||信じてバプテスマを受ける者は救われる。しかし、不信仰の者は罪に定められる。)

⑦ 36・5・8「我が神、我が神、何ぞ我を捨て給ふや」何ぞ我を捨て給ふや。我が愛するものを捨て給ふや。黄金の如き純なる愛は偽りの愛と謬^{あやま}られる。(15・34||「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」この言葉はアラム語で詩篇二十二篇にある言葉であるが、この叫びの本当の意味が分らない現代人は、イエスの弱さを笑っている。キリストといわれるものが、死を前にして何とぶざまなことかという。思い違いもはなはだしい。イエスは、このとき、本当に神に見捨てられたのである。イエスは神なき世界、地獄の絶望へ突き落された。罪なきイエスが罪人となって神の審判に会われた。身代りのイエスは、我々が捨てられないように、我々のために捨てられたのであった。ここに救いがある(佐(間)。マタイ27・46にもあり。)

⑧ 37・7・27「異郷人に一杯の水を與ふる人は祝福さる可きかな」(9・41に準ずる。||異郷人キリスト者に、水一杯をやる小さな愛でも、それはイエスに対する愛であって、その報いは大きい(間)。マタイ10・42にもあり。創世記二十四章十五と二十一節にあるアブラハムの僕がリベカに出会って十頭のらくだにまで水を飲ませてもらう話がある。ここで有島が言う「異郷人に一杯の水を與ふる人」とは、やはり福音書の中で「水一杯でも飲ませてくれるもの」を指していると判断すべきだろう。)

(間) || 間垣洋助著『2 マルコによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

(三) || 三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

(佐) 佐藤陽二著『マルコ福音書講話』えくれしあ社 (昭和37年)

観想録 (日記) とイザヤ書

番	期	日	章	節	内	容
7	37	9	12	6	5	Woe is me, for I am undone!
6	37	3	29	25	1	ん エホバの御名を讃めたムへ
5	37	3	29	60	9	いやはてなり エホバは、いやさきなり、
4	36	5	31	6	2	6
3	36	1	25	25	8	見よ天國はセルビムとケル ビムに
2	35	1	7	6	2	6
1	32	4	4	59	1	4

① 32・4・4 《エホバの手短くして救ひ得ざるにあらず。其耳は鈍くして聞こえざるにあらず。唯汝等の邪曲なる業、汝と神との間を隔てたり。又汝等の罪、その面を被ひて聞えざらしめたり。そは汝等の手は血にて汚れ、汝等の指はよこしまにて汚れ、汝等の唇は虚偽を語り、汝等の舌は悪を囁き、その一人だに正義をもて訴へ、眞實を

もて論らふものなし』……以賽亞書 59. 1—4.

自ら顧て我が眼を撫し、口を撫し、手を見、胸を抑へて如何と見る時、我は實に悔恨の涙に咽ぶ。我が手は誠に血にて汚れたり。我は嘗て此の手を以て諸種の不善を行へり。我が指はよこしまにて汚れたり。嗚呼然り、我は長き間一時の勃情を制する能はずして、痴夢を腦裏に畫きつゝ邪淫を行ひぬ。我の唇はそも幾何の虚偽を云ひ、我が舌はそも幾何の惡を囁きけん。加之我が口は煙草と毒酒と過食と道ならぬ口吻とによりて、いたく汚れぬ。而して我が眼は、嗚呼此の我が鈍き眼は、悲しくも汚濁を見るに鋭く、諸の不善を見る毎に、我が薄志をして之れに傾けしめぬ。我は我が眼によりて少しの知識と巨多なる惡性とを得ぬ。我が眼は假層の金銀を見て姑息なる心を起しぬ。惡鬼の如き權勢を見て懸戀の心を起しぬ。美女を見て不道の心を起しぬ。不用の書を見て怠慢の心を起しぬ。我が身として顧る所汚れに染みたる處あらざるはなし。此の不潔汚濁の泥身を抱懷して我甚しく思ふ。我が堅くなりたる手は再び赤兒の如き淨きものたる事能はず。我が眼は盲者の眼にだに如かず。我が口と舌は鳥だにも劣れり。嗚呼、此の一度色に染みたる絲を再び舊の純白なる色に返し得るか。揚氏の涙、今は我が上なり。常に身を離れざる眼を擧げて、常に身を離れざる手を見る時、我が心誠に哀れに悲しむ。我は今我が肉體も心も共に神に捧げぬ。神は果して我がかく計り汚れたる心身を受け給ふ可きや。我が卑志を以て之れを計るに甚だ難し。されども我は唯神が惱めるものを救ひ給ふと云ふ本願に縋りて、心身を捧げまつる。神よ、願くは我が懸々の微志を憐み給ひ、願くは我に君の卑僕たるを許させ給へ。我君に心身を捧ぐと誓うてより以來、茲に一ヶ月の餘り經たり。我の神に盡す處或は足らざりしやを知らずと雖も、我は我が出來得る限りを盡したるを信ず。而して未だ我と神との間に隔りあり。我の面は被はれて聞えざるは、嗚呼之れ何が故ぞ。我尙未だ邪惡なる業あるか、罪あるか。神、願くは此の小なる人を哀れみ給へ。自ら邪曲ならんと云ひ、罪を爲さずと誓うて、而かも之れを犯す。されども神願くは我が微志を哀れみ給ひて隔てをなからしめよ。我は世俗の障礙に遇ふ事なしに、直ちに神の面前に伏拜して眞に我が舊惡を謝し、新たなる清き信仰を得せしめ給へ。

我は之れなくば何事も此世に爲す事を得じ。自ら顧みて長く眞に神に接するを得ざる事を思ふ毎に、或は我の救はれざるものにあらざるかを思ひ、淋しき感に堪へざるなり。(59・1と4と神との破れた関係。イスラエルの民の中に、予言の成就が遅いというので、神力に対して懷疑の念を抱く者が生じてきた。しかしこれに対して神は、助けに来ることの遅い原因は、民の罪にあると言われる。これは神人関係の破れであり、神の現臨は罪のなかにないことをいう。民は全身で悪しきことをおこなった。神から離れ、返逆する者の歩むところは、このようなものである。パウロはこの句をロマ書3・10と18で引用して、人間が罪のもとにあることを示している(岸)。入信後一ヶ月半、二十一歳の武郎は五十九章を読んでいくうちに、その一句一句が胸に突きささって来た。自分は全身で悪しきことを行っている罪人に過ぎずという反省が克明に記述されている。武郎の若き日の「懺悔録」であり、魂からの祈りの文章になっている。)

② 35・1・7 へ我にセルビムの 翼あれな(6・26に準ずる。)

③ 36・1・25 へ唯我の眞に要するは、我の涙を拭ひ得るものこれのみ。(25・8に準ずる。黙示録7・17、21・4に類似あり。)

④ 36・5・31 へ「見よ天國は彼處にあり。セルビムとケルビムと光の汀に戯れ遊べるを。而かも眼を返して我が立つ所を見れば、此地何ぞ寒きや」と。(6・26とセルビムはセラビム (Seraphim) の誤りである。イザヤ書六章のみにある。内村注解書には次のような説明がある。神のみ姿にして拝するを得しものはそのもすそであった。他は彼を包みまつる周囲であった。「セラビムその上に立つ」とある。天使に二班ありて、その一班はケルビムであり他の一班はセラビムであるという。ケルビムは神の威厳を守る天使であり、セラビムはその神聖を守る天使であると思わる。(内) 昭和三三年五月『聖書之研究』。

⑤ 37・3・29 へ萬軍のエホバは愛なり、義なり、いやさきなり、いやはてなり、今なり。(60・9に「タルシ

の船はいや先に」とある。)

⑥ 37・3・29へエホバの御名を讃めたゝへん。〈25・1に準ずる。明治三十九年一月、英國聖書協會發行の『新約聖書』によれば、「エホバは汝はわが神なり我なんちを崇めなんちの名をほめたたへん」とある。昭和三十三年、日本聖書協會發行の『聖書』によれば、「主よ、あなたはわが神、わたしはあなたをあがめ、み名をほめたたえる。」とある。次に岸千年の注解を引用する。この章は、おどろくべきみわざをあらわしたもう神をさんびする歌である。

一節においてまず、あなたとよばれる神とわたしとの関係をあきらかにする。「あなた」は主でありわが神である。

「あなた」は、ご自身で決定せられた救いの計画を決して捨てず、人間の側の状況がどのようであろうと、それを真実をもって実行にうつされた。「わたし」はただただあなたをあがめ、み名をほめたたえるだけである。これが、神

なる「あなた」と人間である「わたし」との間の関係の基本線である(岸)。有島は、イザヤ書25・1を意識しているか否かは分らないが、先の日記文の前後にも、次のような神を讚美する文を書いている。へさらば余主を讃めたゝへん。へエホバの御名は永久に讃めたたへらる可ければなり。)

⑦ 37・9・12へ余が重荷は大なり。基督そを分ち給ふにあらざれば、余は其重きに死せん。主よ、心弱きものに祈りを教へ給へ。"Woe is me, for I am undone!"——Isaiah.〈6・5 〓 禍なるかな我ほろびなん〉(明治三十九年一月、英國聖書協會發行)。異象を見て、イザヤは神を見たことに気づいた。ここにおいてか大なる恐怖のおそうところとなった。イザヤもまた多くの神のしもべと共に、自己の罪に気づく前に他人の罪を責めた。人の悪しきを知って自己の悪しきを知らなかった。しかるに神に接して、自己の罪人のかしらなるを知った。「わざわいなるかな、われ滅びなん」というた。滅ぶべきはユダとエルサレムではない。われ自身である。見神の直接の結果は卑下である。謙遜である(内) 〓 昭和三年六月『聖書之研究』。日記引用文の直前に次のような苦悩に満ちた文章がある。へ余は基督信徒と呼ばれるゝにふさはしからず。これを如何にすべきや。(略) 涙と祈とにて半夜を明かす。すなわち、罪深い自己

番	期	日	章	節	内	容
1	32	5・18	1、2章		試練に堪えた義人ヨブ、序曲	
2	34	3・23	19章		麻布を纏ひ灰を被り樂園に	
3	36	3・3	20、29章		家に歸りヨブ記を読み始む	
4	36	3・8	30・1、42・6		約百記の末方を讀む、涙下	
5	36	3・31	38章		自然現象も愛の摂理、未だ	
6	37	3・29	28・3		第三十八章	
					エホバは、いやさきなり、	
					いやはてなり	

觀想錄（日記）とヨブ記

（内）Ⅱ 『内村鑑三聖書注解全集』第六卷「イザヤ書 エレミヤ書」教文館（昭和47年）
 （岸）Ⅱ岸 千年著『14 イザヤ書』信徒のための聖書講解―旧約 聖文社（昭和47年）

を反省するに、とても基督信徒として生きるのは重荷過ぎる、へ余は其重きに死せん。という心情である。「わざわいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。」（6・5）という聖書からの引用文はへ余が重荷は大なり。……、余は其重きに死せん。という心情がそのままではまる適切な聖句であると言えよう。

① 32・5・18 へ嗚呼、ヨブの忍耐の潔きかな。彼は必ずや死を生より如何に美はしきものと見たりけん。されども神の命を、己れの苦痛よりも甚だ貴きものとなしたるなり。我嘗て以爲らく、余若の不治の疾を病む事あらば、劍を秉つて自ら亡す可し。焉ぞ貴重いとの糧かきを食ひ、他人の幫助に預り、爲す事なくして碌々ろくろくと生きんやと。嗚呼淺薄なる覺悟よ。余今日にして初めて余の甚だ輕卒なるを知りぬ。人の品ひん階たうすべきはその行爲にあらず、其精神なり。史家の責甚だ輕からざる所以此にあり。余若し行爲に於て何事をも爲す能はずんば、其精神に於て萬事を爲すべきなり。固き信仰は、行爲に於てなす事能はざるに至るも決して失望せざるなり。ヨブが財散じ、家毀しこわ奴僕去り、家族死し、萬境不幸の間において身は人の厭ふ所の天刑病に罹り、灰を被り砂に伏して、行爲に於て何の爲す所なかりしも、而かも一點の確信は絶望の間に希望を抱懷せしめ、無爲の如く生きて而かも驚く可き有爲の事をなしぬ。噫、此の如きは確信ある人にして初めて得べし。余は以前の余が淺薄極まる信仰に築きたるの故を深く愧ぢずんばあらざるなり。涙に滿つる人の笑は神の最も喜び給ふ所にして、神によりてのみ得らるべきなり。▽(12章 散文体の序曲。神の試練に堪えた義人ヨブの物語。家畜と召使たちと全財産と、息子、娘たちすべてを失うが、神信仰を失わない。更に悪性の腫物に犯され、妻から「神をのろつて死になさい」と勧められるが、「神から幸をうけるのだから、災をもうけるべきではないか」と信仰に徹する。次に三人の友が登場。ヨブの痛みがひどいので七日七夜、一言も對話できず(名二内)弁)。定山溪での入信から約三ヶ月後、義人ヨブの信仰は「噫、此の如きは確信ある人にして初めて得べし。」と有島に言わせ深い感銘を与えている。そしてこの時期は、仏教(真宗)信徒として敬愛する祖母・静を看病するため上京している時期であったことも注目しておこう。)

② 34・3・23 へヨブが麻布を纏ひ灰を被りて路頭に坐せし其儘を樂園の中に導きたりとせば▽(19章に準ずる。 神の義は「あがなう者」(19・25)の代償的死による罪のゆるしにあらわされるといふことである。ヨブはこの神の謙讓の姿を腐りはてたからだで拝したのである。ヨブ記十九章はイザヤ書では五十三章に匹敵する絶頂の章である

(名)(内)

③ 36・3・3 〈家に歸りてヨブ記及び約翰傳を讀み始む。〉(前日の三月二日、〈今日から毎朝舊約聖書を讀む事にした〉と日記にある。二十章から二十九章あたりまでと推測される。)

④ 36・3・8 〈約百記の末方を讀む。云ふ可からざる敬虔の思胸に充ちて思はず涙下る。〉(ヨブ記は三部に分けられる。第一部は一、二章の序曲。第二部は3と42・6までの詩文体で、對話風に書かれ、ヨブ記の主体をなす。第三部は42・7と42・17まで。ヨブの回復が散文文体で述べられる終曲(名)。さて有島はヨブ記の末方を読んで落涙している。しかしどの章に感激したのかは分らない。十九章以後であるから「悲惨な現状」の三十章か、それともやはり嵐の中から主がヨブに語りかける三十八章か、または主とヨブとの對話全体として三十八章から四十二章六節までか。)

⑤ 36・3・31 〈「約百紀」を讀む、余は今迄繙きたる文學にして未だ第三十八章の如く崇高深遠なる想を見たる事なし。是れ洵に殆ど人の聲にあらず。天の聲なり。讀み行く中に我の「小」を身に沁みて覺ゆるなり。實に我等は鷲の巢を岩の一角に置かしたる其手をすら知らざるなり。人世に立ちて事をなす、何の傲り、何の譽、何の力ぞ。是れ蜘蛛が一塊の米粒を其穴に致せしに過ぎざるのみ。我等をして謙遜ならしめよ。汝の譽を全能の御手に歸せよ。辛酸の材を擔ふは易し。人生榮譽の荷を負ふの苦痛あらんや。百の思想遂に一の行爲に如かず。余頃來切にこれを思ふ。汝の涙を汗に代へよ。〉(三十八章Ⅱ第一回の主の問いかけ。40・2まで。38から42・6までは「主とヨブとの對話」である。嵐の中で敢かに問いかける。内容は苦難については一言もなく「神の知恵」が述べられる。それは友人たちのいう賞罰応報の神学教理ではなく、神の創造の愛であるのでヨブを圧倒し悔い改めに導くのである(名(辭))。有島もヨブと同じ気持になったのかへ讀み行く中に我の「小」を身に沁みて覺ゆるなり。實に我等は鷲の巢を岩の一角に置かしたる其手をすら知らざるなり。〉と云って、自然現象も愛の摂理によることに感嘆し、〈未だ第三十八章の

如く崇高深遠なる想を見たる事なし。』と最大限の賛辞を呈しているのである。1と3ヨブへの呼びかけ。4と11
 神の愛による創造。12と15毎朝、太陽を上らせ得るか。16と18大地の深さ、その広さ。19と21光と闇の住ま
 い。22と30天候の自然現象も愛の摂理。31と38宇宙の法則を支配。星座の位置。39と41野獸、空の鳥を養育(名)。
 尚、「日本のヨブ」と言われている内村鑑三の「角筭聖書 ヨブ記注解 第一篇」は明治三十七年八月に聖書研究社
 から出版された。その約一年半前の明治三十六年三月末日までに、有島はヨブ記を読み終っている。特定の注解書な
 しに札幌独立教会の一信徒として自主的に読んだのであろう。それにしてもヨブ記の主題である「義人の苦難」を
 信仰の糧とする正しい読み方をしていと言えよう。

⑥ 37・3・26「萬軍のエホバは愛なり、義なり、いやさきなり、いやはてなり、今なり。」(28・3に「人は暗や
 みを破り、いやはて、までも尋ねきわめて、」とある。『広辞苑』によると「いやはて」とは「一番のはて。最後。」とある。)と
 のことである。内田 満氏の論文「有島武郎の大島豊あて未発表書簡27通そのほか」(『文学』昭54・11)の中に、有
 島の「御在京中申上候聖書劇は参考書を涉猟し聖書を讀むに従ひ益々自分の力是れにかなはざるを覺え申候間、尙暫
 く保留致候事に致申候」(大正6・2・26消印)という大島 豊宛書簡からの引用がある。内田氏はこれに次のような解
 説を加えている。

「この時期に有島が読んでいた『参考書』はルナンの『イエスの生涯』であった。大島文には、「彼は聖書、特に
 旧約聖書を其の頃勉強してゐたのだが、ヨブ記を劇にする事に苦心し、その参考書を蒐める事を私に依頼してゐたの
 であつた」とある。有島にとって「ヨブ記」が感動的な書物であつたことは後の書簡(たとえば「一二二六」など)
 にもみえるところで、この構想が実つておれば『三部曲』はさらに多彩なものになるはずであつた。」

番	期	日	章	節	内	容
6	5	4	3	2	1	
大正 5・8・3	37・8・29	36・4・3	36・4・3	36・2・25	34・7・23 <small>(五)</small>	
13・1・13	3・18	6・19 20	9・16	9・24 27	15・28	
						此卑僕が主に従ふを得るに 朽ちない冠を得るため 福音を述ぶる能はずんば心 病まし 余の力は神の榮光を顯さん が爲 爾自身をだにあざむき得ず 愛がなければ無に等し

觀想錄（日記）とコリント人への第一の手紙（コリント前書）

（名）Ⅱ名尾耕作者『11 ヨブ記』信徒のための聖書講解―旧約 聖文社（昭和47年）
 （内）Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第四卷「ヨブ記」教文館（昭和47年）（角筭聖書 ヨブ記）前半部を除き、明治三十八年から大正十年の間に『聖書之研究』誌上に発表されたもの。
 （辞）Ⅱ『新聖書大辞典』キリスト新聞社 「ヨブ記」の項は浅野順一

① 34・7・23 へ此卑僕が主に従ふを得るに至らしめ給へ。我が心、我が身、凡ては主のものなり。主、我をよきに導き給ひ得べし。主よ凡てを捧げしめ給へ。（15・28に準ずる。Ⅱ「万物が神に従う時」、それが終末である（山）。）

② 36・2・25 へ我は此朝聖書を繕きて哥林多前書九章を讀み、二十四節以下に到り、云ふ可からざる不快の念に打たれて思はず鉛筆もて其文を塗抹しぬ。我の傲慢かくなさしめしか、ポーロの傲慢かくなさしめしか我知らず。さ

れどもポーロを神の如く敬ふものは基督を人の如くするものなり。ポーロが眞に基督を了解せりや否やは少しく疑ふ可き處あり。我は彼の言行の上に屢々ソーロたりしポーロの^{おもかげ}佛を見るなり。基督の弟子と云はんよりはガマリエルの弟子と云はんの寧ろ適當なる所あるを見るなり。我は彼の獻身的、殉教的なる偉大なる人格を尊敬して止まず。我若し言行ポーロの如くなるを得ば我は神の前に満腔の感謝を捧げん。されども若し我にして彼の神學に服従せよと命ぜらるれば我は^{わざはひ}災なるかな。我は此點に於てはポーロを離れてヨハネに到らん。(9・24〜27) 信仰の鍛錬や修養のために、日々^{日々}の精進と克己の精神が必要である。「自分のからだ」の肉の欲を制し、靈の力に従い、「朽ちない冠」を目ざして走る(山)。第一部第一章で論究したのだが、有島が二十四節以下に云ふ可からざる不快の念に打たれた原因は、二重決定論的思考でパウロ書簡を誤解していたからである。すなわち「賞を得る者はひとりだけ」「朽ちる冠」「失格者」という言葉の中に選びの排他性、偏狭性、パウロの傲慢さを感じたからである。

③ 36・4・3へ余若し福音を述ぶる能はずんば心病ましき哉。(9・16に準ずる。河野信子を恋人としてへあこがる) 頃であるが、同時にパウロのように伝道への意欲も秘めているのである。

④ 36・4・3へ余の力は余がものにあらず。神の其榮光を顯さんが爲めに假に余に與へ給ひしものなればなり。(6・19・20に準ずる。わたしたちのすべては、もはや自分のものではなく、主キリストのものである。だから、わたしたちは、積極的に、このからだを、神の榮光のためにささげねばならない(山)。内村注解書で6・19・20を見ておこう。深いかな、パウロの教訓、彼はおそるべき姦淫の罪を論じ、しかしこれに打ち勝つべき秘訣を教えて、肉體神聖論をとなえ、われらの肉體をもつて神の榮光をあらわすべしと結んだのである。彼パウロの教うるところによれば、われらが肉體をもつて神の榮光をあらわすことの可能なるのみならず、肉體をもつてせざる時は、この貴き道徳^{モラルビユウ}美の發揚はついに不可能なりというのである(内) 〓 大正七年一月『聖書之研究』。前の③に直後する日記文である。やはり若者らしい伝道意欲が読みとれる。)

⑤ 37・8・29 へ神の余に告げ給ひし囁きの中に、「古諺に云ふ『爾人をあざむき得可し。されども爾自身をあざむく可からず』と。されどもそは誤れり、爾自身をだにあざむき得ず、如何にして人をあざむく事を得んや。」と教へ給ひしは、余が思ひ設けざりし大なる御聲なりき。〔3・18に準ずる。〕「だれでも自分を欺いてはならない。もしあなたがたのうちに、自分がこの世の知者だと思ふ人がいるなら、その人は知者になるために愚かになるがよい。」パウロがかくいうは、なんじらの中に知者をもつてみずから任じ、なんじらの中に紛争嫉妬の種をまくものあるを知ればなり。なんじら、かかる人に注意して、彼らのあざむくところとなるなかれ。そは、彼らは知者なりと自信してみずからをさえあざむくものなればなり(内)〔明治三十六年一月『聖書之研究』〕。

入信前の明治三十一年頃から、有島は一貫して内村の著作には目を通して来た。留学後の明治四十一年(三十一歳)、農科大学英語教師になるまでの約十年間、有島の二十歳台は内村の著作も愛読書の一つであった。『観想録』には次に示す期日の中に内村の著作についての記述がある。

『東京獨立雑誌』(31・7・15)

『聖書之研究』(35・11・15、36・2・14、36・2・15、36・4・4、36・5・15、36・8・4、38・1・1、38・1・2、^{一九〇六}・2・9)

『基督信徒の慰め』(33・6・12、36・3・19)

『興國史談』(36・2・14、36・2・15、36・2・16、36・2・20、36・2・21、36・2・23、36・3・1)

『求安録』(36・4・21、36・4・22、36・4・26)

『日曜講演』(36・6・18)

このうち『聖書之研究』には「札幌獨立教會沿革」(34年10〜12月)の掲載を続けている。そして信仰生活に対して深い懷疑に陥っていたと言われる米国留学時代においてさえへ田島君より送り來りし『聖書之研究』を讀む。先生の

熱誠には敬服の外なし。〕(38・1・1) というように愛読している。故に内村鑑三の『聖書之研究』で論究されている注解は、創刊号の明治三十三年九月から少くも明治四十一年頃までの期間のものは、すべて有島も読んでいたと考え、て論を進めることにする。よって明治三十六年一月の『聖書之研究』にある「コリント前書」3・18に関するこの注解も、有島は読んでいたと推測しておこう。

⑥ ^{二五六}大正5・8・3 〈哥林多前十三〉(Ⅱ最高の道である愛(フ)。安子臨終の記録「終焉日記」から。筑摩全集第十二巻にあるが新潮全集にはない。明治四十一年九月十五日、武郎は婚約中の安子に『新約全書 詩篇附』を贈った。明治三十六年八月七日、札幌で購入しているその聖書の中には既に武郎が書き込み、傍線を引いてあった。この聖書の見返しには毛筆で〈哥林多前書第十三章 わが安子 武郎より〉と書いてある。また、武郎は五百二頁から五百三頁にわたってある第十三章一節から十三節全体にわたって上の余白に二本の傍線を横に引いておいた。武郎は自分が安子に贈った聖書の中から思い出の章節を「終焉日記」にメモしたのである。

(フ)Ⅱフランシスコ会 聖書研究所訳注『パウロ書簡Ⅱ(一・二コリント)』中央出版社(昭57年)

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十二巻「コリント書 ガラテヤ書」教文館(昭和47年)

觀想錄（日記）とヨハネの第一の手紙（ヨハネ第一書）

番	期	日	章	節	内	容
1	32	8・17	1	7	罪人唯基督の血によりて生き	罪人唯基督の血によりて生き
2	36	2・25	1	12	元初より在し生命の道を傳	元初より在し生命の道を傳
3	36	2・28	3	16	我儕亦兄弟の爲め生を捐つ	我儕亦兄弟の爲め生を捐つ
4	36	4・16	4	11 19	可し	可し
5	36	4・17	5	16	死に至る罪ありこれが爲祈	死に至る罪ありこれが爲祈 れと言はず

① 32・8・17へ嗚呼、罪人の罪人唯基督の血によりて生き得べし。余は唯祈る。▽（1・7に準ずる。|| 十字架の死を神と人間との和解である（エペソ2・16）というところから、ヨハネは特に神と信者との交わりの点へと進み、これを強調したのである（間）。ロマ書5・89に類似あり。）

② 36・2・25「夫れ我儕が聞き又眼に見、懇切に觀、我が手捫りし所のもの即ち元初より在りし生命の道を爾等に傳ふ」、此の感激なり。此の懇切の語なり。我はこれを聞きてヨハネに到らざるを得ず。▽（1・12 || 序説。ヨ

ハネ福音書の方は、永遠の言の受肉に中心をおくのに対して、第一の手紙は、生命いのちについて語り、生命による交わりを強調しており、教理よりも生活体験を説いている(問)。このところの感激は第一の手紙からだけのものではなく、これまでのヨハネ福音書からの感激をも含めたものであることは言うまでもない。

③ 36・2・28〈「主は我儕の爲めに命を捨て給へり。是れに由つて愛と云ふ事を知りたり。我儕亦兄弟の爲めに生を捐つ可し」(約第一書306(3・16の誤植)〈3・16 Ⅱ「アガペー」なる神の愛であつて、愛すべからざる敵に自己を犠牲にしてなす愛である。福音書、書簡それぞれを貫いているのは愛の原理である(問)〉)。

④ 36・4・16〈“Behold, (Beloved の誤植である。) if God so loved us, we ought also to love one another……There is no fear in love; but perfect love casteth out fear: because fear hath torment. He that feareth is not made perfect in love. We love him, because he first loved us.” I. John, IV〉(4・11 Ⅱ「神は愛である。」3・16で神の先行的愛が示され、これによつて兄弟愛が生れる必要があることが説かれた。ここでは更に「愛し合うべきである。」という命令形になっている(問)。二ヶ月半前の二月二十八日、3・16を引用して「神の愛」「兄弟愛」を認識した有島は四月十六日に4・11 Ⅱまでを引用し、再度「神の愛」と「キリスト者」との関係を確認しているのである。)

⑤ 36・4・17〈朝 John I の “There is a sin unto death” と云ふ所に讀み到りて interrogation mark を附しぬ。余に解釋せられず。残れるは此問題なり。これを思ふ時余は云ふ可からざる迷惑を感ず。〉(5・16 Ⅱ「死に至る罪」「不信仰の罪」(問))。有島がヨハネ文書で反感・疑問を抱いたのはここだけである。ヘヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得な(36・2・5) かった有島にとって、約二ヶ月後、そのヨハネの「死に至る罪がある。」という言葉を発見して、理解できなかったのである。)

観想録（日記）と使徒行伝

〔間〕 間垣洋助著『15 ヨハネ、ユダの手紙』徒信のための聖書講解 聖文社（昭和55年）

番	期	日	章	節	内	容	同	項
4	37	7	29	16	30		3	
3	36	3	1	16	30	救を得んが爲め何を爲す可きや	4	
2	36	2	25	22	3	ガマリエルの弟子と云はん 救はれんために何を爲すべきや		
1	32 ^{一六}	2	10	8	16	汝には未だ聖靈下らざるなり		

① 32・2・10 へ嗚呼され共汝には未だ聖靈下らざるなり。∨（8・16に準ずる。∥主イエスの名によって洗礼をうけても、まだ聖霊の賜物を知らない者があつた。原始教会では、使徒の権威が重く見られたために、このようなこともあつたであらう（福）。この引用文の前後に有島は次のように書いている。へ汝は何が故に早く眞に神の御手を受くるを得て、之れを森本君に語りて君をして迷ひ入りたる迷宮より救ひ出さざるぞ。へ汝が聖霊を得ざるの外は何者も森本君を救ひ出すものなきを知る。∨苦しむ森本君に対する激しい友情を読みとらう。へ聖靈下らざるを嘆く有島の心には聖霊降臨の大事件（2・1～13）のことも思い出されたに違いない。）

② 36・2・25 へ基督の弟子と云はんよりはガマリエルの弟子と云はんの寧ろ適當なる所あるを見るなり。∨（22・3に準ずる。∥青年パウロもかつては、律法学者ガマリエルの弟子であつた。ガマリエル（紀元25～50年頃）は、律法学者ヒレルの孫で、パリサイ派でも穩健な学派に属し、「律法の光榮」と呼ばれるほど、学識にも人格にも、すぐれた著名の教師であつた（福）。しかしここで有島が反パウロの立場から述べているのは明らかである。）

③ 36・3・1へ余救はれんがために何を爲すべきや、一つだになすべきものなし。(16・30に準ずる。|| 霊の救いのためには、イエスを救い主と信じる信仰告白が必要である(福))。

④ 37・7・29へいでや余救を得んが爲めに何を爲す可きや。(16・30に準ずる。|| 獄吏がパウロとシラスに問うた言葉である。救いを求めるための第一歩として大切な問いである。使徒行伝にある言葉であると意識していたか否かは分らないが、有島は二度この言葉を発している。留学六ヶ月前と精神病院で働いている時である。③に類似す。)

(福) || 福山猛著『5 使徒行伝』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

観想録とコリント人への第二の手紙(コリント後書)

番	期	日	章	節	内	容	同	項
4	37	・9	19	12	・9	神の僕として自分をあらわす神は感謝す可きかな	3	
3	37	・9	3	12	・9	神共にあり給ふ時、余は弱からず	4	
2	37	・8	3	2	・14	世の何物より弱からざるなり		
1	37	・7	29	6	・3	神の僕として自分をあらわす		

① 37・7・29へ此日聖書のコリント後書の第六章を読む。曰へ、"Giving no offence in anything, that the ministry be not blamed: But in all things approving ourselves as the ministers of God, in much patience, in afflictions, in necessities, in distresses, in stripes, in labours, in labours, in imprisonments, in watchings, in fastings; by pureness, by knowledge, by longsuffering, by kindness, by the Holy

Ghost, by love unfeigned, by the word of truth, by the power of God, by the armour of righteousness on the right hand and on the left, by honour and dishonour, by evil report and good report : as deceivers, and yet true; as unknown, and yet wellknown; as dying, and, behold, we live; as chastened, and not killed; as sorrowful, yet always rejoicing; as poor, yet making many rich; as having nothing, and yet possessing all things……” 足れり、足れり。何等の慰藉ぞ、何等の奨勵ぞ。余は他に何者をも要せず。余の道は誤らず。凡ての困難に打ち勝ちて之れを忍ぶ可し。「Jack」と呼びつけにせられ、すさまじき詈りの聲に逐はるゝとも、余は毛を剪らるゝ小羊の如くならん。基督は國賊と罵られ神を汚すものとのゝしられ給ひて尙彼等の爲めに祈るを忘れ給はざりき。余も亦數には足らねども其模倣者たらん。(6・3・10)「神の僕として。」神の僕としてのパウロの一生がいかに困難に満ちたものであつたかが述べてある。よし世間からどのようによましましからぬ批評をされ、どんな残酷な取り扱いをうけても、神は生きている。必ず必要な助けと導きを与えられる。であるから福音伝道に努力している人で、コリント後書六章一節から十節までに激しい感動を受けない人はいない(山)。有島は内村鑑三にならない精神病院で看護夫として奉仕していた。そこで有島は「Jack」と呼びつけにせられ、すさまじき詈りの聲に逐はるゝとも、余は忍ぶべし。と耐え得たのは、コリント後書の第六章を讀んで、何等の慰藉ぞ、何等の奨勵ぞ。と勇氣づけられたからである。第六章の英文は叢文閣全集第十二巻から引用してある。

② 37・8・3 へ——神は感謝す可きかな——(2・14)「パウロ書簡」にのみ見られる表現である。ロマ書6・17、7・25にもあり(典)。この日記文の直後に有島は「主よ、爾にありて凡てのもの浄められざる事なし」と書いてゐる。

③ 37・9・3 へ余は嘗て強しと云はれし事あらざりき。而して我も亦爾が信じぬ。さなり我は今も弱し。されども神余と共にあり給ふ時、余は弱からず。余は何者よりも弱からず。神の大なる力は余の心の中に漲り湧く。(12・

9に準ずる。||これはパウロの一つの結論である。つまり、彼の心身の弱さこそ、神の御手の強さをあかしする絶好の器となったのである(山)。常に「我は今も弱し。」と痛感している有島にとって、「むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。」というパウロの言葉は励みになったに違いない。)

④ 37・9・19へ余は弱し。されども世の何物よりも弱からざるなり。(12・9に準ずる。||これはパウロの一つの結論である。つまり、彼の心身の弱さこそ、神の御手の強さをあかしする絶好の器となったのである(山)。九月十六日、フランクフォードのフレンド派の精神病院を辞し、再びアボンデルの田園にあるアーサー・クロウエルの家で休養していた。アーサーの妹が有島の永遠の恋人ファニーであった。九月十九日はそのファニーの家を去る日であった。(③に類似す。)

(山)||山内六郎著『8 コリント人への第二の手紙』信徒のための聖書講解 聖文舎(昭和55年)

(典)||『旧新約聖書語句大辞典』教文館「感謝」の項

観想録(日記)とテモテへの第一の手紙(テモテ前書)

番	期	日	章	節	内	容	同	項
4	36	1	25	1	15	主の前に罪人の首なり	1	2
3	35	12	31	1	15	主の前に罪人の首なり	1	2
2	35	12	31	1	15	主の前に罪人の首なり	1	3
1	35	12	31	1	15	主の前に罪人の首なり	2	3
						罪人の首は基督に行かざる可からず	2	3

①―③ 35・12・31へ我等若し立たざれば主の前に罪人の首なり。▽(1・15に準ずる。Ⅱキリストの救いの恵みを体験すればするほど、罪の意識は深まるといふことは、矛盾することのように思えるが、事実はその通りであって、パウロは自らを罪人のかしらと呼んでいる。これは他の人と比較して、彼が罪を多く犯したものであることを意味するものではなく、キリストを罪人の救い主とする彼の考えから見て、これはむしろキリストを讚美する言葉である(大)。有島にも「罪人の頭」としての意識があった。十二月三十一日だけでも三度も同じ表現を書いている。入信約三年後の大晦日、一年を反省し、「聖書と信仰」に関する記述が多い。)

④ 36・1・25へ罪人の首は基督に行かざる可からず。▽(1・15に準ずる。)

「かしらなり」第一に位する者なり。首座を占むる者なり。必ずしも最大の罪人たるの意にあらず。罪人の首長なり。彼らを指導せし者、すなわち隊長なりとの意なるべし(内)。

(大)Ⅱ大内弘助、江口武憲 著『12 テモテ、テトス、ピレモンへの手紙』信徒のための聖書講解 聖文舎(昭和51年)。

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十四卷 教文館、(昭和47年)「テモテ前書第一章十五、十六節」は明治三十九年十一月『聖書之研究』に発表。

観想録（日記）とヤコブの手紙（ヤコブ書）

番	期	日	章	節	内	容
1	36	2・2・5	1	1・1・5・20	ヤコブ書の価値の容易ならざるを認め	
2	36	3・3・1	5	5・11	終りまで忍ぶものは幸なり	
3	36	4・4・5	1	22	聞くのみにして自己を欺くものとなる勿れ	
4	36	7・22	2	26	信仰若し行を兼ねざれば死ぬるなり	

① 36・2・5 へ元來を云ふと普遍的でないものは愛ではないのである。勿論普遍的と云うたとして、僕は愛の正面のみが働くものと露も思はぬ。其裏面なる義なるものが、働く場合も多いのである。然かも今日に處して、僕は悲しくも、愛を裏面より用ふる場合の方が寧ろ多いのを歎ぜずには居られぬ。我が胸にかき抱くべきもの、接吻の交換を爲すべきものを捕へて、之れを面責し叱咤するのは世の何者よりも苦しい事と思はれる。此に至つて僕はヤコブ書の価値の容易ならざるを認めざるを得ない。人々は何故ヤコブ書を重んぜぬのであらう。〔「ヤコブ書」は「善行なき信仰は虚偽の信仰にして、実は無信仰なり」（内）というように、行為実践面を強調した訓戒の書である（矢）。有島は次のように考えていた。愛は普遍的である。愛には裏面の義も含まれていることは認める。しかし義のみ強調する風潮が今日一般に波及しているように思われて残念である。だから義のためとは言え、へ我が胸にかき抱くべきも

の、接吻の交換を爲すべきものを捕へて、之れを面責し叱咤するのは世の何者よりも苦しい事と思はれる。そのよ
うな義の行為は、愛の行為ではなくなっている。そういう意味で、愛の行為、義認の書であるヤコブ書を重んぜざるを
得ないのである。内村鑑三の「ヤコブ書」二章「信仰とおこない」は、明治三十四年十二月の『無教會』と明治三十
七年十月の『聖書之研究』に発表されてあるので、有島も読んでいたと考えられる。

② 36・3・1へ唯「終りまで忍ぶものは幸なり」余をして願くば此忍耐あらしめ給へ。(5・11に準ずる。ヤコ
ブがヨブの忍耐を模範として、耐え忍ぶ者は救われることを力説している(矢)。共観福音書マタイ10・22、マルコ
13・13、ルカ21・19にある言葉である。二日後の三月三日、そして八日、三十一日にわたってヨブ記を熟読し落涙し
ていることから分るように、有島はヨブのような忍耐と信仰が得られるよう願っていたのである。)

③ 36・4・5へ朝、少暇を偷み久し振りにて雅各書を讀む。ヒシヒシとして心に沁む語誠に多し。「なんぢ等道を
行ふものとなるべし。徒らにこれを聞くのみにして自己を欺くものとなる勿れ」など鎗もて胸を刺さるゝ様なり。余
は弱きものなり。何時までか此の如き語に脅かされて悔恨を再三度せんとはすらん。(1・22)みずからその道を施
しもしくはおこなわざる時は、これみずから欺く者にあらずして何ぞ(内)。聞いていて行なわぬ者は、何も知ら
ない者より許されない最悪の人である(矢)。明治三十六年二月五日「ヤコブ書」重要視宣言」をして以来、半年
間、「愛の行為義認」に対して自分の実践面を反省し続けていた。であるからへヒシヒシとして心に沁むヤコブ書
の言葉にへ鎗もて胸を刺さるゝ様」にへ脅かされて悔恨を再三度せんとしてしているのである。九日後の四月十四日、
遠友夜学校の教え子・瀬川 末から感謝の手紙を受け感激している一例からも分るように、恵まれない夜学の子供た
ちのため「愛の行為実践」を続けた有島であればこそヤコブ書の言葉にへ胸を刺さるゝ」思いをするのである。雅各
書とはヤコブ書のことである。雅歌と混同しないこと。)

④ 36・7・22へ嗚呼然り「信仰若し行を兼ねざれば死ぬるなり」。(2・26)真理は信仰とおこないとありて存

するなり。信仰のみは真理にあらず。おこないのみもまた真理にあらず。二者の合体は真理存在のために必要なり。善行なき信仰は無用の長物なり（内）。生れながらにして真面目な有島が注目しそうな聖句である。）

（内）Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十四卷「テモテ書 ピレモン書 ヘブル書 ヤコブ書 ペテロ書 ヨハネ書 黙示録」教文館（昭和48年）この書物に収録されている「ヤコブ書」二章「信仰とおこない」は、明治三十四年十二月の『無教會』と明治三十七年十月の『聖書之研究』に発表されたものである。「ヤコブ書」第一章は明治三十八年十一月から明治三十九年

二、四、五月『聖書之研究』に発表されたものである。

觀想録（日記）とヨハネの黙示録

番	期	日	章	節	内	容
4	37	9・3	21	2、19・7	女	余は既に許嫁せられたる處
3	36	9・6	1	22章	し	余は黙示録を深く研究し度
2	36	1・25	7	17、21・4		私の涙を拭ひ得るもの
1	34	4・21	13	10		the patience and faith

① 34・4・21 <“Here is the patience and faith of the Saints.”なる motto は亦我が胸に刻むべき motto

とせん。▽(13・10) 忍耐と信仰は、迫害のもとにあるキリスト者の堅持すべきものである。忍耐は、運命への忍耐ではない。小羊の勝利を知るゆえに、その勝利の具体化する日を信じて待つ忍耐である(石)。このモットーは『用無全集』の中にある次のような神を讃美する詩の後に書かれた聖句である。(『観想録』には「彼が壁に掲げたる」とあるが)「主耶穌こゝにいまし すべての事をきき、すべての行を見 すべてのおもひを わきまへたまふ」▽『用無全集』とは二十二歳にて夭逝せし詩人伝道者・永野武三郎の遺稿集『用無遺稿』を指している。昭和五十四年十二月二十日、私は日本近代文学館にて『用無遺稿』の实物を手にして見る機会を得た。皮表紙、B5版の厚さ2cm程の本。「薩摩菊」「吊友歌」「夢のおもわ」「しほれし花」「絶望憤」「病床にて」「六花姫」「退臺」「探花行」「乱曲」(上)等のひらかな七五調の詩に、有島が感動したところに青線や赤線を引き、文字の右側に……。印を付けてあるところもある。書き込みもある。有島は自筆の絵を六枚挿入している。その中で嵐の海上での「絶望憤」の絵と詩はヨナ書を思わせる。次の記事あり。「明治十年一月五日、出雲松江市に生れ、明治廿四年十二月廿五日、松江聖公会に於て、バックストン師より受洗す。洗礼名をヨナと言ふ。」

このモットーの前に、有島は次のように書いて詩人を敬慕している。「へされど何とも知れず心『用無全集』に向ひて、彼の生き残れる「半身」が書きたる傳を読む。涙落ちて休む能はず、思はず聲を飲んで泣かんとせり。嗚呼偉大なる聖徒永く逝きぬ」▽尚、『観想録』の中の『用無遺稿』に関する記事は次の通り。34・4・21、36・2・7、26・2・27、2・28、3・1、3・5、3・14、5・4以上の中には推測も含まれる。

② 36・1・25「唯我の眞に要するは、私の涙を拭ひ得るものこのみ」(7・17、21・4に準ずる。 黙示録の中で、ここに至ってはじめて、神自身が働き出し、我々に向つて行動をおこされる。みずからきたって、「目から涙を全くぬぐいとつて下さ(7・17)り、慰めいたわられる(石)」。キリスト者の終末論的信仰は、このような状態の実現されるのを待ち望むことにある。イザヤ25・8に類似あり。)

③ 36・9・6 〈今日はまた柏井君と美術、宗教に就て語れり。彼の聖書上の知識は余に少なからざる利益を與へたり。余は黙示録を深く研究し度しとの念を起せり。〉（聖書中の最難解の書である。さまざまの誤解の大きな理由は、遠い将来に起こる終末の出来事の預言と考えることである。しかし、黙示録自身「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである」(22・10)と注意している。すなわち、終末への存在であるわれわれの現在における態度が、主題であるように思われる。黙示録の中心はキリストであり、その王権と栄光とを最もよく伝えていゝる書といえる。しかもその栄光は、ほふられたとみえる小羊(5・6)に与えられる。十字架の自己犠牲において勝利を得ているキリストこそが、神の審判のにない手としてふさわしい者とされる。それが小羊の怒りの審判である。しかし神の審判は、「応報」の思想によるのではなく、神のわれらに対する恩恵を、なおも避け、また憎む、われわれの罪責に向かうものなのである(一石)。最も読まれない書ではあるが、聖書の総決算としての黙示録を有島も重要視し〈深く研究し度しとの念を起〉したのである。

④ 37・9・3 〈余は既に許嫁せられるた處女、貞操は余が唯一の務めなり。〉(21・2、19・7に準ずる。Ⅱ小羊の花嫁である新しいエルサレム(21・2)は、サタンが最後に克服され、最後の審判がすぎ去るまでは、用意が備わらない。それがすんではじめて、み霊と花嫁は「きたりませ」(22・17)と主にむかって言うことができる。その招詞をもって、黙示録は終るのである。キリストの全教会は、キリストの花嫁であるとともに、小羊の婚宴に招かれたお客でもある(一石)。キリスト者が終末の時にキリストの花嫁になるといふ信仰は、黙示録によって与えられるのだが、有島もその点を読みとっていたのである。

観想録（日記）と出エジプト記

番	期日	章節	内容
1	34・5・10	19・16 20・17	十戒をばモーゼが受けしシナイの山も 土塊もて造れる人の中に恒久を求め
2	37・8・6	20・4	放牧の父モーゼに導かれ燃ゆる土地を歩いて
3	40・3・8	13・17 19・2	

① 34・5・10 へ十戒をばモーゼが受けし シナイの山も（19・16～20・17）モーゼの十戒。イスラエルはエジプトの地を出でてより三ヶ月目にシナイの荒野に至り、山の前に營を設けた。この山においてイスラエルに対する律法の宣布はおこなわれた。十戒は旧約聖書の中心点である（内）Ⅱ大正五年五～八月、十一、十二月、大正六年一、三月『聖書之研究』。尚、内村鑑三の「モーゼの十戒とその注解」には十戒第三条までの注解があり、続稿がない。しかしこの発表は明治三十二年九月『東京獨立雜誌』誌上であるので、有島は少くとも第三条までの内村の注解は読んでいたと思われる。）

② 37・8・6 へ神余に祈の心を賜へり。心を空しくして祈る。神教へたまはく「爾は尙土塊もて造れる人の中に恒久の或者を求め出でんとす。汚れなき白玉を求め出でんとす。そは無益なり。」（20・4に準ずる。Ⅱ「ねたむ神」

嫉妬は不実不貞を憤るの情なり。普通の男女間の愛においてするも、夫たるものは妻たるものより彼女の全心の愛を要求し、妻たるものもまた彼より同一の要求をなして可なり。神は最大の愛なり。ゆえに彼は彼の造りたる人類より専心全力の愛を要求するなり（内）Ⅱ「モーセの十戒とその注解」明治三十二年九月『東京獨立雜誌』。十戒第二条「偶像崇拜禁止」である。申命記5・8に類似あり。

③ 40・3・8へスエズは名ばかりの都市だ。モーセが移り住む人々を引連れて通つた場所は、こゝから餘り遠くないやうに思はれる。（略）シナイ山が水平線上から、我々に挨拶した。スエズ灣の赤い不毛の岸邊が正義の神の選民の、退屈な移住を傍觀する人を思ひ浮べさせでもするやうに廣々と擴がつてゐた。子供や老人をひきつれた、働き疲れ切つた奴隷の一群が、不平をこぼしながらも、尙ほまだ救世の希望に縋りながら、放牧の父モーセに導かれて、燃ゆるやうな土地を歩いて行く。私はその光景をそこに見た、目のあたり見るやうに思はれた。（13・17〜19・2Ⅱ脱出（13・17〜22）、紅海の横断（14）、神のしもべモーセの歌（15）、荒野彷徨（15・22〜18・27Ⅱメラの水とエリムのなつめやしの林、マナの下賜、レビデムの幕張り、荒野の団變）、シナイの荒野着（19・2）（内）（辞）。明治三十九年、有島はイタリヤ、スイス、ドイツ、ベルギー、フランスへと旅をし、明治四十年、パリからロンドンへ。更に因幡丸で地中海からスエズ運河を越える。そしてスエズ灣から荒涼としたシナイ半島を眺めながら有島は、モーセに導かれるイスラエルの民が荒野を彷徨して行く光景を想像しているのである。）

（内）Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第二卷「出エジプト記」レビ記 民数記 申命記 教文館（昭和47年）。

（辞）Ⅱ『新聖書大辞典』キリスト新聞社（昭和46年）。

観想録（日記）と雅歌

番	期	日	章	節	内	容	
2	1	36 <small>六三</small>	1	1	8	14	雅歌書、讀む毎に恥面に満つ
37・3・29			2	1			つ シャロンの野薔薇の他に花はなし

① 36・7・22 へ此頃余の讀める所は雅歌書なり。是れ永く聖書の中より除かれたる書なりとぞ。しかも其言々の鋭き事兩刃の劍の如く、讀む者をして思はず手に汗を握らしむ。余は此書を讀む毎に恥面に満つ。▽〔内村鑑三聖書注解全集〕に「雅歌」はない。有島が使用した注解書は分らないが、へ是れ永く聖書の中より除かれたる書なりとぞ。△とある。確かに『新聖書大辞典』の「雅歌」（奥相正敏）の項にも次の記事がある。「正典に入れるに当たっては相当の論争があったと伝えられ、結局当時のラビ・アキバ（Akiba）の意見がものを言ったとされている。」また「愛の讚歌」（8・7）と言われるだけあって、濃厚な接吻や女体讚歌の描写も多い。「あなたの舌の下には、蜜と乳とがある。」（4・11）、「あなたの乳ぶさが、ぶどうのふさのごとく、」（7・8）、「その足のすねは金の台の上にすえた大理石の柱のごとく、」（5・15）内に激しい性欲を秘めている純情二十五歳の童貞がへ余は此書を讀む毎に恥面に満つ。▽と言うのも当然であらう。

② 37・3・29 へシャロンの野薔薇よ、其色を被ひ其香を包む事勿れ。……シャロンの野薔薇の他に花はなし。花

一つだにある事なし。シャロンの野薔薇の香と色とを人の子の眼よりかくすものは禍なるかな。(2・1に準ずる。シヤロンとはカルメル山南方からヨッパまで延びる有名な沿岸平原を指す。「わたしはシャロンのぼら、谷のゆりです。」(2・1)とあるように、早春には萌え出る青草と色とりどりに競い咲く野花によって飾られる牧草地でもある(辞))。

(辞) Ⅱ 『新聖書大辞典』キリスト新聞社(昭和46年)

観想録(日記)とテサロニケ人への第二の手紙(テサロニケ後書)

番	期	日	章	節	内	容		
1	36	・3	・12	1	・1	・3	・18	1st & 2nd Letters to the Thessalonians を讀む
2	36	・7	・23	3	・13			善行を行ひて倦む事勿れ (帖撒羅尼迦後書第三章十三節)

① 36・3・12 〈朝 20th Century New Testament の中 1st & 2nd Letters to the Thessalonians を讀む〉
(「テサロニケ人への第一の手紙」の①と同じ。)

② 36・7・23 へ金曜日。「兄弟よ、善行を行ひて倦む事勿れ」(帖撒羅尼迦後書第三章十三節)。(3・13 Ⅱ 良い働きは、行なうことが神のみこころなのであるから、認められようと認められまいと、絶えず行ない続けることが必

要なのである（岸井）。善行為義認を信じ、「ヤコブ書」を重んじている二十五歳の武郎が（36・2・5）、「テサロニケ後書」3・13に共鳴して引用することは、至極あり得ることである。）

（岸井）岸井 敏著『11 テサロニケ人への第一、第二の手紙』信徒のための聖書講解 聖文社（昭和50年）

観想録（日記）とヘブル人への手紙（ヘブル書）

番	期	日	章	節	内	容		
1	33	・5	・25	10	・38、	11	・13	信仰によりて生き、信仰によりて死する生涯
2	36	・1	・25	5	・1	・10	大祭司の資格と務め	よりて死する生涯

① 33・5・25へ信仰によりて生き、信仰によりて死するの聖生涯我に臨む時は果して何時なる可き。②（10・38、11・13に準ずる。II アブラハム、イサク、ヤコブらは、天上の都、地上のカナン、いづれをも獲得せずして死んだ。されどもはるかにこれを望み見て、すでに得たりと信じて死んだ。希望は現実と化した（内）。ヘブル書十一章は「信仰第一の章」として有名である。ロマ書1・17に類似あり。有島はイスラエルの列祖たちのような「聖生涯」を自分も全うしたいと望んでいるのである。）

② 36・1・25へ（略）深き苦悶のみが深き同情を味ふなり。深き同情を受くるは人間至大の幸福にして、深き同情を分ち得るは人間最大の事業なり。人間の求め得る同情の料を何處に見出さんとするや。『人の中より選ばるゝ諸（すべて）

の祭司の長は人の爲めに神に屬く事を任ぜられて、罪の供物と犠牲を獻ぐる事をなすものなり。己れ自ら荏弱に周るれば亦愚昧なる迷へるものを憐れむ事を得るなり。之れに因つて民の爲めになす如く己れが爲めにも罪の供物を獻げざるを得ず。此尊貴は、アロンの如く神の召を受けたるものにあらざれば自らこれを取るものなし。此如く基督も自ら尊びて祭司の長とはならざりき。爾は我が子也。我今日爾を生めりと言ひしものを尊びてしかなせり。又別の篇に爾は窮りなくメルキセデクの班の如き祭司たりと云ひ給へるが如し。彼肉體にありし時、哀哭び涕を流して死より己れを救ひ得るものに祈り、又懇求をなし其敬 畏により聽かるゝ事を得たり。彼子たれども受くるところの苦難によりて順ふ事を効ひ、既に完全ければ凡て彼に従ふものゝ永 救の原となれり。彼はメルキセデクの班の如き祭司の長なりと神に稱へられき。』(希、五章一一〇節)我はこれを以て諸君に告げんと欲す。』(書き行く中に、其文中我が自身の思想の方寧ろ多くなれるを覺ゆ。されど大體に於ては多く氏の云ふ所に違はざりしを信ず。)(希伯來書5・1~10 大祭司の資格と務め(名)。へ我は獨り本郷の或る會堂に到りて宮崎湖處子の説教を聞きぬ。×題は同情なりき)。有島自身、元々同情の人であつたため説教には共鳴しへ余は記念の爲め彼の説教の全部を掲げんとす。となり四頁半にわたつて日記に書いてある。へ彼の説教)によると、同情には三つある。(1)肉體に對する同情。(2)半肉半靈に對する同情。(3)靈に對する同情。へ釋尊は實に同情厚き人であつたが、(2)までの人であつた。(3)はへ靈の痛み、罪の自覺)に對する同情である。へ之れに同情するの人はへ神の子基督なり)という。そして最後にへブル書5・1~10を援用した理由は次の点にある。「イエスが、イスラエル人によつて仲保者と考えられてきた天使たちや、モーセや、ヨシヤアよりも、はるかにすぐれた仲保者であり、大祭司であることを述べ」(名)、大祭司たるものは、へ己れ自ら荏弱に周るれば亦愚昧なる迷へるものを憐れむ事を得るなり。(二節)というように同情の人である点を強調するためである。尚、有島自身が同情の人であつたことは、説教の記録の最後にへ書き行く中に、其文中我が自身の思想の方寧ろ多くなれるを覺ゆ)と注を入れていることから分るのである。

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十四卷「テモテ書 ビレモン書 ヘブル書 ヤコブ書 ペテロ書 ヨハネ書 黙示録」教文館(昭和48年) この書物に収録されている「ヘブル書」十一章「アブラハムの信仰」は大正二年十、十一、十二月『聖書之研究』に、「ヘブル書」二章「同情のキリスト」は明治四十年六月『聖書之研究』に発表されたものである。

(名)Ⅱ名尾耕作者『13 ヘブル人への手紙』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)

観想録とペテロの第一の手紙(ペテロ前書)

番	期 日	章 節	内 容
1	36・4・8	2・2	今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く眞乳を
2	36・7・29	3・4	ペテロ書の「柔和恬靜」の字義

① 36・4・8 「今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く爾曹心を養ふ眞乳を慕ふべし。」(彼前、Ⅱ、2) 午前一時より起きて三時迄病床にあり。母上割合によく静眠せらる。(2・2Ⅱ信仰者は、今生れたばかりの乳飲み子である。著者がここで混じりけのない霊の乳というのは神の言である。「霊の乳」は、み言から湧き出る神の力であって、これによって人は霊的成長をとげるのである(矢)。半月前の三月二十四日、母幸子が「腹膜炎の徴候ありとの事」で病床に伏してから、親孝行の武郎は毎日「床邊に看護の手を盡し」ていた。母の病氣全快と自分の信仰の成長とを願って「霊

の乳」という神の力を慕いつつ引用したものとと思われる。

② 36・7・29 〈河野氏の令嬢来る。(略) 彼女等は余に強ふるに教話を以てしぬ。されども余は是れを固辭せる時、愛子君は余に問ふにペテロ書の「柔和恬靜」の字義を以てせり。余は喜んで彼女に答へぬ。余は今に至る迄多く彼女を相識らざりき。而も此兩三日彼女と接する所によれば、彼女は確かに其姉に過ぎたる品性を備ふるが如し。恬靜なる一少女なり。かくて寺を出でて七里ヶ濱に到りぬ。〉(3・4 明治三十九年一月、英國聖書協會發行『舊新約聖書』の三章四節に次の言葉あり。「心のうちの隠れたる人、すなはち柔和、恬靜なる靈の朽ちぬ物を飾とすべし、」
 明治三十九年六月『聖書之研究』の注解では「キリスト信徒の婦徳」「聖書の模範的婦人」と題が付いていて次の記事がある。アブラハムの妻サラ(創十二、十三章)、エフタの娘(士師十一章)、ボアズの妻ルツ(ルツ記)、サムエルの母ハンナ(サムエル上一、二章)、女王エステル(エステル記)、キリストの母マリヤ、ベタニヤのマリヤらなり。いずれも柔和にして静かなる女なり(内)。当時十六歳の河野愛子が問う「柔和恬靜」とは「妻に対する教え」(3・116 (矢)の中にある言葉である。少女がキリスト者に尋ねておきたい聖書の言葉である。有島が喜んで彼女に答へたのであるが、内村があげた婦人を見ても分るように、その答えは、外面の飾りではなく慎み深く心を美しく飾るべきである、というような内容であったと推測できる。聖書について質問を受けた有島は、六日後の八月四日、『聖書之研究』を河野愛子に送っている。尚、明治三十六年二月から八月頃までの有島日記には、二人の愛子の名があるが混同しないよう注意したい。一人は有島のすぐ下の妹・有島愛子(明治十三年生。明治三十年十二月六日、山本直良に嫁す。36・4・12、4・7、4・10、4・27、5・3、5・8、6・17、6・23、7・26、7・28)であり、もう一人は初恋の河野信子(明治十七年生。明治四十一年四月二日、小柳津邦太に嫁す。36・2・5、2・15、2・18、3・19、4・3、4・10、5・3、5・4、5・17、5・23、7・28、7・29、7・30、7・31、8・2)のすぐ下の妹・河野愛子(明治二十年生。小林太吉に嫁す。36・2・5、2・15、2・18、7・28、7・29、7・31、8・2、8・4)である。有島武郎と河野家との関係は瀬

沼茂樹「留学前後の有島武郎（上下）」（『文学』昭39・10、12）を参照されたい。

（内）Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十四卷「テモテ書 ビレモン書 ヘブル書 ヤコブ書 ペテロ書 ヨハネ書 黙示録」教文館（昭和48年）

（矢）Ⅱ矢野英武著『14 ヤコブの手紙 ペテロの第一、第二の手紙』信徒のための聖書講解 聖文舎（昭和50年）

観想録（日記）と申命記

番	期	日	章	節	内	容
1	37	8	6	5	8	土塊もて造れる人に恒久を求め、無益なり

① 37・8・6 へ爾は尙土塊もて造れる人の中に恒久の或者を求め出でんとす。汚れなき白玉を求め出でんとす。それは無益なり。Ⅱ（5・8に準ずる。Ⅱ「十戒」の偶像崇拜禁止。出エジプト20・4に類似す。）

観想録（日記）と列王紀上

番	期	日	章	節	内	容		
1	34	5	10	5	1	7	51	ソロモンが立てしシオンの宮居の地も

① ^{一六〇}34・5・10 ヘソロモンが 立てし シオンの宮居の地も（5・1と7・51に準ずる。|| 神殿の建築 ダビデの町の北方の高い丘に神殿を建てて以来、この神殿の丘がシオンの山と呼ばれるようになった（辞）。引用は「祝福された聖地」という題の十七行詩の最初の行である。有島が創作したと思われる。直後に「此地の聖きに 若くべしや」とあり、天国を暗喩した詩であろう。ルカ伝12・27に「ソロモンの栄華」の記述がある。

（辞）|| 『新聖書大辞典』（キリスト新聞社）の「シオン」の項。（昭和46年）

観想録（日記）と箴言

番	期 日	章 節	内 容
1	41・5・3	14・10	心の苦しみは心みづから知る、他人あづからず（箴言第十四章第十節）

一五六

① 41・5・3 へ午後大石來訪。彼はこの頃の余の精神状態に同情をもつてくれてゐるらしい。彼は、余が、ともすると、あらはにはではないが、非常に憂鬱な顔付をするのを見受けると言った。（略 今朝、ピストルを買つた。余の魂は余から離れて行く。余の魂は余の最も嫌ふことをする。怖ろしい事だ。「心の苦しみは心みづから知る、そのよろこびには他人あづからず。」（箴言第十四章第十節）（14・10 || 人間の精神はその不安の時にも元氣いっぱいの時にも、根深い孤立によって苦しむ。人生は「長い孤独」であり、人は自分自身の最も真実なものを人に伝えることができず、ただ自分自身に語ることができただけだと感ずる時がある。悲しみ（リ）。

明治四十年四月十一日、欧米留学から帰国した有島が、三ヶ月の軍務に従い、その間に意中の恋人・河野信子との結婚問題で敵父の反対に遭う。翌四十一年一月から母校札幌農学校教師となり、夏休み上京して神尾安子との婚約が成立するのだが、この六ヶ月の期間を安川定男は「内面の苦悩」と題して『有島武郎論』（明治書院）で論じている。自己のキリスト教信仰動搖、へ自由な自然の子」として信子との愛を結実し得なかつた心痛などが苦悩の原因である。五月三日の前後の日記を見てみよう。へあゝ、今この瞬間に死ねたら！ 私は、愛に見放されてゐる。（41・3・11）、

へ余は生命ある生涯を送つてゐるのではなく、死せる生涯を送つてゐるのだ。』(41・4・1)、へ余の心を動かしてゐるものは、(略)恐らくは死の囁きであらう。』(41・5・2)。このような心境の有鳥がへ憂鬱な顔付を』してへピストルを買う』という突飛な行動に出るのも分る氣もする。苦悩する有鳥が箴言14の10「心の苦しみは心みずからが知る、……。」と日記に書き付けたのは的を得た聖句引用と言ふべきだらう。二日後の五月五日にへ朝日新聞所載の藤村の「春」を讀んでゐる。青木が自殺しようとしてゐる。自分には、讀むに堪へぬ程切實に、その心持がわかつた。』と書いてゐるが、正直に当時の氣持を表現してゐると言えよう。)

(リ)H・J・C・リラーズダム著 松浦 大、木ノ協悦郎 共訳 『箴言・伝道の書・雅歌』 聖書講解全書10 日本基督教団出版局(昭和55年)

観想録(日記)とテサロニケ人への第一の手紙(テサロニケ前書)

番	期	日	章	節	内	容	
1	36	・3	1	・1	5	28	1st & 2nd Letters to the Thesalonians を讀む

① 36・3・12へ朝 20th Century New Testament の中 1st & 2nd Letters to the Thesalonians を讀む。Old text に比較して用語新しきが故に耳に入り易く、讀み行く中にポーロは今活ける人にして我自身に此書を送れるにあらずやとの思をなさしむ。彼にある多少の缺點を除く時は(人なり。彼に缺點なからさんや)彼に於て余は強き聲を聞くなり。然り彼は、仁者ならんより、義者ならんより、勇者なりき。彼の向上的獻身的勇氣は世の未だ嘗て見ざ

りし所なるべし。基督教には確かに彼なかる可からざるなり。〕(「テサロニケ書」) について内村鑑三は次のように注解している。テサロニケ前書は、パウロの書簡として存すものの中に最も古きものなり。また新約聖書中最も初めに書かれしものなり。教会創設時代の作なるがゆえに、その中に新鮮生氣の掬すべきもの多し(明治三十七年九月—明治三十八年四月『聖書之研究』)。キリストの再来は新約聖書全体を通じての基調である。特にこの思想に燃えて書かれしものはテサロニケ前後書である。パウロさきにテサロニケの信者を見舞いし以来、死したる信者はいかになるべきであるか、その疑惑を解いて、残れる信者を慰めんがために、彼は前4・13と5・11を書きつづつた(大正五年十月『聖書之研究』(内))。前日の三月十一日に新渡戸氏より借りた“The 20th Century New Testament”という注解書の中の「テサロニケ書」にも、内村の注解と同じ意味の内容があつたと推測される。再臨前に死んだ人に対する必要以上の悲しみを抱く傾向にあつたテサロニケの人々に対して、パウロは、叱責と、慰めと、奨励の必要を感じて筆を執つた(岸井)。有島は「パウロは今活ける人にして我自身に此書を送れるにあらざるや」と言つて感動し、基督教には確かに彼なかる可からざるなり。とパウロを支持している。三十五日前の明治三十六年二月五日、基督教の基督教にあらざるパウロの基督教と推せらるゝ所も尠くない。と言つて(「羅馬書、難解」)宣言して以来、九章(明36・2・14)、十三章(明36・2・17)、十一章(明36・3・29)とロマ書を読み続け、ついに四月二十日、反パウロの態度を決定するのだが、途中の三月十二日にはあるがめずらしい「有島のパウロ支持」として注目しておこう。

(内) Ⅱ 『内村鑑三聖書注解全集』第十三卷「エペソ書 ピリピ書 コロサイ書 テサロニケ書」教文館(昭和47年)

(岸井) Ⅱ 岸井 敏著『11 テサロニケ人への第一、第二の手紙』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和50年)

観想録（日記）と不特定

- ① ^{一六七} 30・5・22 〈「天使」〉（旧新約聖書）、〈「悪魔」〉（新約聖書）
- ② 32・2・15 〈クリスト〉
- ③ 32・2・16 〈クリストの愛は世界萬劫の民を救ふに足る、而して我はクリストに比して大海の泡沫、泰山の土塊なり。〉
- ④ 32・11・3 〈彼のミカエルが天上に〉（舊約13回、新約2回）、〈サタンを逐ひし其かみの〉（旧約3ヶ所、新約32ヶ所）
- ⑤ 32・12・31 〈全能なる神〉（旧約4ヶ所、新約10ヶ所）
- ⑥ 33・12・9 〈罪多き 我人の子〉〈唯頼む 天の父の 限りなき助け 萬軍の主エホバよ〉
- ⑦ 33・12・31 〈然かも神は讀むべきかな。〉（創9・26、詩28・6、ダニエル3・28、ルカ1・68、その他）
- ⑧ 34・5・10 〈シオンの宮居の地〉（「シオンの山」と解すれば、列王下19・31、詩2・6、黙14・1、その他にある。）
- ⑨ 34・5・11 〈“Eden and Gethsemane,” Endeavors after the Christian life, by James Marrianeu〉（「エデン」創2・8、イザヤ51・3、エゼ28・13、ヨエル2・3、他。「ゲッセマネ」マタ26・36、マルコ14・32。）
- ⑩ 34・6・18 〈シオンの宮〉（列王下19・31、詩2・6、9・11、黙14・1、列王上8・13、イザ14・32、その他）
- ⑪ 34・7・25 〈されど全能の手〉
- ⑫ 34・12・26 〈ミカエルの劍〉〈主の御手は讀むべきかな。〉

- ⑬ 34・12・28 〈全能の御業〉〈人の子〉
- ⑭ 35・11・13 〈されど全能の手は、(略)神に行かて嗚呼我何處に行かんや。〉(「在營回想録」)
- ⑮ 35・11・15 〈全能の主よ、(略)退き去れ悪魔! 人の子を無^なみするもの!〉(「マタイ4・10」「サタンよ、退け」に近い。国家権力は有島にとって「無」であり「悪魔」であった。「在營回想録」)
- ⑯ 35・12・29 〈人の子〉
- ⑰ 35・12・31 〈萬軍の主エホバ〉〈基督の十字架〉
- ⑱ 36・1・1 〈全能の手〉〈嗚呼我が主よ、我が凡てよ、〉
- ⑲ 36・1・25 〈人の子も亦惱めるものなる哉。〉
- ⑳ 36・3・2 〈今日から毎朝舊約聖書を讀む事にした。〉
- ㉑ 36・5・31 〈ケルビムと光の汀に戯れ遊べるを。〉(ケルビムⅡ天的存在であって、手足を持つ有翼の像。創3・24、出エ25・18、エゼ9・3、ヘブ9・5、その他。)
- ㉒ 36・10・27 〈人の子〉(旧新約聖書、両方に多数)
- ㉓ 37・3・29 〈萬軍のエホバは愛なり、義なり。〉〈人の子〉
- ㉔ 37・9・3 〈余が人はねたむ人なり。〉(出エ20・5、34・14。申命5・9、6・15、4・24。ヨシユア記24・14。ナホム書1・2。)
- ⑳ 37・9・15 〈嗚呼、十字架につけられ結ひし主よ、〉(十字架Ⅱ新約聖書)
- ㉖ 39・10・26 〈十字架の基督〉〈十字架上の基督〉
- ㉗ 39・12・21 〈Iscariotのヒダ〉(「マタ10・4、マコ3・19、ルカ6・16、ヨハ6・71、行伝1・16、その他。)
- ㉘ 39・12・25 〈“Christ as King of Heaven,”〉(「マタ6・9、5・34、ルカ11・13、ヒベ6・9、黙11・19。)

- ②⑨ 40・3・13 〈「十二使徒の島」〉(十二使徒Ⅱマタ10・2、行伝6・2、黙示21・14。十二弟子Ⅱマタ10・1、11・1、20・17、26・14、マコ4・10、9・35、11・11、14・17他)
- ③⑩ 40・3・14 〈聖書〉
- ③⑪ 40・3・18 〈ジョンソン氏が、モーゼについての異教徒の見解を攻撃した刷物パンフレットを貸して下さった。題して、「モーゼは間違つてゐたか。」〉(召命Ⅱ出エ3・1〜10、紅海渡渉Ⅱ出エ13・3〜14・30、十戒Ⅱ出エ20・1〜17、申命5・6〜21、約束の地Ⅱ申命34・1〜7)
- ③⑫ 40・3・18 〈蹟く石〉(原本では a stumbling block. 筑摩全集の小玉訳では「障害」。エレミヤ6・21、ロマ9・32、14・13、第一ペテロ2・8)
- ③⑬ 41・2・9 〈罪と云ふ問題について論じ合つてゐる時に〉(罪Ⅱ聖書全体で、約1050回出ている。)
- ③⑭ 41・2・16 〈聖書研究は、海老名の「キリストの奇蹟」と云ふ題の論文についてゝあつた。〉(キリストの「奇蹟」の語句Ⅱ行伝2・22、15・12、ルカ23・8、他。「キリストの奇蹟」に関する話Ⅱマコ2・11、12、4・35〜41、5・34、6・49、ルカ8・55、18・42、ヨハ4・52、5・9。)
- ③⑮ 41・5・17 〈キリストが神の子〉(イエスは神の子キリスト)〈キリスト即神の子〉(イエス、キリストⅡ新約聖書。神の子Ⅱ旧新約聖書。)
- ③⑯ 41・5・27 〈神よ、余の祈りを聞き入れ給へ。〉
- ③⑰ 41・6・23 〈神よ彼に幸福を與へ給へ。〉
- ③⑱ 41・6・25 〈信仰〉(イザヤ26・2、ハバクク2・4、他は新約聖書に他数あり。)
- ③⑲ 41・7・9 〈神を知りて信ぜざる、神を知らずして信する、之れ瀆神なり。〉
- ④⑰ 41・7・12 〈教會〉〈信仰と智力〉

- ④1 41・10・18 〈神は讀むべきかな。〉(旧新約聖書。旧約49回、新約5回。)
 ④2 大正5・3・29 〈キリスト〉
 ④3 大正5・10・15 〈「Life of Jesus」〉
 ④4 大正6・2・16 〈「イエスの生涯」〉
 ④5 大正6・2・26 〈「イエスの生涯」〉

(1) この三行後に、「ヨハネ第一の手紙」一章一、二節からの引用文があるが、ここでの感激はこれまでのヨハネ伝福音書からの感激も含まれていることは明らかである。

ローマ・カトリック教会では、ヨハネ文書(ヨハネ伝福音書、ヨハネ第一、第二、第三の手紙、ヨハネ黙示録、等の五つの書物)の著者は同一人物であるとしている(『旧約新約聖書』ドン・ボスコ社)。すなわち十二使徒の一人ゼベダイの子ヨハネが著者である。東方正教会でもカトリック教会と同じ立場であるという(ニコライ堂 武岡武夫司祭)。一方、プロテスタント教会では、福音書と手紙の著者は同じ使徒ヨハネであるが黙示録の著者は別人で予言者ヨハネであるか(山谷省吾『新約聖書解題』)、著者確定は不可解(『新聖書大辞典』キリスト新聞社)かのいずれかであるとしている。しかしいずれの教会でも福音書と手紙の著者は同じと見ており「ヨハネ福音書の愛読される所では、本書(ヨハネ第一の手紙)も亦喜んで愛用されて居る。」(山谷 一四四頁)ことは、有島が聖書を読む場合にも言えたわけである。

(2) 「迷える羊」については、旧約聖書に五ヶ所の記事がある。申命22・1、詩篇119・176、イザヤ53・6、エレミヤ50・6、エゼキエル34・11と16。しかし有島が言う〈迷羊〉の直前に共観福音書(マタ22・34と40、マコ12・28と34、ルカ10・25と28。)にある「神と隣人への愛」に関する記述があるので、ここでの〈迷羊〉は新約聖書マタイ18・12と14、ルカ15・3と7に入れらるべきである。

(3) イエス・キリストは歴史的人物であることを示すため、新約聖書は無味乾燥な系図で始まっている。しかしこの意味は重大であるのでイエスの系図(マタイ1・1と17)に関する聖書の他の章節を内村注解書を参考にして挙げておこう。

出エジプト20・56。申命記7・3、23・3。ヨシヤア記2章、6章。サムエル後7・11と16、11章。列王紀下2・12、21

・ 2、
 21・31。ルカ1・32
 33
 51
 52
 53
 69、
 19。ガラテヤ3・6
 8
 16。エペソ2・12。
 ビリビ2・8。テモテ前1・4、
 2・5、
 6・15。
 テモテ後3・16。テトス3・9。ヘブル2・17
 18、
 4・15
 16、
 11・31、
 12・2。黙示録22・16。
 詩篇2・12、
 51・3
 4
 5。イザヤ書9・6
 以上。
 マタイ1・1
 17
 21、
 3・9、
 5・17、
 8・11
 12、
 10・27、
 コリ

第五部 作品で話題にした聖書

はじめに

作品で話題にした聖書も、日記で話題にしたようにヨハネ伝が一番多く150回に及んでいる。次の表の通りである。

順番	著 作 名	章・節	内 容
1	「人生の歸趣」	18・38	眞理とは如何なる者ぞ 來るものは捨てざる可し
2	「リビングストーン傳」第7章63節	6・37	余の名によりて希ふもの
3	「リビングストーン傳」第7章63節	14・13 14	神は同じく食せり
4	「リビングストーン傳」第7章63節	21・9 13	カナの婚筵
5	「札幌獨立教會」	2・1 11	十字架上「事は終つた」
6	「日本文明の發展」	19・30	「It is finished」
7	“Development of Japanese Civilization”	19・30	病ましからざる者、石を投げよ
8	「露國革命黨の老女」(ブレシコフスキイ女史)	8・7	疚しからざるもの、石を投げよ
9	「露國革命黨の老女」(ブレシコフスキイ女史)	8・7	娼婦やマグダレナのマリア
10	「半 日」	8・3	わが神は凡てを愛するに
11	「ブランド」(初稿六)	3・16	罪なき者彼女を石にて搏つべし
12	「二つの道」	8・1 11	眞理とは何ぞや
13	「ブランド」(初稿二十六)	18・38	

36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
「ブランド」(改稿二六)	「ブランド」(改稿 六)	「一切無か」	「一切無か」	「一切無か」	「或る女」(一一)	「或る女」(七)	「リビングストーン傳」の序」(第四版の序)	「自己を描出したに外ならない「カインの末裔」	「宣言」	「自己(我)の考察」	「自己(我)の考察」	「迷路」(二)	「死と其の前後」	「洪水の前」(未定稿)	「サムソンとデリラ」(未定稿)	「サムソンとデリラ」(未定稿)	「宣言」(初出)	「内部生活の現象」	「ブランド」(初稿三十九)	「或る女のグリーンブス」(十一)	「或る女のグリーンブス」(七)	「ブランド」(初稿三十四)
18・38	3・16	3・16	3・16	20・25	16・33	4・5 42	2・1 11	8・7	1・3	15・13	3・16	8・1 11	20・29	8・5	9・1 41	12・3	1・3	2・1 11	19・5	16・33	4・5 42	18・11
眞理とは何ぞや	わが神は凡てを愛する	神は愛なり	神は愛なり	奇蹟を見せてくれ	我れ既に世に勝てり	サマリヤの女	カナの婚筵	石を以て打ち得る者がまづ石を	創造に着手する神のやうな	身を殺して仁を爲す	惜しみなく與へ	姦淫のマグダラのマリヤ	神を信ずるものは幸なり	奸淫の女を石で搏て	心の眼はエホバの御心をも	ナルドの香油	創造に着手せんとする神のやうな	カナの結婚	荆棘の冠	我れ既に世に勝てり	サマリヤの女	基督の死を味ひし時

37	「ブランド」(改稿三二)	18・11	基督が死の杯を味ひし時
38	「ブランド」(改稿三八)	19・5	荆棘の冠
39	「サムソンとデリラ」	12・3	ナルドの香油
40	「サムソンとデリラ」	9・1	心の眼はエホバの御心をも
41	「大洪水の前」	8・5	奸淫の女を石で搏て
42	「聖餐」	5・1	ベテスダの池で盲人を治す
130	省略	16・33	世に勝つた
131	「聖餐」	3・16	神は愛なり
132	「イブセン研究」(第三部「ブランド」の梗概)	3・16	神は愛なり
133	「イブセン研究」(第三部「ブランド」の三つの敵)	1・1	太初に道があつた
134	「惜みなく愛は奪ふ」	1・1	太初に道であるかを
135	「惜みなく愛は奪ふ」	1・1	太初が道であるか行であるか
136	「惜みなく愛は奪ふ」	1・1	ヨハネのロゴス
137	「聖餐」に就いて」	8・1	石で殺さるべき賣色
138	「ホキットマンに就いて」	4・44	生まれ故郷から迫害
139	「静思」を讀んで倉田氏に「(草稿)	2・13	繩で宮殿に巢喰つた商人を撃退
140	「静思」を讀んで倉田氏に「(草稿)	2・13	祭司と結托した商人に直接行動
141	「静思」を讀んで倉田氏に「(草稿)	5・17	神は働き給ふ我れも亦働くなり
142	「静思」を讀んで倉田氏に「	18・38	眞理とは何ぞや
143	「静思」を讀んで倉田氏に「	2・13	繩で宮殿に巢喰つた商人を撃退
144	「静思」を讀んで倉田氏に「	2・13	祭司と結托した商人に直接行動
145	「静思」を讀んで倉田氏に「	5・17	神は働き給ふ我れも亦働くなり

第五部 作品で話題にした聖書

順番	章・節	内 容	順番	章・節	内 容
53	8・5	モーゼの律法、石で殺す	65	8・10	訴へた者達は何處にゐる
52	12・6、13・29	ユダは會計役	64	8・8、9	群集一人残らず
51	6・71、13・26	イスカリオテのユダ	63	8・7	罪なき者石を投げよ
50	6・71、13・26	カリオテ生れのユダ	62	8・6	イエス地上に字を書く
49	6・71、13・26	弟子はガリラヤ人、ユダはカリオテ人	61	8・5	姦淫女を律法通り殺せ
48	5・17	父なる神は働く、私も働く	60	8・4、5	モーゼの律法、石で殺す
47	5・16	安息日を破るイエス	59	8・3	マグダラのマリヤ捕へらる
46	5・6、8、9	床を上げて歩いて御覽	58	9・41	誓言よりも憐れな精神的盲目
45	5・5、7	三十八年も遅れる誓言	57	12・6、13・29	ユダは會計役
44	5・3	癩病人、誓言、跛者、衰へた者集まる	56	8・1、11	姦淫の女
43	5・4	第一番に池に飛び込めば治る	55	6・71、13・26	十二人の弟子中、ユダのみユダヤ人
42	5・1、1、9	ペテスダの池で盲人を治す	54	2・4	母マリヤに「何んの関係もありません」

続いて聖書戯曲「聖餐」とヨハネ伝を表にすると次の通りである。

150	「即實の生活」	4・16、17、18	サマリヤの女も許す
149	「即實の生活」	2・13、17	祭司と結托した商人に直接行動
148	「即實の生活」	2・13、17	繩で宮殿に巢喰つた商人を撃退
147	「獨り行くもの」	20・24、29	再臨を信じなかつたトマス
146	「即實の生活と宗教」	8・1、11	我れ汝の罪を定めず

87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66		
11・43 44	30・8 20	2・4 7・6 8	12・6 71、13・2 26	6・71、13・29 26	12・6、13・29 40	11・40	11・39	11・36	11・33 34 35	11・32	11・27	11・24	11・24	11・23	11・21 22	11・16	11・9 10	11・8	11・11	11・6	8・11		
ラザロは甦つた	私の擧げられる時はまだ來ない	レプター一枚も自分勝手にしない	ユダのみユダヤ人	ユダは會計役	信ずるなら榮光を見る	埋めて四日、「石を取りのけよ」	ラザロは愛せられた	キリスト涙を流す	主がいらしたなら死ななかつた	マルタ、主よ信じます	イエスは復活であり生命である	マルタ、末の日に兄も甦える	兄のラザロは甦える	兄は死なずに濟む	トマスも「主と共に死なう」と	主はラザロを愛す	晝の間は蹟く事はない	パリサイ人は煽動して主を迫害	ラザロは眠つてゐる	行くべき時を待つイエス	何處にも居りません		
110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	
13・14 15	12・8	12・7	12・4 5	13・10	13・9	13・8	13・6	13・3 4 5	13・37	14・1 11	14・12 26	12・12 13	12・10 11	12・1 2	12・24	3・14	12・24	20・29	11・53 54 57	11・49 50	11・48	11・46	
互に相手の脚を洗ひ合ふ	私はいつまでも一緒にはゐない	マリヤは葬りの準備にこの油を	贅澤なナルド香油を貧しい人に	ユダへの悲しみ、皆が淨くなつてない	それなら手も首も洗つて下さい	ペテロ、勿體な過ぎます	勿體ない、洗わせるのが主人の役目	イエス弟子の足を洗ふ	ペテロは何處までも主に従つて行く	天の父は常に私と共に	私が去つた後天から聖靈が送られる	棕櫚の葉でホザナ／＼と祝ふ	復活のラザロを殺そう	渝越の節の前日	一度死ななければ	モーゼによつて蛇が上げられたやうに	一粒の麥が地に死ねばこそ	見ずして信ずる幸ひなり	一人になる機會に死刑	イエスを犠牲にしよう	一人残らずイエスを信するだらう	パリサイ人の恐れ	

第五部 作品で話題にした聖書

120	119	118	117	116	115	114	113	112	111
15 ・ 9	14 ・ 9 10	14 ・ 8	14 ・ 6	14 ・ 5	14 ・ 1 2 3	13 ・ 28 29	13 ・ 30	13 ・ 26 27 30	12 ・ 10 11
<p>祭司らラザロの命を覗ふ ユダ、行つてすべき事をしなさい ユダ、金袋を携へ退場 弟子たち、ユダが分らず 天國に第宅<small>イオコ</small>を用意 トマス、主の道さへ知りません イエス、私とその道だ ペテロ、天の父を知らせて下さい 私を見たものは父を見たのだ 父が愛して下さつたやうに</p>									
130	129	128	127	126	125	124	123	122	121
16 ・ 33	11 ・ 38 44	18 ・ 1	16 ・ 33	16 ・ 31 32	16 ・ 29 30	16 ・ 22	16 ・ 21	15 ・ 18 19	15 ・ 12 13 14
<p>友の爲め命を捨てる愛程 私が世から選み取つた 婦の産みの苦しみ 再び會ふ時が来る ヨハネ、主が神より出づるを信ず 皆は私だけを残すだらう 私は既に世に勝つた ケデロン河よりゲツセマネの園へ ラザロを甦らしたイエス 世に勝つたと仰しやつたイエス</p>									

以上の通り作品数は35種であるが、主にヨハネ伝を参考にした聖書劇「聖餐」が89回に及ぶ。次に評論「静思」を讀んで倉田氏に、「惜みなく愛は奪ふ」、イブセンの「ブランド」初稿と改稿が各4回、「静思」を讀んで倉田氏に「草稿」、「一切か無か」、「リビンググストン傳」、「卽實の生活」が各3回と続いている。

作品で話題にしたヨハネ伝の内容を回数順で見ると、第1位は20回の「姦淫の女」(8・11・11)、第2位は18回の「ラザロの復活」(11・11・44)となる。第3位の6回は「イエス、弟子の足を洗ふ」(13・11・21)、「ペテスダの池で盲人を治す」(5・11・9)、「父への道であるイエス」(14・11・14)、「創造者であるロゴス」(1・11・5)、ニコデモとの対話(2・23・3・21)に含まれる「モーセが蛇を上げたように」「神は愛なり」(3・14・16)である。第8位の5回は「神殿清め、商人を縄で撃退」(2・13・17)、「姦淫のマグダラのマリヤによる」「ベタニヤでの香油注ぎ」(12・11・8)である。第10位の4回は「世に勝つイエス」(16・25・33)、「安息日問答」「神は働き給ふ、我れも亦働くなり」(5

・17)、ピラトの尋問「眞理とは何ぞや」(18・38)、「イエスを殺さうと相談」(11・46と57)、「イスカリオテのユダ」(6・71、13・226)である。第15位の3回は「サマリヤの女」(4・5と42)、「カナの婚筵」(2・1と12)、「トマス」見ずして信ずるは幸なり」(20・24と29)、「イエス捕縛」「ゲツセマネの園」(18・1と11)、「ユダの裏切り」(13・22と30)である。第20位の2回は「心の眼と精神的盲目」(9・1と41)、「ラザロに對する陰謀」(12・9と11)、「ギリシヤ人來訪」「一粒の麥が地に死ねばこそ」(12・24)、「産みの苦しみと」「再び會ふ時が来る弟子の喜び」(16・16と21222324)、「荊棘の冠」(19・5)、「十字架上」「事は終つた」(19・30)である。第26位の1回は「生まれ故郷から迫害」(4・44)、「来るものは捨てざる可し」(6・37)、「勝利のエルサレム入城」(12・12と19)、「命を捧げて何處までも従うという」「ペテロの蹟きの豫告」(13・363738)、「父から送られる聖靈」(14・151617)、「父が愛して下さつたやうに」(19・5)、「友の爲め命を捨てたる愛程」(15・121314)、「世の憎しみ」「私が世から選み取つた」(15・1819)である。以上、回数順で通して見てきた中で、第1位「姦淫の女」は有島らしい話題の取り上げ方で分るのだが、第8位「商人を縄で撃退」、第10位「我れも亦働くなり」には、イエスをへ直接行動するへ即實主義者であると理解し、現実の社会悪に敵しく対処し、労働問題にも関心を深めていた有島の社会労働思想の特徴が出ていたので本稿の解説で注目していただきたい。

第五部の本稿では、第三部「増子方式」第一章「全集とヨハネ伝一覽表」で示した順番、新潮卷・頁・行、筑摩卷・頁・行、に倣つて次のような順序で解説してある。

(順番)新潮卷(筑摩卷)「著作名」新潮頁・行(筑摩頁・行)〈原文〉(章節)解説(同内容番号、発行掲載年月日)「掲載誌」年齢

例えば122番の「聖餐」に、新潮全集第4巻、268頁の8行から11行、筑摩全集第5巻、166頁1行から4行にわたつてヨハネ伝十五章十八、十九節に準ずるイエスの言葉がある場合、1224(5)「聖餐」268・8と11(166・1と4)へイエス 私が世から選み取つたのだ(15・1819に準ずる。……)となる。又例えば131番の「イブセン研究」に、新潮全

集第6巻、354頁の16行、筑摩全集第8巻、459頁上段の17行に「神は愛なり」というヨハネ三章十六節に準ずる言葉があり、有島四十二歳の時、大正九年二月『大學評論』に掲載された場合、1316(8)「イブセン研究」354・16(459上・17)〈天から聲があつて「神は愛なり」〉(3・16に準ずる。……。大正九年二月『大學評論』四十二歳)となる。

ヨハネ伝

① 5(1)「人生の歸趣」400・16(59・11)へ昔者ピラト傲然として眞理其の者に「眞理とは如何なる者ぞ」と問ひぬ。(18・38 眞理は不信仰者には隠されている間)。明治三十三年と三十四年『學藝會雜誌』第34、35號 二十二、二十三歳)

② 無(1)「リビングストン傳」第七章六十三節(206・19 20)へ彼は「余に來るものは決して捨てざる可し」(6・37に準ずる。 終わりの日を待て(内)。 6・39に通じる。ヘブル13・5にも類似あり。明治三十四年三月二十九日 警醒社 二十三歳)

③ 無(1)「リビングストン傳」第七章六十三節(206・20)へ或は「余の名によりて希ふものには其誰なるを問はず之に與ふ可し」と云へり(14・13 14に準ずる。 祈禱の永遠的効力(内)。

④ 無(1)「リビングストン傳」第七章六十四節(208・12 13)へ神は故らに人の子に生れて、同じく食せり、使徒ヨハネが尊敬したりし豫言者は、余等がなせしと同一の事業をなして、之れを成就せり。(21・9 13 朝の食事。ルカ24・30 31 41 42 43にもある。文の前俊から豫言者はイエスを指す可能性あり)。

⑤ 無(1)「札幌獨立教會」(295・1)へカナの婚宴に厨裡人の知らざる所水酒と化しぬ、奇跡は永へに我等に新意義を與ふるなり(2・1 11 カナの婚筵、イエスの最初の奇跡(内)。(18)と同じところ。明治三十四年十月二十日、十一月二十日、十二月二十日、『聖書之研究』14 15 16号 二十三歳)

⑥ 無(1)「日本文明の發展」(616・上21〜下1)「カルヴァリの丘の十字架の上から「事は終わった」と叫ばれてから二千年がたった。」(19・30)「絶望的万事休すでなくして、人間の救い達成の事業が完成された安心の声である。十字架が完成し、時が満され、悪魔に勝つて永遠の命を与える栄光が現わされた(間)。明治三十七年六月十日 ハヴァフォード大学 修士論文 二十六歳)

⑦ 無(1)“Development of Japanese Civilization”(607・45)「Two thousand years have been elapsed since the “It is finished” was cried from the top of the cross on Mount Calvary;」(19・30) ⑥と同じ内容)

⑧ 無(1)「露國革命黨の老女」(ブレシコフスキイ女史) (357・17)「而して尙病ましからざる者、彼女に向つて第一の石を投げよ、」(8・7に準拠)「罪なき者先づ彼女を石で擲て。」(10⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺)と同じところ。明治三十八年四月五、六、七、九、十日『毎日新聞』第一〇六九四、五、六、八、九号 二十七歳)

⑨ 無(1)「露國革命黨の老女」(ブレシコフスキイ女史) (359・17)「而して尙疾しからざるもの、彼女に向つて第一の石を投げよ。」(8・7に準拠)「罪なき者先づ彼女を石で擲て。」(8⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺)と同じところ。

⑩ 1(2)「半日」29・10(14・2)「娼婦やマグダレナの MARIA や」(8・3に準ずる)。「姦淫の女を想定している。有島は「此節を新約聖書中深く愛讀し」(36・2・8)「ていたからである。明治四十二年二月 三十一歳。）」

⑪ 無(1)「ブランド」(初稿六)(432・17)「わが神は凡てを愛するに、」(3・16に準ずる)。「全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。ヨハネ第一の4・7と10に同類記事あり。③と同じところ、明治四十二年六月二十五日と明治四十五年四月三日『文武會々報』57と62 64 65号 三十一歳〜三十四歳 明治四十二年六月 三十一歳)」

⑫ 5(7)「二つの道」116・67(9・17)「10・1)「昔キリストは姦淫を犯せる少女を石にて擲たんとしたパリサイ人に對し、汝等の中罪なき者先づ彼女を石にて擲つべしと云つた事がある。」(8・1と11に準ずる)。「姦淫の女。」

⑬と同じ。明治四十三年五月『白樺』 三十二歳)

⑬ 無(1)「ブランド」(初稿二十六)(452・3)〈ピラトが基督に對し、傲然として「眞理とは何ぞや」と問ふて以來、眞理は彼等に取りて永久の謎語となりき。〉(18・38)眞理は不信仰者には隠されている(間)。①③⑥と同じところ。明治四十三年六月 三十二歳)

⑭ 無(1)「ブランド」(初稿三十四)(461・8)〈基督の死を味ひし時、〉(18・11)に準ずる。||十字架は、父なる神より与えられる杯である(間)。「キリストが十字架にかかる時」という意味になるので新約に多数と解してよい。〈杯〉はマルコ14・36にもある。③⑦と同じところ。明治四十四年三月 三十三歳)

⑮ 無(2)「或る女のグリーンブス」(七)(97・7)〈基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから、〉(4・5)42||彼女がここで出会つたのは、「永遠の命の泉」「生ける水」イエズス自身である(フ)。明治四十四年一月〜大正二年三月『白樺』三十三、三十四、三十五歳 明治四十四年六月 三十三歳)

⑯ 無(2)「或る女のグリーンブス」(十一)(125・1617)〈思はず幼時から習ひ覺えた聖書の中の「我れ既に世に勝てり」と云ふ言葉をはつきりと心の中で絶叫した其時の事や〉(16・33)十字架上の死は敗北ではなく、勝利だからである(フ)。田鶴子の過去の記憶として有島は書いている。有島自身、十六章三十三節は心に残る言葉であつたらしい。「聖餐」第三幕、最後から二番目のイエスの台詞にも〈私は既に世に勝つた〉とある。この台詞は神学の立場から云えば「聖餐」の核になつてゐるからである。⑮⑯⑰⑱と同じところ。明治四十四年十一月 三十三歳)

⑰ 無(1)「ブランド」(初稿三十九)(470・15)〈荆棘の冠〉(19・5)「いばら」は悪を行なう者、イスラエルの敵、呪詛じゆそなどの象徴とされている(『新聖書大辞典』)。マコ15・17にもある。マタ27・29、ヨハ19・2に類似あり。③⑧と同じところ。明治四十四年十二月 三十三歳)

⑱ 5(7)「内部生活の現象」225・910(97・18)〈彼が最初に自己を現はしたのはカナの結婚の席であつたと云ふこと〉(2・1)11を指している。||貧家の宴席において新郎新婦を恥辱より救い出ださんためのイエスの最初の奇

跡。水をぶどう酒に〔内〕。有島から見ればイエスは〔即實主義者〕〔行〕の人のなのである。へと云ふこと〕が筑摩では
 へ〕〕に変わっている。大正三年七月 三十六歳)

①⑨ 無(2)「宣言」(初出 AよりBへ〔千九百十二年十月十日〕〔515・上67〕〔僕は創造に着手せんとする神のや
 うな自由と昂奮とを感じる。〕〔1・3に暗示を受けている。〕すべてのはみことばによってつくられた(フ)。原
 文直後に、Y子との恋を結実させ一歩、一歩人生を創造して行こうというAの昂奮した気持が続いている。〔僕にこの戀
 を成就すべき運命が與へられてあると云ふ事は、はつきりと暗示されて居る。この絶大な特權に報ゆる爲めに、僕は
 凡ての人を愛しやうと思ふ。〕大正四年七月〜十二月『白樺』、一九一四・二・三までは大正四年七月 三十七歳。)

②⑩ 無(2)「サムソンとデリラ」(未定稿 第一幕 デリラの住家)〔416・19〕〔ナルドの香油でこの髪を櫛り〕〔12
 ・3ナルドの香油は、インドのヒマラヤの原産植物甘松香の根から取った高価な香油である。雅歌1・12、4・14
 にもこの香油のことが出ている(フランシスコ会「マルコによる福音書」14・3)。〔魂體にもナルドの香油の記事あり。〕

大正四年九月『白樺』 三十七歳)

②⑪ 無(2)「サムソンとデリラ」(二幕劇 未定稿)〔425・1112〕〔サムソンの眼睛が輝いた時には心は盲目だった。
 醜く盲目になった時、サムソンの心の眼はエホバの御心をも讀む事が出来る。〕〔9・1〜41に準ずる。〕精神の盲目
 (共)。生れながらの盲人のいやし(間)。④⑩と同じところ。大正四年九月『白樺』 三十七歳)

②⑫ 無(2)「洪水の前」(三幕劇 未定稿)〔437・12〕〔ヘセム。奸姪を犯しながら、その穢はしさを言葉にまであら
 はす憎い女。ハムその女を石で擲て。擲つて殺してしまへ。(手頃の石を拾つて立ちかゝる)〕〔8・5を意識している。〕

②⑬ モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じました。申命記22・24にある。その他、レビ20・10、21、
 エゼキエル16・3840。⑧⑨⑩⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺

②⑭ 4(3)「死と其の前夜」55・2(20・11)〔婆——旦那様「神を信ずるものは幸なり」と申しますが……〕〔20・

29に準ずる。|| 大切なのは、霊的に主を理解し信じることである(問)。大正六年五月 三十九歳)

②4 1(3)「迷路」(二二359・10 11(242・18 19)へ基督を思ふと、白晝姦淫を犯したマグダラのマリヤが想ひ出でられ
た。)(8・1~11に準ずる。|| イエスの言葉に聞き入ったり(ルカ10・39 42)、十字架を遠くから見つめていたり(マ
タ27・56 61、マコ15・40 47)、十字架のそばまで行って立っていたり(ヨハ19・25)、復活後のイエスに対面しているのが
マグダラのマリヤであるが(マタ28・1、マコ16・1 9、ヨハ20・1 11 13 15 16 18)、有島の自由な聖書解釈によればヨハネ
伝八章の姦淫の女がマグダラのマリヤなのである。⑩⑫⑬⑭と同じ。大正五年三月『白樺』、大正六年十一月『中央公
論』、大正七年一月『新小説』、三十八、三十九、四十歳)

②5 5(7)「自己(我)の考察」311・2 3(410下 22~411上 1)へポーロが「惜しみなく與へ」といつたのは實は愛の働きの
表面的な現はれを云つたに過ぎません。)(3・16にも暗示を得ている。|| 全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。有
島が指摘するポーロが云つた言葉とは、ロマ書八章三十二節、十二章八節あたりを指している。原文の直前に「愛は
自己以外のものから奪ふにだけ奪ひ取るのです。」とある。既に反パウロ、反キリスト教会の立場でものを云つ
ている。⑩⑪と同じところ。大正六年十一月二十六、二十七、二十八、二十九、十二月一、二日『北海タイムス』十
一月二十七日掲載 三十九歳)

②6 5(7)「自己(我)の考察」311・12 13(411上・17~20)へ所がこゝに愛己主義に反して主張される愛他主義の主張
を裏書きすると思はれる事實が存在してゐます。所謂「身を殺して仁を爲す」といふやうな、自己の存在を滅却する
激しい愛の作用のある事です。)(15・13に準ずる。|| まことの愛(ド)。その他、ヨハネ第一3・16、ロマ5・7 8。
⑩⑪と同じところ。『北海タイムス』大正六年十一月二十七日掲載 三十九歳)

②7 1(2)「宣言」(AよりBへ 千九百十二年十月十日)80・8 9(324・4 5)へ僕は創造に着手する神のやうな自
由と昂奮とを感じる。)(1・3に暗示を得ている|| すべてのものはみことばによってつくられた(フ)。原文直後に、

Y子との恋を結実させ、一歩一歩人生を創造して行く、というAの昂奮した気持が続いている。僕の戀がきつと成就する運命にあるといふ事は、はつきりと默示されてゐる。この絶大な特權に報謝するためには、僕は總ての人を愛しようと思ふ。初出との間に異同がある。⑲と同じところ。大正六年十二月十八日 著作集第二輯 三十九歳

⑳ 6(7)「自己を描出したに外ならない「カインの末裔」18・45(45下・23)へ批評は優者の仕事だ、石を以て打ち得る者がまづ石を取るべきである。」(8・7に暗示を得ている。罪なき者先づ彼女を石で擲て。⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳)

(24)(41)(53)(56)(59)(60)(61)(62)(63)(64)(65)(66)と同じところ。大正八年一月一日『新潮』 四十一歳)

㉑ 6(7)『リビングストーン傳』の序(第四版の序)77・161718(379上・5)8)へ基督が始めてその奇蹟なるものを行つたのはカナの婚筵であつた。而かもその奇蹟といふのは、葡萄酒が足らなくなつたのを見て、更に潤澤に葡萄酒を供給して饗宴の興を助けたのだつた。(2・1)11)カナの婚筵、イエスの最初の奇蹟(内)。この後、基督が饗宴の興を助け、たこと、へそれは保羅の馬鹿々々しい偏靈主義とは随分かけ隔たつたものに私には思へる」と続いている。反パウロの有島ではあるが、キリスト自身への攻撃ではない。「惜みなく愛は奪ふ」十八章に反キリスト論はある。背教者有島を決定するかのようである。しかし意外に反キリスト論は少ない。むしろキリストをへ即實主義者へ行)の人として高評している。⑳㉒と同じところ。大正八年三月二十二日 四十一歳)

㉓ 2(4)「或る女」(七)44・4(46・13)へ「基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから、……」(4・5)2)「生ける水」とは、自然のレベルでは新鮮な流れる水であるが、象徴的には、イエスを通して与えられる神の賜物すなわち啓示、聖霊、永遠のいのちを指している(ジ)。木部との結婚問題で葉子を叱る内田の言葉である。「サマリヤの女」とは葉子を暗示している。反抗していたが後で基督に心を開いた女である。㉓と同じところ。大正八年三月二十三日前編(二十一章まで) 六月十六日後編、「著作集」第八輯、第九輯、四十一歳)

㉔ 2(4)「或る女」(一一)82・1718(83・1718)へ赤兒の産聲——やみがたい母性の意識——「我れ既に世に勝て

り」とでも云つて見たい不思議な誇り) (16・33 || 十字架上の死は敗北ではなく、勝利だからである(フ)。繪島丸が横浜を出航して三日間、葉子は一人船室に閉じ籠つて(自分の過去を夢のやうに繰り返してゐた。)その中には葉子が母親になつた体験も思い出されている。母親になつた誇りが「我れ既に世に勝てり」という意識を持たせたといふのである。(15 16 17 18 と同じところ。)

(32) 無(7)「一切か無か」(44下・9 10) (また他の者は、「奇蹟を見せてくれ」とか、(20・25に準ずる。|| トマスの不信仰は、後世のキリスト信者の信仰を強めるために大いに役立つたので、多くの教父は、そこに神の摂理を認めている(フ)。(23 22)と関連あり。大正八年三月二十八日『婦人週報』四十一歳)

(33) 無(7)「一切か無か」(45上・5) (神は愛なり) (3・16に準ずる。|| 全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。
ヨハネ第一の4・7と10に同類記事あり。(11 25 35)と同じ内容である。)

(34) 無(7)「一切か無か」(45下・6 7) (雷鳴の中より「神は愛なり」との聲が聞える。) (3・16に準ずる。|| 全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。(ヨハネ第一の4・7と10に同類記事あり。(11 25 33 35)と同じ内容である。)

(35) 5(7)「ブランド」(改稿六) 7・18 (271・4) (わが神は凡てを愛する) (3・16に準ずる。|| 全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。(ヨハネ第一の4・7と10に同類記事あり。大正八年四月『白樺』四十一歳。)

(36) 5(7)「ブランド」(二六) 28・9 10 (290・15 16) (ピラトが基督に對し、傲然として「眞理とや、眞理とは何ぞや」と反問して以來、眞理は彼等に取りて、永久の謎となりぬ。) (18・38 || 眞理は不信仰者には隠されている(間)。
①と同じ。)

(37) 5(7)「ブランド」(三三) 37・10 (299・11) (基督が死の杯を味ひし時) (18・11に準ずる。|| 十字架は、父なる神より与えられる杯である(間)。「キリストが十字架にかかる時」という意味になるので新約に多数と解してよい。
<杯>はマルコ14・36にもある。)

③⑧ 5(7)「ブランド」(三八)45・18(308・8)〈荊棘の冠〉(19・5)Ⅱ「いばら」は悪を行なう者、イスラエルの敵、呪詛などの象徴とされている『新聖書大辞典』。マコ15・17にもある。マタ27・29、ヨハ19・2に類似あり。

③⑨ 4(5)「サムソンとデリラ」(第二幕 デリラの住家)188・10(87・10)〈ナルドの香油でこの髪を櫛り〉(12・3)ナルドの香油は、インドのヒマラヤの原産植物甘松香の根から取った高価な香油である(フランシスコ会「マルコによる福音書」14・3)。雅歌1・12、4・13、マルコ14・3にも同類あり。②⑩⑪にもナルドの香油の記事あり。大正八年十月 四十一歳)

④ 4(5)「サムソンとデリラ」204・1617(103・89)〈サムソン——サムソンの眸が輝いてゐた時には心が盲目だった。眼が醜く光を失った今、サムソンの心の眼はエホバの御心をも見る事が出来る。〉(9・11)41に準ずる。Ⅱ精神的盲目(共)。生れながらの盲人のいやし(問)。未定稿では、サムソンの眼睛が輝いた時には心は盲目だった。醜く盲目になった時、……)となつている。②⑩と同じところ。大正八年十月 四十一歳)

④ 4(5)「大洪水の前」116・910(17・34)〈ヘテム——奸淫を犯しながら、二つの心に事へながら、その穢らしさを言葉にまで現はす憎い女! ハム! その女を石で擲て。擲つて殺してしまへ。手頃の石を取り上げて立向ひかゝる)〉(8・5を意識している。Ⅱモーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じました。申命記22・24にある。その他、レビ20・10、エゼキエル16・3840。未定稿には、二つの心に事へながら、はしない。⑩⑪と同じ。大正八年十月 四十一歳)

④ 4(5)「聖餐」209・1617(109・121314)〈甲——あれは羊の門のそばのベテスダの池ね……いつだつたか、イエスが三十八年盲だつたといふお爺さんの眼を癒して、學者やパリサイ人と大議論をなさつたあすこの近所にあるんです。〉(5・1)9を指している。Ⅱベトザタの池で盲人を治す(共)。足なえのいやし(問)。大正八年十月三十一日 著作集第十輯 四十一歳)

④3 4(5)「聖餐」210・6・7(110・1・2)へ甲——その時を見すまして第一番にその池に飛び込んだものは、どんな難病でも即座に治つてしまふのだ。5・4を指す。||ベトザタの池で盲人を治す(共)。④2と同じ。)

④4 4(5)「聖餐」210・8・9(110・3・4)へ乙——そこには癩病人と云はず、瞽盲と云はず、跛者と云はず、衰へた者と云はず、氣味の悪い程うよくと集まつてゐて、5・3に準ずる。||ベトザタの池で盲人を治す(共)。④2④3と同じ。)

④5 4(5)「聖餐」210・13・14(110・9・10・11)へ乙——そこに瞽盲で三十八年も池のそばに辛抱して天の使のお降り待つてゐた爺さんがあつたのだ。何しろ眼は見えず、體はきかず、そら今だと云ふ時でも立ちおくれしてしまふのだ。5・5・7に準ずる。||ベトザタの池で盲人を治す(共)。④2④3④4と同じところ。)

④6 4(5)「聖餐」210・15・16・17(110・12・13・14)へ甲——その歎きをイエス様が御覽になつて、「起きるがいゝ、さうして床を上げて歩いて御覽」と仰しやると、どうだ……その三十八年間風雨にさらされて、エジプトのミイラのやうになつてゐた爺さんの眼が開いて、歩き出したのだ。5・6・8・9に準ずる。||ベトザタの池で盲人を治す(共)。奇跡は、神の愛と力の顕現であつて、人間の信仰が奇跡を生み出すのではない。自己の利益に基いた信仰に、奇跡の意味は分らない(間)。④2④3④4⑤と同じところ。)

④7 4(5)「聖餐」211・2・3・4(110・17・18・19)へ甲——安息日にイエス様があんな奇蹟をなさつたからだ。安息日はエホバの大神ですらお休みになる日なのだ。安息日に働いてならぬといふのはこのユダヤの國の堅い御法度だ。それをイエス様が平氣でお破りになつたからいけなかつたのだ。5・16に準ずる。||安息日の問題。イエスは安息日を与え、律法を完成する(間)。出エジプト20・8・9・10、31・12に参照。)

④8 4(5)「聖餐」211・5(111・1・2)へ乙——「わが父なる神は今に至るまで働き給ふのだ。だから私も働くのだ」と仰しやつた。5・17||安息日の問題。イエスは、安息日を与えた神と一つであり、「安息日にもまた主なのである。」(マルコ2・28)(間)。④7と同じ内容である。)

④9 4(5)「聖餐」212・12(111・1516)へユダ——主の十二人の選ばれた弟子の中十一人までは主と同じ國のガリラヤ人だが、私はユダヤのカリオテの生れでありながら進んで主に従つたのだ。(6・71、13・226に準ずる。|| イスカリオテのシモンの子。彼は十二人の中で唯一の南のユダの出の者である。イスカリオテは、ヘブル語の כּוֹרֵי־עֵיט (kōrîyôṭ) で「ケリオテの人」(man of Kerioth)の意味となる『新聖書大辞典』キリスト新聞社。

⑤0 4(5)「聖餐」212・5(111・19)へユダ——私はカリオテの生れだからイエスの人々からイスカリオテのユダと呼ばれてゐる。(6・71、13・226に準ずる。|| 彼は十二人の中で唯一の南のユダの出の者である(辭)。④9と同じ。)

⑤1 4(5)「聖餐」212・6(112・1)へ乙——イスカリオテのユダ……あなたのお名は立派な響きを持つてゐます。(6・71、13・226に準ずる。|| Judas, 'Iōdāas ヘブル語「TIT, (y'hadāh)のギリシア音写で、「彼を讚美しよう」(創世29・35参照)の意味(辭)。有島がこの意味を知っているからへお名は立派な響き」という台詞を書いたのかも知れない。④9⑤0と同じ。)

⑤2 4(5)「聖餐」212・7(112・2)へユダ——私は然しイエスの人々の會計役をしかしてゐないのだ。(12・6、13・29に準ずる。|| 會計役とは使徒の中でも信頼されている者が勤める役である。④9⑤0⑤1と同じ。)

⑤3 4(5)「聖餐」213・14(113・89)へ甲——モーゼの律法おきてに従つて石で打ち殺して、女だ。(8・5を意識している。|| モーゼは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じました。申命記22・24にある。その他、レビ20・10・21、エゼキエル16・3840。⑩⑫⑭⑮⑯と同じ。)

⑤4 4(5)「聖餐」214・34(113・1516)へユダ——母上のマリヤに對してさへ「私はあなたと何んの關係もありませんよ」と云はれたのが一度や二度ではない。(2・4に準ずる。|| 真正の孝道とは父母の命ただこれ従ふことのみをいうにあらず。天与の公職に忠実(内)。メシヤとして肉親關係を断つ(間)。有島は自分が想像するユダに⑤4の台詞の前後で、次のように言わせている。へユダ——我が主は女の人達から特別の尊敬を受けて居られるけれども、へ女

のする事云ふ事は何時でも私を不快にさせる。理窟もなく盲従するか、理窟もなく反抗するか、女にはその二つの外にはないのだ。従つて2・4の引用もヘユダ——女は女だ。エバの末裔だ。私は女に牽き付けられた覚えがない。ことを強調するため、ユダが引用したことになる。すなわち2・4の「イエスの言葉」も、ここに限り、内村、間垣、両氏が解説する意味にとるべきではない。

⑤⑤ 4(5)「聖餐」216・13(116・6)ヘユダ——イエスの十二人の弟子の中私だけが唯一人のユダヤ人です。(6・71、13・226に準ずる。||彼は十二人の中で唯一の南のユダの出の者である(辞)。④⑨⑤⑩⑪⑫と同じ。)

⑤⑥ 4(5)「聖餐」216・1617(116・910)ヘあの姦淫を犯した女を連れて行つて御覽なさい。(8・11に準ずる。||姦淫の女。⑩⑫⑭⑮⑯と同じ内容である。)

⑤⑦ 4(5)「聖餐」220・910(120・112)ヘイエス——ユダ、あなたの財布には金があるだらうか。(一人の男にユダを指し)この人が私達の會計を司つてくれてゐる。(12・6、13・29に準ずる。||會計役とは使徒の中でも信頼されている者が勤める役である。④⑨⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮と同じ。)

⑤⑧ 4(5)「聖餐」222・12(122・2)ヘ自分の眼がよく見えると思ふ人は、どうかすると瞽言よりも憐れな盲目な事がある。(9・41に準ずる。||精神的盲目(共)。⑳㉑㉒と同じ。)

⑤⑨ 4(5)「聖餐」224・23(123・910)ヘこの時祭司パリサイ人等極力反抗するマグダラのマリヤの両手を堅く捕へて神殿より出で來り群集を押し分けてイエスの前に突き轉がす。(8・3に準ずる。||学者とパリサイ人は罪の婦人を捕えて、彼らの教敵イエスを責むるの道具に供した(内)。⑩⑫⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺と同じところ。)

⑥⑩ 4(5)「聖餐」224・1516(124・34)ヘパリサイ人乙——この女は昨夜姦淫を行つてゐる時捕へられたものです。が、モーゼの律法の中に「かくの如きものは石にて打ち殺すべし」と明らかに書いてあります。私達はこの明文をどう解釋したらいいでせう。(8・45に準ずる。||学者とパリサイ人達はイエスを危地におとしいれようと、戦い

をいどんで来ている(間)。申命記22・24、レビ20・10、21、エゼキエル16・3840を参照。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と 同じところ。

⑥1 4(5)「聖餐」25・5(124・11)〈群集——姦淫を犯した女をモーゼの律法通り打ち殺せ。〉(8・5に準ずる。)
 ⑥11 モーセは律法の中で、こういう女を石で打ち殺せと命じました。申命記22・24にある。その他、レビ20・10、21、エゼキエル16・3840。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と同じところ。

⑥2 4(5)「聖餐」226・9(125・14)〈蹲みながら地の上に字を書く。〉(8・6に準ずる。)
 ⑥12 イエスがこの罪を面前にさらけ出されて一種の羞恥を感じたまひしは当然である。ゆえに彼は身をかがめて地にも書きたまいたりとはるは実に彼らしくある(内)。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と同じところ。

⑥3 4(5)「聖餐」227・1314(126・1819)「イエス——待て! あなた方の中で罪のないものが先づこの女に石を投げるがい。」(8・7)この場合において彼が何びとに対しても発し得るただの一言であった。人は神の前にすべて罪の人である、罪人よく罪人をさばき得べけんやと(内)。申命17・7に類似表現あり。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と同じところ。

⑥4 4(5)「聖餐」227・161718(127・234)「やがて少しづつ人々マリヤより離る。イエスは再び蹲みて地に字を書く。パリサイ人を始めとし、人数次第に減少し、遂には弟子のみイエスの傍らに残る。」(8・89に準ずる。)
 ⑥11 人は人をさばき得るものにあらず、ついに群集は一人残らずその影を隠した(内)。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と同じところ。

⑥5 4(5)「聖餐」228・6(127・10)「イエス——静かにマリヤに向ひ女よ。あなたを訴へた者達は何處にゐる。〉(8・10)「学者、パリサイ人は、自分が審判者となって立っている。しかし審判者は神であつて、人間に罪のない者は、一人もいない(間)。⑩⑫⑭⑱⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿と同じところ。」

⑥6 4(5)「聖餐」228・7、12(127・11、16)「マリヤ——泣きつゝ何處にも居りません。イエス——やゝ程

經て) 誰もあなたを罪に定めなかつたのか。マリヤ——主よ! イエス——私も亦あなたを罪に定めまい。……早く歸つて行くがいゝ。……さうしてもう二度と罪を犯してはいけけない。本當に罪を犯してはいけけない。(マリヤ感激のあまり地に伏して泣く。イエスは靜かに伏めに遣遙ふ。) (8・11を参考にして)。II 学者とパリサイの人たちはイエスを試みんとてこの婦人を引き来たりて、彼より大真理を引き出したのである。すなわち神はもはや人を罪に定めたまわれない。この一篇のごとき、これを全福音の縮写として見ることができる(内)。神は、罪を見のがさない。しかしみずから十字架につくことによつて、罰を受け、人間の罪をあばくことによつて悔い改めに導き、最後の救いへと至らせる(間)。有島は、八章十一節だけで、イエスとマリヤとの対話とト書きに六行にわたつて劇的に書いているのである。〔約翰傳八章一の一。殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。〕(36・2・8) というように感激していたからである。

⑥7 4 (5) 「聖餐」236・78 (135・910) ヘユダ——主イエスはあなたの知らせを受けられてから二日の間は出て立たうとなされなかつた。 (11・6に準ずる。II イエスは愛するラザロが病氣であるのを聞いて二日も、そのおられた所に滞在された。これは、弟子たちの言葉から想像されるように、イエスがベタニヤに行かれることは危険であつて、ユダヤ人の迫害を恐れた、という理由によるのではない。彼は、メシヤとしていつでも神から与えられた使命を感じ、神の御意に従つて行動されたのである。イエスの行き方が二日もおくれたことは、人間的には理解されないことであり、無情の行為と思われ得るであらう。しかし彼は、自分の行くべき時を待つておられた(間)。「ラザロの死」(11・1と16)、「ラザロの復活」(11・1と44)(間)

⑥8 4 (5) 「聖餐」236・12 (135・1415) ヘユダ——主は出發の時鞋を結びながら「ラザロは眠つてゐるのだ。これから行つて眼を覺してやらう」とさう少し戯談のやうに仰しやつた。 (11・11 II ラザロは眠つてゐると、彼が言われた時、彼はラザロの死を意味されたのである。しかし人間の絶望の中にこそ、メシヤの大いなる喜びがある(間)。ラザ

ロス（共）。⑥7と同じ。

⑥9 4(5) 「聖餐」236・15 16 17(135・17 18 19)へヨハネ——この頃この邊には主を迫害しようとするらしい様子はありませんか。パリサイの人や學者達は祭司を煽動してどうあつても主の命を滅ぼさうと企たくらんでゐるらしいが、……だから私は言葉の限り主にユダヤの地に來られる事をおとめ申したのに、主はお聞きにならない。▽(11・8を参考にしている。Ⅱイエスは弟子たちに対し、メシヤがいかに行動すべきかを教えようとしている。⑥7の解説と関連している。⑥7⑥8と同じところ。)

⑦0 4(5) 「聖餐」236・17 18(135・19)136・1)へヨハネ——さうして笑つて「晝の間は主躓つく事はない。夜が來るまでは私は安全だ」と仰しやつた。▽(11・9 10に準ずる。Ⅱイエスは世の光である。彼は救いのためにラザロの所に行くことを決心された。イエスの行動が神の意に従つてなされることが示されたのである(間)。⑥7⑥8⑥9と同じところ。)

⑦1 4(5) 「聖餐」237・2(136・3)へユダ——それは主がどれ程ラザロを愛して居られたかを思ひやつたからだ。▽(11・5に準ずる。Ⅱヨハネ伝において、事件はイエスの親しい者の求めによつておこされている(2・3 4 5、7・3、10)(間)。⑥7⑥8⑥9⑦0と同じところ。)

⑦2 4(5) 「聖餐」237・5(136・6)へユダ——トマスも「私達も行つて主と共に死なう」とさへ云つた。▽(11・16に準ずる。⑥7⑥8⑥9⑦0⑦1と同じところ。)

⑦3 4(5) 「聖餐」237・10 11(136・11 12)へマルタ——主よ！あなたが若しこゝにさへお出で下さつたら、私共の兄は死なずに濟みましたらうに。主が神にお願ひ下さる事は神がお許し下さると私共は知つて居ります。▽(11・21 22に準ずる。Ⅱ死んでしまったラザロについては、イエスでも何事もなすことはできない。しかしイエスの祈りは神によつて聞かれるものであることを、マルタは信じていた(間)。⑥7⑥8⑥9⑦0⑦1と同じところ。)

⑦4 4(5) 「聖餐」237・12(136・13)へイエス——(憐れみを催して)あなたの兄のラザロは甦よみがえる。▽(11・23に準

ずる。||復活は単に将来のことではない。復活はイエスを信じるものに現在与えられるものである(間)。(67 68 69 70 71 72 73と同じところ。)

(75) 4(5)「聖餐」237・13(136・14)へマルタ——主の末の日の復生の時には、兄も甦るでは御座いませうが……(11・24に準ずる。||後期ユダヤ教において、復活思想は一般的に行きわたっていたので(間)、マルタも「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」と言ったのである。(67 68 69 70 71 72 73 74と同じところ。)

(76) 4(5)「聖餐」237・14 15(136・15 16)へイエス——私が復活であり生命である。私を信する者は死ぬとも生きるだらう。あなたはそれを信する事が出来るか。(11・24に準ずる。||この言葉こそ全人類の希望の源である。マルタにとっても、復活は遠い将来の迂遠なことであった。しかし復活とは、将来に限られず現在すでにあるものであり、生命とは、現在に限られず将来までも続くものである。信仰によって、キリストのものが信仰者のものとされる(間)。(67 68 69 70 71 72 73 74 75と同じところ。)

(77) 4(5)「聖餐」237・16(136・17)へマルタ——主よ信じます。私はあなたが神の子キリストでいらつしやるのを堅く信じ申します。(11・27に準ずる。||彼女にとって、復活は漠然たる将来の出来事でなくして、現在の生ける事実として信じられるようになった(間)。(67 68 69 70 71 72 73 74 75 76と同じところ。)

(78) 4(5)「聖餐」237・18、238・1 2 3(136・19—137・1 2 3)へマリヤ、イエスの前に泣き崩れてひれ伏す。(へマリヤ——私の救主なる主よ! あなたの愛するラザロは死にました。死にました。あなたがこの家にいらしたならば、兄は死ななかつたでも御座いませう。(11・32に準ずる。||この声は、彼女の心からの声であったに違いない。しかしそれにもかかわらず、彼女にもイエスの真の姿は理解されてない。イエスを神の子と信じるには、時と事実とイエスの働きかけが必要であった(間)。(67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77と同じところ。)

(79) 4(5)「聖餐」238・5 6(137・5 6)へ人々マリヤの悲しみに同情して皆涙を流す。キリスト深く心を動かし、へイ

エス——何處にラザロは置いてあるのだ。(涙を流す) (11・33 34 35に準ずる。|| イエスが、ラザロの病気を聞いてわざと二日も来るのを遅らせたのは、ラザロの死は神の栄光のためであり、弟子たちの信仰のためであった。我らはここに、罪の力が強く働いて人間を死に至らしめたことを見、悪の勢力に対して、イエスが憤激されたこと、さらにまたユダヤ人の外見の見せかけの同情心と悲しみとを見て、感情を爆発させたもうたことを見なければならぬ。しかしイエスは人間味豊かな方であり、愛する姉妹の涙を見て同情し、涙を流された。罪と死が、姉妹を苦しめていることに同情して涙を流された(間)。(67(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)と同じところ。)

(80) 4(5)「聖餐」238・8(137・8)へ他の男——どれ程かラザロは愛せられたのだ。(11・36に準ずる。|| ユダヤ人たちは感激した。イエスが、いかに純真な心で人を愛されたかを見たのである(間)。(67(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)と同じところ。)

(81) 4(5)「聖餐」238・9 10(137・9 10)へマルタ——ラザロは洞穴に埋めてからもう四日になります。悪い臭氣が致します。|| イエス——洞穴の口の石を除かせておけ。(11・39に準ずる。|| ユダヤの考えによれば、死後三日以上経過すると、生命は完全に破壊されてしまう。ラザロの死が仮死でなくて、完全な死であることを示している。「石を取りのけよ」というイエスの言葉によって最も劇的な情景が展開されようとする(間)。(67(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)(79)(80)と同じところ。)

(82) 4(5)「聖餐」238・12(137・12)へイエス——あなたが若し私を信するならば、あなたは神の榮えを見る事が出来るのだ。(11・40に準ずる。|| マルタは、信仰的にもう一段の飛躍を必要とした。ラザロの復活という事実によって、彼女の目は開かれねばならなかった(間)。(67(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)(79)(80)と同じところ。)

(83) 4(5)「聖餐」241・15(140・14)へユダ——お前達は私が會計を司つてゐるのを何んとか思つてはゐないか。(12・6、13・29に準ずる。|| 會計役とは使徒の中でも信頼されている者が勤める役である。(49(50)(51)(52)(55)(57)と同じ。)

⑤4 4 (5) 「聖餐」241・17 (140・16)へユダ——私一人がユダヤ人である事も。∨ (6・71、13・226に準ずる。∥彼は十二人の中で唯一の南のユダの者である(辞)。(49)(50)(51)(52)(55)(57)(83)と同じ。)

⑤5 4 (5) 「聖餐」241・17 18 (140・16 17)へユダ——私はレプター一枚でも自分勝手に費つひ果はたした事はない。∨ (12・6から暗示を得ている。∥「その中身をごまかしていたからであった」。(49)(50)(51)(52)(55)(57)(83)と同じところ。)

⑥6 4 (5) 「聖餐」243・1 2 (141・17 18)へヨハネ——然し主は「私の擧げられる時はまだ来ない」と云つて居られる。∨ (2・4、7・6 8 30、8・20に準ずる。∥「わが時はいまだ至らず」公然救い主として世に現われるの時をいう(内)。

⑥7 4 (5) 「聖餐」243・11 13 16 (142・8 10 13)へ(「ラザロが甦つた」)へ(ヨハネ——(思はず地に伏して)エホバ！私は何んと云ふ事を聞くのだ。ラザロが、死んだラザロが生きた！)へ(この時狂氣の如く興奮せる村人部屋の中に亂入し來り、ラザロの衣服を携へて後庭に行かんとす。∨ (11・43 44から暗示を得ている。∥ラザロの復活は実に再臨の日におけるわれらの復活の模型である。主の大声、「ラザロよ、出でよ」。信者の最後の希望はここにある(内)。ユダヤ人の埋葬時に使う衣服・亜麻布については、ルカ24・21、ヨハネ19・40、20・5 7 参照。(67)(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)(79)(80)⑧1⑧2と同じ「ラザロの復活」のところ。)

⑧8 4 (5) 「聖餐」245・8 9 (144・3 4)へパリサイ人の弟子——恐ろしい有様になりました。人々は悪鬼にでも魅かれたやうに、イエスの前に一人々々罪を悔いてひれ伏してゐます。イエスがどれ程立ち上れと云つても聞きません。∨ (11・46から暗示を得ている。∥心のかたくなな人々は、いっそう敵がい心を燃やし始める(間)。イエスを殺す計画(共)。

⑧9 4 (5) 「聖餐」245・14 17 (144・9 12)へパリサイ人乙——これをこのまゝにして置いたらユダヤ中の人々は一人残らずイエスを信するだらう。∨へパリサイ人甲——さうして大きな一揆でも起したら、羅馬人はこゝこそいゝ折

と、いらざる干渉立てをしてユダヤを滅ぼさうと計らないものでもない。(11・48に準ずる。人々は、イエスを王としようとしていた。民衆の動きは政治運動化しつつあった。このことは、議員たちが心配するように、ローマの官憲を刺戟し、エルサレムの神殿を破壊し、人民を苦しめることになるに違いない(間)。BC 63年ポンペイウスがエルサレムに入城した時から、事実上ユダヤに対するローマの支配が始まり、両者の関係は悪くなる一方であった。「わたしたちの所」「われわれの聖なる所」とは神殿、またはエルサレムの町をさす(フ)。(88)と同じところ。)

(90) 4(5)「聖餐」245・18、246・1(144・1314)ヘバリサイ人甲——ユダヤの國中が亡びない爲めには私達はどうしてもあの男を犠牲にする覺悟でかゝらなければならぬ。(11・4950に準ずる。大祭司カヤパの預言。カヤファは敵密な意味での預言の霊を受けて語ったのではなく、政治的見地から語ったにすぎない。神は、大祭司であるかれのことによって、世の救いに関する超自然的真理を人々にお示しになったのである(フ)。(88)(89)と同じところ。)

(91) 4(5)「聖餐」246・4(144・17)ヘバリサイ人甲——イエスは時々人を離れて一人になる。その機會に手早く捕へて手早く死刑に處するのだ。(11・535457から暗示を得ている。大祭司長とバリサイ人たちが公にイエスを殺すことを決心したのは、ラザロの復活という事件の後であった(間)。(88)(89)(90)と同じところ。)

(92) 4(5)「聖餐」248・1617(147・89)へ眼のあたりを見ないでそれを信ずる事の出来る人達は幸ひな人達だ。(20・29に準ずる。大切なのは、靈的に主を理解し信じていることである(間)。(23)と同じところ。)

(93) 4(5)「聖餐」249・567(147・151617)ヘイエス——(その男の言葉を聞き)人は一度死ななければ新たな命に生れ代る事は出来ない。一度死ななければ……さうだ。一度死ななければ新たな命を得る事は出来ない。一粒の麥が地に落されて死ねばこそ、幾十倍の麥が秋のみのりとなる事が出来るのだ。(12・24に準ずる。イエスの死は、一粒の麥が地に落ちることによって多くの実が結ぶように、多くの人に生命を与えるものとなる生命の根源である(間)。(94)

(94) 4(5)「聖餐」249・1011(148・12)ヘイエス——昔モーゼによつて蛇が上げられたやうに人の子も上げられる

時が来るだらう。〕(3・14に準ずる。〕イスラエル人はモーセの造った青銅のへびをながめていやされた(民数21・4〜9)。イエズスもこの青銅のへびのように、十字架に上げられて、すべての人の救いのもととなった(マ)。

〔95〕 4(5)「聖餐」253・7(151・1314)へマリヤ——「一度死ななければ人は神の國に生れ出る事が出来ない」とたった今仰しやつた主の御心が私には判ります。〕(12・24に準ずる。〕イエスの死は、一粒の麦が地に落ちることによつて多くの実が結ぶように、多くの人に生命を与えるものとなる生命の根源である(間)。ロマ6・410に内容同じのパウロの言葉あり。ロマ14・9、コリント前15・36参照。〔93と同じ。〕

〔96〕 4(5)「聖餐」253・131415、254・1(152・114)へ第三幕 シモンの家(ベタニヤなるシモンの家の食堂。ラザロの家よりは富裕なる廣間。廣間につゞきてそれに通ふ廊下あり。時は第二幕の翌年の四月二日の夕。即ち逾越の節の前の日。イエスの捕へられたる夜はこの夕べに續きて來るなり。イエス廊下の所にてマリヤと談り、廣間の方にはマルタ、シモンその他の人々出入して食卓を整へ居る。〕(12・12を参考にして)。ヨハネは、過越祭とイエズスの死との關係を重視して(下)。四福音書にも一回として入れたが、内容はヨハネ伝の記事に近い。)

〔97〕 4(5)「聖餐」254・8910(152・111213)へマリヤ——祭司やパリサイの人達はラザロや私達の命をまで覗つてゐるのださうで御座います。ラザロが生きてゐる間は主のなされた奇蹟がいつまでも人々に記憶されるから、ラザロを無いものにするのだと云つてゐるのださうで御座います。〕(12・1011に準ずる。〕「ラザロスに対する陰謀」(共)。ヨハネ12・18、11・4546、7・31、ルカ16・31参照。)

〔98〕 4(5)「聖餐」254・1516(153・23)へマリヤ——さうして主がエルサレムにお出でになつたあの日、羊の門の所で、うれしさのあまり棕櫚の葉を振りながらホザナホザナとお祝ひ申した。〕(12・1213から暗示を得ている。〕群衆は、奇跡を行った偉大イエスがエルサレムにくることを聞いて、しゅろの枝を手にとって迎えた。「しゅろ」は、凱旋將軍を迎えるに用いられるもので(黙示7・9)、イエスはイスラエルの王として來られる。「ホサナ」は、お救い下

さいの意(間)。「エルサレムに迎えられる」(共)。詩篇118・25 26 参照。)

⑨⑩ 4(5)「聖餐」258・45(156・78)へイエス——(静かな威厳を以て)然し天なる父の懷ろに歸るのだ。……驚く事はない。又悲しむ事もない。私が行つた後にはあなたを慰めるものが天から送られるだらう。(14・12 16に準ずる。Ⅱ「聖霊の約束」(14・12 16)(ド)イエスは地上を去って行かれる。しかるに弟子たちは、弱いものである。そのためにイエスは、神に願って別に助け主(弁護者)を送るようになして下さった。「助け主」という言葉は、ヨハネに特有なもので、聖霊(14・26、15・26、16・7、行伝1・6 7 8、2・1 1 4)に対して用いられている。すなわち「真理の御霊」(14・17)に対して用いられている(間)。有島は「助け主」をへあなたを慰めるもの」と言い替えているのである。)

⑩ 4(5)「聖餐」259・1(157・3)へイエス——天の父は常に私と共にいますのだ。(14・10 11の内容と同じ。Ⅱみ子はおん父におられ、おん父がみ子においでになることを知るのは信仰である(ド)。イエズの言行は父の言行である(フ)。「弟子らをなくさめる」(14・1 1 11)(ド)

⑩ 4(5)「聖餐」261・10 11(159・10 11)へペテロ——主のお心がお前の云ふ通りになつたら、私の命はその爲めに捧げても惜しくはない。私は何處までも主に従つて行く。(13・37に準ずる。Ⅱペテロは、イエスのためには命をも捨てると言ったが、実際は三度までもイエスを否定した。ペテロは確かに死の決心をもしたであろうが、いざとなれば罪の下にある人間の弱さをばくろしてしまつたのである(間)。戯曲ではペテロとユダとの対話だが、このペテロの台詞は聖書のイエスと対話するペテロの言葉と同じ意味になっている。「ペトロのいなみの預言」(13・36 37 38)(ド)

⑩ 4(5)「聖餐」262・17 18、263・1(160・16 17 18)へ人々ユダヤの習慣に従ひ、草鞋を脱ぎ脚を洗ひて食卓に就く用意を始む。マルタ、マリヤ整へる水盤を持ち出す。(Ⅱ)へペテロ——主よ。どうぞお洗ひ下さい。(Ⅲ)へイエス——あなた方から淨めるといふ。私は今日は洗ひ役にならう。(13・3 4 5に準ずる。Ⅱ「弟子の足を洗う」(13・1 1 20)当時におい

て人の足を洗うことは、どれいの役目であった。弟子たちの主人であり先生であり、世界の救い主、王なるイエスが、どれいとなって弟子たちの足を洗われた(間)。

⑩③ 4(5)「聖餐」263・3(161・1)ヘシモン——勿體ない、それは主人の役目です。(13・6に準ずる。IIイエスは身をもって謙遜の徳を示す(間)。脚を洗わせるのがへ主人の役目です)とシモンが驚いて言うのは当然である。⑩②と同じところ)。

⑩④ 4(5)「聖餐」263・9 10 11(161・7 8 9)ヘペテロ——主よ、主はどうしても私の脚までお洗ひなさるのですか。いけません。洗つていたゞくのは勿體もったいな過ぎます。(ヘイエス——洗はしてくれないと、もうあなたとは關係がなくなるよ。(13・8に準ずる。IIペトロが奴隷の仕事であった洗足を拒むのは当然であろう。この外面的洗足は洗礼など靈的清めの象徴である(フ)。洗足の出来事は、十字架の死による罪の洗いを示す(間)。13・8イエスの言葉に比較して、戯曲のイエスの台詞は少々くだけた言い方になっている。⑩②③と同じところ)。

⑩⑤ 4(5)「聖餐」263・12(161・10)ヘペテロ——(急ぎ腰かけに坐し)それなら、主よ、脚と云はず、私の手も首も洗つて下さい。(13・9に準ずる。戯曲では「頭」を(首)に替えてある。⑩②③④と同じところ)。

⑩⑥ 4(5)「聖餐」263・13 14 15(161・11 12 13)ヘイエス最後にペテロの脚を洗ひ立ち上り。(ヘイエス——手や首まで洗ふには及ばない。さあこれであな方は淨くなつた。然し(と云ひながら殊にユダに眼をそそぎて)あなた方の凡てが淨くなつた譯ではない。けれどもそれでいゝ。(13・10に準ずる。II「からだを洗う」を洗礼(エフエソ5・25 26、ヘブライ10・22)、「足だけ洗う」を告解の秘跡の暗示と解する学者もいる。すなわち、受洗後、罪を犯した者は、再び洗礼を受ける(からだを洗う)必要はなく、罪の告白(洗足)が必要である(フ)。イエスは、ユダを怒るよりも、断腸の思いをもって悲しまれたことであろう(間)。(殊にユダに眼をそそぎて)のト書きを演ずる場合、イエスの表情は「怒り」ではなく「深い悲しみ」であることを有島は意識していたと思われる。④⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)

じところ。

⑩7 4(5)「聖餐」264・9 10(162・6 7)ヘユダ——(殊に氣色を損じ)ナルドと云へばその五六滴で、貴人の頭が「淨められる贅澤な品だ。それを脚に……それを賣れば銀三百枚にはなりません。その賣り高を貧しい人達に施したらどれ程の恵みになるか知れないのだ。」(12・4 5に準ずる。Ⅱ「ベタニアで香油を注がれる」(12・1 7)(共)一デナリは、一日の労働賃金である。へ貧しい人達に」というユダの言葉は、主を理解しない言葉である。世界の王者イエスへの捧物は、高価過ぎることはないからである(間)。戯曲では「三百デナリ」をへ銀三百枚に替えている。へナルドと云へばその五六滴で、貴人の頭が淨められる贅澤な品だ。それを脚に……」というユダの台詞は聖書にはない。へ氣色を損じて驚くユダの氣持を表現している。有島の創作である。マタイ26・8 9では「弟子たちは」であり、マルコ14・4 5では「ある人々」であり、ヨハネ伝のみが「ユダが言った」となっている。④⑨⑤⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)

⑩8 4(5)「聖餐」264・18、265・1(162・15 16)ヘイエス——マリヤのする事はマリヤに任せておくが、マリヤは葬りの日の爲めに、この油を蓄へておいたのだ。」(12・7に準ずる。Ⅱマリヤが自己の最大をつくした捧物は、イエスの神の子としての死に対する準備としては、まことにふさわしいものであった(間)。イエズスは、マリアのこのおこないを、自分の死がいをあらかじめとうとんだこととしてごらんになった(下)。⑥⑩と同じところ。)

⑩9 4(5)「聖餐」265・1 2(162・16 17)ヘイエス——貧しい人達は常にあなた方と一緒にゐるだらうけれども、私はいつまでも一緒にはゐないのだ。一緒にはゐないのだ。」(12・8に準ずる。Ⅱマタイ26・11、マルコ14・7、ヨハネ16・5 6 7参照。⑥⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿)

⑩⑩ 4(5)「聖餐」265・5 6 7(163・1 2 3)ヘイエス——(弟子達に向ひ)あなた方はこれから互に分れ争ふやうな事をしないでくれないか。私はあなた方に今例を示した積りだ。私はあなた方の脚を洗った。私のした事をあなた

方も互の間にし合つて貰ひたい。(13・14・15に準ずる。|| 文字通りの洗足を勧めたのではなく、他人への奉仕を教えたものである(マタ23・11、ルカ22・24・25・26参照)(フ)。イエスの台詞へあなた方はこれから互に分れ争ふやうな事をしないでくれないか。)は有島の創作である。これまた、少々くだけた言い方ではあるが、後の「他人への奉仕」を説くための導入部として適切な台詞であると言えよう。(22(33)24(35)26(37)と同じところ。)

(II) 4(5)「聖餐」266・1~4(163・15~18)ヘラザロ——その税吏の人達は私が日頃からあまり信用をしてゐない人達ですし、死から主によつて甦らされた私を殺さうと祭司やパリサイ人が覗つてゐると知つてゐましたから、歩きながらも氣を配つて居りますと、果して森蔭に怪しい人影を幾人も見付け出しました。(12・10・11から暗示を得ている。|| 「ラザロスに対する陰謀」(共)。有島は12・10・11にある祭司長たちの思惑をヒントにラザロの台詞を考え出した。聖書から新しい台詞を生み出す一例として注目しておきたい。(97)と同じところ。)

(III) 4(5)「聖餐」267・5・6・7(164・18~165・1)ヘイエス——私と麴麩を分ち合つて食ふものゝ一人だ、(ユダに向ひ)さあ、あなたはこれから行つてあなたのすべき事をして來たらいふだら。もうすつかり、夜になつてしまつた。今夜の中に事は成し遂げられなければならない。(13・26・27・30に準ずる。|| 「裏切りの予告」(13・21~30、マタ26・20~25、マコ14・17~21、ルカ22・21・22・23)(共)イエズスはまず、ユダに裏切りの実行をうながす。これは、イエズスが父のみ旨にしたがったのであり、悪魔に負けたのではないことを示すものである(10・18参照)(フ)。聖書の「時は夜であった。」はむしろ象徴的な表現で、ユダが夜によって象徴される悪魔の手に落ちていったことを示すものであろう(フ)。有島はへもうすつかり、夜になつてしまつた。)と替えている。(49(50)51(52)55(57)58(59)60(61)と関連あり。)

(III) 4(5)「聖餐」267・10(165・4)ヘユダ決心せる面持ちにて突然座を立ち、金袋を携へたるまゝ廊下の方より退場せんとす。(13・30から暗示を得ている。「ユダは一きれの食物を受けると、すぐに出て行つた。」からト書きヘユダ決心せる面持ちにて突然座を立ち)を考えたと思われ。この直前の次の対話は聖書にはない。ヘユダ——主は私にそれ

をお命じになるのですか。ヘイエス——命じなくてもあなたは何時かそれをせずにはおくまい。これは少し説明し過ぎる対話とも思えるが、劇を分りやすくするための台詞にはなっている。(49)(50)(51)(52)(55)(57)(83)(84)(85)(96)(97)(98)と関連あり。)

㉔ 4(5)「聖餐」267・111213(165・567)ヘトマス——(廊下の近くに坐してありしがユダに)渝越の節の買物にでも行くのか。ヘユダ——さうではない。ヘトマス——貧しい人に施し(ほどこ)してもしに……。(13・2829を参考にして)

㉕ 弟子たちは、ユダの反逆を察知することさえできなかった(問)。イエスがユダに何か命じたのであろうと弟子たちが考えている聖書の内容を、有島はトマスとユダとの対話に替えている。劇としては対話の方が分りやすいからである。また、ユダの対話の相手をトマスにした理由は何であろうか。「共観福音書ではトマスの名は十二人任命の時に記されているだけであるが、ヨハネ福音書では四ヶ所現われている(11・16、14・5、20・24・28、21・2)(辞)。ヨハネ伝を愛読していた有島は、十一章十六節で分るように「イエスと共に苦難を負おうとする気魄と情熱とをもつてい」(辞)たトマスを対話の相手を選んでであると推測しておこう。(49)(50)(51)(52)(55)(57)(83)(84)(85)(96)(97)(98)と関連あり。)

㉖ 4(5)「聖餐」267・1617(165・1011)ヘイエス——あなた方は心に憂へる事はない。神を信じ又私を信じてくれるがよい。わが父の家には^{すまひ}第宅が多い。私はあなた方の爲めに所を備へに行つて来る。それは私のある所にあなた方もあて貰ひたいからだ。(14・123に準ずる。㉑一節は「弟子たちは、神とイエズスを信頼して、心を乱さず、別離に耐えなければならぬ」、二節は「天国には多くの人のための住まいが用意されており、それが永遠に続くものであることをさしている」、三節は「各信者の死(二コリント5・6・10)、もしくはイエズスの再臨(一テサロニケ4・14・17、一コリント4・5、一ヨハネ2・28)をさす」(フ)。イエスはご自身が受難と死におもむくときに際し、弟子たちに慰めと希望を与えるために語り始めているのであるから、十五行目のト書きヘユダの去りし後不安の氣食堂に満つ。イエズス殿かにしめやかに語り出づ。は対話の導入部として非常に適切なト書きであると言えよう。「父への道であるイエズス」(14・1・14)(フ)㉒と同じところ。)

⑩ 4(5)「聖餐」267・18(165・12)へトマス——私には主の行かれる所が何處だかその道さへ知りません。⑪(14・5)に準ずる。⑫トマスは、七章三十五節のユダヤ人のように、イエズスのことばを文字どおり解している(フ)。
と同じところ。)

⑬ 4(5)「聖餐」268・1(165・13)へイエス——私がその道だ。私に由らなければ父の許に行く事は出来まい。⑭(14・6)に準ずる。⑮人となったみことばであるイエズスは、人類を神に導く「道」である。イエズスは「真理」である。教えを説き、真の「いのち」を与えることによって、人類を父と一致させる(フ)。イエスの最も完全なる自顕である(内)。トマスからへその道さへ知りません。⑯という問いを受けたイエスの答えとしてへ私がその道だ。⑰となつてゐる。前後の台詞の関連を劇に生かすため、聖書の「真理であり、命である。」を有島は省略したのである。⑱⑲⑳と同じところ。)

⑳ 4(5)「聖餐」268・2(165・14)へペテロ——主よ、私達に天の父を知らせて下さい。㉑(14・8)に準ずる。㉒この願いはヤールウエに対するモーセの願い(出エ33・18)に似ている。モーセの願いがどのようになえられたかは、出エ33・19、23、34・6、9に描かれている(フ)。この台詞は聖書ではペテロではなくピリポである。『新聖書大辞典』によれば、ピリポは共観福音書では十二人の一人であること以外は不明であるが、ヨハネ伝にはしばしば登場しているという(1・43 44 45 46、6・5、12・20 21 22、14・8 9)。するとトマスの場合と同様、ヨハネ伝を愛読している有島であれば、そのままピリポの台詞にするはずである。それを敢てペテロに替えた理由はどこにあるのだろうか。やはり十二使徒の中の指導者としてイエスから委託されていたという事実を有島が重視していたからであるろう(ルカ22・31 32、マタイ16・17 18 19)。三幕物の「聖餐」劇も終りに近づき、この後、イエス、ヨハネ、マリヤによる五回の対話を残してイエスと弟子達は共に退場する。これが十二使徒の指導者ペテロの最後の台詞になつてゐる。有島は、ピリポの代りに十二使徒の誰が尋ねても不都合な台詞ではないと判断し、それならばイエスに尋ねる最

後の人物に使徒代表のペテロを選んだ、という推測を加えておこう。このように台詞の人物を替えるのは、創作上の自由である。^{000 015 016 017}と同じところ。

119 4(5)「聖餐」268・345(165・151617)「イエス——ペテロ。私はかほど久しくあなた方と一緒にゐたのにまだ私を知つてはくれないのか。私を見たものは父を見たのだ。私がある方に語つた言葉は私自身の言葉ではない。私は私と共にあられる父の行ひをなしたまへなのだ。」(14・910に準ずる。||イエスと父とは神として同じ本質を持つているので、イエスの言行は父の言行である(フ)。神を啓示することが、イエスの第一の役割(マ)。知る、見るは信じると同じ意味(間)。^{000 015 016 017 018}と同じところ。)

120 4(5)「聖餐」268・56(165・1718)「イエス——父が私を愛して下さつたやうに私はあなた方を愛してゐる。どうかあなた方も私の愛に抱かれて貰ひたい。」(15・9に準ずる。||イエスに対する父の愛は、永遠から存在する。みことばに対する愛だけでなく、人間となつたみことばであるイエスへの愛をもさす。「愛にとどまる」は新約聖書中、本節と次節だけに出る(フ)。聖書では「わたしの愛のうちになさい」とう命令形であるが、有島は「どうかあなた方も私の愛に抱かれて貰ひたい」というように強い要望形に替えている。イエスの台詞の前後から、この優しい表現が適切に思えるが、有島のイエス、少し弱々しいイエスにも感じ取れよう。「イエスはまことのぶどうの木」(15・117)(共)

121 4(5)「聖餐」268・67(165・1819166・1)「又私があなた方を愛するやうに、あなた方も互に愛し合ふがよい。友の爲めに自分の命を捨てる程大きな愛は外にはない。凡て私がある方に語つた言葉を守つてくれるなら、それは誰であらうと私の友だ。」(15・121314に準ずる。||まことの愛(ド)。僕と友の相違は、主人の命令の真の意味を理解するかどうかにかかっている間)。旧約で「神の友」と呼ばれたのはアブラハムだけであつた(歴下20・7、イザヤ41・8)(フ)。120で命令形を要望形に替へてあつたやうに、聖書の「わたしが命じることが行ふならば」というイエ

スの言葉を、有島はへ凡て私があなた方に語つた言葉を守つて、く、れる、なら、と替えている。著者は「守るならば」に替えた方がよいと考える。つまりイエスの言葉はもつと權威ある表現に書き替えて欲しいと有島に言いたいのだが。

⑩と同じところ。

⑫ 4(5) 「聖餐」268・8～11(166・1～4)ヘイエス——この世の人が若しあなた方を憎むなら、あなた方より先きその人達は私を憎んでゐるのだ。あなた方が若し今の世に屬するものであつたら今の世はかうまであなた方を苦しめ攻める事はしまい。然しあなた方は今の世のものではない。私があなた方を今の世から選み取つたのだ。だから世の中はあなた方を憎むのだ。∨(15・18 19に準ずる。Ⅱ「世」はイエスへの信仰を拒む人びとを指す(マ)。聖書の「この世は、あなたがたを自分のものとして愛したのであらう。」を、有島は次のように書き替えている。へ今の世は、かうまで、あなた方を苦しめ、攻める事は、しまい。∨確かにこの表現の方がこの世からの憎しみが深く強いことを暗示している。「運命の訴え」「お末の死」「星座」十七章の「おせいの悲哀」などにある文章で分るように、有島は悲劇描写には優れている。少々サディスティクと思える程の描写もある。「聖餐」で十五章十八、十九節の言葉を台詞に替えるこの例の場合にも、憎しみの深さを表現するのに、意識せずして得意の悲劇的表現が出ていと言えよう。「世の憎しみ」(15・18～27)(ド)

⑬ 4(5) 「聖餐」268・12 13(166・5 6)ヘイエス——女婦が子を産まうとする時には憂ふるだらう。然しすでに産み終れば前の憂ひは忘れてしまふ。この世に一人の人の子が現はれ出るからだ。∨(16・21に準ずる。Ⅱ弟子たちの悲しみが喜びにかわることを分からせるために、産みの苦しみという美しくも力強いたとえを用いる(マ)。ほとんど十六章二十一節と同じであるこの台詞の直前にへもう少し私の言葉を聞いて貰ひたい。∨という例によつて有島のイエスの要望形の台詞がある。「悲しみが喜びに変わる」(16・16～24)(共)

⑭ 4(5) 「聖餐」268・13～16(166・6～9)ヘイエス——見ればあなた方も今不思議な不安と憂ひとに沈んでゐる。

然し私があなた方と別れ去つても、又再びあなた方に會ふ時が来る。この事は記憶してゐて貰ひたい。その時が來たらあなた方の心は喜ばずにゐられないだらう、私はもう二度と別れる事なくあなた方と一緒にゐるだらうから。その時の喜びを奪ひ得るものは何處にもないのだ。(16・22に準ずる。||キリスト信者の生活はこの世では苦しみに満ちていても、秘跡を通して、復活したキリストと出会うことにより、その心は喜びにあふれる(二コリント6・10、7・4)(フ)。イエスは復活のあとで弟子たちのもとに歸つてくる(マ)。へこの事は記憶してゐて貰ひたい。)という要望形が又出ているが、復活と再臨を強調するための台詞である。十六章二十二節より理解しやすい台詞になっている。⑬と同じところ。)

⑬ 4(5)「聖餐」268・1718(166・1011)へヨハネ——主は今夜こそ誓言を用ひずに凡てを明らかに云つて下さいます。私は今にして主が明らかに神より出で給へるを信じます。(16・2930に準ずる。||福音史家はここで、イエズスが旧約のヤーウエと同じく人の心を読みとる力を持っていることをさしている(詩139・4)(フ)。十六章二十九節では「弟子たちは言った、」となつてゐるが、二十九、三十節はヨハネ伝だけにある言葉なので有島は弟子の中でもヨハネの台詞にしたのである。「この世に対するイエズスの勝利」(16・25・33)(共)

⑭ 4(5)「聖餐」269・1・4(166・12・15)へイエズ——あなた方は今それを信じてくれるか。略然しもう時が近寄つた。もう時が來た。あなた方は散り散りになつて私だけを孤獨に残すだらう。然し私は全く孤獨ではない。父が私と共にゐられる。(16・3132に準ずる。||神と人とに対して熱情に燃えし人はイエズのごとくに単独であつた。人はただ一人となつて万人を友とし得る。単独の幸福内)。弟子たちの信仰告白のあと、彼らが受難においてイエズを見捨てるといふ預言(マ)。有島が使用した聖書は、『新約全書』(明治三十四年八月二十九日發行)である。その聖書の三十二節は「時まさに至ん今いたりぬ」で始まつている。であるから⑭の最初の二つの台詞へ然しもう時が近寄つた。もう時が來た。は三十二節の最初に準じてゐる。原典 EBERHARD NESTLE NOVUM TESTAM-

ENTUM GRAECE にも次のように入っている。 *ἰδοὺ ἐφύρατο ὄρα καὶ ἐχίροσε* behold comes an hour and has come しかし現在のプロテスタントの文語、口語、カトリックのバルバロ、中央出版社のフランシスコ会聖書研究所訳注、共同訳等の聖書にこの部分はない。(16)のイエスの台詞の最初と(略)にへあなた方は今それを信じてくれるか。私はそれを嬉しく思ふ。さうなら私が今まで云つた言葉を守り且つ覺えてゐて貰ひたい、) というように、又又有島のイエスの要望形の台詞が出てゐる。威厳ある聖書のイエスより優しい感じのイエスではあるが、この違いこそ芸術家の自由な創作によるものと言えよう。(16)と同じところ。)

17 4 (5) 「聖餐」 269・45 (166・1516) ヘイエス——さうして…… (云ひつゝマリヤを顧みる) あなた方は世にある間は迫害の限りを受けるだらう。然し懼るゝには及ばない。私は既に世に勝つた。) (16・33に準ずる。|| 神によりて生まれて、人は世に勝つ(内)。勝利の雄たけびを、受難に向かうイエズスの口にのせてゐる。十字架上の死は敗北ではなく、勝利だからである。この勝利にあずかるのがキリスト信者 (一ヨハネ2・1314) (フ)。へ(云ひつゝマリヤを顧みる) という卜書に相当するところは聖書にはないが、何故この卜書を入れたのかに對する有島の答えは次の通り。

「聖餐」に於いては、私は聖書の解釋に或る新しい考へ方を試みようとした。それは誰れにも意外であつたキリストの突然の捕縛と死刑とが、一人の女子に豫めキリスト自身に由つて告げ知らされてゐたに違ひないといふ事實である。キリストは周囲の凡ての人から受けてゐた誤解の中にあつて、只一人の理解者を求め出し得たやうに思はれる。それはその前半生に石で打ち殺さるべき悪い賣色の行ひをしてゐた、マグダラのマリヤといふ特別な教養もなければ品位もない一人の女である。が、彼女は強い愛の持主であつた。イエスが「彼女は救はるべし、彼女は凡てに優りて愛したが故である」(ルカ7・47に準ずる。著者) と云つたその女である。このマリヤのみがキリストの心を臆げながら感じてゐて、キリストの死後、弟子達が絶望の餘り一人残らずキリストを離れ去つた時にも一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止めたと思はれるのだ (「聖餐」に就いて)。

罪の女とマグダラのマリヤとベタニヤのマリヤの三人の女を、同一人物と見做しているのが有島の自由なへ新しい考へ方」なのである。(15(15)と同じところ。)

⑧ 4(5)「聖餐」269・67(166・171819)へイエス——さあこれからケデロンの河を渡つてゲッセマネの園の方に散歩に行かう。私が待ち設けられてゐる所に行かう。(イエスは立ち上る。弟子達も亦。) (18・1に準ずる。Ⅱ「ケデロン」という名をあげるのはヨハネ伝だけである(フ)。共観福音書には見られるがヨハネ伝・第四福音書には「ゲッセマネの園」の記事は見られない。そのわけは、「ヨハネが、イエスこそすべての成り行きを決め、導く者であるとみなしているから」(マ)であり、「ヨハネにおいては、十字架を栄光と見る思想が強いので、苦悩の祈りを省略した」(間)からであろう。しかし十二章「二十七節は、ゲッセマネの園の場面を、ヨハネ流に新しく解釈した箇所である」(マ)。「ゲッセマネの園への途上」(18・1、12・27、14・31)

⑨ 4(5)「聖餐」270・8(167・19)へラザロ——このラザロを死から甦よみがへらして下さつたそのイエス様 (11・38)に準ずる。「イエズス、ラザロをよみがえらす」(11・38) (44) (フ) (67(68)(69)(70)(71)(72)(73)(74)(75)(76)(77)(78)(79)(80)(81)(82)(87)と同じところ。「ラザロの復活」(11・1) (44) (間)

⑩ 4(5)「聖餐」271・5(168・16)へマリヤ——……世に勝つたとはつきり、仰しやつたイエス様が…… (16・33)に準ずる。Ⅱ十字架上の死は敗北ではなく、勝利だからである (一ヨハネ2・1314) (フ)。「聖餐」はマリヤの台詞で終つている。⑩のマリヤの台詞の後、次のように続いて舞台は幕となるのである。へ……けれども主は信じろと仰しやつた。(この頃よりマリヤは他の兄妹等の凝視の中に全く孤獨なるものゝ如くなり、宛たがら荒野の真中に立てるが如く獨白す) 主よ、信じさせて下さいまし。あなたが限りなく生き給ふ事を信じさせて下さいまし。……靜かに……靜かに……もつと靜かに……若し見る事が出来なければ……凡てが聞こえるやうに……おゝ世界が闇やみになつて行く……(マリヤ唇のみ動かせども言葉出でず。他の三人兄妹は唯あきれてマリヤを見やる。極度の靜寂。)——幕——以上のように、ヒロイン

・マリヤの佇む姿と独白は「聖餐」の最終場面として相応のものと言えよう。

さて有島は『三部曲』自注として次のように述べている。

あれは聖書を題材とした、私の三部曲の最後のものであつて、この三つの戯曲の間には、私として或る觀念上の連絡を興へてゐるつもりである。「大洪水の前」で、エホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみが、「サムソンとデリラ」に於ては一種の、然し、不満足な解決が興へられ、第三の「聖餐」に於てそれが圓滿の解決に持ち來されてゐるといふのが構想の一つ。又、第一の戯曲に於ける男女關係が、第二のそれに於て激しき破綻を起し、第三に於て或る正しい調和を得たといふことを云ひ表はしたかつたのだ（「聖餐」に就いて）。

以上のように『三部曲』には二つの主題がある。第一主題は「神と人間との關係」、第二主題は「男と女の關係」である。「聖餐」での第一主題は「圓滿の解決に持ち來されてゐると言っているが、そのことを決定的に証言しているところはイエスの台詞「私は既に世に勝つた。」(269・5)であろう。「聖餐」での第二主題は「或る正しい調和を得たといふことを云ひ表はしたかつた」とある。有島のこの意図は「聖餐」の中心人物であるイエスとマグダラのマリヤとの間の理想的な愛の物語の中に表現されている。即ちマリヤの姦淫の罪を許したイエス、イエスが十字架にかかることをへ臆げながら感じて「ナルドの香油と自分の髪の毛で葬りの準備をしたマリヤのイエスに對する敬愛と信仰、この理想的な愛の物語こそ有島が言う「聖餐」の第二主題なのである。(269)と同じところ。」

⑩ 6(8)「イブセン研究」(第三部「ブランド」の梗概) 354・16(459上・17)「天から聲があつて「神は愛なり」といふ言葉が残された。」(3・16に準ずる。Ⅱ全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。ヨハネ第一の4・7〜10に同類記事あり。⑪⑫⑬⑭⑮と同じ内容である。大正九年二月『大學評論』四十二歳)

⑯ 6(8)「イブセン研究」(第三部「ブランドの三つの敵」 355・18〜356・1(460上・5)「そのあとへ残されたのは「神は愛なり」いふ天からの言葉であつた。」(3・16に準ずる。Ⅱ全宇宙にこれよりも切なる愛なし(内)。ヨハネ第

一の4・7・10に同類記事あり。(11)(25)(33)(34)(35)(31と同じ内容である。)

(13) 6(8)「惜みなく愛は奪ふ」158・3(126・3)へ太初に道があつたか行があつたか、私はそれを知らない。(1を意識している。11ことばは三位一体の第二の位格である(下)。全聖書の序説、福音の中心主題(間)。世界最大のことば(内)。有島が使用した『新約全書』(横濱市山下町六十番 大日本聖書館 明治三十四年八月二十九日發行)には「太初に道あり道は神と偕にあり」とある。へ……私はそれを知らない。とあることから「惜みなく愛は奪ふ」は、反キリスト教評論であることが分る。大正九月六日著作集第十一輯 四十二歳)

(14) 6(8)「惜みなく愛は奪ふ」161・12(128・20)へ太初は何であるかを知らない私には、自身を惜いてたよるべき何者もない。(1・1を意識している。この文も反キリスト教の立場で書いていることは明らかである。(13と同じところ。)

(15) 6(8)「惜みなく愛は奪ふ」161・1011(129・910)へ太初が道であるか行であるかを(考へるのではなく)知り切つてゐる人に取つては、この感想は無視さるべき無益なものであらう。(1・1を意識している。へ……知り切つてゐる人とは、自分のような背教者ではなくキリスト者を指すのだ、という意味である。このように言うようになった有島が痛ましくも思える。(13)(14と同じところ。)

(16) 6(8)「惜みなく愛は奪ふ」210・7(174・4)へヨハネのロゴス(1・1を意識している。11ことばは三位一体の第二の位格である(下)。(13)(14)と同じところ。)

(17) 7(8)「聖餐」に就いて」165・131415(532上・3)へキリストは周囲の凡ての人から受けてゐた誤解の中にあつて、只一人の理解者を求め出し得たやうに思はれる。それはその前半生に石で打ち殺さるべき悪い賣色の行ひをしてゐた、マグダラのマリヤといふ特別な教養もなければ品位もない一人の女である。(8・1)へ11に準ずる。11姦淫の女。(8)(9)(10)(12)(22)(24)(28)(41)(53)(56)(59)(60)(61)(62)(63)(64)(65)(66)と同じところである。筑摩全集では「に就いて」なし。大正十年

二月『讀賣新聞』 四十三歳)

⑬ 6(8)「ホキットマンに就いて」(新人會第二回學術講演會に於て) 383・15(540下・1617)へ彼は第一その生まれ故郷から迫害されました。(4・44に準ずる。Ⅱ共観福音書ではイエスの故郷は、ガリラヤあるいはナザレとされている(マタ13・57、マコ6・4、ルカ4・24)。しかしヨハネが、イエスの活動の中心をエルレムにおき、イエスの故郷を天にあるとしたところから考え(6・38)、エルサレムがすべてのユダヤ人の故郷であると一般に考えられていたことからして、この箇所の故郷は、エルサレムを指すものであろう(間)。先の⑭で私は有島の反基督論は少ないと述べた。ここでの有島らしい基督論も正当な論に近い。原文の前後に次のような文章がある。へ基督教會の創始者と稱へられてゐる基督その人は絶大な Teacher の一人であつたかと思ふのです。……その母その兄弟から離れました。ユダヤ國から超越しました。……彼の死を以て守らうとしたものは、故郷でもなく、肉親でもなく、故國でもなく、同行者でもなく、彼の正しい存在そのものであつたではありませか。この後に有島のキリスト像も続いているのはあるが。へだから私の想像からいふならば、基督が現代に生まれ出たならば、基督教會に屬しようとしなは勿論、恐らくは基督教會を非難するのではないかと思ふ所以であります。大正十年三月『新社會への諸思想』 四十三歳)

⑭ 無(9)「靜思」を讀んで倉田氏に(草稿)(41下・7と10)へ基督の生活を考へて見ませう。基督は人間の愛のみに訴へて、嘗て權力を用ひられなかつたでせうか。彼れは繩を以つてエルサレム宮殿に巢喰つた商人達を撃退しました。(2・13と17に根拠。Ⅱキリストはあわれむもの、ゆるすもの、彼の眼中にはただ宥憐憫の涙あるのみとは、たいいてのキリスト信者がその心に思うところでもあります。しかしそれは誤りたる觀念であります。彼の愛は父なる神の愛であります。すなわち厳格なる、強い、堅い愛であります(内)。男性的キリスト教。怒りの神聖(内)。内村鑑三は、以上のような注解を明治三十九年七月発行の『聖書之研究』に発表している。弱い者意識を持っていた有島は個性の強い内村を敬愛していた。強い男性的イエスを強調する注解を有島は注目したに違いない。内村の注解を讀ん

で十六年後の大正十一年、四十四歳の有島は「静思」を読んで倉田氏に」の中で、男性的行動派のキリストを論じているのである。

有島が内村鑑三の著作を愛読し始めたのは明治三十一年、二十歳、札幌農学校学生時代からである。明治三十六年八月二十五日から明治三十九年九月一日までの米国留学中も読み続けるため、田島に郵送を依頼してあったらしい。明治三十八年一月一日の日記に「へ田島君より送り来りし『聖書之研究』を読む。先生の熱誠には敬服の外なし。」、同年一月二日「へ田島君より『聖書之研究』また送り来り、通読す。」と続いている。ヨハネ伝二章十三節から十七節の注解「男性的キリスト教」が載っている『聖書之研究』は翌三十九年七月に発行されているから、これまで通り読んだに違いない。有島は明治四十年四月十一日、ヨーロッパを經由して帰国した後も、内村の著作は精読している。例えば明治四十一年二月九日、日曜日の日記に「へ『聖書之研究』を読む。沈思した。嚴肅な數時間であつた。」とある。又、「大洪水の前」創作に際して有島は既に内村の「創世記」注解を参考にしていたことを、私は『三部曲』論で述べたのである。要するに有島は内村の聖書注解を『聖書之研究』を通してほとんど読んでおり、影響を受けていたということである。完稿は大正十一年十一月一日、十二月一日発行の『泉』に発表。四十四歳。草稿は完稿より少し前に書かれたが期日は不明。

⑭ 無(9)「静思」を読んで倉田氏に(草稿)(44下・13)19)へ商人達は當時の權力階級なる祭司と結托して民衆を愚にしてゐたのです。(丁度今の資本階級が政府と結托して民衆を愚にしてゐるやうに)基督はその時、祭司と商人に對して「彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せしめんとする教化の道」ばかりを選んでほりません。彼れは同時に直接行動を取つてゐます。彼れは彼れの怒れる民衆の一人としての權力に依頼してゐます。(2・13)17に根拠。|| 男性的キリスト教。怒りの神聖(内)。⑮と同じところ。)

⑰ 無(9)「静思」を読んで倉田氏に(草稿)(44下・19)23)へ又安息日が無意味に——而して多分貧乏な百姓達

の生活の脅かしになるやうにのみ——守られてゐるのを見出した時、「神は働き給ふ。我れも亦働くなり」といつて、
 麥畑から穂を取つて喰ひました。こゝにも彼れは直接行動を敢てしてゐます。(5・17) 神は創造を終えてのちも、
 全宇宙を保たせ指導するおこないをおやめにならない(ド)。イエスは安息日を与え、律法を完成するかたである(間)。
 「神は働き給ふ。我れも亦働くなり」とはヨハネ伝五章十七節のイエスの言葉とほとんど同じであつて共観福音書に
 はない。著者はこのイエスの言葉があるのでヨハネ伝の中に入れることにした。安息日に(麥畑から穂を取つて喰ひ
 ました)とあるが、ヨハネ伝にこの記事はなく共観福音書に出ている(マタ12・1と8、マコ2・23と28、ルカ6・1と
 5)。しかし空腹のため穂を摘んで食べたのは弟子たちであつて、イエスはそれを是としてゐる。ここでは有島はイ
 エスが食べたと間違えてゐる。「即實の生活」では(安息日に麥畑を歩いて穂を摘んで食べたことに對する態度も、
 實際現實の解釋であつて理想家のやり方ではない)とあるように、イエスではなく弟子たちが食べたたと解してよい
 表現がある。要するに有島の意図は、イエスが(直接行動)する(即實主義者)であることを強調するための例とし
 て、穂を食べたことに對する態度も、繩で商人を追い出したことや(ヨハ2・13と17)、パリサイ人たちに(爾毒蛇の
 裔よ)と悪罵を浴せ(マタ23・33、12・34)たことと同様な例として挙げてゐるのである。尚、「我れも亦働くなり」
 (ヨハ5・17)の表現は安息日にイエスが足なえをいやした直後に出ていて、共観福音書の「麥の穂を摘む」ところに
 は出てゐない。しかし有島が云うやうに安息日に働く、という意味では同じことになる。イエスが常に弱者の味方とし
 て革新的に男性的にこの世の權威と戦つてゐることを有島は強調してゐるのである。(17)(18)と同じところ)。

(19) 7(9)「静思」を讀んで倉田氏に」295・15 16 17 (105・13 14 15)へピラトが「眞理とは何ぞや」と尋ねた時、基督
 は呆れて答をしなかつたと聞かされてゐます。私が若しこの場合「眞理そのものとは何ぞや」と反問したら、私も亦呆
 れられるかも知れません。然し私はピラトではありません。而して呆れる人も基督でないのは確かです。(18・38) 眞
 理は不信仰者には隠されてゐる(間)。倉田氏が(思想家は眞理の探究に専らでなければならぬ)といつてゐるが

ら、真理をへ自明のものゝ如くに用ゐてゐることに對し、有島は「絶対無限の眞理が、人間の思索によつて發見し得られる」ものではないと反論している。眞理は人間の思索で分るものではないことを強調するために、ピラトの「眞理とは何ぞや」を引用しているのである。①⑬⑳と同一ところ。大正十一年十一月一日、十二月一日発行の『泉』四十四歳

⑭ 7(9) 「靜思」を讀んで倉田氏に」 300・18ゝ301・1 (110・9 10) (へ神の宮の神聖を保つために繩を以て商人を追ひ出しました。)(2・13ゝ17に根拠。Ⅱ男性的キリスト教。怒りの神聖(内)。共観福音書にも同類の記事はあるが(マタ21・12 13、マコ11・15 16 17、ルカ19・45 46)、繩を用いるのはヨハネ伝だけである。⑳㉑と同一ところ。)

⑮ 7(9) 「靜思」を讀んで倉田氏に」 314・12ゝ16 (124・6ゝ9) (へ商人達は當時の權力階級なる祭司と結託して、民衆を愚にしてゐたのです。(丁度現代の資本階級が政府と結託して民衆を愚にしてゐるやうに)、基督はその時、祭人と商人に對して「彼等の愛に訴へ、彼等をして自發的にその問題を正しく解決せしめんとする教化の道」ばかりを選んではおませんでした。彼は同時に直接行動を取つてゐます。彼は怒れる民衆の一人として、又指導者として權力に依頼してゐます。)(2・13ゝ17に根拠。Ⅱ男性的キリスト教。怒りの神聖(内)。⑳㉑と同一ところ。)

⑯ 7(9) 「靜思」を讀んで倉田氏に」 314・16 17 18 (124・9 10 11) (へ安息日が無意味に、而して多分貧乏な百姓達の生活の脅かしになるやうにのみ守られてゐるのを見出した時、「神は働き給ふ。我も亦働くなり。」といつて、麥畑から平氣で穂を取つて喰ひました。こゝにも彼は直接行動を敢てしてゐます。)(5・17 Ⅱイエスは安息日を与え、律法を完成するかたである(間)。イエスが常に弱者の味方として革新的に男性的にこの世の權威と戦つてゐることを有島は強調してゐるのである。⑳㉑㉒と同一ところ。)

⑰ 無(9) 「即實の生活と宗教」(306下・8ゝ14) (へユダヤの國の律法とは即ちその時代の道德として見られるが、その道德によれば姦淫せる者は罪として罰せられた。けれども姦淫せる女が基督の前に跪いて懺悔と悔い改める心から

その罪の裁きを乞ふ時、基督はその罪を購へるものとした。『我れ汝の罪を定めず』といふやうな基督の言葉こそ、まこと宗教の宗教たるところに胚胎されたものでなくて何んであらう。(8・11に根拠。|| 姦淫の女。(8)(9)(10)(12)(22)

(24)(28)(41)(53)(56)(59)(60)(61)(62)(63)(64)(65)(66)17と同じところである。大正十一年十一月一日『新家庭』 四十四歳)

(17) 無(9)「獨り行くもの」(309上・216)へ後に残つた十二人の使徒は堅く團結してその教を盛にしようとした。唯その中に一人のローファアのゐた事を忘れてはならない。それはキリストの再臨を信じなかつたトマスであつた。彼はキリストの眞精神が制度化される事に反對した。獨り行くものであつた。(20・24129を根拠。|| トマスのこの不信仰は、後世のキリスト信者の信仰を強めるために大いに役立つたので、多くの教父は、そこに神の摂理を認めてゐる(フ)。『新聖書大辞典』によれば、トマスはイエスと共に苦難を負おうとする気魄と情熱をもっており(11・16)、理性的に判断し、実証的に理解するような性格であつたらしい(14・5、20・25)。こうした性格には、復活のイエスを信ずることは大きな飛躍を要したことであらう(20・28)、とある。すると有島が云うへキリストの再臨を信じなかつたトマスは事實であり、へ彼はキリストの眞精神が制度化される事に反對した。|| ことも広義に解釈すれば認められよう。有島が好んで用ゐるローファアとはへ同情者、被迫害者、叛逆者、人類の恩人、獨り行くものゝなのである。トマスをローファアと見做すのは有島らしい解釈によつてゐる。(23)(22)(22)と関連あるが、トマスの名を用いてゐるのはここだけである。大正十一年十二月三十一日『二高女東華 同窓會報』 四十四歳)

(18) 無(9)「即實の生活」(316下・567)へ彼はエルサレムの宮殿から繩でもつて商人を追ひ出した。エルサレムの宮殿は最も神聖な所とされて居た。(2・1317に根拠。|| 男性的キリスト教。怒りの神聖内)。共観福音書にも同類の記事はあるが(マタ21・1213、マコ11・151617、ルカ19・4546)、繩を用いて鞭としてゐるのはヨハネ伝だけである。(19)(10)(10)と同じところ。大正十二年一月一日『開拓者』 四十五歳)

(19) 無(9)「即實の生活」(316下・111213)へ然し彼等は僧侶と妥協して居たので誰も之れを默認して居た。基督は此

支配階級と結んで居る商人等を見て、繩の鞭にて追ひ出したのである。〕(2・13、17に根拠。 Ⅱ男性的キリスト教。怒りの神聖(内)。共観福音書にも同類の記事はあるが(マタ21・12、13、マコ11・15、16、17、ルカ19・45、46)、繩の鞭はヨハネ伝だけである。⑬⑭⑮⑯⑰⑱と同一ところ。)

⑲ 無(9)「即實の生活」(316下・15、19)〔サマリヤの女に對する時でもさうである。あの時の基督の言葉は決して現實を離れて云つたのではない。今日の婦人が何等の許すべき事情なくして他に夫を造つたりしても、別に死刑にはならない。基督は之れ等のものを許すべきものとした。〕(4・16、17、18に根拠。 Ⅱサマリヤの女。「私には夫はありません。』という女の皮肉な冗談じみて言つた言葉を捕えて、イエスは、女の罪を指摘し、その心をしんかんせしめられた(間)。へあの時の基督の言葉』とは、17、18節「夫がないと言つたのは、もつともだ。あなたには五人の夫があつたが、今のはあなたの夫ではない。あなたの言葉のとおりである。」を指している。ユダヤの律法では、姦通した男女は死刑に処せられることになつていた(レビ20・10、申22・22、23、24)。しかし有島が「基督は之れ等のものを許すべきものとした。』と言っているのは、へ許す』方が基督にとつては「現在に即し」た「現實の解釋」であると言いたいからである。即ちもう少し有島の意図を補足するならば、姦淫女が「わたしもあなたを罰しない。今後はもう罪を犯さないように。」(8・11)と言われて許されたように、サマリヤの女も「許すべきものとした。』のである。⑮⑯と関連している。)

⑳ 追『聖經』(聖經公會在香港印發)の「約翰福音」第一章には「太初有道、道與上帝同在、道就是上帝。」とある。この中国の聖書では「ことば」に「道」を当てている。

(内)Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第十卷「マルコ伝 ヨハネ伝」教文館(昭和44年)

(フ)Ⅱフランススコ聖書研究所訳注『ヨハネによる福音書』中央出版社(昭和56年)

- (間) II 間垣洋助著『4 ヨハネによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社 (昭和41年)
- (共) II 『新約聖書 共同訳』カトリック・プロテスタント共同訳 日本聖書協会 (昭和53年)
- (辞) II 『新聖書大辞典』キリスト新聞社 (昭和46年)
- (下) II パルバローデル・コル訳者『旧約新約 聖書』ドン・ボスコ社 (昭和43年)
- (ジ) II ジョージ・マックレイ著 堀口委希子訳『ヨハネ福音書への招き』エンデルレ書店 (昭和57年)
- 『新約全書』(詩篇附) エフ、パーロット 横濱市山下町 大日本聖書館 明治三十四年
- 『舊新約全書』ヘンリー、ルーミス 横濱市山下町 大日本聖書館 明治卅二年
- 尚、本文中の聖書からの引用は主に口語『聖書』(日本聖書協会 昭和30年改訳)からである。

第六部

有島武郎が使用した『新約全書』

はじめに

昭和五十四年十一月十三日、私は駒場の日本近代文学館で「有島武郎展」を見学した。その時、有島が使用していた新約聖書の見返しに、毛筆で哥林多前書十三章と記入してあるのが気になった。中にとどのような書き込みがあり、どんなところに傍線が引いてあるか調べたかったからである。その聖書は、武郎の弟・生馬氏の長女・有島暁子氏から当館が借用し、展示しているものであった。当館の安部秀次郎氏の好意により暁子氏から承諾を得、十二月四日、有島が使用していた新約聖書を調べることができた。本稿はその時にまとめたものである。今年、昭和五十七年七月五日、有島暁子氏が他界された。拙論ではあるが、どこかに発表しなければならぬような気持になった次第である。

有島が使用した『新約全書 詩篇附』“NEW TESTAMENT AND PSALMS”（明治三十四年八月二十六日印刷、二十九日発行、発行者 英國人 エフ、パロット、發行所 神奈川県横浜市山下町六十番地 大日本聖書館、PUBLISHED BY THE BIBLE SOCIETIES COMMITTEE FOR JAPAN.）は縦10.5 cm、横7.5 cm、厚さ2.8 cmで皮表紙の装丁である。見返しにペンで購入のいわれが次のように記されている。

〈第十九世紀の尽くる時、余は札幌に聖書を購ひて、永遠に去り行く世紀を記念したりしが 頃者^{このころ} 是れを旧友竹園君に贈りぬ 此は其聖書の後身なり


明治三十六年八月七日（平仮名は著者）

以上のいわれの前後の余白に毛筆で、明治四十一年九月十五日、婚約中の安子へ札幌へ発つ日の言葉が次のように記されている。

へ一九〇八、九月十五日別離の日 此日秋霽あきはれへ歌林多前書第十三章

わが安子 武郎より（平仮名は著者）

そして見返しの右端の余白に赤鉛筆で行光なる落書きがある。この落書きは明治四十四年一月十三日に生まれた長男行光（森 雅之）によるものであろう。落書きといえは次のハケ所にもある。

- 1 馬太傳 11・25と12・7（卅一頁）子供のいたずら書きらしく鉛筆でのグシャグシャ書きあり。
 - 2 馬太傳 12・45と49（卅五頁）にわたって赤鉛筆で○印あり。
 - 3 馬太傳 17・12と19（四十九頁）にわたって赤鉛筆でくずれた二重丸印あり。
 - 4 使徒行傳 17・29と34（三百九十頁）にわたって鉛筆でくずれた三重丸印あり。
 - 5 使徒行傳 18・14と19（三百九十二頁）にわたって鉛筆でくずれた長円形印あり。
 - 6 約翰黙示録 22・21の最後の余白に（七百七十頁）、鉛筆で  印あり。
 - 7 詩篇 88・7と17（百四十六頁）にわたって鉛筆グシャグシャ書きあり。
 - 8 終り「見返し」部分にも鉛筆でグシャグシャ書きあり。
- 又、破損部分は次の三ヶ所にある。

- 1 馬可傳 8・26と36がある百十九頁の右上部から左へ中央部にかけて破れている。
- 2 馬可傳 9・1と9がある百二十頁の左上部より右へ中央部にかけて破れている。
- 3 馬可傳 9・9「○九山くまやまを下る時ときにイエスイエス彼等かれらに命いのちて人」以後、三十節まで、そっくり一枚（表は百廿一頁、裏は百廿二頁）が破り取られている。

更に馬太傳から約翰黙示録まで頁を開くと左側に▼印の黒い染みが約三百四十枚にわたってついている。こぼしたインクの染みであろう。このように子供にいたずらされている『新約全書』から判断して、長男行光出生の明治四十

四年一月以後は、有島は三十六年頃のように聖書を勉強しなくなっていると見えよう。大正四年九月「サムソンとデリラ」（未定稿）を『白樺』に発表する頃からは、聖書を創作上の題材を見つげるために利用はしている。

さて有島がこの『新約全書』を購入した明治三十六年という年は、彼が生涯で最も力を入れて聖書を読み勉強した年である。購入日の八月七日は留学の十八日前の日である。著者としては明治三十六年八月まで使用していた『舊新約全書』を調べたいのだがまだ実現していない。しかしながら有島が『新約全書』の中に書き入れた言葉、傍線、目印などをまとめて判断した結果、一貫した読み方は「愛」を重視する読み方であることが分る。反抗しているパウロに対してでさえ、その書簡である哥林多前書十三章、加拉太書五章六、十四節などの愛を強調するところは見逃してはいない。それでは有島が『新約全書』に書き入れた言葉、傍線、○印、□印など十四ヶ所は次の通りである。

① 馬太傳 10・16 「われ爾曹を遣すは羊を狼の中に入るが如し故に蛇の如く智く鴿の如く馴良かれ」 〓キリスト者の態度である(内)。10・16の上の余白に○印あり。廿六頁(武郎は、キリスト者としてへ蛇の如く慧からざりし)(36・5・8) 自分のために、親友増田英一と妹愛子とのプラトニックラブが結実し得なかったという自責の念を述懐している。この自責の念と聖書に○印を付けたことが呼応しているわけである。日記のマタイ伝②でも触れている。(内) 〓明治四十年八月『聖書之研究』

② 馬太傳 10・21 「兄弟は兄弟を死に付し父は子を付し子は兩親を訴へ且これを殺さしむべし」 〓真実の義人はかならず迫害される(二三)。10・21の上の余白に○印あり。廿六頁(キリスト者は迫害を受けたり、キリスト者であるが故に悲哀を体験したり、悩みを深くしたりすることを、有島は知っている。入信の際、両親からへ妄動へ邪教(32・3・3)などと批難されたこと、親友・増田英一にへ絶交の書を送(32・2・21) った後の悲哀へ悲慘(32・3・11)、
「パウロ書簡と性欲」に関する悩み(二序)、などの体験が有島の心に残っている。このような体験がマタイ 10・21に

○印を付けさせたと考えられる。尚、有島日記の共観福音書①でも論じてある。

③ 路加傳2・49「イエス答けるは何故われを尋るや我は我父の事を務べきを知らざる乎」の上の余白に「我ハ父ノ家ニアル可キコト」ヲ知ラザルカ」との書き込みがある。百六十二頁（四福音書の中で「十二歳の少年イエス」を語っているのはルカ伝二章四十一節から五十二節までである。「イエスが神の子たることの最初の発表であ」(内)る。)エルサレムの宮を自分の父の家と言ひ、「幼児の時から神を父と呼ぶ神の子の自覚があつたことを示している。」(牛)のであるが、このルカ伝2・49の別表記を有島が自分で調べて書き込んだのか、または教会の説教などで学んでから書き込んだのかは判明しない。有島が使用している新約聖書は明治三十四年八月、大日本聖書館(横浜市山下町六十番)から発行されたもので、発行者は英国人エフ、パロットである。明治三十四年発行によるルカ伝2・49は引用文の通りであるが、有島が書き込んだ同じルカ伝2・49は少し表現が違っている。著者が使用している同じエフ、パロット氏による明治三十九年一月(神戸市江戸町九十五番屋敷 英國聖書協會)発行の『舊新約聖書』のルカ伝2・49を見てみると次の通りである。「イエス言ひたまふ『何故われを尋ねたるか、我はわが父の家に居るべきを知らぬか』」これを見ると有島の書き込みは、明治三十九年発行の聖書の表現に近い。有島は明治三十四年八月発行の新約聖書を明治三十六年八月七日に購入している。そして五年後の明治四十一年九月に婚約者安子に贈っているのである。すなわち明治三十六年八月以後、新しく翻訳され改訂された聖書を通して書き込んでいるわけである。

④ 約翰傳12・23と28の途中まで、次のような「」印が付けてある。「アンデレ亦ピロと偕にイエスに告ぐ三」イエス彼等に答へて曰けるは人の子榮を受べき時いたれり二四誠に實に爾曹に告ん一粒の麥もし地に落ちて死すば唯一にて存んもし死ば多の實を結ぶべし 二五その生命を惜む者は之を喪ひ其生命を惜ざる者は之を存て永生に至るべし 二六人もし我に事んとせば我に従ふべし我に事る者は我を尋る所に在ん人もし我に事れば我父は之を責ぶべし 二七今わが心憂懍めり何を言んや父よ此時より我を救たまへと言んか否これが爲に我この時に至れるなり 二八願くは父よ爾

の名の榮を顯」せ此とき天より聲ありて云われ其榮を既に顯す再これを顯すべし」二百九十六頁から二百九十七頁（イエスに会いに来たギリシア人に死の近いことを知らせるが、死を忌避するのでなく死を通過し復活を示している（内）。共観福音書にある「ゲツセマネの苦しみ」を反影している（間）。福音の世界的宣教はヨハネ福音書の説く特徴の一つであるが（間）、有島が「」印を付けたところも世界的宣教の前兆をなすものとして重要な章節である。）

⑤ 哥林多前書1・21の上の余白に○印が付けてある。「二世人は己の智慧を恃て神を知らず是神の智慧に適へなり是故に神は傳道の愚なるを以て信する者を救を善とせり」四百七十五頁（「神の恩恵の大いなるものの一つは、知者がその知に負けることなり。「伝道の愚か」とは、ほろぶるものの目に愚の極と見なされる十字架の教えをさしていえるなり（内）」明治三十五年十二月『聖書之研究』）。

⑥ 哥林多前書1・27の上の余白に○印が付けてある。「神は智慧を愧しめんとて世の愚なる者を選び強者を愧しめんとて世の弱者を選ぶ」四百七十五頁（「キリスト信者中、弱者多くして強者少なきは、世の弱者をもつて強者はすかしめんとためなり（内）」明治三十五年十二月『聖書之研究』）。有島は常に自分を弱者であると認識し、同時に弱者に同情し続けていた。であるから1・21も1・27も共に有島が注目しそうなところであると言えよう。）

⑦ 哥林多前書13・1〜13全体にわたって上の余白に二本の傍線が横に引きしるされてある。「第十三章（黒地に白字）假令われ諸の人の言および天使の言を語るとも若し愛なくば鳴銅や響・鉞の如し（略）それ信仰と望と愛と此三者の者は常に在なり此うち尤も大なる者は愛なり」五百二頁から五百三頁（「愛の賞讃」愛は人生の終極点なり。「そは神はすなわち愛なればなり」（ヨハネ第一書四・八）（内）」明治三十八年八月『聖書之研究』）。明治三十六年二月五日、ロマ書難解を日記に書き付け、二十日後の二月二十五日、へ哥林多前書九章を讀み、二十四節以下に到り、云ふ可からざる不快の念に打たれて、以来、反パウロ宣言をしていたのであったが、パウロ書簡の中でもヨハネ文書を思わせる「愛の賞讃」十三章などは見逃がさず、傍線を引いたり、婚約者安子に贈る聖書の見返しに書き記したりし

ている。是非はともあれ有島らしい聖書の読み方として注意しておこう。)

⑧ 哥林多前書十三章 明治四十一年九月十五日、婚約中の安子へ札幌へ発つ日の言葉として、新約全書の見返しに毛筆で書きしるされている。(一九〇八、九月十五日別離の日 此日秋霽(略)この間五行、ペンにて購入のいわれの記述あり。) 哥林多前書第十三章 わが安子 武郎より(平仮名は著者)

⑨ 哥林多後書5・4の一部に、次のように赤鉛筆で傍線が引いてある。「我儕この幕屋にをり重を負て歎くなり之を衣の如く脱んことを欲はず彼を衣の如く着んことを欲ふ是生に死べき者の吞れんが爲なり」五百廿三頁(彼は、こぼたれねばならない弱い肉体という幕屋の中にとじこめられて、さまざまの苦難におしつぶされそうである。しかし、彼の願っていることは、主から新しいからだを与えられることである(山)。再臨という終末論的信仰と希望を有島も知っていたことを示す傍線であると言えよう。)

⑩ 加拉太書2・19にわたって赤鉛筆で傍線が引いてある。「十九われ律法に由律法に向ひて死り是神に向て生ん爲なり」二「我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生るに非ずキリスト我に在て生るなり今われ肉體に在て生るは我を愛して我が爲に己を捨し者すなはち神の子を信するに由て生るなり」三「我は神の恩を徒然せず若し義とせらるること律法に由はキリストの死は徒然なる業なり」五百四十七頁(「すべての人は信仰によって救われる(共)。反パウロの姿勢をとっていた有島ではあるが、パウロ自身の深い信仰体験には心打たれて傍線を引いたのであろう。)

⑪ 加拉太書5・6に青鉛筆で傍線が引いてある。「六夫キリストイエスに在ては割禮を受るも受ざるも益なく惟愛に由て行く所の信仰のみ益あり」五百五十四頁(「特にパウロが愛という言葉を信仰との関連において、本書簡において、ここではじめて使っている点に注意しなくてはならない(海)。)

⑫ 加拉太書5・14に青鉛筆で傍線が引いてある。「十四それ己の如く爾の隣を愛すべしと曰る此一 言すべて律法を全うする也」五百五十四頁(「愛をもって、互に仕える」ことは、律法の、真の要求を、全体的に、満たす

ことである(海)。隣人愛。コリント前書十三章「愛の賞讃」全体に傍線を引いた有島は、同じパウロ書簡のガラテヤ書でも、5・6、14など、やはり活動的な愛の行動に注目しているのである。ここでも有島らしい一貫した聖書の読み方を見ることが出来る。)

⑬ 約翰黙示録13・10の後半に青鉛筆で左側に傍線が引いてある。「刀にて人を殺す者は己また刀にて殺さるべし 聖徒の忍耐と信仰茲に在」七百四十九頁から七百五十頁(「忍耐と信仰は、迫害のもとにあるキリスト者の堅持すべきものである。小羊の勝利を知るゆえに、その勝利の具体化する日を信じて待つ忍耐である(石)。コリント後書5・4に傍線を引いているということは、「神から新しい体を与えられる」という終末論的信仰を知っているわけだが、その有島は黙示録でも終末論的信仰に支えられた忍耐の重要性に注目して傍線を引いたのである。)

⑭ 詩篇第二十三篇の最後の余白に「nighingale of the psalms Becher」(詩篇の夜鳴鳥。ビーチャーとは人の名前であろう(著者の注。))という書き込みがあり、そこから第二十三篇の最初の「ダビデのうた」の下まで傍線が引いて矢印が付けてある。三十二頁から三十三頁(内村鑑三は大正八年六月『聖書之研究』の中で、二十三篇(「ダビデの牧羊歌」)は旧約聖書中の真珠であり、新約聖書「主の祈り」と共に心に銘じて誦すべきものであると言っている(内)。岸井敏氏によれば「エホバはわが牧者なり、われ乏しきことあらじ」と続く第二十三篇は「わたしはよい羊飼である」(ヨハネ10・11)という言葉を思い出させる、信仰の詩篇である、という(井)。有島もビーチャーの言葉を書き込んだ。「詩篇の夜鳴鳥」すなわち「詩篇の美声の歌手」という意味である。明治三十四年四月二十一日、有島は永野武三郎著『用無遺稿』に感涙して詩篇二十三篇四節(「なんぢの杖なんぢの笞我をなぐさむ」)を日記に書き、(貧民窟(「遠友夜學校」)で働こうと考えている。有島もキリスト者として「信仰の詩篇」第二十三篇を読んで心に銘じていたことになる。)

番	聖書	章節	内容
1	マタイ伝	10・16	〈蛇の如く慧〉くない自分 基督者故に迫害受く
2	マタイ伝	10・21	イエスは神を父と呼ぶ
3	ルカ伝	2・49	復活と世界的宣教の前兆
4	ヨハネ伝	12・23、28	己をみ頼て神を知らず
5	コリント前	1・21	基督者に弱者多い記
6	コリント前	1・27	信仰、希望、愛の中、最大は愛
7	コリント前	13・1、13	愛の賛歌
8	コリント前	13章	愛の賛歌

以上の十四ヶ所（パウロ書簡8、ヨハネ文書2、マタイ伝2、ルカ伝1、詩篇1）中、愛を賛歌するところが⑦⑧⑩⑫と四ヶ所もある。そして（終末論的）信仰を強調するところも⑨⑩⑬⑭と四ヶ所ある。また、自分が弱者であると思ひ⑥、キリスト者故に迫害を受けたり②、自責の念に打たれる読み方をしているところは①、いかにも有島らしい真面目さが出ている。この点から判断しても、聖書に書き入れ印を付けたのは武郎自身であり、明治四十一年九月に武郎から贈られた婚約者安子が書き入れたり印を付けたものでないことは明らかである。生涯で最も熱心な信仰生活を続けた時と言われる明治三十六年、その八月七日に購入した『新約全書』に記されているところを調べて分ったことは、やはり愛と信仰、伝道と研究の意欲に燃える頃の武郎が実在していた、ということだ。

有島武郎が『新約全書』に記した個所

14	13	12	11	10	9
詩 篇	黙示 録	ガラテヤ	ガラテヤ	ガラテヤ	コリント後
23 篇	13・ 10	5・ 14	5・ 6	2・ 19 20 21	5・ 4
					再臨、終末論的信仰
					信仰によって救われる
					愛による信仰のみ
					隣人愛
					終末論的信仰と忍耐
					旧約の真珠「信仰の詩篇」

- (内) Ⅱ『内村鑑三聖書注解全集』第八卷「マタイ伝」、第九卷「ルカ伝」、第十卷「マルコ伝」、第十二卷「コリント書」ガラテヤ書、第五卷「詩篇」箴言「伝道の書」教文館(昭和44、47、44、47、47年)
- (三) Ⅱ三浦義和著『1 マタイによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和53年)
- (牛) Ⅱ牛丸省吾郎著『3 ルカによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和44年)
- (間) Ⅱ間垣洋助著『4 ヨハネによる福音書』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和41年)
- (山) Ⅱ山内六郎著『8 コリント人への第二の手紙』信徒のための聖書講解 聖文舎(昭和55年)
- (共) Ⅱ『新約聖書 共同訳』カトリックプ・ロテスタント共同翻訳 日本聖書協会(昭和53年)
- (海) Ⅱ内海季秋著『9 ガラテヤ人への手紙』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和48年)
- (石) Ⅱ石居正己著『16 黙示録』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和45年)
- (井) Ⅱ岸井 敏著『12 詩篇』信徒のための聖書講解 聖文社(昭和49年)

第七部 悲運、有島武郎

結論を先に述べると、「悲運の最大の原因は確乎たる信仰体験のなかったこと」である。その根拠として、

(1) 明治三十二年二月、二十一歳、雪中の定山溪にて宗教的エクスタシー (Ecstasy) を経験した時に入信決意している。聖書の言葉による聖霊の働によって改心しているのではない。

(2) 明治四十一年四月十八日、三十歳、欧米留学後の彼の日記に「余は世間體の爲めに動きたり、若しくは人によく思はれんが爲めに動きたり」とある。宗教と道徳とを混同している。

(3) 大正九年四十二歳、「惜みなく愛は奪ふ」(三)という評論の中に「神を知つたと思つてゐた私は、神を知つたと思つてゐたことを知つた。私の動亂はそこから芽生えはじめた」とある。

確乎たる信仰体験のなかつたことが何故悲運であるのか。

明治四十四年三十三歳、有島は背教宣言以来、キリスト教に対決しながらも、ついにその思想的感化から独立出来ず、むしろその影響の中にもだえ苦しみながら四十五歳の若さで自殺して生涯を閉じている。

事実彼の作品には神に反駁するものと、神聖な魂の世界に対する憧憬のものとがある。「クララの出家」「フランセスの顔」は後者の場合であり、「リビングストーン傳」の序「惜みなく愛は奪ふ」は前者の場合である。自己を描出したに外ならない「カインの末裔」、有島が女になつたような「或る女」などはその中間にあると見られる。有島のこの二元分裂こそ彼の宿命的悲劇を物語っている。

大正十一年四十四歳、狩太農場を小作人へ解放して自分の社会主義労働思想(クロボトキンによる影響)を実行している(「宣言一つ」「私有農場から共産農園へ」「農場解放顛末」)。この農場解放は有島の父への反駁でもある(私小説「親子」)。しかしインテリ有島はプロレタリアになり切れなかつた。そして社会主義者ではなく徹底した個人主義者となる。自我主義者となる。

「愛したものの死ほど心安い潔い死はない」(「惜み」(一八))という思想を實踐するかのようになつた大正十二年波多野

秋子と心中している。ここに至った根本的原因是先に述べてある。

有島の文体には英語を直訳したような直接的立体的表現がある。日本文学に新鮮フロンティアスピリット味を鼓吹した功績を買うべきである。

彼の作品も人間の生き方の反省の糧として常に現在の問題となっていくと考えられる。

(昭和三十八年六月九日、東洋大学国語国文学会研究発表要旨、『文学論藻』第二十五号、昭和三十八年九月)

第二編
作品研究

I
『
三
部
曲
』

『三部曲』序論

『三部曲』とは旧・新の聖書に題材を求めた聖書劇三部作のことで、大正八年十二月、三つの戯曲を収録する著作集第十輯として叢文閣から出版されている。最初の「サムソンとデリラ」は大正四年九月、七月からの「宣言」を休載している間に『白樺』に発表してある。未定稿であったがその後大正八年十月に完稿してある。十二月に「宣言」が『白樺』に完結する少し前に「洪水の前」が執筆され、大正五年一月に『白樺』に発表された。これも未定稿であったが大正八年十月、「サムソンとデリラ」と同時に完結している。二つの旧約劇が発表されて約四年後、つまり二つの旧約劇が完結した大正八年十月に新約劇「聖餐」が執筆され、前の二つの戯曲と一緒に『三部曲』として十二月に発表された。二つの旧約劇は安子の入院中に書かれ、新約劇は代表作「或る女」後編が完結（五月）した大正八年という最も創作力旺盛な時期の最後の年に書かれている。

作家の創作活動と心理推移とは有機的で微妙な関係がある。年譜は次のようになってい

大正三年九月下旬、妻安子、肺結核発病、十一月二十四日、一家で帰京。二十八日、安子は鎌倉に転地。

大正四年二月、安子平塚杏雲堂病院入院。

大正四年七月、「宣言」を『白樺』に連載。

大正四年九月、「サムソンとデリラ」を『白樺』に発表。

大正四年十二月、「宣言」完結。

大正五年一月、「洪水の前」を『白樺』に発表。

大正五年三月、「首途」（「迷路」序編）を『白樺』に発表。

大正五年三月、「フランセスの顔」を『新家庭』に発表。

大正五年七月、「クロボトキンの印象」を『新潮』に発表。

大正五年八月、「潮霧」を『時事新報』に発表（一、二、三、四）。

大正五年八月二日、妻安子死去。

以上、発表された中のほとんどである「宣言」「サムソンとデリラ」「洪水の前」「潮霧」という作品は死に関係している。これらは当時不治の病であった肺結核の安子を看護しながらの作品群である。デリラもナアマも死んでいる。安子と同じ肺結核の「宣言」のY子もいずれ結核のBと共に死に近い存在である。坂本浩が武郎A、安子Y子、死Bと比喩しているが的を得ている（角川文庫『宣言』昭四十二）。そういえば YASUKO のYがY子を象徴しているかのようにも見える。安子の死の直前に書かれた小説「潮霧」は、室蘭から函館に向かう小さな汽船が黒潮と親潮の激突によって生ずるガスにおおわれ視界零という危機・死に直面するが、奇蹟的にガスが晴れて助かるという短編である。死と対決している安子を意識しながら奇蹟的に回復することを願って書かれた小説である。死と対決という意味で一連の作品と関連している。しかし安子の死は避けられないかも知れないという無意識の中にある死の恐怖が、一貫してこれらの作品を書かせる動機となっている。これが第一動機である。もし安子との死別があった場合、自分たち夫婦の生活を回想することにより男女のあり方と死んでいった女性の生き方を聖書に取材して創作するということはあり得る。これが二つの旧約劇創作の第二動機として考えられる。既に棄教していたが、その後も武郎のキリスト

教に対する態度は接近、反発の繰り返しである。「宣言」(一例として、一九一四年一月十日、BよりAへの書簡に教会脱会理由が六つに箇条書してある)も、説教の予定説が原因で自殺したスコット博士によって背教を決定的にした武郎の分身Aを書いた「首途」も、共にキリスト教反発作品である。これに対して二つの旧約劇は比較的聖書に忠実である意味で接近作品と言える。「首途」と同じ大正五年三月に発表された「フランセスの顔」は、「首途」と同じように明治三十七年頃の米国での体験を元に書いた「永遠の女性」小説である。「首途」とは明暗をなし、米国砂漠の中のただ一輪の花が「フランセスの顔」なのである。一連の死に関する作品を書いている武郎の心を一時的にせよ明るくしてくれたのは、十三歳のファニーの思ひ出である。暗い心が光を求めたのである。へ美しく無邪氣可憐なる其容貌は實に天國にも見まほしき計りに御座候。(一九〇三年十一月二十八日家族宛へ嗚呼、ファニーを思う。汝天使よ。純潔の化身よ。)(一九〇五年一月十二日記) というもの狂おしいほどの讚美を十三歳のファニーに呈している。宣言以後、二つの旧約劇によって男女交渉のあり方を追求してきた時、「永遠の女性」が十三歳のファニーであったとは意味深い。人を疑うことを知らないへフランセスの顔に天國における幼子の顔を見たのであろうか。いずれにせよ、「フランセスの顔」は「首途」に対してばかりでなく安子発病後、世界までの間で「光」となっている作品である。有島の数少ない明朗作品の代表でもある。

先に『三部曲』の主題を明確にしておく、後の論が理解しやすくなるのでまとめておきたい。主題は「愛」である。そして愛を追求するのに二通りある。一つは神と人との関係で、もう一つは男と女との関係である。「聖餐」に就いて(大正十年二月「讀賣新聞」)という談話筆記によると武郎は、次のように『三部曲』について自注している。へあれは聖書を題材とした、私の三部曲の最後のものであつて、この三つの戯曲の間には、私として或る觀念上の連絡を與へてゐるつもりである。「大洪水の前」で、エホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみが、「サムソンとデリラ」に於ては一種の、然し、不満足な解決が與へられ、第三の「聖餐」に於てそれが圓滿の解決に

持ち來されてゐるといふのが構想の一つ。又、第一の戯曲に於ける男女關係が、第二のそれに於て激しき破綻を起し、第三に於て或る正しい調和を得たといふことを云ひ表はしたかつたのだ。制作順序とは別に主題の發展によつて以上のように自注している。武郎の自注と作品を読んだ結果とにより、次のように主題を二つの表にまとめておいた。

第一主題——神と人との愛

<p>エホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみ。</p>	<p>神は人類を創造したことを後悔。(ノアの箱舟は神の恵み)</p>
<p>その心の苦しみに一種の、然し、不満足な解決が與えられた。</p>	<p>神は背信のイスラエルを罰するためペリシテ族に襲撃させる。</p>
<p>その心の苦しみに圓滿な解決が與えられた。</p>	<p>「私は既に世に勝つた」という十字架の愛<small>アガペー</small>の宣言。</p>

第二主題——男と女との愛

<p>第一の戯曲に於ける男女關係。</p>	<p>ヤベテとナアマとの宿命的に結ばれぬ男女愛。</p>
<p>激しき破綻を起した。</p>	<p>サムソンとデリラとの愚かな男女愛。</p>
<p>或る正しい調和を得た。</p>	<p>イエスとマグダラのマリヤとの理想的愛。</p>

男女愛に共通していることは、互いに異なる種族、むしろ敵対する環境におかれていることである。箱舟予言を受けたセツ族に属するノアの三男ヤベテと、エホバに呪われたカイン族のナアマ。エホバを信ずるダン族のナザレ人のサムソンと、ダゴンの神を信ずるペリシテ人のデリラ。天の父の御元に行くイエスと、この世のマグダラのマリヤ。以上が『三部曲』に登場する主人公達となっている。

ここで『三部曲』と他の作品との関連をもう一度考えておこう。「宣言」という心の傷深い男女愛の作品を休載している間に、「サムソンとデリラ」という激しき愛の破綻を起す旧約劇が発表されている。当時、不治の病であった肺結核に妻を取られ看病していた武郎の夫としての悲しみが、Y子と同じ結核患者であるBに取られるA（武郎の分身）の悲しみとして「宣言」に書かれてある。愛を決裂させられた小説「宣言」と愛の破綻である戯曲「サムソンとデリラ」とは、当時の武郎の心境による愛哲学から生まれた作品である。悲しい心境の時に聖書に取材する戯曲となると、裏切り後に共に死んだ「サムソンとデリラ」が心に浮んだのであろう。完稿は妻他界後、「大洪水の前」と同じ大正八年十月になった。

大正五年一月、「洪水の前」は妻の死の前七ヶ月に未定稿として『白樺』に発表された。大正四年二月以後、武郎は安子が入院している平塚の杏雲堂病院へ東京から通っていた。不治の病に妻と共に武郎も対決していた。人事を盡し天命を待っていた。神の恵みで救われた信仰の人・ノアのように、妻が救われることを祈る気持でいた。このような心境の時、創世記に取材した戯曲「洪水の前」は執筆されている。妻はノア一族のように助かるか、ナアマの属するカイン族のように洪水で死ぬか、執筆当時は分らなかつた。「潮霧」のように奇蹟的に助かって欲しかった。結果は妻はノアではなくナアマに属していたことになった。大正五年八月二日、朝八時、杏雲堂病院で安子は武郎に見守られながら世を去った（「死と其の前後」、日記）。不治の病であったので、武郎は覚悟をしていたかも知れない。妻が死去して三年後、大正八年十月にカイン族が洪水にのまれる描写をして完稿している。主人公・ノアの末子ヤベテの

悲しみは武郎の悲しみにもなっている。

旧約劇の主題は発展し「聖餐」で完結・成就している。「聖餐」の執筆動機はマグダラのマリヤの性格に武郎が共鳴していたことよって（「聖餐」に就いて）。以前から武郎はキリストとマグダラのマリヤとの対比が好きであった。「平日」（一九〇九年二月）で有島のモデルである相島が次のように思っていることがその一例である。〈相島はひしひしと基督の人格に觸れた様に思つた。漁夫や税吏や娼婦やマグダレナのマリヤやザーカイヤの間にまじつた基督の顔を見る様に思つた。而して殆んど涙にあふれんとする眼を擧げて牧師を見た。〉明治四十三年五月、棄教宣言後、大正六年九月、信仰心の結晶「クララの出家」を『太陽』に発表している。聖なる神への憧憬が時々又は週期的に具体化又は作品化される一例である。イエスとマグダラのマリヤとの関係を武郎の愛哲学の完結として「聖餐」で表現することになった。男女愛の〈正しい調和〉をこの「聖餐」で得ることになる。「宣言」「石にひしがれた雑草」（大正七年四月、『太陽』、「或る女」等、有島の恋愛小説は悲劇ものばかりである。大正八年五月二十三日、「或る女」は葉子が内田（内村鑑三）の来るのを祈つて死ぬところを脱稿した。それから五ヶ月後の十月、葉子の性格を受け継いだマグダラのマリヤが内田ではなくイエスと対面する「聖餐」が執筆された。武郎はここで理想的男女関係と人生論とを暗示した戯曲を書きさかした。その意味で「惜しみなく愛は奪ふ」（大正六年六月）への無意識の反動作品となつていとも言える。安子の病床に取材した「死と其の前後」（大正六年五月『新公論』）は美しい夫婦愛を描出した戯曲である。瀬沼茂樹氏は、この戯曲を「宿命的な「死」の圧力に対して、「愛」の力がこれを超克して対等の地位を克ちとれるとして、愛の永遠性とその勝利を謳歌」していると評している（角川、近代文学大系33）。「聖餐」が「死と其の前後」の精神を踏まえて書かれていることも事実である。

共感にせよ反抗にせよ有島文学の大部分に聖書の影響があるのだが、『三部曲』ほどはっきりと題材が聖書そのも

のであるのは他に例がない。欧米の古典的文学作品が聖書を土台にして思想的対決を強調して来たのに対して、近代日本文学の中では真の聖書の文学がまだ生まれていないといわれる。聖書を素材或は発想の根拠とした作品を『浪漫主義文学の誕生』（笹淵友一著 明治書院）の本論第二章から引用すると次のようである。

近代日本文学は四福音書によって幾つかのイエス伝を生んだ。上田敏の「耶蘇」（明治三年）、武者小路実篤の「耶蘇」（大正八年）、江原小弥太の「新約」「復活」（耶蘇伝ではないが、「旧約」もまた一聯の作で、共に大正一〇年）、芥川龍之介の「西方の人」「続西方の人」（遺稿）等がそれである。一種のエキゾティシズムの目で見られたキリストから、自我主義の頂点とされ、あるいは、人間主義の立場にまで引きおろされたイエスの像を経て、芥川に至ってキリストは浪漫人の悲劇性を代表させられている。近代の文学者はこのように福音書を通じてキリスト像を、というよりむしろ自画像を描いた。中には逆に自画像の奥に、或は作中人物を通じてキリストを隠顕させているものもないではない。たとえば賀川豊彦の「死線を越えて」（大正九年）の構想には、キリストとマグダラのマリヤのイメージが反映しているように思われる。局部的な構想ではあるが、島崎藤村の「破戒」にもキリストとペテロとの関係から示唆をえた構想が挿入されている。福音書につづいて最も多く文学の素材になったのは、旧約の創世記、詩篇、雅歌等である。半月の「天地初発」が創世記に取材していることはさきに述べたが、その他武者小路の「人間万歳」（大正一一年）は内容的には聖書と何の関係もないが、その宇宙創造という觀念が創世記から生れていることはいうまでもなく、有島武郎の「カインの末裔」（大正六年）もまた創世記四章に発想の典拠をもっている。さきに詩篇に関係がある藤村詩をあげたが、この外にも詩篇に典拠をもつ藤村詩は少くない。湖処子の「帰省」（明治二三年）、漱石の「三四郎」（四一年）も詩篇と交渉がある。雅歌もまた藤村詩の貴重な源泉であった。「狐のわざ」（「若菜集」）、「春詞」（「一葉舟」）はその例証である。しかし雅歌に学んで清新豊麗な異国情調を醸したものとしてはむしろ北原白秋の「天草雅歌」（「邪宗門」）をあぐべきであらう。

以上、引用文にある作品も「真に聖書的、キリスト教的な観点から見ると、真の意味で影響乃至感化を受けたとはいえないものが多い。」と言われている。その原因については、近代主義への批判がなかったわけだが、その書を参照されたい。有名ではないが聖書に取材した作品に太宰治の「駆込み訴へ」（『中央公論』昭和十五年二月）がある。イエスをイスカリオテのユダの立場で書いてある。「生れてすみません」の太宰が「生れて来なかったほうがよかった」と言われたユダに同情して書いたもの。イエスがマグダラのマリヤに恋をしているのでユダが嫉妬するというキリスト教への皮肉もあり太宰らしい一面が出ている短編である。最近のキリスト教小説では転びバテレン・ロドリゴ神父（ジュゼッペ・キャラが本名）を扱った『沈黙』（遠藤周作、新潮社、昭和四十一年）を重視したい。北九州を舞台に十七世紀の殉教物語。「踏むがいい。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから」という声を聞くことは、厳しい父なる神の面がないマリヤのキリスト教であるという評もある。原罪を扱った「氷点」（三浦綾子、朝日新聞、昭和四十年）は「統水点」として発展し、昭和四十五年五月十二日から朝日に連載された。

さて『三部曲』は題材が明確すぎて研究家にも余り問題にされていない。研究資料も少ない。『白樺』派の文学（本多秋五、新潮社）の中の「大洪水の前」と、瀬沼茂樹の解説（『有島武郎集』角川書店）文中の『三部曲』とが現在のところあるだけである。しかし『三部曲』は聖書と微妙なところで違っている。その違いとは聖書に説明されておらず、どのようにも解釈可能なところを有島の想像力で描出しているところである。「大洪水の前」の創世記四、六章の解釈がその一例である。『三部曲』の中では「大洪水の前」がその全人類史的課題と高遠なる思想性として秀れている。ネビリム（六の四）の解釈やヤベテに新約的光をあてているところにも特徴がある。サムソンとデリラとの愛は聖書よりも当然人間臭く悲劇的に描いている。「聖餐」は有島の『三部曲』における「愛」哲学の完結として重視す

べきところがある。特にマグダラのマリヤ観は武郎独得の聖書解釈であり神学的にも注目されよう。私は演劇専門ではないが、大洪水やサムソンの怪力と神殿破壊のような場面はそれにふさわしい音響効果と色彩豊かなせわしない照明効果をもって観客に想像させるという方法などがあるであろう。つまり二つの旧約劇には舞台規模も大きいヤマ場がある。しかし「聖餐」は心理演技になるので演劇としては難しいであろう。

第一部 本論「大洪水の前」

戯曲では最初に洪水に関する創世記四章から七章までの抜粋がある。少なくとも天地創造の一章から洪水後の十章までの理解が必要であろう。時はアダム生まれてより七千二百二十五年目の二月。処はエデンの園の東方ノドの地方及びアララット山の麓である。四幕劇である。長くなるが各幕の話の筋を説明しながらまとめておく。『三部曲』理解には正確なあら筋が基本となる。

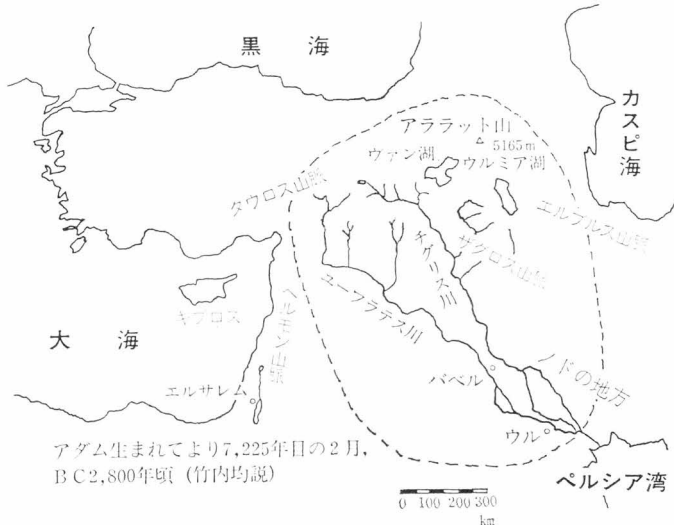
第一章 あら筋

第一幕 アララット山の麓

エホバは人の悪が地にはびこったので、地上に人を造ったのを後悔した。それですべての人を洪水で絶やそうと決心した。しかし、ノアは神に恵みを得た。ノアは全き人で神とともに歩んでいたから、エホバの神はノアに箱舟を作らうと命じた。七日後の全滅からノアとその家族を救うためである。ノアは以上のことを聞き、三人の息子に箱舟を作り終えるよう命じた。信仰の人ノアはカインの族がエホバの呪いを受けたことを息子達に告げる。そして末子ヤベテがカイン族の美女ナアマを恋しているのを戒めて、ヘナアマの顔の美しいのは、それだけ心の醜いのを裏切りしているのだと説く。カイン族はわずかばかりの知恵を頼みとして、一度味わった知恵の果をもう一度味わう程の非望を抱いている。女も優しい姿を餌にして男心を釣っている。増長の果には天使と密通して人と思えぬほどの勇士や勝れた女をも生み拮めている（六の一―八）。エホバの憤りが日に日に増すのも無理ない事だ。何よりもエホバの御心に従順になることが大切である。以上のような説教をノアは息子達、特にヤベテにする。長男セムは父に従う義人だが情無用の冷酷人間。次男ハムは意志薄弱な懷疑家。「洪水の来るのを信じているのは世界中で父と兄だけです。もし洪水がなかつたら笑い草です。天の使いさえ地上の人間の女にたわむれかかる時節に、洪水が地の上にはかり起るとは片手落ちなお審判……」とハムは言っている。ヤベテが箱舟なんか用がないと去る時、ハムもヤベテに従っている。

「大洪水の前」舞台推定

エデンの園の東方ノドの地方及びアララット山の麓



三男ヤベテはカイン族のレメクの第二妻チラが天使と密通して生んだ美しい娘ナアマと恋仲である。へ地を這う蟲のように土にしがみついて活いき、心にもなくエホバを讚美し、惨めな生活をそのまま傳える我々セツ族が恥しい。私はエホバの御業みわざの誇りなる人間なのだ。カインの族も同じ人間です。カインの族の中に生れた勇士達を私は何故誇りとしてはならないのでせう。その人々の中に生れた美しい娘達を私は何故榮えとしてはならぬのでせう。人の持つものを私は持ちたい。とヤベテは叫ぶ。感激しやすい博愛主義者。盲者の群や憐れな者達に砂金を与えようとする正義感のある人道主義者。芸術家肌の青年でもある。

第二幕 エノクへの途上

洪水の前日の夕。第一幕より六日目の後。ヤバルはカイン族の主になろうと残忍な野心家らしい計画を、剣のトバルカインを誘惑して実現しようと考えている。ヤバルはまずトバルカインを相手に自分達の母、アダとチラが父を裏切つて天使と密通してユバルとナアマを生んだ裏切り淫婦であると話す。淫婦達は我々よりも密通の子を愛しているのではないかと同じ仲間意識をトバルカインに持たせる。ヤ

バルは父に同情しているように思わせておいて憎むべき女・互いの母を罰しななければならぬと説得しついに母達を殺せとトバルカインに言う。さすが一本気の剣のトバルカインも自分を生んだ母を殺す気にはなれなかったがヤバルの言葉が次第に影響して来て剣が母達に向かいついに殺してしまふ。父レメクのため殺人をして悲しみ後悔しつとトバルカインは父に祝福を乞う。しかし父レメクは妻達が自分の名を呼びつつ死んだと話され、悲しみ、自分の母まで殺す息子トバルカインに腹を立て彼を殺す（四の二三と二四）。しかし父親は若い子供を激怒のあまり殺してしまつたが後悔し、ついに気が狂う。その時をねらつて極悪人ヤバルは父レメクを殺す。ヤバルの残忍な計画は成功した。第二幕のヤマ場は最後のレメクの言葉である。へおゝアダとチラ！レメクの妻達私は心の創傷いたでに堪えかねて少年わかうとを殺した！カインの爲めに七倍の罰があるのなら、私の爲めに七十七倍の罰があれ！おゝトバルカインお前はもう死んでしまつたのか。……笑へ。ヤバル！笑へ。お前がさう黙ると三人の血を啜つて喜ぶサタンの笑聲が地獄の底から聞こえて来る。笑へ。このようにレメクは狂人になつて息子ヤバルに殺されるのだが、この最後の言葉が創世記四章二三、二四節とほとんど同じで実に適切に出て来ている。二三、二四節は次の通りである。「アダとチラよ、わたしの声を聞け、レメクの妻たちよ、わたしの言葉に耳を傾けよ。わたしは受ける傷のために、人を殺し、受ける打ち傷のために、わたしは若者を殺す。カインのための復讐が七倍ならば、レメクのための復讐は七十七倍。」

第三幕 エノクの幕屋に近き所

第二幕と同日の夜。ユバルが楽人等と楽を奏している。月夜である。沈んでいるナアマをユバルが慰めてみると、一人の男が来てアダが殺されたと知らせる。姦淫の女であろうとユバルには一人の天使が墮落するよりも母上の死は傷いたましい程に愛すべき母であった。今度は一人の女が来てチラが殺されたと知らせる。母の死を聞きナアマは倒れ、ユバルに支え抱かれる。そしてナアマはヘエホバは人間を見捨ててしまひになりました」と言う。ユバルは近くの森にヤペテが潜んでいるのに気付く。ユバルは群集に父、アダ、チラ、トバルカインの亡骸なきがらとヤバルを探し出

すよう指示する。そしてナアマとヤベテを会わせてやろうと計らう。ユバルはカインの族は良い者も悪い者もエホバに呪われていると吐き捨てるように言う。ユバルは「私のこの上衣を、あなたの前にあなたを慰めるものが現はれたら着せるがよい。この上衣はサタンのの黒い眼を防ぐ護符まもりとなるのだから」と言つてナアマに渡し、気をきかせて去る。ナアマはしみじみ「ユバルがカイン族に生れたのは狼から羊が生れたやうです」と言う。「けれども私もユバルも墮落した天の使ひの血を稟ちりけて生れたからには、エホバの呪ひを殊更に深く受けたも同然なのだらう」とつぶやく。森の中からヤベテが現われる。そしてヤベテはナアマと洪水に溺れて死ぬために来た、そうすることが生きることだと愛を告白する。しかしナアマは「へどれ程の愛もエホバの呪ひから私を洗ひ淨めて下さる事は出来ません。私は天使サミアサをも愛してゐる二心の女です。ヤベテ！愛するからこそ立ち去つて父上の許に歸つて下さい」と願う。天使サミアサが来て、ヤベテは倒れる。サミアサとナアマは愛し合う。サミアサに永久に愛するかと問われ、ナアマは永久はカインの族にはなく命の限りと答える。やがて天使サミアサは天に歸る。ナアマは天国を恋し、同時に人の世をも恋する。氣絶していたヤベテが正氣に戻り、再びナアマと愛し合う。ヤベテは天の使いにまで自分を鍛え上げ良人おとこにふさわしくなる、天の使ひ以上に愛するといつもの調子で愛を告白する。ナアマはユバルから受けた衣をヤベテに着せてもらう。そして父上の許に歸つて下さいとせがむ。

血の剣を持ったヤバル登場。ユバルの上衣を纏まとっているナアマをユバルと思つて斬る。ヤベテは「へお前の呪われた血がお前にさせた事を見て見るがよい。倒れたのはユバルではないぞ。お前の淫たがらな心が慕ひ求めていたナアマだとは知らないのか。毒蛇まむしの末裔すえ。」とどなる。ヤバルはナアマのない私は人間ではなく毒蛇だと氣も狂つたやうになつてヤベテを殺そうとする。純情なヤベテはそのナアマの血がついている剣に刺され、ナアマのところへ行こうと自分の胸を抵げる。その時、大雨大風と雷鳴起る。ヤバル天地の猛勢に恐れをなす。

第四幕 水 面

豪雨、雷電、狂風。一面の洪水。舞台の一角にわずかに高地の突角あるのみ。ヤベテとユバルは突角に泳ぎつく。溺れる人々を助けている。ヤベテは「自分が死ぬまではお前達も死なせはしない。」と言って救い上げた人々を励ます。二人の幼児を溺れる男から受け取ったヤベテは「サタンもこの嬰兒みどりこには牙を向けかねるだろう。あゝエホバ。あなたの義ただしさは人の子をつまづかせようとします。」と訴えるように天に向かつて言う。

ノアたちは箱舟からヤベテを見つけ助けようと必死になる。しかし冷酷な義人セムは「亡うしなはれた小羊は捨てておくのがいいのだ。」と以前に父ノアが言った言葉をこの場になっても平然として言っている。最後の突角もくずれ皆が洪水の中に散った後もセムは「エホバの義しさを曲げて弱よい心になるのは罪を犯すのです。」と冷やかに言う。しかしヤベテは二人のみどり児を抱いて箱舟に泳ぎ着く。そして「私はこの二人の爲めに船に泳ぎ着いたのです。ユバル！あの氣高い心のユバルさへエホバの呪ひを受けねばならぬのか。」と嘆いて言う。その時でもセムは「その罪の薬ひとばを水に投げ捨てろ。」とどなってヤベテを責める。そしてセムは「ハムと一緒にやってヤベテからみどり児をもぎ取って水中に投げ捨てる。ヤベテは「死なして下さい。地獄に行かせて下さい。」と水中に跳び込もうとするが父ノア等に押えられる。ノアの妻は我が子ヤベテをひと抱く。ノアはどんなに死にたくとも人は生きねばならぬ、一人一人に与えられた道を進むことである、新しい人の世が待っているとヤベテを諭す。ヤベテは涙して「ナアマよ。：エホバよ。」と遠くを眺めるように眼前を見ながらつぶやく。ノアの妻が静かにヤベテを抱く。

以上が「大洪水の前」のあら筋である。この戯曲は創世記十章までを題材にした有島の想像によって創作された物語であることが分った。創作であることはサムエル・テリエンによる『聖書物語』（高崎毅・山川道子訳監修・創元社）の「ノアとはこ舟」と比較しても、また聖書の四章から九章までと比較しても分るであろう。その相違には有島なりの創作意図があるからである。

第二章 登場人物評

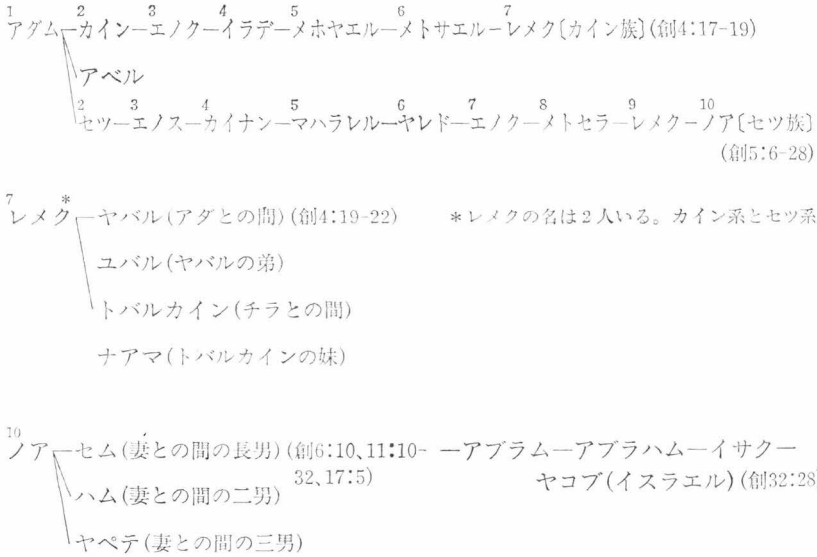
足助素一宛の手紙に、武郎のこの作品に対する創作意図の一部が説明されている（大正五年一月八日）。

「洪水の前」は兄と僕と解釋が多少異つてゐるやうだ。僕はヤベテが方舟に乗つた事を妥協とは思はない。ヤベテのゐないノアの子孫を想像する事は僕には苦痛だ。あすこでヤベテに死んでしまはれてはいやだ。ヤベテがあすこで死ぬといふ事は却て容易な事かも知れないが、夫れは彼が運命の狂ひに對して妥協した事になると思ふ。運命の狂ひが本道に戻るまでちつとこらへてくれる方が僕はうれしいのだ。又一面に於て僕はセムに第十八世紀以前の思潮を、ハムに自然主義的の思潮を、ヤベテに到來すべき思潮を、代表させた積りである。ナアマという $\text{A}+\text{B}$ の境界に對してセム、ハム、ヤベテが取つた態度によつて思潮の向ふ所を暗示しようとした積りだ。

以上の手紙の文章で分ることはこの作品の構想が本多秋五氏も言うように、全人類史的課題を持っていることである（『白樺派の文字』新潮社）。思想的作家・有島武郎の特質と力量が内包されている作品であり、人類の永遠の疑問（一例として何故カインの族が神に呪われたのかという疑問）と取り組んでいる力作でもある。これ等については順に考えてみよう。

この戯曲には有島の二つの面が出てゐる。一つの面は信仰への憧憬と神の摂理の強調である。信仰の人ノア及びその家族とカイン族の話がそれである。この戯曲は有島が聖書（主として創世記）を熟読して彼なりの人間観、歴史観

カイン族とセツ族の系図



を登場人物に託して語り、結局、人間がどんなに
 もがきあえいでも、神の意志又は摂理は人間の意
 志に左右されず実現すべくして実現しているの
 はないかという問題提起と有島の神・絶対信仰へ
 の憧憬とによって書かれていると考えられる。

もう一つの面は世俗的肉的で熱烈な男女愛への
 憧憬である。この二つの面は『三部曲』全体を通
 して言えることである。この戯曲の中心人物であ
 るノアの末子ヤベテとカイン族少女ナアマとの矛
 盾を克服してのどうしようもない激しい恋愛がそ
 の第二の面である。そして信仰の有無に関係なく
 人間ヤベテ、有島の理想的人間像が懸かっている。
 ハヤベテのみないノアの子孫を想像する事は僕に
 は苦痛だ。あすこでヤベテに死んでしまはれては
 いやだ」と有島は言っている。従って読者は自由
 人・放浪人 (Nomad) なるヤベテがひたすらエホバ
 を信ずる父ノアに反逆して、カインの族も同じ人
 間、青年が美人を美人として何故愛してはならな
 いのかとナアマと心中しようとする情熱家ぶ

りに、更に洪水の時は必死にカイン族の人々を助けようとしたヤベテの博愛精神に共感することになる。そしてこの共感に創作目的もあつた。更にヤベテによってエホバ批判という問題提起も意図されている。つまりヤベテにノアとエホバとに反逆させる一面で、歴史の実存でもあるキリスト教を現代人として批判していることになる。信仰憧憬は最初に反発・批判として出発し、その憧憬と反発が止揚して「聖餐」で解決され完結されるという形式で表現されている。

人類学の立場から考えれば問題があるが、聖書によれば現在の全人類は「箱舟から出たノアの子等はセム、ハム、ヤベテであつた。この三人はノアの子等で全地の民は彼等から出て、広がつたのである。洪水の後、これ等から地上の諸国民が分れたのである」(創九の一八、一九。二〇の三二)というようにノアの子孫ということになる。しかしノアもカインの弟セツの子孫である。つまりノアもアダムとイブの子孫である。カイン族とセツ族の系図を参照されたい。そのアダムとイブが創世記三章によれば不信仰という罪を犯す、つまり原罪をもつ存在であるという。洪水後エホバはノアに「人が心に思い図ることは、幼い時から悪いからである」(創八の二一)と言っている。するとアダムとイブの子孫であるノアにも原罪又はカインの族の血で潜んでいたことになる。現在、人類はカインの末裔と一般にいわれている。つまり聖書によれば全人類はカイン族もセツ族も含めてアダムとイブの子孫ということになる。故に聖書を基準に考えれば創世記のノアの洪水物語に登場した人々が元で現在の人類が構成されているということになる。この戯曲は有島が洪水物語を題材にして自己の人間観、歴史的人類観を語ろうとした遠大な作品である。本多秋五氏は、この戯曲を「全人類史的な問題が、有島の個性の特殊な訴えとひとつに溶け合つて造形されており、蒼古晦冥な題材が、現代の空気に生かされて象徴的意義を帯びている」と評している。現在の世界の人類構成の問題は人類学に譲るとして、本多氏の評と有島の創作意図とを考え合わせると、この戯曲に登場するようなタイプの人々が現在の人類を象徴的に構成していると解してもよからう。文学としては登場人物が現在どのような性格の人に当っているかを考えなけ

ればならない。登場人物批評することで戯曲を深く理解し、有島の悠大な創作意図を把握することが出来る。聖書注解書を一部参考にすれば有島の聖書理解を知ることが出来る。それではまずカイン族の人々から順に批評し考察してみよう。

レメク

荒唐なるカイン族の首長。エホバの律にそむいて妻を二人もっている。第二幕洪水の前日に登場。極悪人である自分の長男ヤバルの残忍な野望のため狂人になり剣で殺される。ヤバルにそのかさされて母親チラとヤバルの母親アダを殺して来たトバルカインから妻達であるチラもアダも死ぬ時、夫レメクの名を叫んだと聞かされる。妻達は自分を愛していたのを知る。そして妻を殺された悲しみに加え自分を生んだ母親チラまで殺した息子トバルカインに立腹のあまりその剣で息子を殺してしまう。この時、創世記四章二三、二四節に準じた言葉を叫ぶ。へおムアダとチラ！私の言葉を聞け。私は心の創傷いたでに堪えかねて少年を殺した！カインの爲めに七倍の罰があるのなら、私の爲めに七十倍の罰があれ！このようにレメクは叫んで息子トバルカインを殺した後悔で狂人になり後から長男ヤバルに殺される。「人の血を流すものは、人に血を流される」（創九の六）の言葉通りレメクは近親者の裏切りによって死んだ。レメクとヤバルの関係は、シエクスピアの悲劇『オセロ』の王と忠誠を誓う召使いととの関係に少し似ている。社会的に高い地位にあって、妻と妾とを持つ多情家、堂々と律法を破る権力者が側近者、近親者によって身を滅ぼすタイプの男性は今日でも多い。レメクはこのようなタイプを象徴している。

カイン族の人物批評中であるが、戯曲と聖書の違いについて少し整理しておこう。創世記にはヤペテがナアマを愛しているとは書いてない。レメクが「わたしは若者を殺す」と聖書にあるが、その若者がトバルカインであるとは書いてない。第二幕でレメクがトバルカインを剣で斬って「私は心の創傷いたでに堪えかねて少年を殺した！」というのは、四章二三節にある「受ける打ち傷のために、わたしは若者を殺す」に当たっている。そして若者を少年トバルカイン

であるとしたのは、武郎の自由な聖書解釈によつてゐる。四章二一、二二節では、ヤバルの弟がユバル、トバルカインの妹がナアマとある。ユバルやナアマはアダとチラとが天使と密通して生んだ子であるとは書いてない。天使との密通の件は武郎のネビリム解釈によつてゐるので次のアダのところを考えよう。

ア　　ダ

レメクの第一の妻。第二幕でトバルカインの話の中でアダは語られている。レメクとの間にヤバルを産む。しかしその息子ヤバルに裏切られる。つまり父レメクを裏切つて天使と密通した姪婦とのしられる。ヤバルにそのおかせられたトバルカインに、後から剣で殺される。ヘレメクと夫の名を叫びながら死ぬ。極悪なヤバルを生んだが、天使と密通して寛大で心の優しい芸術家ユバルをも生んでいる。四章の二〇節に「アダはヤバルを生んだ」とあつて「アダはユバルを産んだ」とは書いてない。ヤバルの「弟の名はユバルといつた」とある。四章一九節から二二節は次の通りである。「レメクはふたりの妻をめとつた。ひとりの名はアダといい、ひとりの名はチラといつた。アダはヤバルを産んだ。彼は天幕に住んで、家畜を飼う者の先祖となつた。その弟の名はユバルといつた。彼は琴や笛を執るすべての者の先祖となつた。チラもまたトバルカインを産んだ。彼は青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者となつた。トバルカインの妹をナアマといつた。」普通、この記述によれば、ユバルはレメクとアダの二男、ナアマはレメクとチラの長女と解せるだろう。しかし戯曲にあるアダが天使と密通してユバルを産んだという発想は、ヘアダはユバルを産んだ」とは書いてないからという理由だけではない。この発想のヒントに六章四節がある。一節から書いておくと次のようである。

人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の好む者を妻にめとつた。そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であらう。」そのころ、またその後にも、地にネビリムがいた。これは神の子たちが人の娘

た、ちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であり、有名な人々であった（点は著者）。

以上によって武郎は神の子を天使と、人の娘たちをアダとチラとに解していることになる。そしてアダとチラが天使と密通して生んだユバルとナアマはネピリムに相当させてある。少し話が横に入ったがアダの人物評をまとめると、彼女は姦淫女、浮気女である。アダは「裝飾」を意味するので派手な女となる。そして肉親によって不幸になるタイプでもある。

ネピリム (נפירימ, ה'פילימ) 創六の四、民数一三の三三)とは、巨人の種族、洪水前の巨人・秀れた人という意味である。私生児、または墮落漢の意で、男は偉丈夫で、女は絶世の美人である（内村鑑三聖書注解第一巻、聖書語句大辞典、教文館）。士師記一章一節にある強い勇士、英雄、ギボールハイール (גבור, גבור) イザヤ五の二二と類似した意味である。戯曲では、ユバルは立流な人格者、ナアマは絶世の美人として登場している。ユバルとナアマをネピリムとして登場させたことがこの戯曲の特徴である。そしてこの戯曲が深遠な思想を持っている理由の一つは、ユバルとナアマが姦淫によるネピリムとして存在していることにある。この件は彼らの人物評で論じよう。ユバルとナアマをネピリムと解するのは芸術家として有島の自由である。聖書学の立場で神の子を天使と見做すのは正当か否か。マタイ伝二二章三〇節に天使は結婚しないとある。しかし私は旧約聖書専攻者を通して調査した結果、創世記六章の神の子に限り墮落した天使と解釈するのが定説であることを知った。たまたま有島の創作上の自由が聖書学から見ても正しかったが、間違っていたとしてもこの戯曲の価値を左右することにはならない。宗教文学として聖書神学のためにこの戯曲が書かれてあるのではない。

ヤバル

レメクとアダとの間に生れた長男。彼は天幕に住んで家畜を飼う者の先祖となっている（六の二〇）。自分がカイン族の首長になるためには親、兄弟をも殺す。極悪人らしく知恵もある。まず緻密な殺人計画を考える。多血漢トバル

カインに、われわれの母たちは父レメクを裏切った淫婦であり、姦淫の子達を我々よりも愛している、だからこの憎むべき淫婦を殺せとそそのかす。へ私は父上の命のよい護り手でなければならぬと忠実な息子のように思わせている。トバルカインはカイン族の主となるためには親兄弟もないのですと父に偽りの告げ口をして父を立腹させておき、トバルカインがそのかさされた通り一本気で母達を殺して来れば父は怒ってトバルカインを殺すであろう、父の落胆する隙に最後の父を殺そうという残忍極まる計画は成功する。先祖カインにも勝る冷酷なヤバルは美少女ナアマを自分のものにしようと考えている。戯曲では実際に妹ではない。野心を完全に実現する一歩手前でユバルと間違えてナアマを殺してしまう。そして洪水に消える。二、三幕に登場。第二幕で父レメクに忠誠ぶりを示す言動は悪知恵に秀れた極悪人の典型として見事に描出されてある。「オセロ」の召使いを連想させる。他を犠牲にして悪知恵を働かせて独裁的権力主義者になるタイプである。

内村鑑三（聖書注解全集第一巻、以後内村説はこの書による）によれば、ヤバルは殺伐的牧畜業の開始者で、彼の子孫は後日ベドウィン族となりて旅人の掠奪に従事しているとある。義人アベルの牧畜は綿毛乳汁の供給が目的であり兇猛なるヤバルの牧畜は豚牛を殺し、その肉で利を得るという目的があるとある。伝道者内村のヤバル観と芸術家有島のヤバル観とはこの場合、本質は同じになっている。

ユバル

アダと天使との間に生れた若者。女のように都びたる容姿。洪水の第四幕にもヤペテと共に出るが、主に第三幕に登場する。琴と笛をとる凡ての者の先祖となっているのは創世紀四章二一節と同じである。芸術家らしく世事には無欲である。へ天國を逐われたものはこの荒くれた土の上に、天國の面影を造り出して慰むのがせめてもの心やりだ。死ぬまで若い心を失ふまい。天國に捨てられても地獄を捨てはならないといかにも理想家、芸術家らしい向上心を語っている。姦淫の母アダの死に際してもへ一人の天の使いが墮落するよりも母上の死は傷ましい。母

上はそれ程人間の中のよい人間であつたが、と云つて母を慕う。ナアマとヤペテとを二人だけで会わせようと便宜を計り、ナアマに自分の豹の上衣をサタンからの守りの衣として、あなたを慰める者に着せなさいと渡す。ナアマをして狼の中の羊と言わしめたほどの同情心篤いヒュミニストである。本多秋五氏も言うように、この劇における第二の *Lothar* である。第一のローファー—ヤペテに準じて有島の分身となつてゐる。ヤペテがへあの氣高い心のユバルさえエホバの呪ひを受けなければならぬのかと叫んでいるが、これは有島の代弁であつて、カイン族の人々のみが何故エホバに呪われるのかという問を提供していることになる。この人類の永遠の疑問については後で論ずることにする。ユバルには学問なり芸術なりの道を極めんとする真摯な人生態度がある。寛大な人道主義者、優しい思いやりのある人で、一般世事にうとい、タイプの人を今日想像出来る。鳶が鷹を生んだというように親に似ず秀れた人物ユバル。ユバルは物静かでヤペテのように激情家ではないが人道主義者、ローファーという点で似ている。ユバルのような善良な男が姦淫の子であるとは皮肉であらう。本多秋五氏は、ネピリムであるユバルとナアマについて次のように言っている。

大洪水はノアの昔にあつたばかりではない。それは、あるいは明日の歴史であるかも知れない。そのとき、いわゆる正義なるものは、果たして正義のすべてであらうか？ 天使は地上の女と交わり、女は天降る天使のまゝに我にもあらずひざまずく。女はその二心を自分でどうすることも出来ない。人間と思えぬほどの立派な男女が天くだりに呪われたものとされている。また、それほどうすぐれた男女が不可思議な邪淫とむすびついている。神の律、世の律とされているものは、微妙な曲線を描く人間の生きる営みをさまで誤りなく裁きうるものなのか？

善良そのものの人格者ユバルも、カインの族に属しているためエホバの呪いを受けなければならぬという問題、今日どのように理解すべきであらうか。非のないような人格者が神信仰を拒絶して他界したという話がある。ユバルの場合、自己徹底否定という信仰の出發がなかったからであると答えるならば、新約的解釈として一理あらう。カイ

ン族とエホバの呪いに関しては最後に論じたい。

劇のユバルは芸術家であり武郎の同情を得て書かれてあるが、内村鑑三のユバル観は良くない。「弟のユバルは性情弱なるが故に、琴と笛とにその情情を訴えてその憂悶をやらんとせり。天の真理の心琴にふれてひとり黙想して宇宙の調和をたのしみ得ざるがゆえに、その憂愁を音声にあらわし、これを楽器に移して靈感の欠をおぎなわんと欲す。深く感ずるあたわず。……音楽の多くは娯楽のためなり」と信仰に対して芸術軽視の傾向のあった内村らしい論がある。カイン族の中のユバルを、有島は自分の創作上の都合で好人物に描いてある。内村説にせよ、*Das Alte Testament Deutsch* による説にせよ、カイン族の人物を好評してある聖書注解書はない。私が創世記の注解書として日本人のものでは内村のを参考にしたのは、聖書学的に定評があるばかりでなく、有島との宿命的因縁を考えてのことである。

チ
ラ

レメクの第二の妻。自分が天使と密通して絶世の美少女ナアマを生む。自分と夫レメクとの間の子トバルカインの剣に殺される。アダと同様、張り裂けるように悲しい声で夫レメクの名を叫びながら死ぬ。チラがナアマを生むという話を作るヒントは六章四節である。アダと同様、第二幕でトバルカインの話の中で語られている。アダが「裝飾」という意味で派手な女なら、チラは「影」の意味で地味な女である。妾として日影の女として苦悶するタイプがチラの今日的存在とならう。

トバルカイン

チラとレメクの間にも生まれた。四章二二節にあるが、彼は青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者となっている。トバルカインは現代ではどんなタイプか。腕力は強いが理性があまり働かないため誘惑されやすく、大犯罪を犯した後悔に苦悶するタイプである。単純なため人に裏切られ損をするタイプであらう。第二幕でヤバルにそそのかされ、洪々自

分の母、ヤバルの母を剣で殺し、父を裏切った淫婦を殺したという手柄によって父レメクから祝福を得たいと苦しんでいる。先祖のカインの心を知る。母殺しの恐ろしさに苦しんでいる時、冷やかで落ち着いているヤバルを憎らしげに眺める。父に母殺しの様子を告げ、へこの大地にかじり付いても死にたくない」と叫びつつ父に斬られる。

内村のトバルカイン観は次の通りである。「カインはたぶん棍棒をもってその弟アベルを打ち殺せしならん。されども「文明」の進歩と同時に人は棍棒にまさる殺人具の必要を感ずるにいたりしならん。ここにおいてか、レメクの子トバルカインは大なる発見を社会に供せり。銅と鉄とをもって製せられたる武器の発見これなり。彼の大なる発見によって、殺人は容易なるわざとなれり」。注解書も戯曲も青銅や鉄の刃物で人殺しするトバルカイ像であることに変わりない。違うところは次の点である。戯曲の方はヤバルを極悪人にしてあるため、トバルカインがどこか抜けている人物でないと劇にならないのである。この点が有島の創作上の発想であることに注目しよう。

ナアマ

この戯曲のヒロイン。チラと天使との間に生れたカイン族の中の絶世の美少女。墮落天使を父とし、レメクの第二の妻チラを母とした二重存在であるためか、天国や天使サミアサを恋したり、人の世やヤペテを恋したりするナアマである。天使サミアサが降臨すると人間ヤペテはどんなにもがいても気絶してしまう。ヤペテが気絶している間、ナアマは天使と愛し合う。その中で、へ私はやがて土に歸ります。あなたの御胸に参れる爲めばかりにも永久に生きとう御座います」と言うナアマの言葉がある。天国の永遠に対し人の世の有限を暗示させ、二重存在のナアマらしい言葉である。天使が地を離れナアマが人間世界の状態に戻った時、ヤペテを目覚まししている。浮気娘であるが呪われて自分のために、愛するヤペテが箱舟に乗り遅れてはならないと身を引く気持がいじらしい。ユバル同様ナアマもネピリムである。絶世の美人が姦淫の子であることはよくあることである。ナアマは現在の女性にたとえればどういうタイプの女性になるか。ナアマとは「愛嬌」の意とある。社交界のトップレディ、犯罪の影に美女ありきタイプの

女性になろう。

以上、カイン族の人物批評をしてきた。極悪人ヤバルを除いて少し人間味のある人物が多い。聖書の人物に名を借り有島の創作上の人物であるネピリムのユバルとナアマは魅力ある人物としてカイン族の中に属している。しかし内村鑑三のカイン族評は徹底している。「カイン族が人類社会に供せる貢献物は神に頼らずして単独をなぐさめんための制度（都市）、肉食して肉情を昂進せんための職業（牧畜）、娯楽の具（楽器）、殺人の機械（武器）、敵愾心の発表（軍歌）、これなり。しかして二十世紀の今日、世の文明となえらるるものは、多くはこれカイン族のこれらの発見にさらに改良を加えたるものすぎず。文明の進歩とは、実はカイン族の進歩なり」注解書の説を参考にするのは信仰と芸術との立場の相違があったら、その相違を明確にすることによって、芸術の独自性を発見し認識するためである。次にセツ族の人物をノアから順に批評し、現在どのようなタイプの人間に相当するか考えてみたい。

ノア

アダム生れてから七千二百二十五年目の二月十日、アダムから十代目、セツから九代目、六百歳になる一週間前のノアはエホバから洪水のお告げを受けたことを息子達に語って聞かせる。第一幕に登場する。末子ヤベテがカイン族の美少女ナアマに恋をしているのを戒める。何よりもエホバの御心に従順であることを説く。純朴な農夫にして信仰の人ノアなのである。ノアは特に末子ヤベテに気をかけていた。第四幕でノアが洪水の中からヤベテを箱舟に助け、ヤベテがみどり児を追って自殺しようとするのを押えつけて人生について論しているところがある。私は人々のこの苦しみを見てゐるよりは死ぬ方がどれ程幸ひであるか知れないと思ふ。けれども生きねばならぬ。さうしてお前も生きねばならぬのだ。セムにはセムの行く道がある。ハムにはハムの行く道がある。お前にはお前の行く道がある。洪水の後に現われる新しい人の世はお前を待ち望んでいるのだ。自殺してはならぬ、生きねばならぬと人生に積極的態

度で臨むことを奨め、洪水後の世はお前を待ち望んでいるとヤベテを励ましている。兄弟一人一人各自の生き方があるのだが来るべき新しい世は有島の意図としてはお前達でなくヤベテを待ち望むことになる。この点において有島はヤベテに到来すべき思潮を代表させ、そしてヤベテをこの劇の主人公にしているわけである。ノアがヤベテに期待するのは裁きではなく許しであり、憎しみでなく愛であり、律法ではなく福音であることを、この劇では暗示してある。ノアは神に忠実であった。劇でもノアは信仰一筋の人として描出されてある。ヤベテに期待するノアは現在のどのようなタイプの人に相当しているのだろうか。有島の意図を推測して代弁すると、次のようなタイプの人であろう。ノアは時代を越えて信仰の人といわれている。父性愛豊かで愛妻家であり理想的キリスト者といえるのであろう。

以上は戯曲の中のノアについて論じたのであるが、キリスト教の立場で少し補足すれば次の点であろう。確かにノアは信仰の人であるが、絶対に正しい人ではなく罪人の一人であるという点である。「その時代の人々の中で正しく、かつ全き人であった」(六の九)とあるように相対的に正しい人という意味である。ノアが救われたのは「主の前に恵みを得た」(六の八)とあるように恵みによっている。以上の補足がなければ戯曲の中のノアを聖人視する傾向が生じないとも限らないであろう。次に内村鑑三のノアと洪水に関する論を参考として一部引用しておく。

レメタに一子生まる。彼その名をノアと名づく。これを訳けば「安息」の意なり。「安息」のノアによりて、神の安息はふたたび疲れたるこの世に臨まん。ノアはその時代の人類の希望なりき。されども革命は、レメタが望みしがごとくに、すみやかに来たらざりし。ノア生まれて五百歳、彼にセム、ハム、ヤベテの三子生まれて、革命の時期はようやくせまり来たりぬ。社会はついに改造せられざるべからず。悪人はついに一度は全滅せられざるべからず。これ人類に臨みし最始の大革命なりし。しかして最始の大革命は、勇士の剣によりて来たらず、預言者の言をもって来たらずして、天よりの大洪水をもって来たり。

文学者としての内村鑑三の文語文体は美しくリズムミカルである。悲恋を織りませカイン族に同情する有島洪水と、

悪人全滅、人類最始の大革命たる内村洪水との相異はそのまま二人の性格と信仰の相異となっている。

セ ム

ノアの長男。第一幕で父ノアと同意見を持つ。徹底してカイン族を人殺しの子孫として憎み攻撃している。エホバの戒を破った不義の族の一人にでも同情すればその人もエホバの呪いを受けることになると思じている。第四幕では洪水の中の弟ヤベテを救い上げようとしめない。カイン族の嬰兒二人を抱きかかえ、箱舟に泳ぎついたヤベテから、〈その罪の薬を水に捨てろ〉とどなって、ハムと二人でその嬰兒をヤベテからもぎ取って水中に投げ捨てる。エホバの義しさを曲げて、弱い心になるのは罪を犯す」という考えから情無用、冷酷な行動をする。エホバの戒を守る律法の鬼である。故に律法に従わない者は、肉親であろうと誰であろうと死に罰せられると信じている。旧約時代の典型的律法主義者がセムになっている。冷酷な義人セムは現在どんなタイプの人間に相当するのであるか。有島の意図を代弁するならば、セムは徹底した自己中心主義者であろう。堅過ぎる敬虔主義者が神に反逆した場合、極悪人ヤバルのようなエゴイストになりかねない。聖書の神が厳しい律法を表に激しい愛を裏に隠しているならば、セムの人生は一面だけの偏狭で残忍なものになるわけである。

ハ ム

ノアの二男。背丈け低い脂肪質の体格。第一幕でヤベテが箱舟など用がないと言つて去る時、ハムもヤベテに同行しようとしている。〈天の使いさへ地に降つて人間の女に戯れかゝる時節に、洪水が地の上にはかり起るとは、片手落ちなお審判……〉と言つてエホバを批判する懐疑家である。ヤベテと組んで父ノアと兄セムと対立しているが、四幕ではセムと組んでヤベテが助けたカイン族の嬰兒二人を奪つて水中に投げ捨てている。ハムのように煮え切らない日和見主義者は今日でも多い。二股膏藥的存在で要領良く損をしないタイプであり、一貫した考えない意志薄弱な卑怯者タイプであろう。有島は、『リビングストーン傳』の序で、罪の責任は神にもあると批判しており、更に意志

薄弱な卑怯者とあれば、有島自身がハムの分身のようにも思われる。しかし立場を宣言する有島は本質的には戯曲のハムの分身ではない。

ヤペテ

ノアの三男。均整のある男性的姿の青年。「大洪水の前」の主人公ヤペテは全幕に登場。カイン族の絶世の美少女ナアマと恋仲である。まず第一幕で、ヘカインの族も人です。その人々の中に生れた美しい娘達を私は何故榮えとしてはならぬのでせう。人の持つものを私も持たうとするのです」と父ノアに訴えている。皆同じ人間、美しいものを愛するのは当然であると言う。感激しやすい青年ヤペテは博愛主義者である。憐れな盲者たちに砂金を与えようとする人道主義者である。第三幕でヤペテはナアマに熱烈な愛の告白をしている。ヤバルに殺されたナアマの後を追って、自分もナアマと同じ剣で死のうとする。愛する者たちの死ほど清いものはないと、「惜しみなく愛は奪う」で有島が述べているように、作者の分身ヤペテは心中しようとしている。更に第四幕では最もヤペテらしさが発揮されている。洪水に溺れるカイン族の人々をユバルと一緒に突角の上で助けている。また、ヤペテは溺れる二人の男たちからそれぞれ嬰兒をあずかり箱舟に泳ぎ着く。そしてセムとハムが嬰兒を水中に投げ捨てた時、へ私はこの二人の爲めに船に泳ぎついたので。死なして下さい。地獄に行かせて下さい」と叫んで入水しようとする。溺死した男たちに対する強い責任感と愛に生きる純心な理想主義者ヤペテの本性が理解出来る。劇のこの場面まで来ると、観客の関心はヤペテに集中するであろう。ヤペテはいわゆる義人よりも罪人を愛した新約的人物になっている。ヘヤペテに到来すべき思潮を代表させた積りである。ナアマという^{ホノ}の境界に對してセム、ハム、ヤペテが取つた態度によつて思潮の向う所を暗示しようとした積りだ」と有島は説明しているが、ヤペテに到来すべき思潮とはどういう思潮であるのか。旧約時代という荒野にて、予言者のようにヤペテがやがて到来すべき理想社会の実現を暗示していることになるのか。詳しくは「ノアの息子たちと思潮」第四章で論ずることにするので、ここでは簡単に触れておきたい。ヤペテなる青

年の言動を考えれば、大体次のように推論出来よう。新約の福音時代における罪の許しと隣人愛、民族の差別なく自由・平等という思潮を意味しているのであろう。悲しむ人に同情せずにおられない有島の分身がヤベテである。信仰の有無に関係なく人間ヤベテに有島の人類に対する理想と希望とが懸けられてある。本多秋五氏は、「ヤベテは旧約の時代に設定された *loafer* であり、この戯曲は *loafer* の悲劇である」と述べている。ヤベテの苦悩は有島の苦悩でもある。それで次のように本多氏の言葉を言い換えることが出来る。「有島は新約の時代に設定された *loafer* であり、彼の人生は *loafer* の悲劇である」と。へヤベテのゐないノアの子孫を想像する事は僕には苦痛だ」とまで強調した有島が、いかにヤベテに期待するところが大きかったかが分かる。ヤベテを通しての有島の主張は、新約的隣人愛の強調であろう。この点で、この戯曲はキリスト教接近作品であり、「惜みなく愛は奪う」の反動になっている。劇の最後にヤベテが母に抱かれながらへナアマよ。……エホバよ」とへ速きものを見る如く眼前を見やりながら言っている。ナアマを思うヤベテであるが、最後はへエホバよ」と呼びかけている。この呼びかけによって、父ノアとしてエホバの神に反逆しつつも、ついには信仰の道に生きる将来のヤベテの姿が暗示されている。創世記九章二十七節に「神はヤベテを大いならしめ」とある。ヤベテが最後にへエホバよ」と呼びかけてこの戯曲が終つているところに、有島の一面である信仰への憧憬が読み取れよう。

ノアの妻

一、四幕に登場。第一幕で不信仰なヤベテにへ悔い改めろ」と言う夫ノアに続いて、へヤベテお前どんな正しくない事を父上の前に仕でかしたのだらう。私達の命が長くないのをお前は忘れるやうな子ではないではないか。おゝエホバ!」と言っている。四幕では洪水の中を泳いでいる息子ヤベテを見出しへセム、ハム。セムは何故働いてくれないのだ」と心配しながら、へもうすぐだ、ヤベテ、命の限り泳いでおくれ」と叫び船に上ったヤベテをしつかりと抱いている。地味であるが良妻堅母そして優しい母として、信仰の人ノアの妻らしい女性となっている。

乙

カイン族で名前を与えられていないが一、二、三幕と登場。第一幕では乙は老人夫婦アダムとイブから生れた**枇**のような弱虫がセツだとセツ族の先祖をひやかしている。第二幕では、ヤバルがナアマに恋をしてしているとヤペテに告げ口をしてヤペテを驚かしている。またヤバルにはこのエノクの地にヤペテがナアマに会うために侵入していると告げ口をする。ヤバルにとって恋敵ヤペテの出現は謎の石であると、謎めいた言葉を言っている。第三幕でもヤペテのエノク侵入をユバルに告げ口している。何か事あるごとに顔を出して、告げ口したり噂話をする主体性のない寄生虫的存在が乙となっている。いつの世にもこういう人間はいるであろう。

以上、登場人物の批評をして来た。研究資料がほとんどないため、冒険な論となっているところがあるであろう。後の研究の参考のための開拓論を進めて来た。

(1) 『キリスト教大辞典』、ファイファー著『旧約聖書緒論』モーセ五書（伊藤進、石井良博訳、新教出版社）等の書籍によると、ノアの洪水の記述はJ典、P典と言われる資料によっている。モーセ五書は紀元前四〇〇年頃に正典化されているが、ノアの洪水の時期は正確には分らない。紀元前二千年以前であると推測されている（ファイファー『旧約聖書緒論』総論、中沢洽樹訳、バルバロ訳『聖書』ドン・ボスコ社、等の書籍を参照）。洪水時期は氷河期直後であったという地史学者もいる。時期判明しないとなると、ノアの洪水時期に他の五大州における人類が生存していたか否かも分らない。内村によれば、「神はノアの一族に、救われるべき人類の全体を代表せしめたまいしごとくに、また世界の一小部分たるその時代の開明国たるバビロニアの付近をして、全世界を代表せしめたまいしなり」とある。つまり、ノアの家族と当時のノアの世界で、全人類と全世界とを代表しているという説である。要は創世記の物語を信仰の書とするか歴史の書とするかによって解釈が違って来る。現在、旧約聖書学界では今だに内村の象徴説が認められており私もその説に同じであるので本文で次のように論じてあるのである。すなわち「聖書を基準に考えれば」とは「聖書の記事をそのまま信ずる立場に立てば」ということであり、この立場に立てば、

「洪水物語に登場した人々が元で現在の人類が構成されている」と論ぜざるを得ないのであるが、私は現在の聖書学界で定説となっている象徴説の立場であるので本文の聖書を文字通り認める立場の後で「この戯曲に登場するようなタイプの人々が現在の人類を象徴的に構成している」と論ずるわけである。

創世記十章にはミツライム（エジプト）、レヘビ（リビヤ）、カフトリ（タレタ）、シバ（アラビヤ）等地中海沿岸と中近東地域に関係する言葉がある。人類学や考古学にとつて十章は歴史的文献として参考資料とはなるであろう。

(2) ゲルハルト・フォン・ラート（Gerhard von Rad, 1901～）は、彼の代表的著作 ATD (Das Alte Testament Deutsch, Vandenhoeck 1967) の創世記 (Das erste Buch Mose, Genesis) 九二頁で「六章二節にある「神の子たち」を天使存在 (Engelwesen) と私訳している。ルドルフ・キッテル (Rudolf Kittel, 1853～1929) のヘブル語原典旧約聖書校訂本《Biblia Hebraica》(1906) にある בְּנֵי הָאֱלֹהִים (ベネ・ハエロヒーム) を天使存在と私訳しているのである。ベネは複数で息子達の意であるから、ベネ・ハエロヒームを直訳すれば「神の息子達」となる。ルッター訳で die Kinder Gottes となっている。しかしラートは次のように注釈している。

ベネ・ハエロヒーム (bene ha'elohim) は、古代人の觀念によると天の世界を住まいとしていた。彼らは折あることに神の側に現われ、神から特殊な命令を受けていた。

更にネピリムについては、巨人は天的な者と人間の娘との結合の結果である、と注釈している。天上の住人が地上の娘を妻にめとることから墮落した天使と解されるわけである。六章二節の「神の子たち」について調べる場合、ATD の外に次のような注釈書がある。

Gunkel, H., Genesis, Vandenhoeck, 1901.

Westermann, C., Genesis of account of creation, Fortress.

第三章 思想的考察

——有島の問題提起——

昭和四十八年度全国大学国語国文学会春季大会研究発表要旨に、「何故カイン族のごとくがエホバの憎しみを受けねばならぬのか」というヤベテの問題提起は聖書学の立場からは否定されることを論証し、この提起についての有島の聖書解釈の誤解を明らかにしておきたい。」とある（『文学・語学』第68号、昭和48・8、三省堂）。それで、①有島は晩年運命論者になっていること、②ヤベテに叫ばせた有島の問題提起は聖書学の立場からは否定されること、③この問題提起は芸術の立場から見れば戯曲構成の点で成功した提起であること、等を論じようと思う。

創世記ではなくこの戯曲に限っていえることは、本多秋五氏も指摘するへなげカイン族のごとくがエホバの憎しみを受けねばならぬのか」という全人類史的問題である。ナアマをして「狼の中の羊」と言わしめたほどのユバルでさえ、カインの末裔なるがゆえにエホバの呪いを受けなければならないのは何故であろうか。セツ族もカイン族も同じアダムとイブの子孫であるのに不平等であるというエホバ批判をヤベテによって問題提起している有島の意図があるであろう。話の筋は、カイン族のみ呪われるのでヤベテとナアマがエホバに不平を訴えるように構成されている。このような構成であるから、劇として興味もあり問題提起も成り立つわけである。この構想は有島の自由な創作によっているのであり創世記にはない。すると本多氏の指摘の問題は作品と作者を調べることで解くことになる。し

かし作品を調べてもどうも解答が出ない。すると有島のキリスト教理解と信仰、人生観、執筆当時の心境等によって問題解決することになる。私は先にこの作品には有島の二面が出ていて、その一つの面として、「信仰への憧憬と神の摂理の強調がある」と述べた。この神の摂理という言葉は、積極的肯定的なキリスト教の場合の意味と違って、有島の場合は東洋的諦観の感もあるが運命という言葉に相当している。有島の時代環境、性格にもよるが有島の生涯そのものが運命にあやつられていた。主に晩年であるが、有島自身も「運命の訴へ」「或る施療患者」「斷橋」その他の作品で人間の自由意志以上に運命の力によって人生は左右され勝ちであることを論じている。有島にとって、人生は運命か自由意志かの問題は『三部曲』執筆以前、留学中からの問題であった。「大洪水の前」発表二ヶ月後、大正五年三月に発表された「首途」(「迷路」序篇)に登場するスコット博士と有島の分身Aとの対話がこの問題を扱っている。教会で予定説の説教を聞いた帰り一本の桜の樹の下で、へ貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた靈魂だぞ」という悪魔の声を聞いたというスコット博士は運命論者である。博士が自殺したと知って人生自由意志論者Aが驚くところで「首途」は終わっている。この話は日記(明治三十七年八月十七日、九月二十六日)によるとほとんど事実である。留学中に有島は贖罪論について、人の罪は神に責任があるという意見を持つようになった(『リビングストーン傳』の序)。この神批判と「首途」のショック(留学中の体験)とがヤベテを通してエホバに不平等を訴えさせる遠因となっている。へカインと一緒に永遠に呪われた」と信じた運命論者スコット博士を念頭に「大洪水の前」のカインの族達は描出されてある。かくして「首途」と「大洪水の前」とは深い関係がある。帰国後も運命論者スコット博士の自殺は頭を離れなかった。帰国一年目、明治四十一年五月三日の日記に、へ今朝、ピストルを買った。余の魂は余から離れて行く。怖ろしい事だ」という自殺をほめかせた記述がある。「大洪水の前」完稿は安子他界後である。「首途」Aの気持は次第に変わり、運命論者の気持に移っていた。前述「神の意志又は摂理は人間の意志に左右されず実現すべくして実現しているのではないか」とは有島の言葉でいうと運命に近い。有島の問題提起であり本多氏の指摘にもあるへ何故

カイン族のことごとくがエホバの憎しみを受けねばならぬのか」に対する答えは、安子の死をともしなう作品完稿までの有島自身の運命論的、人生観によっているという答になりそうである。この問題提起が正当であると仮定して、聖書による解答となれば、「神はモーセに言われた、「わたしは自分のあわれもうとする者をあわれみ、いつくしもうとする者を、いつくしむ」。ゆえに、それは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである。ああ人よ。あなたは、神に言い逆らうとは、いったい、何者なのか。造られたものが造った者に向かつて、「なぜ、わたしをこのように造ったのか」と言うことがあろうか。陶器を造る者は、同じ土くれから、一つを尊い器に、他を卑しい器に造りあげる権能がないのであろうか」(ローマ書九・十五、十六、二十、二十一)により神の絶対主権によるという答になるであろう。

有島は悲観的運命論者であっただけではない。分身ヤベテにエホバ批判させながらも、ヤベテ自身の言動は新約的である。棄教後もキリスト教に時々接近していることは、彼の作品、日記、言動等によって幾度も繰り返し指摘されてきている。神の絶対主権に対する限りない憧憬も有島にはあった。その一例が「聖餐」である。先の問題提起は、「大洪水の前」という創世記に題材を求めたにしろ独立した創作作品を通しての問題提起である。故に、問題そのものを聖書学から見て正否いずれであるかを検討する必要もないはずである。しかし、聖書による答えとして神の絶対主権を答えとしてから、私は何かスッキリしないのである。神がえこひいきするはずがないからである。結論を述べると、この問題提起は聖書学から見ると間違っている。

アベルとその供物をかえりみても、カインとその供物をかえりみないのはどういう理由からかという創世記四章の疑問は、今でも時々起こっているし、有島の問題提起と彼の聖書理解にも関連するのでここではっきりさせておこう。聖書注解書は多くあるが、四章についてはどれもほぼ同じ解説をしている。ここでは、相手が有島であるので内村説を引用することで答えとしたい。(有島が棄教した理由の一つが内村のカルヴァニズム的キリスト教に接近したからと

いう最近の説は認めたい。しかし内村注解書を引用する際には、その引用文が他の注解書と比較してもほぼ同じ内容であるという学界定説という意味で引用してある。世界の内村といわれるほど特徴があるのだが、内村のキリスト教という狭い意味ではない。）

作物は単なる供物であつて、畜産には供物以外に犠牲いけにえの精神がこもつた。そして犠牲は代償を意味し、ひいては贖罪の意味がこもつた。アベルがはつきりとその理ことをさつたかいなやを知らずといえども、たぶんおぼろげにそのことに感づいたのであろう。すなわち、罪人なるアダムとエバの子として、聖きエホバの神に近づかんと欲すれば、手に贖罪の印記をたずさざるべからずと。たぶん彼が牧羊に従事した最初の動機がここにあつたのであろう。すなわち羊を飼育し、これを神にささげて、その嘉納にあずからんとの心根よりして、この業に従事したのであろう。そしてその目的が達して彼は喜び、神もまた喜びたもうたのであろう。かくのごとくに見て、エホバがアベルの供物をかえりみたまいし理由がよくわかる。しかるに、カインにはアベルにありしこの心がなかつた。彼はただ労働に従事した。そして労働の結果を神にささげた。彼はそれだけで神に対する人の本分は尽きると思つた。彼に罪の心配がなかつた。民が国に税を納むるがごとくに、納むればそれで義務を果たしたと思つた。かくのごとくにして、カインの神に対する態度は全然律法的であつた。すなわち権利義務の関係であつた。なすべきをなせば、それで事は足りると思つた。神がカインとその供物をかえりみたまわざりし理由はここにあつた。羊は神が定めたまひし犠牲であつて、土の産は人が選みし供物である。羊は代贖を意味し、土よりいでたる果はおのが義を代表する。アベルは神のさだめにしたが、自己の罪を認め、これを羊のからだに託して、燔祭の供物として神にささげたのである。カインは神のさだめをかえりみず、おのが正しと信ずるところにより、おのが手に作りしものもちきたり、神にむくゆる心をもつて、これをささげたのである。しかるに「エホバは、アベルとその供物をかえりみたまいしかども、カインとその供物をかえりみたまわざりき」といふ。

以上が内村の説である。説明の必要もないと思う。次に旧約聖書学の恩師渡辺善太氏の講義から著者のノートを要約しておく。

旧約聖書物語を理解するには、その当時の社会学的背景を調べる必要がある。当時の宗教では動物犠牲を供物とすることであった。それをしなかったカインを神はかえりみなかったが、特別にカインを憎んだわけではない。六章五、七節、十三節で主が地の上に人を造ったのを悔い、すべての人を絶やそうと決心したとある。カインの族だけがエホバの憎しみを受けたのではなく、セツ族も含めすべての人が旧約時代ではエホバの憎しみを受けることになったのである。

以上、内村、渡辺両氏の説を要約すると、カインとアベルの神に、対する心構えの相違が原因で、神はアベルの供物を顧みて、カインの供物を顧みなかったということになる。動物犠牲の供物が当時の風習であった。この供物には犠牲、代償、贖罪の意味があったわけである。アベルはこの神の要求する供物を捧げた。つまりアベルには神に従順な信仰的心構えと態度があった。一方、カインは自分の判断で勝手に供物を定めて神に捧げた。カインの神に対する態度は儀礼的、律法的であった。つまり彼の根底には自己中心の気持があり神の声を聞こうとする信仰的心構えがなかったわけである。しかしカインの族だけがその後エホバの呪いを受けたのではない。セツ族も神の憎しみを受けねばならなかった。そのことは内村、渡辺両説参照で理解できたし、更にイスラエル民族の歴史が何よりも明確に実証しているわけである。(第二部「サムソンとデリラ」第五章にある「旧約における愛」要約文を参照されたい)

戯曲「大洪水の前」で、有島はヤベテを通して「何故カインの族のみが呪われているのか」という神批判をした。しかし、有島の神批判の問題提起が聖書学から見て間違った提起であっても、それによって戯曲の作品としての価値が低下することはない。むしろ戯曲としてはこの問題提起によって物語に筋が入ったことは確かである。その筋とはエホバ批判によって主人公ヤベテが新約的博愛精神で言動し得たことである。この問題提起によって主人公を主人公

たらしめ、ヘエホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみ」という有島の構想を描出し得たことになる。また、神批判のある劇の方が観客にアピールするという創作意図も有島にあったかも知れない。いずれにせよ、この問題提起は芸術の立場から見れば劇を盛り上げる役割を果していると言えよう。

第四章 他の作品との関連

「大洪水の前」と他の作品との関連として、有島以外の洪水作品では横光利一の「碑文」を対比させ、有島作品では米國留学時代の自伝的小説「首途」を検討してみたい。第一節「横光利一「碑文」との比較」のねらいは、二つの洪水作品を比較することによって、「大洪水の前」の特徴を明確にすることにある。すなわち、次のような対比が論じてある。「碑文」の主人公は群集、「大洪水の前」は理想家ヤペテ、前者の主題は人間有限性強調、後者は神の怒る愛とヤペテとナアマの男女愛、前者には洪水に動機を得てその極限状態における群集心理と言動を唯物的客観的に描写しようとする意図、後者には旧約のエホバの怒りに動機を得てセツ族カイン族対立という神学的課題設定とその課題による神批判の意図、等の対比がある。次に第二節「「首途」と予定説」では、有島がヤペテに仮託して神批判する原因は米國留学中遭遇したスコット氏自殺事件に起因することを論証してある。すなわちフランクフォード精神病院の患者・スコット氏は、弟の自殺悲報に自己の薄情痛感して教会出席、予定説を二重決定論と誤解して苦悩の末自殺する。そしてこの自殺事件は有島の信仰に大きな打撃を与え、帰国以後、有島自身が二重決定論に悩み、次第に不平等なる神への反抗と発展する心の推移を論じたものである。最初に、ノアの洪水と恩寵との関係を論じた大木英夫氏の説を導入し、この恩寵に懐疑するヤペテ、すなわち有島として論を進めてある。

第一節 横光利一「碑文」との比較

本多秋五氏は有島の諸作品の中における「大洪水の前」の位置とノアとヤベテの父子関係を次のように論じている。

「大洪水の前」という戯曲は、「カインの末裔」「クララの出家」「或る女」「石にひしがれた雑草」など、有島の諸作品がここに流入し、また、それらの諸作品や「親子」のような作品が、ここから流れ出す作品とも考えられる。義人であるだけではない老ノアと、Iofarのヤベテとの関係には、有島における「父と子」のニュアンスが読み取られるように思う（『「白樺」派の文学』新潮社）。

この本多氏の指摘をヒントに考えてみよう。信仰の人ノアはその信仰故に頑固一徹であった。この父に対してヤベテは人間愛という理想で対抗していた。一方、敵父武が現実主義者であったのに対して息子武郎は理想主義者であった。有島親子とノア親子に共通するこの現実対理想のニュアンスは作者武郎自身も意識していたかも知れない。大正五年一月『白樺』に発表された未定稿「洪水の前」が三幕までのうちどこまで発表されていたか未調査であるが、「カインの末裔」（大正六年七月）、「クララの出家」（大正六年九月）は、第一主題である神と人との関係を、「石にひしがれた雑草」（大正七年四月）、「或る女」（大正八年五月、後編脱稿）は第二主題である男女関係を主に扱っており、これらの作品が発表又は脱稿された後、第一、第二主題を聖書に取材した「大洪水の前」と「サムソンとデリラ」とが大正八年十月、「聖餐」が大正八年十月に執筆され、その十月三十一日に完成されている。そして「親子」は「大洪水の前」完成三年半後、大正十二年五月『泉』に発表されてある。

序論で「愛」という主題を表にしてまとめおいたが、再度「大洪水の前」についての主題を考えてみる。第一主題であるヘエホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみという有島の創作意図は創世記第六章五、六、

一三節にある「すべてその心に思ひはかることが、いつも悪い事ばかりであるのを見られ、主は地の上に人を造つたのを悔いて、すべての人を絶やそうと決心した」というところを根拠にしていることにならう。このことは、戯曲の最初に創世記より抜粋として六章一節から十八節までを引用していることから理解出来る。次に第二主題の男女関係であるヤベテとナアマとの恋愛は悲劇で終わっている。情熱家と（ホム）の絶世の美女との愛は宿命的に結ばれない。結ばれる可能性のない恋愛をこの戯曲で描いているのは有島の遠隔地の女性偏愛傾向（例としてティルダ、フアニー、リリーへの愛）にもよっている。

『三部曲』の中で前者二つの戯曲は旧約劇である。主題である愛はエホバの神とイスラエルとの間の愛である。よって「サムソンとデリラ」のところで旧約におけるエホバの愛とそれに対する有島の解釈を論ずることにしたい。

ここでノアの洪水にヒントを得た作品、横光利一の「碑文」について論じ、有島と横光とを対比させてみよう。「雨は降り続いた」で始まり、「雨は依然としてヘルモンの山に降り続いた」で終る没主観小説である。次のようなあら筋である。

雨は降り続いた。ヘルモン山上のガルタン市民の死者が急激に増加した。ガルタン市の執政官が大降雨の原因と救済方法について哲学者たちに討論させた。誰も救済方法に関しては答えられなかった。その時立ち上がった哲学者は名高い醜男カンナであった。「神は怒った。ガルタンの上には、滅亡と共に神の浄き恵と物が自殺となって下っている。ガルタンは絶滅する」と叫ぶ。カンナは昔、美しい妻を奪われていた。そして市民に復讐の微笑を浮べて首の動脈を切断した。翌日から自殺が流行した。彼等は自殺の前に、生き残る市民の秘めた悪徳と自分たちの罪業の数々を城市の壁に刻んだ。穢れたガルタンの罪跡を暴露した石碑（碑文）のタイトルが雨に打たれた。自殺の次は殺人、淫売、罵り合いと流行が変っていった。そしてガルタンは永久に沈黙した。依然として雨は降り続いた。

以上のように「碑文」の創作方法は、記録映画を見ながら客観的に叙述するような方法である。その記録映画とは、洪水という極限状態をヘリコプター上から撮影したような映画である。客観的創作方法による横光の作品として「碑文」のほかに、「蠅」「静かなる羅列」「幸福の散布」「頭ならびに腹」「ナホレオンと田蟲」などがある。これらの文体は非情な写生文である。どの作品にも横光の分身が登場していない。さて「碑文」の創作意図はどこにあるか。大洪水という世の終末状態を設置しておいて、その時の群集心理の推移と言動をいかに描出するかにある。従って「碑文」の主人公はうごめく群集である。この小説の舞台は、ヘルモン山という北イスラエル国境地帯にある山の名をとってあるが、その山上のガルトンという都市は虚構である。「大洪水の前」ではエホバの怒りによる洪水、セツ族とカイン族の対立という神学的題材があるが、「碑文」ではそのような明確な題材はない。「大洪水の前」の主題は愛であり具体的にはエホバの人間に対する怒り、ヤベテとナアマとの激しい男女愛である。これに対して、「碑文」の主題は洪水という極限状態によってひき出された人間心理と言動の醜さそしてはかなさとを、唯物的自然現象と対比することによって人間の有限性を強調することにある。ヤベテは有島の分身であるが、「碑文」には横光の分身がない。前者が旧約聖書による洪水戯曲であるなら、後者は洪水に動機を得た唯物的小説である。この違いは両者の創作態度の違いである。有島の創作原動力となったものは男女愛、神、社会正義、運命等であった。一方、横光の創作原動力は大正十年代のプロレタリア文学と自然主義文学と素朴な自分の資質とに反抗することであった。そして伝統的に抒情的で感傷的である日本文学のマンネリズムを打開するため、あえて虚無的唯物的客観小説を書くことにあった。横光の文学は、「何をいかに」ではなく「いかに」に重点が置かれていた。新感覚派の「物それ自体をそのまま写生する」という芸術運動の旗手横光にして初めて「碑文」が書けるわけである。作品内容も生真面目で悲劇的な有島作品に較べ、横光のはユーモアがあり作者の人間性不在のものが特徴となっている。文体も有島が勢い込んだ情熱的文体であるのに較べ、横光のは派手な装飾文と淡々とした撮影文が特徴である。

以上、洪水を扱った有島と横光の作品を比較することで両作家の特徴を考えてみた。次に洪水神話について大木英夫氏（アメリカのキリスト教社会学者・ラインホルド・ニーバー（Reinhold Niebuhr）の弟子）が『終末論的考察』（中央公論社、昭和四十五年一月）という歴史哲学書の中で論ずる〈恩寵〉と、この〈恩寵〉に懐疑する「大洪水の前」のヤペテの嘆きを有島の嘆きとしてとり上げ、有島が「惜みなく愛は奪う」十八章などでアンチ・キリストを論ずるようになった遠因がどこにあったかについて「首途」と関連させて触れておこう。

第二節 「首途」と予定説

『終末論的考察』という書の中で、著者・大木英夫氏は現代の絶望的な現実をふまえた上で、「究極的な希望」を探求する論理を展開している。その中で洪水神話についての氏の説を要約してみると次のようになる。

フォン・ラートが「原歴史」という概念でとらえた人類史は、究極的にはただ二つの局面をもつものとして把握せられていく。その第一局面は、ノアの洪水（自然的生の破局を象徴）によって、第二局面はバベルの塔の建設（文化的生の破局を象徴）によってとらえられている。神話は人類史の深層構造の認識を与えるのであって、歴史の表層の諸現象の前科学的説明を与えているのではない。洪水神話が開示してやまないことは、人間の生と自然との究極的不和という事実、人間の生が自然によって結局守護されていないという事実である。「母なる大地」「自然の子」という言葉がある。しかし洪水神話は、自然は人間を子のごとくその胸にいだいてくれる母なる神ではないことを、知らせている。日本が誇りとした宗教的自然観なるものは今やそれを支える現実的基盤を失っている。

ノアの箱舟、古来それは〈恩寵〉のシンボルと見なされてきた。ノアの生き方は、自然によってではなく恩寵によって生きる生き方をあらわしている。自然と恩寵の対立、この対立概念なしに人間の生の問題を十分に認識できない。

人間は結局自然によって生きることができず、恩寵によって生きるのである。

以上、大木氏の説によれば洪水神話がわれわれ人間に啓示している点は、人間は〈自然〉によって結局守護されておらず〈恩寵〉によって生きるのである、という点である。確かに創世記六章八節には「ノアは主の前に恵みを得た」とあるので、人類は〈恩寵〉によって全滅を免れ得たことになる。「ノアは神とともに歩んだ」（六章九節）信仰の人であったので箱舟という〈恩寵〉が与えられ、ノア以外の神に従わない者たちに〈恩寵〉は与えられなかったということになる。すると大木氏が〈強調〉する恩寵によって生きるとは、〈信仰〉によって生きると同義になって来る。

しかし、信仰は人間の力によるのではなく神が啓示することによってのみ与えられるという排他性に有島の不安が生じていた。啓示される人も啓示されない人も既に決定しているという二重決定論として予定説を解釈し、このような解釈が主に原因して自殺したスコット博士のことについて有島は留学中の日記、「首途」等に書いている。第三章でも少し触れておいたがスコット博士の悩みの件は事実であって「迷路」序篇「首途」にある記述と日記にある記述とは類似している。次にその記述の一部を引用しておく。

某年八月二十四日。博士は僕に話して聞かせた。「私には一人の弟があつてT州で農場を經營してゐたが、遠い爲めに、思ひながら互に無沙汰して二十三年も顔を合はせずにあつた。弟は親切にも豊作の秋には必ず私にその喜びを分けてよこした。……所が今から三箇月程以前に弟の友人から私の許に手紙をよこして、T州一帯は雹害の爲に麥の收穫が皆無だつた爲に、非常な經濟界の恐慌が起つて、弟の關係してゐる銀行は破産の憂目に遇い、弟は農場と銀行との整理に夜の眼も合はず奔走してはゐるが、逆も見込みはなさうだ、と知らして來た。その時私は何を措いても弟に

遇つて言葉だけで、も慰め勵ましてやらなければならなかつたのだ。所が克己心の勝つた弟自身からは、割合に平氣らしい音信があつたのに氣を許して、心にもなくつい一日々々と怠つてゐた或る朝、突然弟の自殺した通知が来て私をうちのめした。その時の驚きと苦痛とを察してくれ。私はそれから神に呪はれた身であることを知るやうになつたのだ。……或る日教會に出席して見る氣になつた。その教會は監督教會だつた。まだ年若な鋭い眼を持つた牧師は、カルヴェンを思はせるやうな妙に浸滲的な熱のこもつた低い聲で諄々と豫定説を説いた。……而して歸りがけに一人で或る一本の櫻の樹の下まで來ると、(さういつて博士は押しつぶすやうに聲を低くした) Aよ、私はその樹の上から惡魔の囁く聲を確かに聞いたのだ。「貴様は、カインと、一緒に、永遠に、呪はれた、靈魂だぞ」。私はその瞬間から絶えず惡魔の聲に脅かされるやうになり、従つて正義の神の嚴存をしかと心の底に感ずるやうになつたのだ。Aよ、お前は、自分の力で運命を變へる事が出來ると思ふのか」云々。

某年八月三十一日。自由論と決定論とは僕に取つて單なる知的遊戯ではない。それは僕の二元的な性格の根柢から湧き出て來る嚴肅な問題だ。自分の心を見詰めると、そこには意志の絶対自由がある。即ち無限の自己責任がある。自分はこの誇りから一步でも退くのを厭しとしない。けれども現象の種々相を見渡すと、そこには宿命の鐵鎖がある。即ち嚴確な運命の統流がある。……僕はスコット博士の宿命説に極力反對してゐる。……僕は口では反對しながら、如何かすると心の中で兩手を擧げて賛成してゐる。

某年九月五日、P市で買つて置いた夕刊新聞に指が觸れた。……ふと或る所まで來ると僕の眼は動かなくなつた。「醫師の益死」といふ文句に續いて、ドクトル・ジュー・ビー・スコットという字が讀まれた。僕は驚いてしまつた。……深い眞實の眞暗に眼の前に立塞がるのを覺えた。(傍点は著者)

以上が「首途」からの引用文である。この引用文の中で、スコット博士の告白によつて、Aが意志の絶対自由論者

であったが運命決定論・宿命論をも肯定し始めるようになっていた点に、注意しておこう。「首途」は形式・内容ともに日記の拡大再生産で、Aは青年有島の等身大の自画像であった」（山田昭夫『有島武郎』明治書院、昭和四十一年）と言える。第三章で有島が晩年運命論者になっていたと論じてあるが、その遠因の一つとして、留学時代に精神病院でスコット氏を看護した体験があることを実証するために以上のように少々長い引用文になったわけである。更に「首途」のスコット博士の話を実証するために日記からその部分を引用しておこう。

明治三十七年（一九〇四年）八月十六日、スコット氏曰く「余には今一個の思想、徂徠して抜き難し。余は余の心に反して神に對し汚濁の思を懐く。かくの如きものは救はれざる可し」と。彼に此の如き思想を與へしものは何者ぞや。血を有せざる、基督教神學者なり。彼は科學者が試験物を treat する如くに、罪を treat す。而して曰く「罪を犯す事一度なるものは救われざる可し」と。

同年八月十七日、スコット氏曰く「余に一人の弟あり、南方に農場を有し道程遠きが故に、互に相思ひながら遇はざる事既に二十三年に及びぬ。又此間彼は親切にも余が窮乏を救はんが爲に金を送り越せし事あり。然るに約三ヶ月前彼の一友余に書を致して、彼の事業失敗し、彼は困難と戦いつゝありと報じ來りぬ。余は此時適當の處置を彼の爲めになすべかりしなり。されども彼自身の書には左程までに事逼れる様子は報ぜられざりしが故に、余は其儘に打捨て置きぬ。而して一日突然彼が自殺の悲報に接せし時の余が驚駭と苦痛とを察し給へ。かくて後、神余を罰し給へるならん……」。一日余は妻の留むるをも聞き入らずして教會に到りぬ。而して其歸途余が心中に何人にも言明し難き恐る可き思想來りぬ。余は此思想より脱逸する事能はず、自殺の念―余が弟の爲したる如き―は常に常に余の頭を犯し來るなり。余は是れを如何にすべきや」と。

同年九月二十六日、曉方、昨夜買ひ置きし“Evening Bulletin”をひらき讀み一欄に來りて忽ち眼に留まりしは“Physician hanged himself”と云える題目なり。はと思ふ暇もなく忽ち余に視られしは Dr. J. B. Scott,

Friend's Asylum 等の文字なり。……余は思はず隣座の女學生を驚かす迄の大聲を發しぬ。彼は遂に縊れたるなり。余が彼の院を去らんとする時なりき。彼は堅く余の手を握り涙に満てる聲もて余に謂つて曰く、「……神既に業に余を永遠の刑罰に命じ給ひぬ。如何なる力も亦よく余を再び昔の余たらしむる能はず。一度基督信徒となりしものに、罪を犯すに増して世に恐る可きものある事なし」。……余は此一大事件を忘れじ。余はこを重ねて思ひめぐらす可し。(傍点は著者)

以上が日記からの引用文である。この引用文によつても確かに「首途」が日記の拡大再生産であることが言える。スコット氏が言う「何人にも言明し難き恐る可き思想」とは二重決定論として理解した予定説を指していると取つてよからう。尚、二重決定論については後述の予定説のところの説明することにする。有島がスコット氏に同情し、彼に恐る可き思想(恩寵を受ける人も神に棄てられる人も決定しているという二重決定論)を与えたキリスト教神学者・牧師を激しく批難している点に注目しておこう(ひいては神に対する批難となるのだが)。へ余は此一大事件を忘れじ。余はこを重ねて思ひめぐらす可し」とあるように、スコット博士の悩みは有島自身の悩みになって来ているのである。

スコット博士自殺による有島のショックは十一年後の「大洪水の前」創作中でも存続していた。否、存続どころではない。むしろこの事件が有島に「大洪水の前」の創作動機を与え、ヤベテによつてエホバ批判をさせる原動力になっていると言えるのである。ここで「大洪水の前」の創作動機について再び触れておきたい。

先の序論で『三部曲』中の旧約劇の創作動機は、安子が不治の病にある時、観念した有島が男女の死別物語を書くために聖書から素材を求めたことによつていと述べておいた。しかし「大洪水の前」に関してはこの創作動機よりも第三章で少し触れてあるスコット事件以来、無意識に潜在していた有島の神批判によつて引き起こされた創作動機

を第一に考えたい。何故ならば、スコット事件が「大洪水の前」を創作する動機¹⁾の第一となつているとすれば、それによつて〈貴様はカインと一緒に永遠に呪はれた靈魂だぞ〉という悪魔の声を聞いたスコット博士の告白が、〈何故カインの族のみがエホバの呪ひを受けなければならぬのか〉というヤベテの訴えに呼応していることに気づくわけである、からである。そしてこの訴えは第一主題である〈エホバと人とに對する或る調和する事の出来ない心の苦しみ〉という表現と同じ意味内容で表現を変えた形になっていることに注目しておこう。

「大洪水の前」では有島の分身ヤベテがカイン族の柔和な人・ユバルに同情し、その死を嘆いている場面が第四幕にある。ヤベテのこの嘆きは有島の心情から創案されたものである。ユバルの心のような柔和な心そして同情心の有無に關係なく、〈信仰〉は神の一方的な啓示・選びによつていと解するところ²⁾に有島の不安が生じていた。有島の信仰に對する不安は米國留学中の諸体験によつて生じていることが定説になつて³⁾いるが、特にスコット博士の自殺の件が不安の直接原因になつて⁴⁾いるわけである。そしてこの不安が神への反抗心となつて行くのであるが、その前にスコット博士や有島を苦悩させたことになる予定説について理解しておく必要がある。

予定説にも〈恩寵〉〈信仰〉〈聖靈〉〈啓示〉〈福音〉〈愛〉という項が当然関連して来るのであるが、ここでは平出享、山本和の両氏がそれぞれ『聖書大辞典』、『キリスト教大事典』に執筆してある〈予定〉の一部を引用しておくことにする。

この語は、世界に對する創造者の目的およびその経過が、あらかじめ定められていることを示す言葉と解されるが、わけても人間の救いにかかわる神の絶対的な主権に對する信仰、とすることができ⁵⁾る。言い換えれば、神の全く自由な恩寵の選びに對する信仰である。予定の信仰については、アウグスティヌス、ルター、カルヴァンなどが、歴史上もっともこれを強調したと言えるであらう。予定は、確かに神の永遠の、自由な決定をさすものであり、もはや動か

しがたい必然性をもった事柄である、という結論に達するのは、あなたがち無理からぬことである。たとえば、ドルト信条に見られるような極端なカルヴァン主義など、その典型である。しかしこのような議論は、イエス・キリストの啓示による理解なくしては無意味である、ということが何度でもくり返されなければならない。イエス・キリストの福音が示されるところに、予定の信仰が生まれるのであって、予定の事実を説明づけるために、福音が方便として利用されるのではない。神の慈愛は、「ひとりも滅びることなく、すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐しておられる」(第二ペテロ三・九)のであり、この事実に根ざした予定であるからこそ、それは恩寵の選びとすることができるのである。そして神の選びはキリストの招きである。いわゆる「二重の予定」(Præ-destinatio gemina)の説にはしり、それをもって即座に、神の予定を選びと放棄とにわれわれ人間が決定してしまうのは、はなはだしく聖書的でないと言わなければならない。たとえは予定を説く典型的なテキストとしてロマ書九章を検討するとき、善も悪もしない、まだ生まれもしないイサクの二人の子、エサウとヤコブとについて、神の選びの計画が行なわれるため、兄は弟に仕えることになる、という記述から(一一、一二節)、その思惟の筋道においては当然このような決定論的な地点に至るが、われわれはこの地点を通過し、神の予定は人間の事柄ではなく、神の自由な、しかし慈愛に満ちた主権の行使であることに思い至らされるのである。もし途中で立ち止まるならば、それは神の恩寵を、人間の経験的な思惟方法をもって制限してしまふことになる。そのみならず、そのような思弁の落ち着くところは、教会の中世紀的な傲岸不遜と、とどまるところを知らない墮落とであると言わなければならない。(平出)

選び・予定ということはアウグスティヌスが『De prædestinatione』で説き、宗教改革者たちも強調した。ところがカルヴァン主義のみならず、ルター派の和協信条でもドルト信条への反論でも、選ばれることと捨てられることの二重の決定論に墮していった。かくて教会の聖職的な傲りと高慢、したがって世に対する軽蔑と侮蔑のみが生じた。こうした選ばれた者と捨てられた者との二重の決定論——思弁的な、また経験から推測される——二重決定論は、聖

書の選びの思想とは無縁である。そこでは自己の選びとこの世の棄却とが自明化し、絶対化され、神化されて、独立の命題になっていくからである。選びまたは予定の命題は、神の自由な恩恵の出来事をただ強調し、下線を引き、目立たせる説明概念にすぎない。……では捨てられるものがあるか？ 必ずいる。神は侮るべきものではない。しかし何びともそれを知らない。われわれが知っているのは、真に捨てられたのは、すべての人に代って捨てられるために選ばれたイエス・キリストのみということである。この世・異邦人世界は遺棄者の国ではなくて、まだ選ばれていない者たちの国、選びの予定者にすぎない。(山本)

以上の引用文によって次のことが理解できるであろう。つまり、予定説を二重決定論と解釈することは、「教会の聖職的な傲りと高慢」とから生じたもので、「聖書の選びの思想とは無縁である」ということが理解できるであろう。それにしても、予定説とは一般の人にとって誤解されやすい危険な説であると言えよう。弟の自殺によって自分の罪そして薄情を痛感していたスコット氏が監督教会に出席した際、たまたま牧師が「予定の事実を説明づけるために福音が方便として利用される」ような説教をしたのかも知れない。つまり牧師が二重決定論を説教したのかも知れない。またはスコット氏が予定説を自分なりに解釈して二重決定論と理解してしまったのかも知れない。いずれにしても予定説の誤解が主な原因となつてスコット氏は苦悩の極に陥つたわけである。弟の自殺による苦悩と予定説誤解による苦悩とは共に関連があるのだが、スコット自殺の致命的原因は後者であることが「首途」と日記の引用文判読によって理解出来るので「誤解が主な原因」と断わっておいたわけである。弟の自殺によってスコット氏が痛感した自己の薄情そして後悔の念から生じた罪意識は、道徳的罪であつて聖書が強調する不信仰の罪という原罪 (original sin) を指しているのではないことは言うまでもない。(スコット氏の原罪意識欠如に二重決定論に陥る原因があり、ひいては有島の信仰体験希薄にも関連するのだが)ともかく、このスコット氏の苦悩を自分の苦悩として受け継いだ有島

は、二つの旧約劇を未定稿のまま、アンチ・キリスト論を「惜みなく愛は奪う」で語り、贖罪論否定と人格神との交わり絶無とを『リビングストーン傳』の序」で告白するに至るわけである。有島がアンチ・キリスト論を論ずるようになった根底には、有島にとっては不可解であり不平等な愛を説く予定説に対する疑問が遠因となつて、無意識に彼の心に潜んでいた神に対する反抗心があったことは否定出来ない。そしてこの反抗心が「キリストの人間化、キリストの有島化というべき惜しみなく奪う愛の超人的理想像」（山田昭夫）を有島に論じさせる結果をもたらしたと推測しておこう。

(1) 瀬沼茂樹「留学前後の有島武郎」(『文学』昭和39年10月、12月)を資料の一つとして挙げられる。